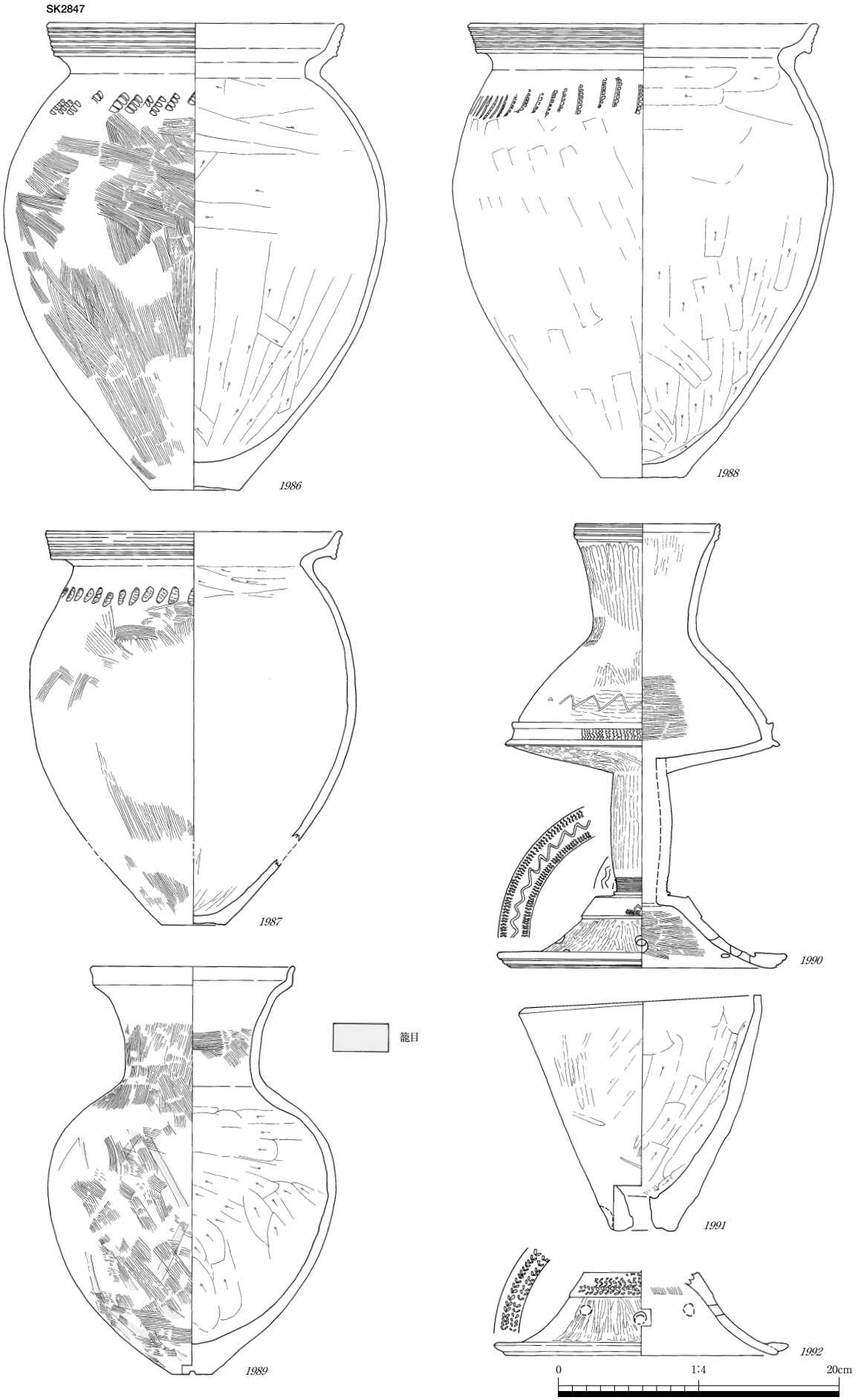
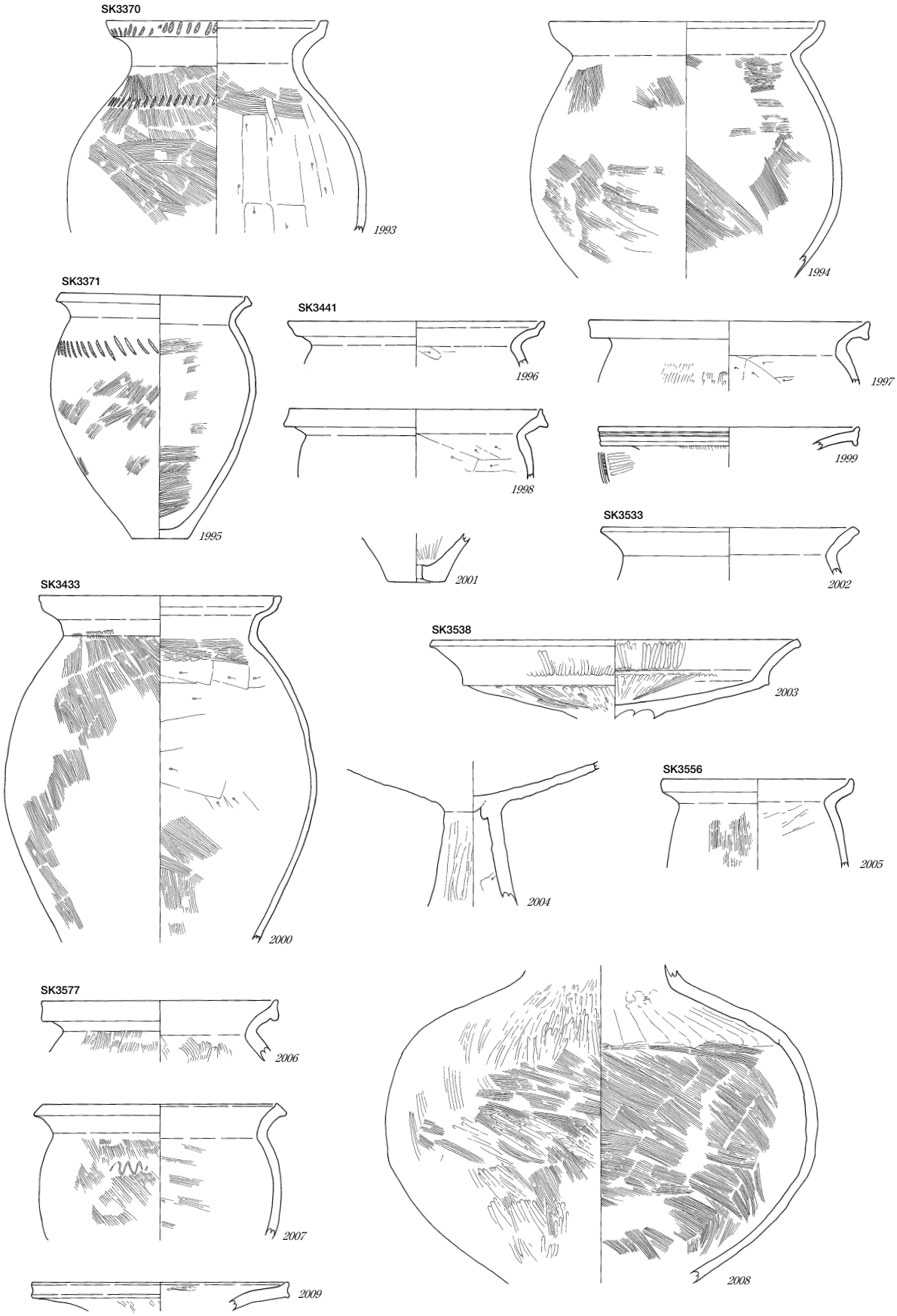
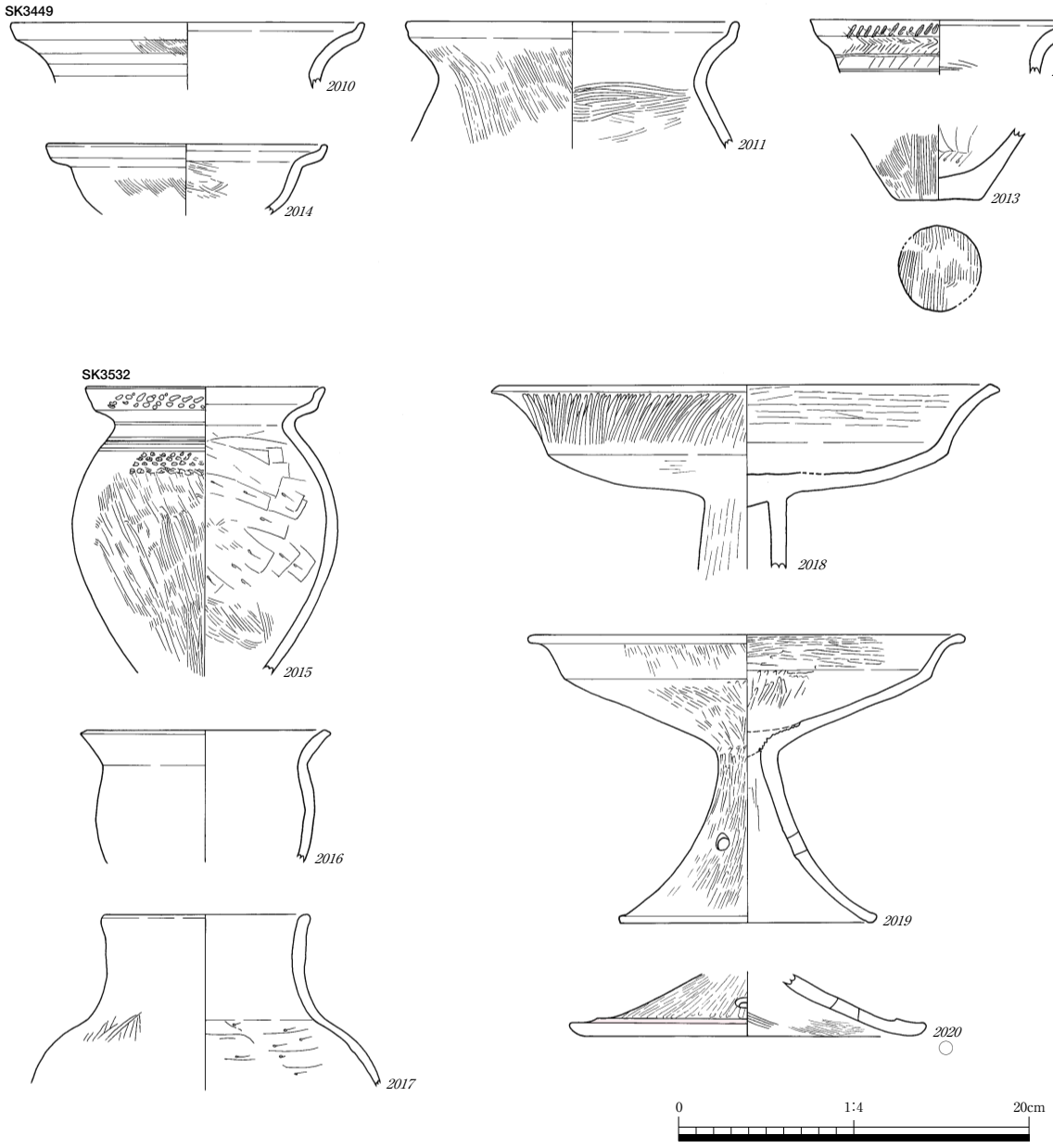


第253図　遺物実測図　(1/4)
B３地区　ＳＫ2847

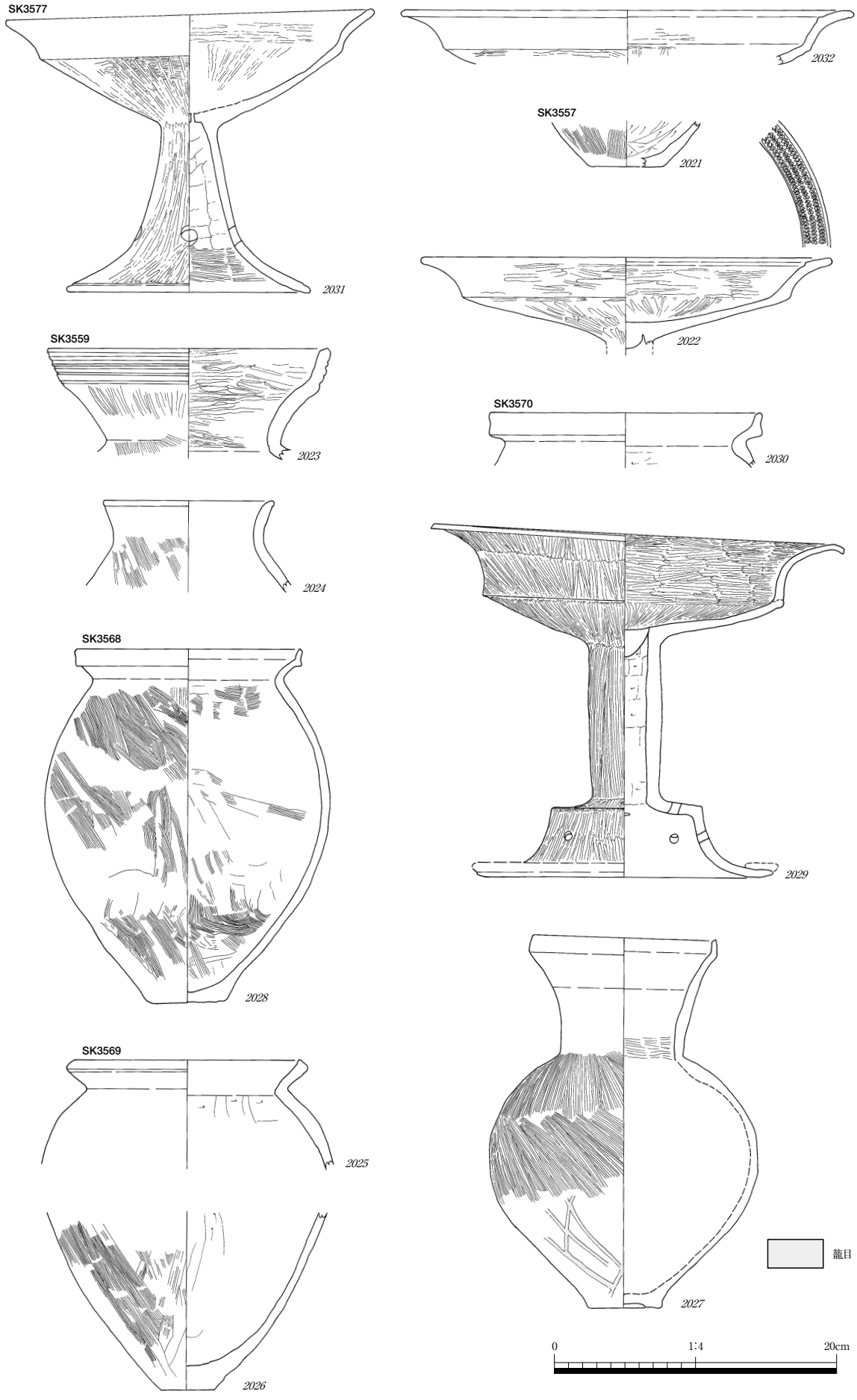


第254図　遺物実測図　(1/4)

Ｂ４・Ｂ５地区　ＳＫ3370(*1993・1994*)　ＳＫ3371(*1995*)　ＳＫ3441(*1996～1999*)
ＳＫ3433(*2000・2001*)　ＳＫ3533(*2002*)　ＳＫ3538(*2003・2004*)
ＳＫ3556(*2005*)　ＳＫ3577(*2006～2009*)

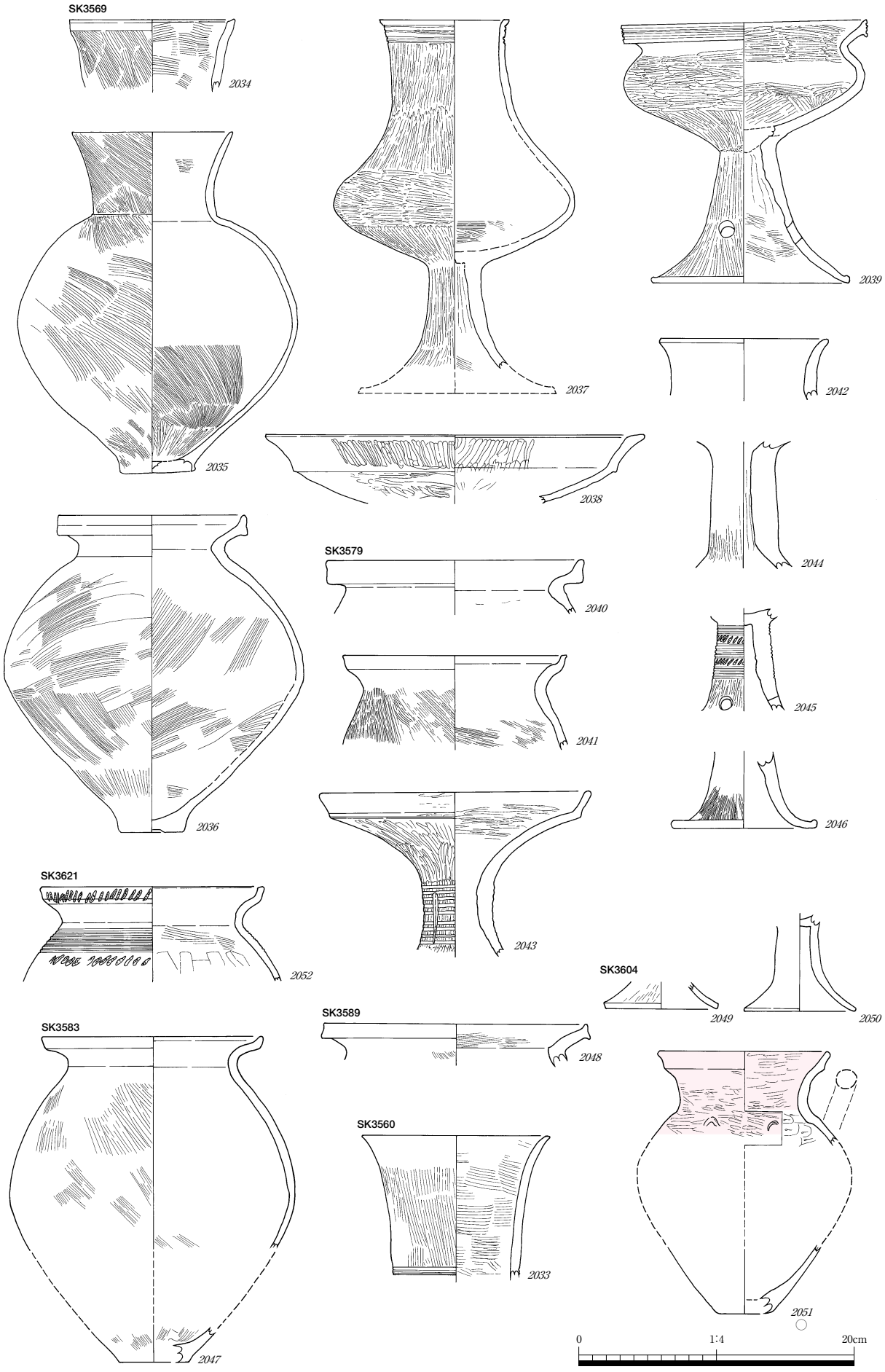


第255図　遺物実測図　(1/4)
B４・B５地区　SK3449(*2010～2014*)　SK3532(*2015～2020*)



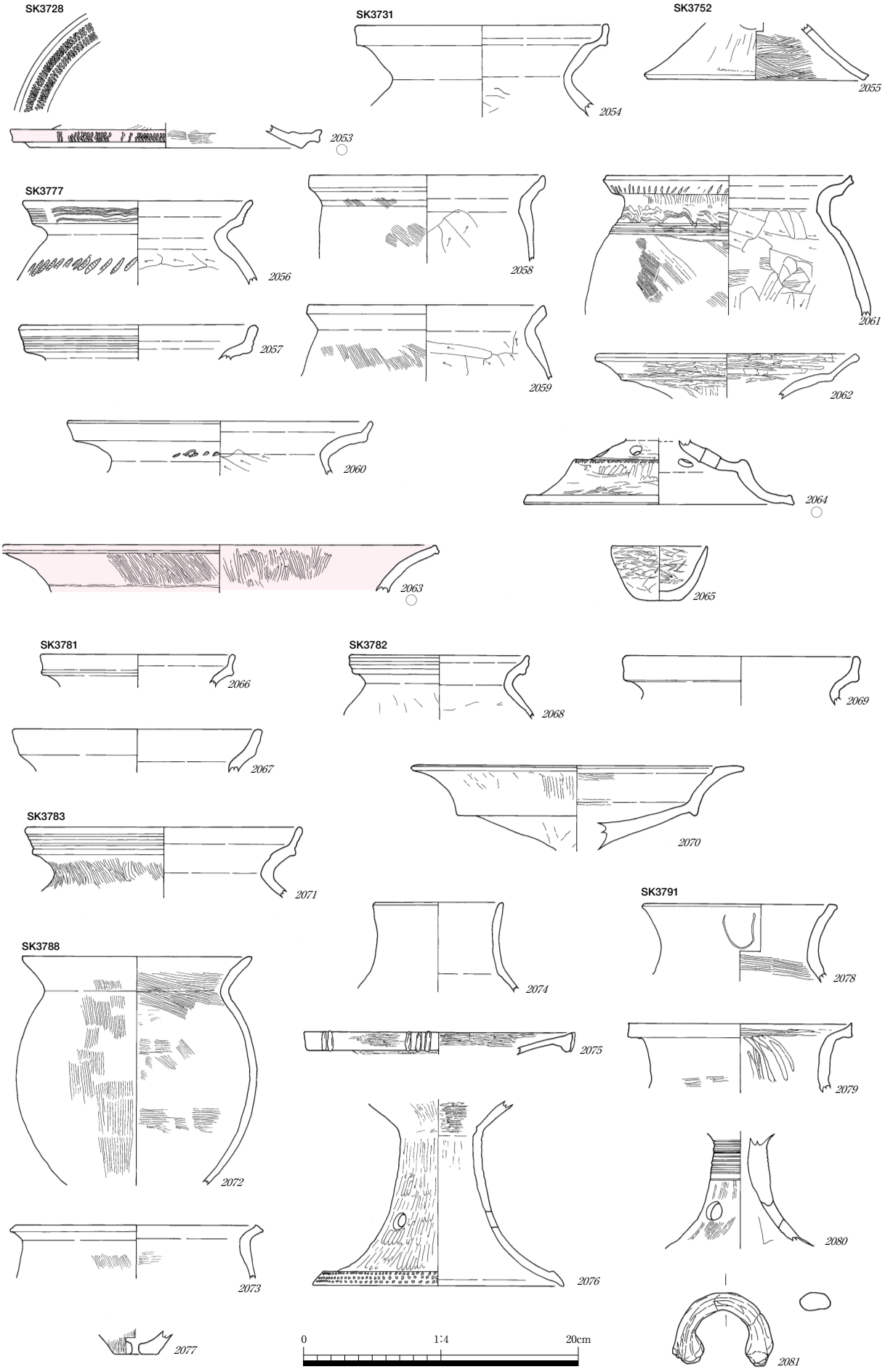
第256図　遺物実測図　(1/4)

Ｂ５地区　ＳＫ3557(*2021・2022*)　ＳＫ3559(*2023・2024*)　ＳＫ3568(*2028・2029*)
ＳＫ3569(*2025～2027*)　ＳＫ3570(*2030*)　ＳＫ3577(*2031・2032*)



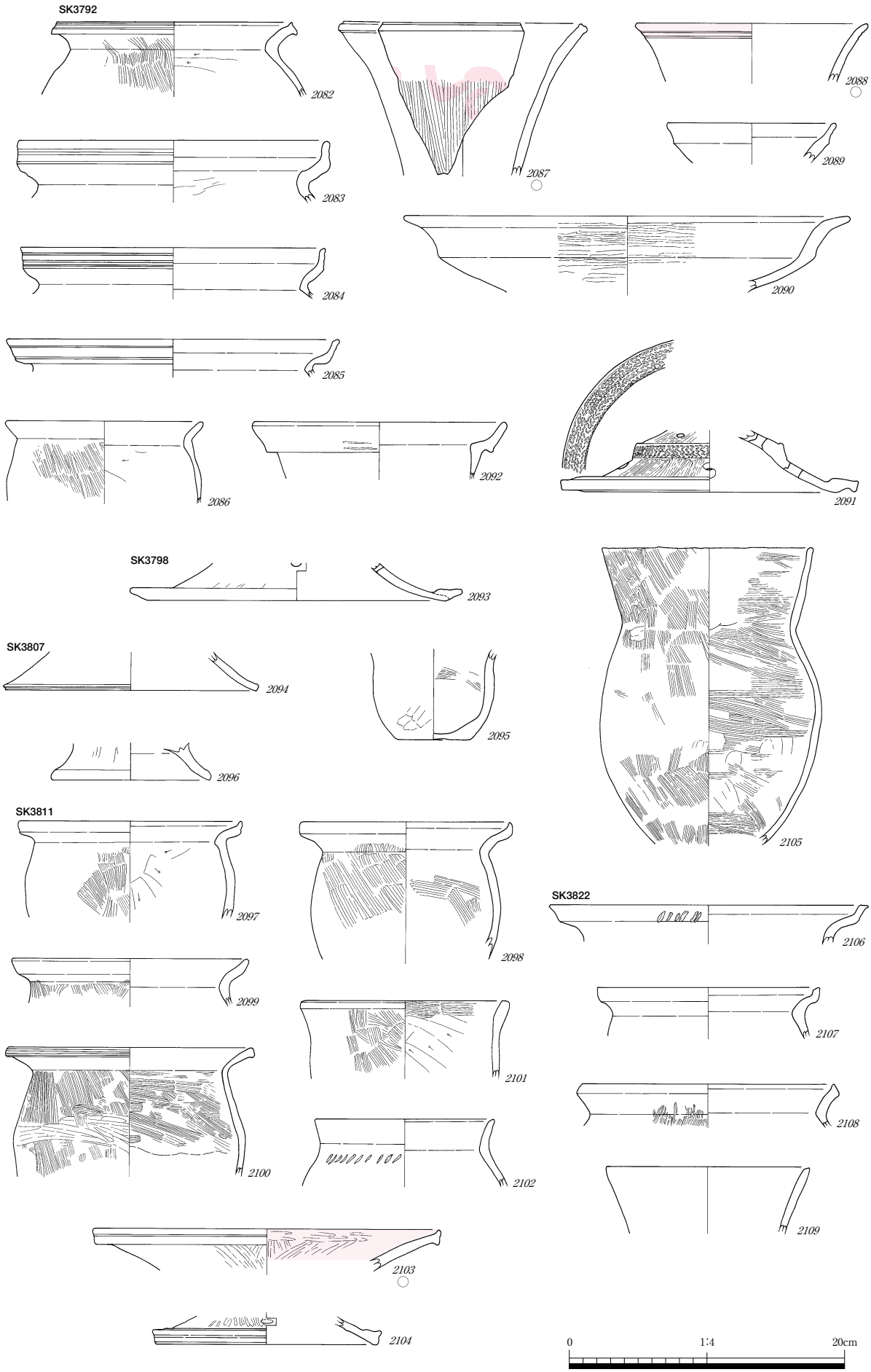
第257図　遺物実測図　(1/4)

B５地区　ＳＫ3560(*2033*)　ＳＫ3569(*2034～2039*)　ＳＫ3579(*2040～2046*)　ＳＫ3583(*2047*)
ＳＫ3589(*2048*)　ＳＫ3604(*2049～2051*)　ＳＫ3621(*2052*)



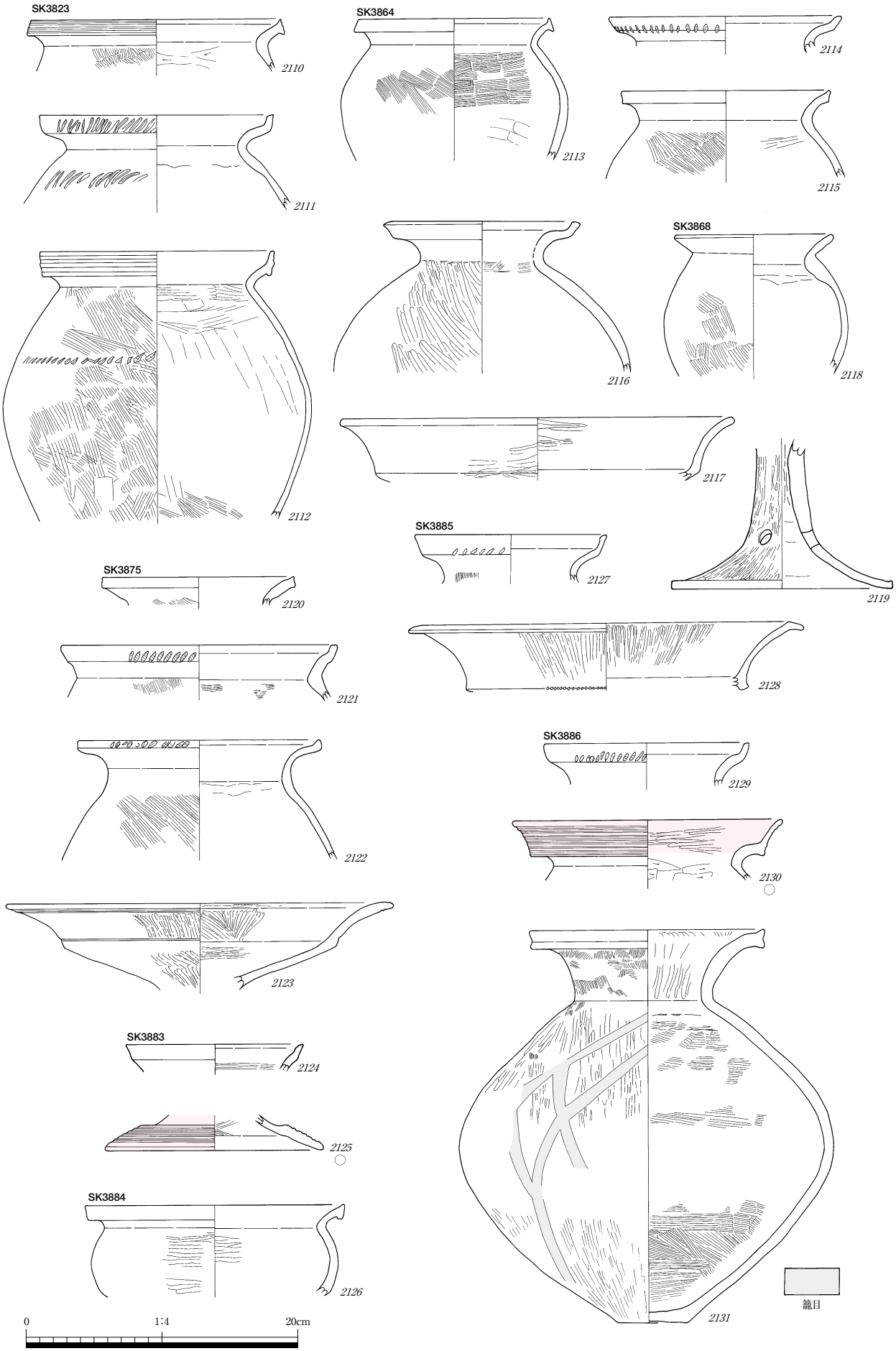
第258図　遺物実測図　(1/4)

B６地区　ＳＫ3728(*2053*)　ＳＫ3731(*2054*)　ＳＫ3752(*2055*)　ＳＫ3777(*2056～2065*)
ＳＫ3781(*2066・2067*)　ＳＫ3782(*2068～2070*)　ＳＫ3783(*2071*)
ＳＫ3788(*2072～2077*)　ＳＫ3791(*2078～2081*)



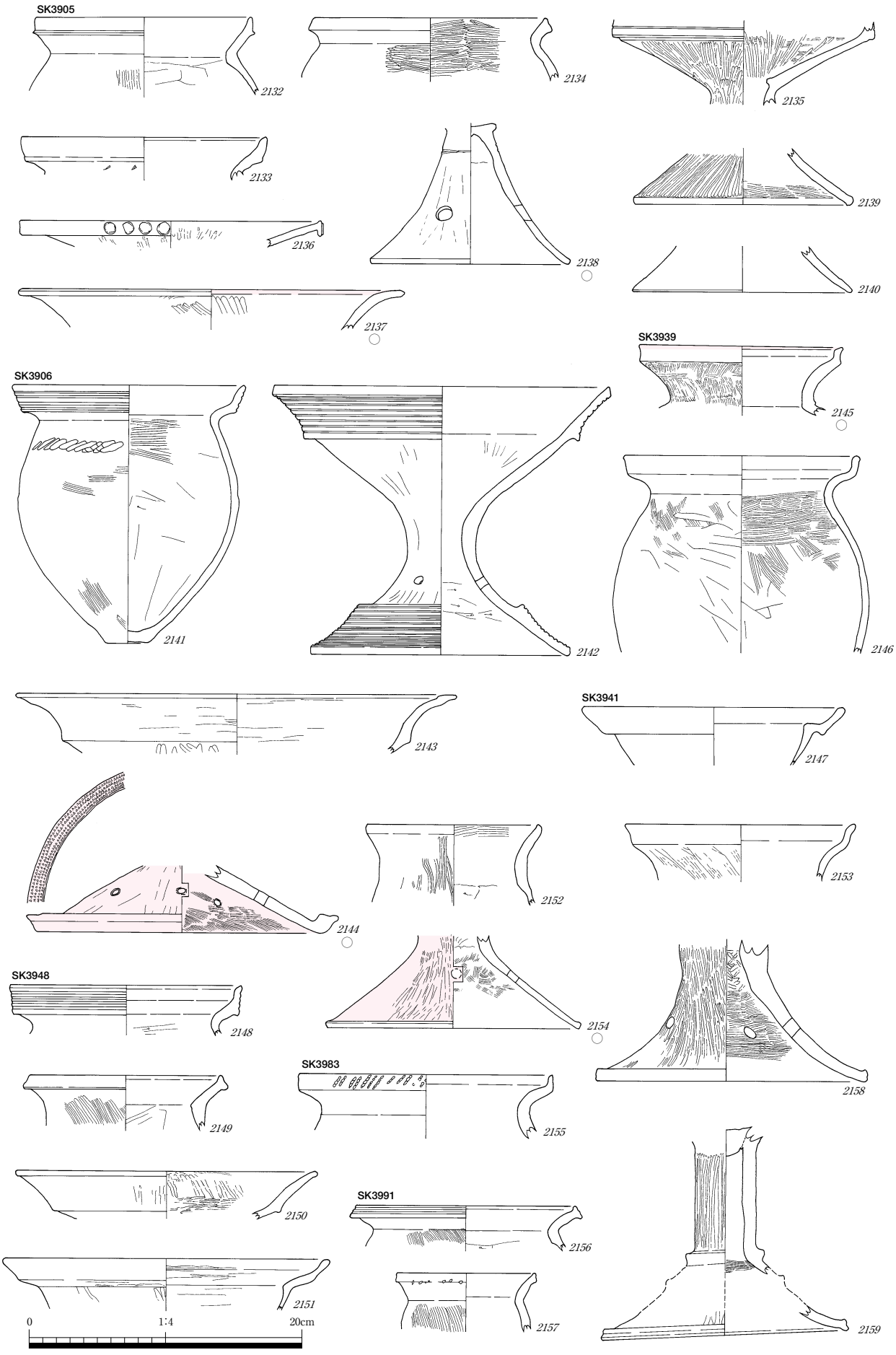
第259図　遺物実測図　(1/4)

B 6 地区　S K3792(*2082～2092*)　S K3798(*2093*)　S K3807(*2094～2096*)
S K3811(*2097～2105*)　S K3822(*2106～2109*)



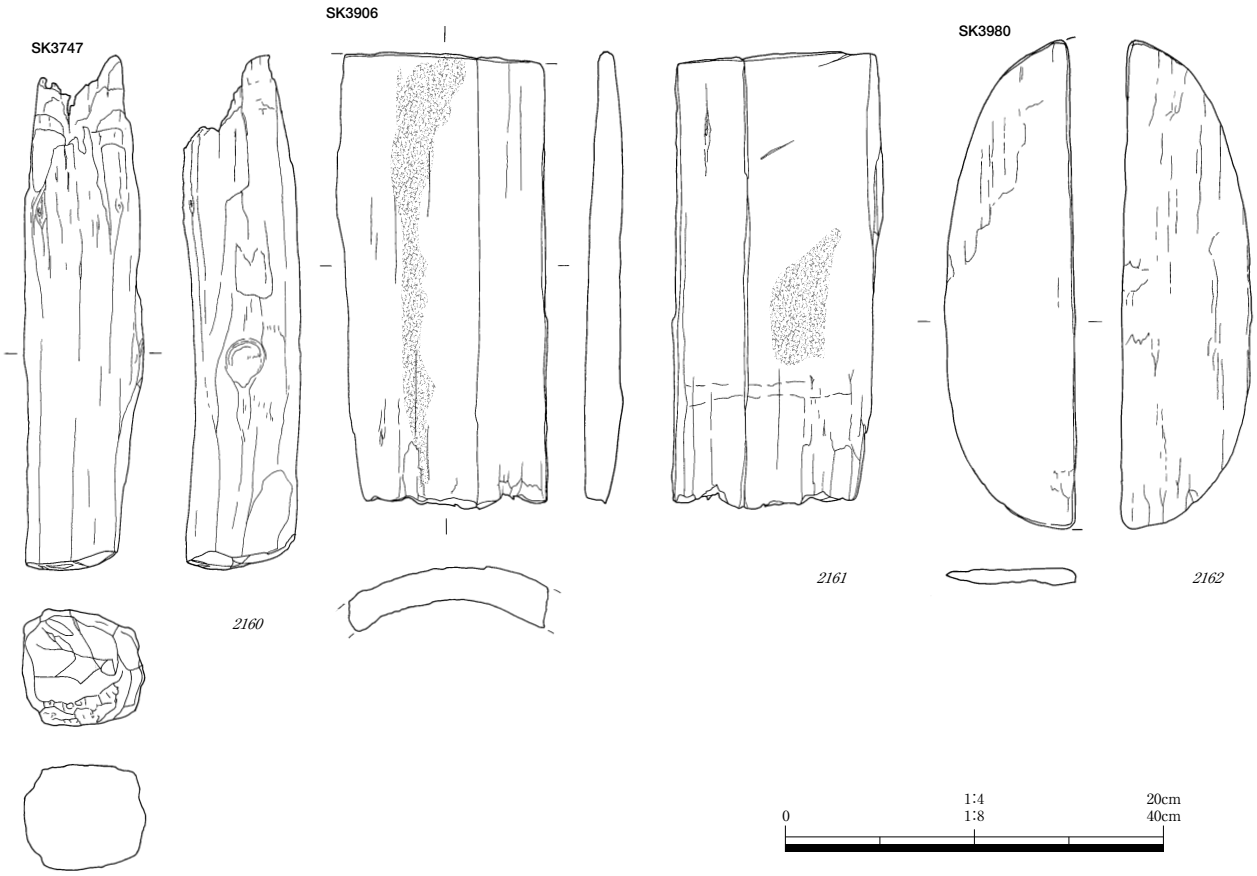
第260図　遺物実測図　(1/4)

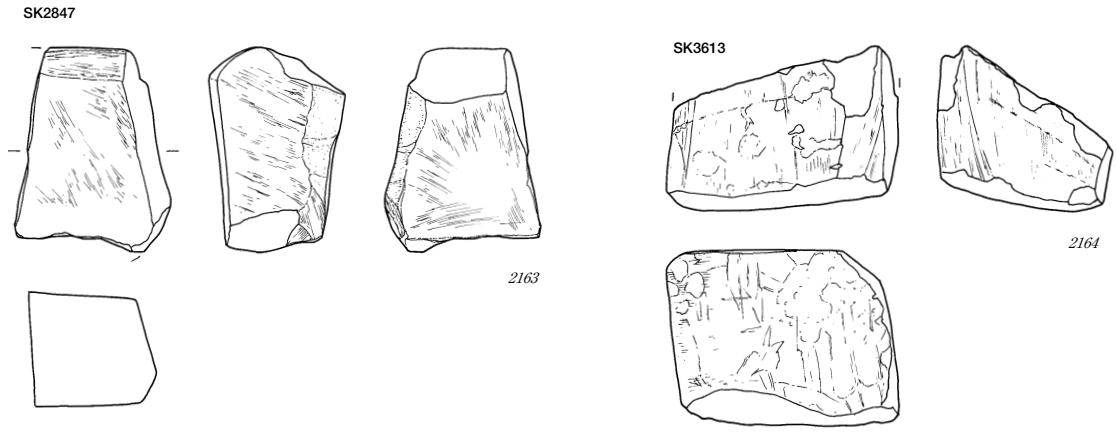
B 6 地区　S K3823(*2110～2112*)　S K3864(*2113～2117*)　S K3868(*2118・2119*)
S K3875(*2120～2123*)　S K3883(*2124・2125*)　S K3884(*2126*)
S K3885(*2127・2128*)　S K3886(*2129～2131*)



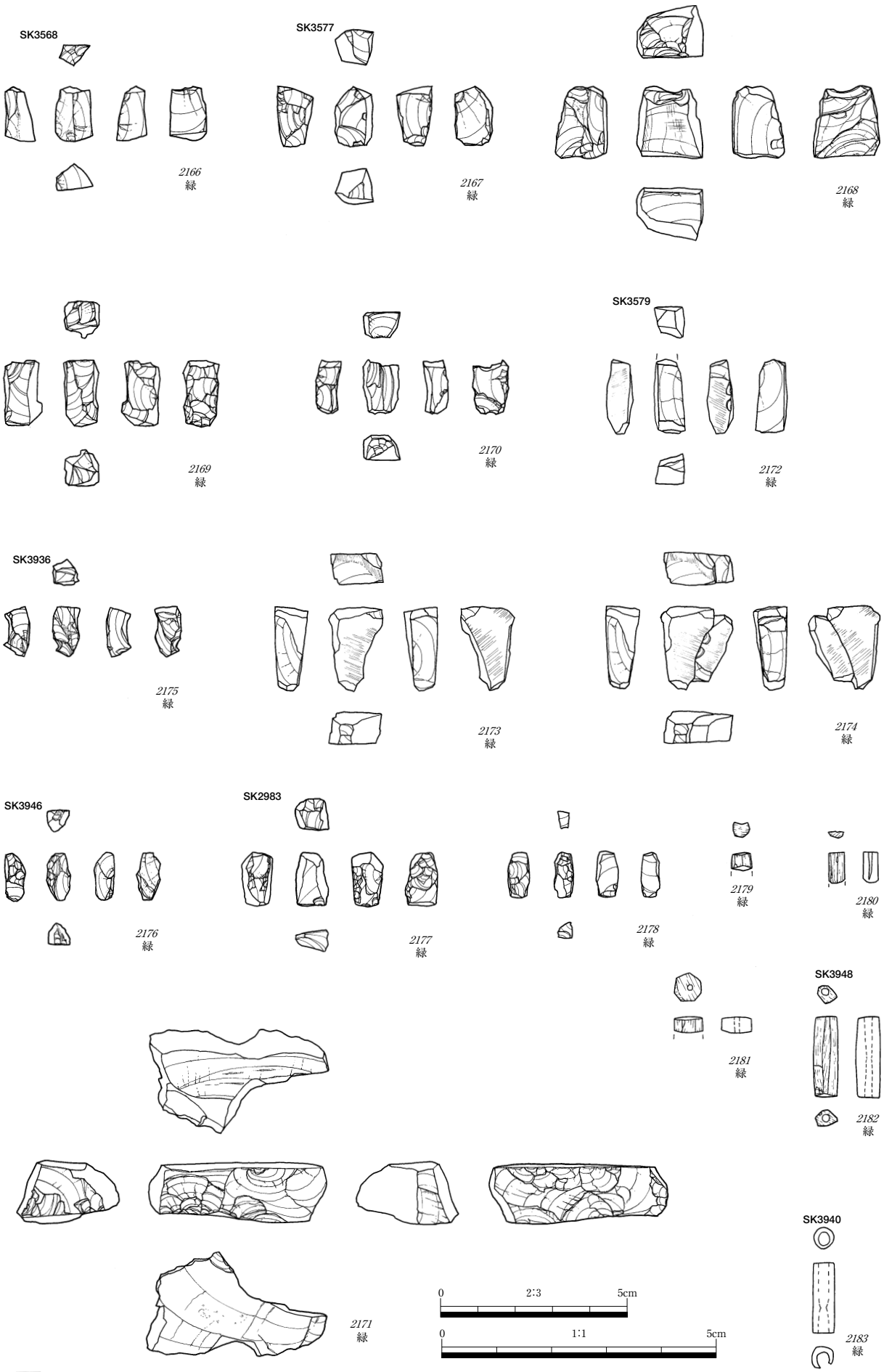
第261図　遺物実測図　(1/4)

B 6 地区　S K3905(*2132～2140*)　S K3906(*2141～2144*)　S K3939(*2145・2146*)
S K3941(*2147*)　S K3948(*2148～2154*)　S K3983(*2155*)　S K3991(*2156～2159*)





第262図　遺物実測図　(*2163*～*2165*　1/3, *2161*・*2162*　1/4, *2160*　1/8)
B地区　SK2847(*2163*)　SK3613(*2164*)　SK3747(*2160*)　SK3792(*2165*)
SK3906(*2161*)　SK3980(*2162*)



第263図　遺物実測図　(*2179～2183*　1/1, *2166～2178*　2/3)
B地区　ＳＫ2983(*2177～2181*)　ＳＫ3568(*2166*)　ＳＫ3577(*2167～2171*)　ＳＫ3579(*2172～2174*)
ＳＫ3936(*2175*)　ＳＫ3940(*2183*)　ＳＫ3946(*2176*)　ＳＫ3948(*2182*)

G　溝・自然流路

2352号溝（ＳＤ2352，第264・277図，図版105）

Ｂ１地区の東側に位置する南北方向のもので，幅約１ｍ，深さ５㎝を測る。埋土は黒褐色砂質ロームで，遺物は弥生土器が出土した。*2184* は擬凹線甕で口縁有段部に４条の擬凹線を施す。肩部には連続刺突文を施す。調整は胴部外面がハケメ，内面がケズリ。*2185* は付加状甕で，口縁部はほぼ直立し，口縁部内外面ともに横方向のミガキを施す。*2186* は拡張有段高杯。内外面ともに摩滅が著しいが，杯口縁有段部は内外面とも横方向のミガキ，杯部外面は縦方向のミガキ調整を施す。

2362号溝（ＳＤ2362，第264・277図）

Ｂ１地区の東端を西から東へと流れている。幅50㎝，深さ４㎝で埋土はオリーブ黒色砂質ロームである。遺物は弥生土器が出土した。*2187* は鉢で，口縁部の一部のみのため分類は不明。調整は，体部上半外面は横方向の粗いミガキ，体部下半外面はハケメ，口縁端部から内面にかけてナデを施す。

2373号溝（ＳＤ2373，第252・264・277図，図版96・105・106）

Ｂ１地区の東端を南北に流れている。ＳＤ2375に切られ，ＳＤ2395を切る。幅約１ｍ，深さ４㎝で埋土は黒褐色砂質ロームである。遺物は弥生土器が出土した。*2188* ～*2196* は甕で，*2188* ～*2191* は有段甕。*2189* ・*2190* の調整は胴部外面にハケメ，胴部内面にケズリを施す。*2192* は有稜甕で調整は胴部内面のみにケズリを施す。*2193* は受口甕，*2194* は丸縁甕。*2195* ・*2196* は底部で，胴部外面にハケメ，胴部内面にはケズリが施される。*2197* ～*2200* は壺で，*2197* ～*2199* は短頸壺。*2197* は口縁部内面にハケメ，*2198*・*2199* は口縁部下部外面にハケメ，口縁部下部内面にケズリが施される。*2200* は擬凹線壺で２条の擬凹線，口縁部の調整は内外面ともにミガキ，肩部外面はミガキ，内面はハケメが施される。*2201* は有孔鉢。*2202* は擬凹線鉢で口縁部に３条の擬凹線，体部内面調整はミガキが施される。*1979* は壺形ミニチュア土器。

2403号溝（ＳＤ2403，第264・277図，図版105）

Ｂ１地区の北西隅を西から東へと流れている。幅84㎝，深さ10㎝，埋土は暗灰黄色砂質ローム，灰オリーブ色砂質ロームで，遺物は弥生土器が出土した。*2203* は平縁甕で調整は頸部内面ハケメ，胴部外面ハケメ，内面はハケメと思われるが剥離が著しく不鮮明である。

2541号溝（ＳＤ2541，第265・266・278～280・286～292・294・295図，図版34・35・105～108・142～146・149・153・163）

Ｂ２地区からＢ３・５地区を経てＢ７地区へ流れる溝である。中近世まで存続するＳＤ2501からＢ２地区で分岐し，Ｂ７地区ではＳＤ4001と合流する。Ｂ地区の集落を二分するように流れ，Ｂ５地区ではＳＩ７やＳＦ3526の排水を流す機能があったと考えられる。

遺物は弥生土器・木製品・石製品・緑色凝灰岩剥片が出土した。木製品のうち，鍬はＢ７地区で６枚が隙間なく重なり合って出土した。*2398* と*2396* が後面，これ以外の鍬が前面を上にする。*2394* ～*2396* は頭部の方向が揃えられ，その直下から出土した*2397* も頭部は逆だが，方向が揃っていた。これらと方向を異にする*2393* と*2398* もそれぞれ頭部は逆になるが，方向は揃っている。*2395* ～*2397* は柄孔の位置がぴったり重なっている。乱れの少ない方向の揃い方や柄孔の位置などから，柄孔に紐などを通して，溝内に投じてあった可能性が高いと考えられる。また棒材はＢ５地区の南側で５本並んだ状態で出土した。ＳＤ2541の遺物は弥生時代に限定されるため，この溝と合流や分岐する他の大規模な溝と比べ，存続期間は短い。

弥生土器は壺・甕・鉢・器台・高杯が出土した。*2204* ～*2211* は擬凹線甕。*2204* ～*2206* ・*2210* は

口縁部が伸長するが，*2207*～*2209* は伸長せず，断面三角形となる。*2208* ・*2209* は肩部に刺突文を施す。*2210* は底部が上げ底，*2211* はやや尖底でハケメを施す。*2212*～*2216* は有段甕。*2212* は有段部の下半に2条の擬凹線が施される。*2217*～*2224* は受口状口縁の甕。*2217* ・*2218* ・*2220*～*2224* は刺突受口甕で，*2217* ・*2218* は肩部に刺突文，*2224* は肩部に櫛描直線文を施す。*2225* ・*2231* は丸縁甕。*2226* ・*2227* は付加状甕。*2228*～*2230* は平縁甕で，*2230* は底部が上げ底となる。*2232* は甕の胴部で，底部はやや中心が凹む程度の平底。*2233* は有段小型甕で，口縁端部はつまみ出して尖らせる。*2234* ・*2235* は平縁小型甕。*2236* は付加状小型甕で，頸部に工具が当たった痕跡がある。

2237～*2246* は壺。*2237*～*2239*・*2245* は短頸壺で，口頸部が外へひらき，端部を面取りする。*2240* は有段短頸壺。*2241* は短頸壺で，口縁端部の一部を指で外に押し出して片口状にする。*2242* ・*2243* は擬凹線壺。*2242* は口縁端部を面取りして，擬凹線を施す。*2244* ・*2246* は広口壺で，口縁部は付加状にし，*2246* の底部は上げ底とする。*2247* ・*2248* は壺の底部。いずれもやや中心部が凹む平底。*2249* は小型壺の胴部で焼成後に胴部に孔を穿つ。*2250* は壺の把手。

2251～*2256* は器台。*2251* ・*2252* は外反器台の受部で，*2251* は口縁端部外面に沈線1条が入る。*2252* は脚基部に沈線6条が入るが，あまり鮮明ではない。*2255* は脚基部に装飾として5条沈線・刺突文・4条沈線・刺突文・5条沈線が交互に描かれる。*2253* ・*2254* ・*2256* は脚部で，いずれも外反し，端部は面取りする。

2257～*2259* は有段高杯の杯部。*2258* は口縁端部を面取りする。*2260*～*2263* は脚基部。*2261* には装飾として5条沈線・刺突文・4条沈線が交互に描かれる。*2264*～*2269* は高杯脚部。*2265* ・*2267* ・*2269* は脚裾端部を面取りし，1～2条の沈線を施す。また*2267* は端部上面に刺突文を施す。*2268* は有段高杯の脚部で，段の部分に稜をつくる。

2270～*2272* は鉢。*2270* は擬凹線鉢，*2271* は有段鉢で，内外面ミガキ調整。*2272* は鉢の底部で，体部外面から底部外面にかけて指頭圧痕が残る。

木製品は農具・容器・雑具・用途不明材・建築部材が出土した。

2393～*2398* は農具で直柄平鍬。これらの鍬の平面形は着柄隆起の左右に肩部をもち，これより上部を頭部，下部を刃部とする。いずれも頭部の先端に特徴となる突起を丁寧に削りだす。突起の下はくびれを丁寧に削って細くし，肩部へと身幅を広げ，肩部でおおよそ最大幅を出してから，ほぼ直線的に刃部となる。刃部の先端は丸みがある。頭部の突起は，平面形が三角形に近い*2393*～*2395* と，平面形が横長六角形に近い*2396* ・*2397* の2種類がある。前者の着柄隆起は逆雫形で，明確な稜をもち，分厚く頑丈なつくりとなるのに対して，後者の着柄隆起はなだらかで，やや厚みを増す程度のつくりとなるという違いがある。着柄隆起の厚みに違いが出るため，その断面においては，後者は前者ほど突起と着柄隆起との間のくびれが明瞭ではない。断面で特徴的なのは，頭部が角度をもつことで，着柄隆起のある後面へ屈曲する。その角度は33°（*2393*）・35°（*2394*）・15°（*2395*）・13°（*2396*）・10°（*2397*）で，強く屈曲するものと，やや屈曲するものにわかれる[注22]。

2393 は刃部先端が破損しているため，全長は不明。全体的に厚手で頑丈なつくりである。柄孔内に柄が残存する。頭部突起は丸みを帯びた三角形で，頭部の上1/3が強く屈曲する。樹種はクヌギ節。*2394* は，*2393* や*2395* の着柄隆起がそのままくびれまでなだらかにつながっていくのに対して，1段削りこんで，着柄隆起部とその他の部分とをはっきりと区別する。柄孔は他の鍬が円形であるのに対して，隅丸方形を呈する。頭部突起はしっかりと横に張りだした三角形で，これだけが強く屈曲する。刃部は角を丸めて，前面側を削って刃先とする。樹種はブナ科。*2395* は厚手で頑丈なつくりである

注22　深堀　茜　1998「下老子笹川遺跡出土の木製鍬について」『富山考古学研究』創刊号　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

ものの，着柄隆起と刃部の稜はやや不明瞭である。頭部突起は台形に近い三角形で，頭部の上1/3がやや屈曲する。刃部はどちらの面にも鉄器による加工痕が残る。樹種はコナラ節。*2396* は着柄隆起の上部から突起にかけて破損している。頭部突起は横長六角形で，頭部の上1/3がやや屈曲する。樹種はクヌギ節。*2397* は頭部突起が横長六角形で，突起だけがわずかに屈曲する。なだらかで稜の不明瞭な着柄隆起とくびれとの境に，鉄器による加工痕が顕著に残る。刃部は使用によるものか摩耗が激しく，形がいびつである。樹種はクヌギ節。*2398* は残存部位が刃部と柄孔の下部のみで，他の平鍬と同様に肩部をもち，刃先はカーブを描く。着柄隆起が剥落したものかとも考えられるが，柄孔の角度から類推して表とした面は非常に荒れており，剥落の痕跡を探すのは難しい。着柄隆起の下部の先端かと考えられる付近がわずかに隆起しているように見えるため，可能性はある。また泥除けの可能性も考えていたが，肝心の柄孔から上部が欠損しており，鍬への装着装置が特定できないため，それも断定することが出来ない。現状としては詳細不明の直柄平鍬としておく。樹種はクヌギ節。

2406 は容器で，小型桶の把手。中段と下段の瘤状部分に剥落痕があるため，この２箇所で桶本体から削り出されており，上段の瘤状部分は装飾と考えられる。樹種はスギ。

2407 は雑具で，椅子の脚部。台形の脚部のほぼ半分が欠損したもので，側辺は断面に丸みをもち，底部木口は斜めに削られて，立てたときにやや傾く。上部のホゾは欠損している。樹種はスギ。

2408 ～*2413* は用途不明の部材。*2408* は先端から５㎝のところを幅２㎝ほどぐるりと１段削って段を作り，裏側を斜めに削っている。上下を逆にして組合せ鋤の柄かとも考えられるが，段から先端までの長さが短く，段で鋤身と結縛しても，先端で鋤身に差し込むには短いように考えられる。樹種はスギ。*2409* は先端をとがらせた杭状の角材の中程に，方形の孔があけられているもの。樹種はブナ科。*2411* は角材で，上端の欠損部分に方形の穴をあけ，そこで折れて欠損したもの。この穴の下部は斜めに削られている。樹種はスギ。*2412* は下端を丸めた棒材で，*2413* は下端を削って細くした棒材。どちらも上部は欠損している。樹種はいずれもスギ。

2399 ～*2405* は用途不明の棒材。*2399* ～*2405* は同一地点からまとまって出土したもので，直径は２～３㎝，芯持ち材ではなく，細長い材を断面が円形になるように削り，端部を加工する。*2399* ・*2400* は上端に紐かけ状の段を削り出すもの。*2399* は段の裏側も斜めに削り，*2400* は裏側を平らに削る。*2399* は下端が欠損しているが，*2400* は完形で長さ2.9m，下端は丸く削っている。図示していないが，紐かけ状の段を削り出す棒材は，この流路の別地点からもう１本出土している。*2401* は上端で断面がやや方形となる凸形の段を削り出す。下端は欠損している。*2402* は完形で長さ3.2m，両端を細め，端部を丸く削って仕上げる。*2403*・*2405* は両端が欠損しているが，同様の棒材と考えられる。特に*2403* は現存長でも3.9mある。樹種はすべてスギ。*2404* は別地点から出土した棒材で，両端は欠損している。樹種はヒノキ亜科。

2414 ～*2418* は建築部材。*2414* ～*2416* は壁もしくは床材と考えられる材。*2414* は上端近くと下部欠損部分に方形の孔があけられる。*2415* の下端のカーブはやや粗く削っている。*2416* は表裏面ともに加工痕が顕著で，表面上部は方形の孔のあたりから斜めに削って厚みを薄くしている。下部欠損部分にも方形の孔があけられる。*2417* は桟材か。左右に切り欠きをいれ，下端は両側面を削って幅を細くする。表裏面には刃あたりの痕跡が多数確認できる。*2418* は垂木材で，上部は断面方形，各側面から抉りを入れる。抉りのある部分から下は断面が台形となり，幅の細くなった側面に等間隔に３箇所の刻みを入れる。下部は欠損している。樹種はいずれもスギ。

2419 は木口に伐採痕のある原材。鉄製工具を使用して，２方向から伐採している。

石製品は砥石・敲石が出土した。*2426* は蛇紋岩製の砥石。平坦な砥面が６面あり，細かな線状痕がみられる。硬質で光沢を持つ石材で中～仕上げ砥と思われる。*2428* は濃飛流紋岩製の敲石。敲打面が天地面と左側面にみられる。

石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩石核・緑色凝灰岩製管玉未成品が出土した。*2429* ・*2430* は荒割工程品。*2429* は右側面に自然面が観察できる。*2430* は天地面を打割により平坦に分割し，厚さ20.4㎜程の板状に整えている。表面は地面側から打割を行っている。剥離の末端部は湾曲して出っ張っており，天面からの調整剥離でこの面を平坦に整えようとしている。共にＢ７地区で出土しており，玉作関連遺物が出土した建物よりも下流に位置する。周辺からの流れ込みの遺物である。

2562号溝（ＳＤ2562，第267・280・293図，図版94・147）

Ｂ２・６地区に位置する。道路状遺構ＳＦ2702を構成するＳＤ2561から分岐して北へ流れる溝。Ｘ201以北ではプランが不明瞭であった。遺物は弥生土器・木製農具が出土した。*2278* は平縁甕。外面から口縁部内面までナデ，胴部内面はケズリを施す。*2420* は農具の又鍬の刃部で，上部は欠損している。欠損部分の内側に又となるような形跡はみられず，刃部はまだ伸びると考えられる。刃部の幅は下部で最大になり，刃先は丸みを描いて細くなる。樹種はクリ。

2570号溝（ＳＤ2570，第267・280・295・296図，図版94・168）

Ｂ２地区の北東部に位置する。東西方向の溝と方形の土坑状のプランからなる遺構。埋土は黄灰色シルトを基調とする。遺物は弥生土器・石製玉作関連遺物が出土した。緑色凝灰岩とひすいは土坑部分から出土したが，剥片は目立って出土していないため玉作り関連の遺構ではなく，Ｂ６地区の玉作工房からの流れ込みと思われる。

2273 ～*2276* は甕。*2273* は刺突受口甕。口縁端部を面取りし，口縁部外面に刺突文を施す。*2274* ・*2276* は有段甕。*2275* は丸縁甕か。*2277* は器台脚部で，脚裾端部を面取りする。石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩剥片少量とひすい石核が出土した。ひすいが特に多く出土したが，未成品は少ない。*2434* ～*2438* はひすい石核。いずれも打割により分割される。*2435* は礫面が残っており，原石が円礫であったことがいえる。*2436* は風化した面がある。Ｂ６地区ＳＩ21で出土したものと比較すると，色調が明るく，美しいひすいが多く出土した。

2581号溝（ＳＤ2581，第267・280図，図版94・107）

Ｂ２地区の南東部に位置する。盛土ＳＸ3990の上面で検出した。遺物は弥生土器が出土した。*2279* ・*2282* は甕。*2279* は有段甕で，頸部外面にケズリ。*2282* は擬凹線甕で，厚みのある口縁部に比べ，胴部から底部の器壁は非常に薄い。肩部には刺突文を施し，底部は中央がやや凹む。*2280* は高杯脚部。*2281* は有鈕蓋で，口縁端部はハケによる面取りをする。つまみ部は端部を面取りし，上面を凹ませて，中央に孔をあける。

2584号溝（ＳＤ2584，第267・281図，図版94・107）

Ｂ２地区の南東部に位置する。Ｂ２地区の南端から円弧を描いてＳＤ2562に合流する。遺物は弥生土器・緑色凝灰岩剥片が出土した。*2283* ・*2289* は甕。*2283* は擬凹線甕で，頸部内面は板状工具のナデにより広く面をとる。*2289* は平縁甕。*2287* ・*2288* は有段小型甕。*2284* ・*2285* は壺。いずれも口縁端部外面を面取りする。*2286* は有段小型壺。胴部外面は横方向と縦方向の丁寧なミガキ，底部は平底でヘラケズリする。*2290* ・*2291* は小型の鉢で，*2290* は無頸鉢。*2291* は擬凹線鉢で，外面と口縁部内面は赤彩する。

2586号溝（ＳＤ2586，第267・281図，図版107）

Ｂ２地区の南東部に位置する。ＳＤ2584に切られる。試掘トレンチで切れるが，ＳＤ2593もＳＤ2586の続きの可能性がある。遺物は弥生土器が出土した。*2292* は擬凹線甕。口縁部は上に伸長せずに付加状となる。底部はやや丸みのある平底でナデ調整。

2587号溝（ＳＤ2587，第267・281図，図版108）

ＳＤ2584から分岐する溝である。遺物は弥生土器が出土した。*2293* ～*2295* は甕。*2293* は擬凹線甕。*2294* は有段甕。*2295* は平縁甕。*2296* は短頸壺で，口縁部外面に４条の線刻が入る。口縁端部は上面で面取りする。*2297* は有孔鉢。

2618号溝（ＳＤ2618，第267・268・281図，図版108）

Ｂ２地区の中程東側に位置する。最長7.5m，最大幅1.7mを測る。埋土は上層が黄灰色シルト，下層が炭粒を多く含む黒褐色シルトである。下層は遺構の南西側のごく一部のみにみられる。深さはほぼ５～10㎝であるが，下層がみられるところでは深さ25㎝を測る。遺物は弥生土器が出土した。遺構の南端で下層が堆積した後，弥生土器がまとまって廃棄されている。

2298 ～*2301* は甕。*2298* ～*2300* は擬凹線甕で，*2300* は口縁部が伸長しない。*2301* は平縁甕。*2302* ・*2303* は高杯杯部。*2302* は拡張有段高杯で，小さい杯部に大きく開く口縁部をもつ。拡張してやや下垂する口縁端部上面にはよく赤彩が残るが，内外面にもわずかに赤彩の痕跡がある。*2303* は有段高杯。口縁端部内面は広めに面取りする。*2304* ・*2305* は高杯脚部で，脚裾端部上面に粘土帯を貼り付け，*2304* はその上面に擬凹線文２条を施す。

2622号溝（ＳＤ2622，第267図）

Ｂ２地区ＳＤ2562から分岐し，Ｂ２地区からＢ３地区へ流れる溝。遺物は弥生土器片・摩耗がみられる鉄石英剥片が出土した。

2667号溝（ＳＤ2667，第267・269・282図，図版109）

Ｂ２地区の中程東側に位置する。最長８m，最大幅3.8mを測る。上層の深さはほぼ７～11㎝であるが，下層がみられるところでは深さ28㎝を測る。遺構は大きく西と東に分かれ，平面形で若干くびれているところを境に，西は上層のみが堆積し浅い窪地となっている。東は下層がみられ，これを掘削すると中心が浅い台地状に残り，平面形は環状になる。

遺物は弥生土器・緑色凝灰岩剥片が出土した。弥生土器は遺構の東側から集中して出土した。なお台地状の高まりからはほとんど土器は出土していない。*2325* は口縁部を打ち欠き，頸部を下にして押し潰れた状態で出土した。甕が２個体重なった状態で出土し，そのうち図化できた*2309* は口縁を環状の窪みへ向けた状態で潰れており，台地状の上に置かれたものが転がり落ちたものと思われる。

2308 ～*2317* は甕。*2308* ～*2315* は擬凹線甕。*2310* ・*2311* は肩部に刺突文を施す。*2312* ・*2313* は口縁部が内傾する。*2314* ・*2315* は口縁部が伸長せず，断面三角形となる。*2316* は有段甕で，口縁部は外に開いて，肩部に刺突文を施す。胴部外面にはススが厚く付着する。*2317* は台付甕で，底部に浅くて広めの台が付く。口縁は有段となり，頸部内面はハケメを施す。

2323 ～*2325* は壺。*2323* は細頸壺か。*2324* ・*2325* は広口壺で，*2324* の口縁部は有段となり，外面に刺突文を施す。*2325* の胴部外面はハケの後粗いミガキを施し，底部は上げ底となる。

2318 は小型の有段高杯。*2319* ・*2320* は鉢。*2319* はくの字鉢で，口縁端部は小さくつまみ上げる。*2320* は無頸鉢。*2321* ・*2322* はミニチュア土器で，*2321* は鉢形，*2322* は壺形。*2322* の口縁部外面はナデ調整の後，波状文を施す。

2678号溝（ＳＤ2678，第267・281図，図版108）

Ｂ２地区の中程東端に位置する。盛土ＳＸ3990上面で検出し，埋土は黒褐色シルトを基調とする。一部を検出したのみだが，ＳＤ2560～2562と同時期で同様な性格を持つ溝と思われる。遺物は弥生土器・緑色凝灰岩剥片が出土した。*2306* は平縁甕。*2307* は擬凹線鉢で，内外面ミガキと赤彩を施す。

2876号溝（ＳＤ2876，第66・293図，図版147）

Ｂ３地区の中程，道路状遺構ＳＦ3526の両側溝に挟まれて位置する溝。Ｂ５地区ＳＦ3526の両側溝と平行して位置するため，この道路に関わる遺構と思われる。しかし南側が中層遺構に切られるため詳細は不明である。遺物は弥生土器片のほか木製品が出土した。*2422* はナスビ形鍬の笠部の一部で，笠部下部に結縛痕はみられなかった。樹種はクリ。*2423* ～*2425* は用途不明の部材。*2423*・*2424* は上部に方形の孔をあけた板材。*2423* はその孔の左右を側辺と上端にむけて削り落とし，断面が算盤玉形になっている。いずれも下部は欠損している。*2425* は板材で，両端ともに欠損しているが，側面に段をつくる。樹種は*2423* がスギ，*2424* ・*2425* がヒノキ亜科。

3540～3543・3547・3549・3550号溝（ＳＤ3540～3543・3547・3549・3550，第239・270・271・293・295図，図版147・159）

Ｂ５地区のほぼ中央に位置し，北西から南東に向かって流れる溝。新旧関係は切り合いから，ＳＤ3543＜3540＜3541となる。深さは10～20㎝で，断面は逆台形のものが多い。これらの溝はＳＦ3526とＳＩ８とを結ぶ道路で，側溝が何度も掘り返された結果，ほぼ同じ箇所に何条も溝が検出されたと考えられる。遺物は弥生土器片が出土したほか，ＳＤ3543からは木製品や緑色凝灰岩剥片が出土した。*2421* は又鍬の刃部。上端は欠損しているが，又に近い部分かと考えられる。刃部の幅はほぼ同じで，刃先のみがやや細る。樹種はクヌギ節。ＳＤ3540からは緑色凝灰岩製管玉未成品が出土した。*2432* は形割工程品。

3544～3546・3548・3551号溝（ＳＤ3544～3546・3548・3551，第270・271図）

Ｂ５地区のほぼ中央に位置する。主に排水溝の役割を担う溝群。ＳＤ3545は周溝遺構ＳＨ18の排水溝で，北から南に流れ道路状遺構の側溝ＳＤ3524に流れ込む。先に述べた溝群ＳＤ3540・3541・3543・3549・3550を切る。ＳＤ3546は周溝遺構ＳＨ12の排水溝で，北西から南東に流れＳＤ3545に合流する。ＳＤ3544・3548・3551は溝群ＳＤ3540～3543・3547・3549・3550と排水溝ＳＤ3545・3546の間を流れる溝。新旧関係は不明。遺物は弥生土器片が出土した他，ＳＤ3545から緑色凝灰岩剥片が出土した。

3553号溝（ＳＤ3553，第271・282・295図，図版94・162）

Ｂ５地区中央西側に位置する。北西から南東に流れる短い溝。深さは30㎝で断面は逆台形。遺物は弥生土器甕が潰れた状態で出土した他，石製玉作関連遺物が出土した。*2326* ～*2329* は甕。*2326* は刺突受口甕で，ヘラ状工具による連続刺突文を施す。調整は内外面ハケ。*2327* ～*2329* は付加状甕。いずれも摩滅が激しい。石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩石核・剥片が出土した。2431は荒割工程品。

3722号溝（ＳＤ3722，第272・283図）

Ｂ６地区の南側に位置する。最大幅97㎝，深さ18㎝を測る。ＳＸ3990の盛土と盛土の間の溝で，ＳＤ2560の支流と考えられるが，部分的にしか検出できなかった。遺物は弥生土器が出土した。弥生土器には擬凹線甕（*2331*）と丸縁甕（*2330*）がある。*2331* は器高が15㎝と低い中型の甕で，胴部外面ハケメ調整，内面は縦方向のヘラケズリ調整である。*2330* は胴部外面ハケメ後ナデ調整で，内部には粘土接合痕が残る粗雑な作りである。

3723号溝（ＳＤ3723，第272・283図，図版110）

Ｂ６地区の南側に位置する。ＳＤ2560掘削後に検出した。遺物は弥生土器が出土した。*2332* は椀形の無頸鉢である。外面はハケメ調整，内面はナデ調整である。底部は上げ底となる。

3750号溝（ＳＤ3750，第272・273・283図，図版111）

Ｂ６地区中央に位置する。南東から西に向かって円弧を描きＳＤ3769へ合流する。幅24～30㎝，深さ８～９㎝を測る。埋土は褐灰色シルトである。細く浅い溝で，底面の勾配がほとんどないため，敷地を区切るための区画溝と思われる。遺物は弥生土器・緑色凝灰岩剥片が出土した。弥生土器には大型の擬凹線甕（*2333*）と刺突受口甕（*2334*）がある。*2333* は口径が30㎝あり，胴部外面はハケメ，内面は横方向のヘラケズリ調整である。*2334* の口縁帯には刺突文が施され，外面はススが付着する。

3769号溝（ＳＤ3769，第244・272・273・283図，図版111）

Ｂ６地区中央に位置する。南から北西に向かって円弧を描き，ＳＩ14の周溝の手前まで続く。幅45～119㎝，深さ８～18㎝を測る。埋土は黄灰色シルト質ロームを基調とする。敷地を区切るための区画溝と思われる。遺物は弥生土器が出土した。*2335* は有段甕で，胴部外面は縦方向のハケメ，内面は縦方向のケズリ調整である。

3784号溝（ＳＤ3784，第272・283図，図版111）

Ｂ６地区中央に位置する。最大幅1.61ｍ，深さ17㎝を測る。遺物は弥生土器が出土した。弥生土器には有段甕（*2336*）と擬凹線鉢（*2337*）がある。*2336* は有段部直下までハケメ調整される。*2337* は頸部が強く屈曲して大きく外反する口縁部が付くもので，２段で施される擬凹線文は直線的ではなくわずかに波打つ。内外面赤彩されるが，外面は有段部直下から底部にかけて炭化物が付着する。

3785号溝（ＳＤ3785，第272～274・283図，図版35・110・111）

Ｂ６地区中央に位置する。南から北西に向かって円弧を描く。幅73～117㎝，深さ28～37㎝を測る。ＳＤ3787に切られる。埋土は上層が灰黄褐色シルト，ついで炭化物が混じる暗灰黄色シルト，その下が炭化物が混じる黄灰色シルトで，下層が暗灰黄色シルトである。遺物は弥生土器が遺構の西側の１・２層目からまとまって出土した。小型の甕が横につぶれた状態で出土した。

弥生土器には甕・壺・器台（高杯）がある。甕は有段口縁甕（*2341*）・刺突受口甕（*2338*）・受口甕（*2339*）・丸縁甕（*2340* ・*2342*）がある。*2338* の屈曲が緩い口縁帯には短線刺突文が施される。*2340* は外傾する短い口縁部をもち，胴部内外面ハケメ調整である。*2342* は器高が15㎝と低い中型の甕で，胴部外面縦方向のハケメ調整，内面ヘラケズリ調整である。*2343* は広口壺で，口縁部のみが完形に残る。*2344* は球形の胴部の広口壺で，外反する口縁部をもち，口縁端部は面取りされ，ヘラ状器具でナデられる。胴部外面は縦方向の荒いハケメ調整で，内面はハケメ後ヘラ状器具でナデる。胴部外面には黒斑状に一部炭化物が付着する。*2345* は器台又は高杯の脚裾部で，裾端部外面には浅く擬凹線文が残る。

3786号溝（ＳＤ3786，第92・93・283図，図版111）

Ｂ６地区の中程東側に位置し，ＳＩ12の周溝を切る。最大幅59㎝，深さ19㎝を測る。遺物は弥生土器が出土した。弥生土器には受口甕（*2348*）・刺突受口甕（*2346*）・台付壺（*2347*）がある。*2348* は胴部中位を欠損するが，肩部の張りから大型の甕と推定される。有段の屈曲は緩く，口縁部はヨコナデ調整，胴部外面ハケメ調整で，内面には頸部内面以下底部にいたるまで広く炭化物が付着する。底部は厚く，上げ底である。*2346* には口縁帯に櫛状工具による列点文が施される。*2347* は台付壺の胴部で，中央を２段の突帯が巡る。

3787号溝（ＳＤ3787，第272・283図，図版111）

Ｂ６地区の中程東側に位置し，ＳＫ3788に切られる。最大幅36㎝，深さ６㎝を測る。遺物は弥生土器の甕が出土した。*2349* は刺突受口甕で口縁帯には櫛状工具による列点文が施される。*2350* は口縁部が内湾し，端部が摘み上げられる。

3789号溝（ＳＤ3789，第272・273・275・284図，図版110～112）

Ｂ６地区の南側西端に位置する。ＳＩ21の壁溝に沿って一部分のみ検出されている。幅69㎝前後，深さ27㎝前後を測る。埋土は７層に分層でき，何度も掘り返されたことが考えられる。遺物は弥生土器の破片がまとまって出土した。また，鉄石英の剥片も出土した。

弥生土器は甕と高杯がある。甕は擬凹線甕（*2351* ～*2354*）と有段甕（*2355*）がある。*2351* は口縁部片ではあるが，器表に炭化物の付着は認められない。*2354* は肩部に刺突文が施され，ハケメ調整された胴部外面には肩部を中心に厚くススが付着する。内面はヘラケズリ調整で，器壁は薄く仕上げられ，内底面には炭化物が付着する。底部は中央が浅く窪む平底で，井の字状にハケメ調整痕が残る。*2355* は中型の甕で，口縁部を一部欠損するのみで残存率は高い。胴部外面ハケメ調整，肩部には垂直方向に刺突文が施される。内面はヘラケズリ調整で，小径の底部には直径約５㎜前後の孔が３個穿孔される。外面には炭化物の付着は認められない。*2356* は拡張有段高杯の杯部で，口縁部は外反し，端部内面には幅広の接地面がある。外面には割れ口に沿って柿渋色の塗料が帯状に塗られており，接着剤として使用されたものであろうか。内面は口縁端部と杯底部の屈曲部に強く赤彩が残る。調整は外面縦方向，内面横方向のヘラミガキ調整である。

3793・3797号溝（ＳＤ3793・3797，第272・284図，図版111）

Ｂ６地区の南側西端に位置する。深さ３～10㎝を測る不整形の溝。ＳＩ21に切られる。遺物は弥生土器の擬凹線甕（*2357*）が出土した。有段部外面は稜を作り，内面には強いヨコナデによる窪みができる。肩部には三角形の刺突文が巡り，口縁部から全面にススが付着する。胴部外面は板状工具によるナデ調整，上半内面はハケメ後ナデ調整である。

3802号溝（ＳＤ3802，第272・273・284図，図版111）

Ｂ６地区ＳＩ14北側から調査区北側中央にかけて位置する，南北方向の溝。幅19～32㎝，深さ３～６㎝を測る。埋土はオリーブ褐色シルトである。全ての遺構を切り，建物廃絶後人工的に掘削された溝と思われる。遺物は弥生土器の受口甕（*2358*）が出土した。口縁部と頸部にススが付着する。

3808号溝（ＳＤ3808，第272・294図，図版153）

Ｂ６地区の中程西側に位置する。最大幅87㎝，深さ13㎝を測る。遺物は弥生土器・砥石が出土した。*2427* は安山岩製の砥石。地面は欠損するが，残存する面全てに線状痕がみられる。５面とも平坦であるが，表・裏・左右側面は天地面に向かって若干丸みをもつ。

3810号溝（ＳＤ3810，第272・284図，図版111）

Ｂ６地区の中程西側に位置する。最大幅1.01ｍ，深さ18㎝を測る。遺物は弥生土器が出土した。弥生土器は刺突受口甕（*2359*）と擬凹線鉢（*2360*）がある。*2359* は口縁帯に刺突文が施されるが，口縁端部は丸縁である。*2360* は胴部の張りがあまりなく，有段部の屈曲も緩く，緩やかに口縁部が外反する器形である。外面には炭化物が全面に付着する。

3813号溝（ＳＤ3813，第272・273図）

Ｂ６地区中央に位置する。最大幅1.41ｍ，深さ９㎝を測る。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト質ロームである。浅い方形の土坑が集中する部分を取り囲むように南北方向に円弧を描いており，敷地

を区切るための区画溝と思われる。遺物は弥生土器片が出土した。

3821号溝（ＳＤ3821，第272・284図，図版111）

Ｂ６地区の中程西端に位置する。最大幅2.29m，深さ31㎝を測る。遺物は弥生土器が出土した。弥生土器は平縁甕（*2362*）と擬凹線鉢（*2363*）がある。*2362* は肩があまり張らない器形である。*2363* の外面全体にはタールが付着する。

3853号溝（ＳＤ3853，第102・272・273図）

Ｂ６地区中央に位置する。ＳＩ16の周溝の周囲南半分を最大幅47㎝，最大深10㎝の規模で取り囲み，区画溝と思われる。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は弥生土器片が出土した。

3854号溝（ＳＤ3854，第102・272・273図）

Ｂ６地区中央に位置する。ＳＩ16の南西側のＳＤ3853のさらに外側に平行して検出された。部分的に建物を２重に取り囲んだ可能性がある。遺物は弥生土器が出土した。

3856・3857号溝（ＳＤ3856・3857，第272・284図，図版110・111）

Ｂ６地区の中程西端に位置し，ＳＤ3853に切られる。深さ６～７㎝を測り，浅く不整形な溝である。遺物は弥生土器・緑色凝灰岩剥片が出土した。

弥生土器は高杯・鉢・有孔鉢がある。*2364* は小型の鉢形高杯である。杯部は浅く，口縁端部は丸縁で，外面には沈線が巡る。*2365* は口縁部が外反する有段高杯であるが，器面が荒れている。鉢は有段鉢（*2366* ・*2367*）がある。*2366* は口径12㎝前後の小型の鉢で，肩部には刺突文が施され，体部下半にはヘラミガキ調整が残る。口縁端部と口縁部内面には赤彩痕が残る。*2367* は内面の屈曲がほとんどなく大きく外傾する口縁部をもつ。体部は内外面ヘラミガキ調整で，口縁部内外面と体部外面は赤彩される。*2368* は口縁部が直線的に開く逆円錐形状の平底の有孔鉢である。外面縦方向のハケメ調整で，口縁端部は丸縁である。内面は横ハケメ調整で，底部はナデ調整である。

3867号溝（ＳＤ3867，第99・100・272・273・284図，図版111）

Ｂ６地区の中程東側に位置する。幅30～119㎝，深さ15㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。ＳＩ15の周溝と同じ向きに円弧を描いて巡る。浅い溝であるが，ＳＩ15の周溝に伴う遺構の可能性がある。ＳＫ3884より新しい時期のもの。遺物は弥生土器がまとまって出土した。そのほか緑色凝灰岩剥片・鉄石英剥片が出土した。

弥生土器は甕・小型甕・器台・高杯がある。甕は擬凹線甕（*2369* ・*2371*）・刺突受口甕（*2370*）がある。擬凹線甕には断面三角形のものと有段のものがある。*2370* は口縁帯に刺突文が施されるが，屈曲は緩く口縁端部が直線的に伸び，面取りされない。*2372* は小型の丸縁甕である。*2373* は擬凹線器台の受部である。口縁端部は内端面に面を取る。*2374* は有段高杯の杯部で，杯底部が浅い。口縁部のヘラミガキ方向は縦方向である。

3873号溝（ＳＤ3873，第272・273図）

Ｂ６地区中央に位置する。ＳＩ24を中心に土坑を含めて最大幅37㎝，最大深17㎝の規模で取り囲み，区画溝と思われる。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は弥生土器片が出土した。

3904号溝（ＳＤ3904，第272・273・276・285図，図版35・112・113）

Ｂ６地区中央に位置する。最大幅1.41m，最大深12㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。ＳＤ3873を切る。

遺物は弥生土器がまとまって出土し，そのうち鉢が完形で２個出土した。土器廃棄溝と思われる。

弥生土器には甕・壺・高杯・鉢がある。甕は擬凹線甕（*2375*）・平縁甕（*2376* ・*2378*）がある。

2375 は同一個体の破片がＳＩ18周溝からも出土している。直立する口縁端部に擬凹線文が施され，口縁部内面には強いヨコナデによって浅い段ができる。*2376* は外面はハケメ調整，内面はヘラ状器具で浅くナデ調整する。*2378* は中型の甕で，わずかに欠損する部位があるがほぼ完形の残存状況である。器高に比べて胴部が張る器形で，底部に向けて急激にすぼまる。底部はやや膨らんだ平底である。胴部内外面はハケメ調整で，外面には全体に炭化物が付着する。*2377* は擬凹線口縁の甕か壺である。*2379* ・*2380* は有段高杯の杯部で，口縁端部は共に丸縁で，*2379* の口縁部は外反する。調整は*2379* は口縁部内面のみが横方向のヘラミガキ調整である。*2380* の口縁部内外面はヘラ状器具でヨコナデし，縦方向のヘラミガキを施す。鉢は擬凹線鉢（*2381*）と無頸鉢（*2382*）がある。*2381* は外反する口縁部に算盤玉形の体部が付くもので，底部は中央が浅く窪む小さな平底である。肩部には双葉状刺突文を３段施文する。外面全体には炭化物が付着する。*2382* は口縁部が大きく開く無頸鉢で，口縁部は摘んで内側に面を取る。外面はハケメ調整，内面は板状工具によるナデ調整である。外面全体には炭化物が付着する。

3915号溝（ＳＤ3915，第272～274・285図，図版35・112・113）

Ｂ６地区中央に位置する。最大幅67㎝，深さ38㎝を測る。埋土は上層が灰黄褐色シルト，次いで褐灰色シルト，下層が黄灰色シルトである。遺物は遺構の南東側で弥生土器がまとまって出土した。

弥生土器には刺突受口甕と長頸壺がある。*2383* は口縁帯に櫛状工具による列点文が施され，口縁帯直下にはハケメ調整が残る。頸部が長く，肩部には櫛状工具による直線文が巡る。*2384* は口縁端部が面取りされ，口縁部上位はナデ調整，口縁部下半と胴部外面はハケメ調整である。

3927号溝（ＳＤ3927，第272・273・285図，図版35・112）

Ｂ６地区北東部に位置する。最大幅5.25m，深さ15㎝を測る。埋土は上層が灰黄褐色シルト，下層が黄灰色シルトである。噴砂に切られる。ＳＤ3950との切り合いはなく，同時期に存在したものと思われる。遺物は弥生土器がまとまって出土した。

弥生土器は擬凹線甕（*2385* ・*2386*）と壺がある。*2386* は摘んだ口縁端部に擬凹線文が巡る小型の甕で，頸部内外面と胴部外面がハケメ調整，胴部内面が板状工具によるナデ調整である。*2387* は壺の口縁の小破片で，上方に摘み上げた口縁端部外面には円形浮文を貼り付けた痕跡が３箇所に残る。*2388* は壺の底部である。

3950号溝（ＳＤ3950，第272・273図）

Ｂ６地区北東部に位置する。最大幅65㎝，深さ13～17㎝を測る。埋土は上層が灰黄褐色シルト，下層が黄灰色シルトである。噴砂に切られ，ＳＩ17を切る。ＳＤ3927との切り合いはなく，同時期に存在したものと思われる。遺物は弥生土器片・緑色凝灰岩剥片が出土した。

3951・3952号溝（ＳＤ3951・3952，第272・273図）

Ｂ６地区北端中央部に位置する。最大幅はＳＤ3951が51㎝，ＳＤ3952が28㎝，深さは両者合わせて４～10㎝を測る。主軸がほぼ北西方向に向いており，また溝間が70～90㎝の間隔で離れている。平面・断面ともＳＤ3815～3820と同様な形状を呈し，用途としては畠が考えられる。埋土は上層が炭化物が混じる暗灰黄色粘土質ローム，下層が灰黄色粘土質ロームである。遺物はＳＤ3951から弥生土器片が出土した。

3956号溝（ＳＤ3956，第272・273図）

Ｂ６地区北西部に位置する。最大幅99㎝，深さ５～８㎝を測る。埋土は暗灰黄色粘土質ロームである。ＳＨ35を切る。ＳＤ3955・3958・3960も同様の規模で2.4～4.7m間隔にほぼ平行して検出されて

いる。区画溝と思われる。遺物は弥生土器片が出土した。

3963号溝（ＳＤ3963，第272・285図，図版112・113）

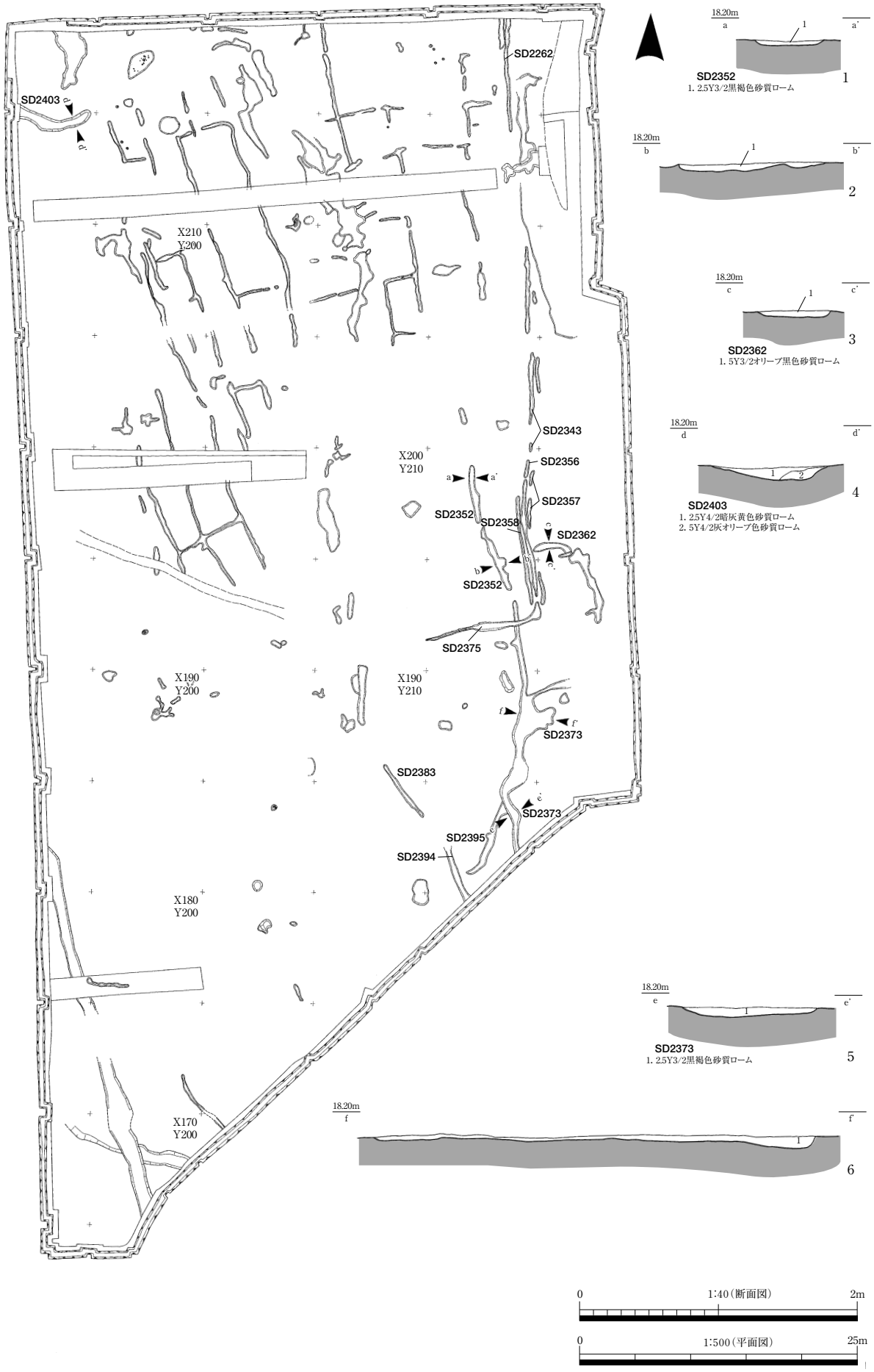
Ｂ６地区北側中央部のＳＨ33の北東側に位置する，Ｌ字状の溝。最大幅79㎝，深さ14㎝を測る。

遺物は弥生土器が出土した。弥生土器は長頸壺（*2390*）と鉢（*2389*）がある。*2390* は口縁部がやや外反する長頸壺の口縁部で，口縁端部は面取りされる。同一個体と思われる破片には口縁端部に赤彩痕が残るものがある。*2389* は擬凹線鉢で肩部には双葉状刺突文を２段施文したものが帯状に巡っている。表面には一部タールが付着する。*2391* は壺の底部である。

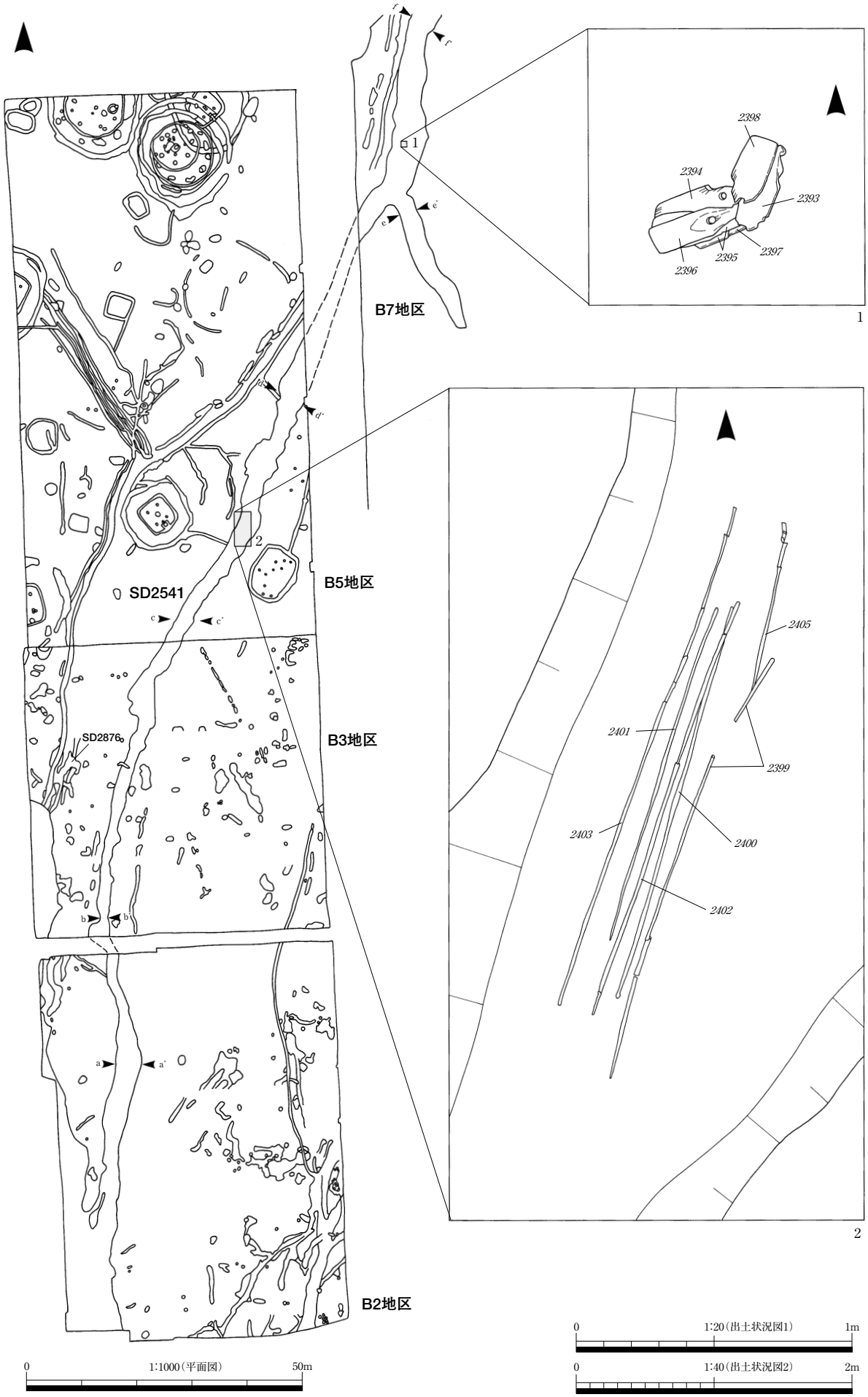
3973号溝（ＳＤ3973，第272・273・285図，図版112）

Ｂ６地区の中程東端に位置する。最大幅3.30ｍ，深さ23㎝を測る。埋土は上層が黄灰色シルト，次いで褐灰色シルト，下層が植物遺体が多く含まれる黒褐色粘土質ロームである。ＳＤ3973の方が先に埋まったと考えられるが，埋土からＳＩ18の周溝と同時期に存在したことが考えられる。ＳＤ3973から東側は地形が下がっており，ＳＩ18の周溝の排水溝だったと考えられる。

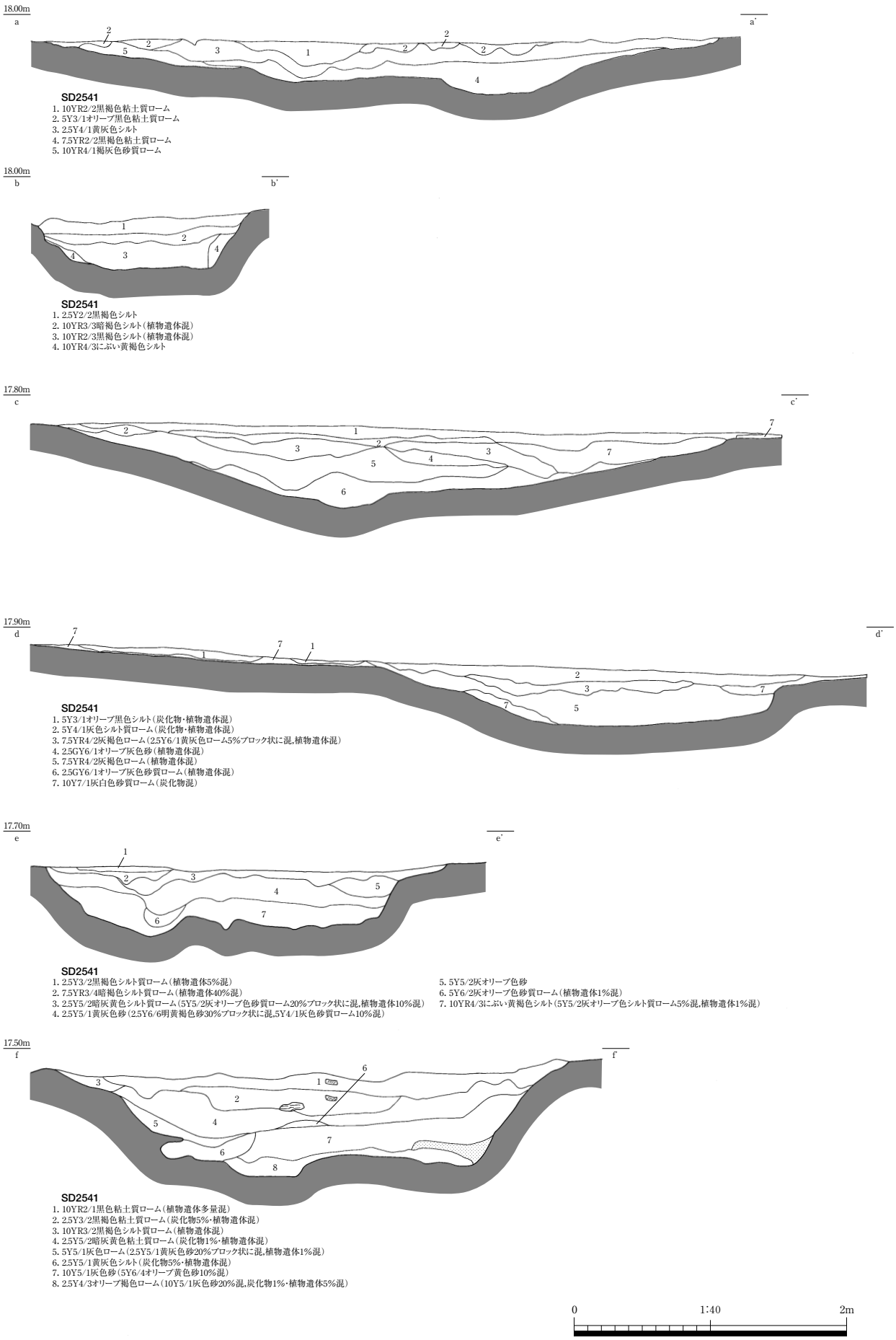
遺物は天王山系の甕の口縁部・胴部・底部片（*2392*）が出土した。同一個体と判断され，表面にはＲＬの縄文が横位に施文される甕である。頸部で僅かに屈曲し，外反する口縁をもつ器形で，内面はヘラ状器具でナデた後ナデて仕上げている。



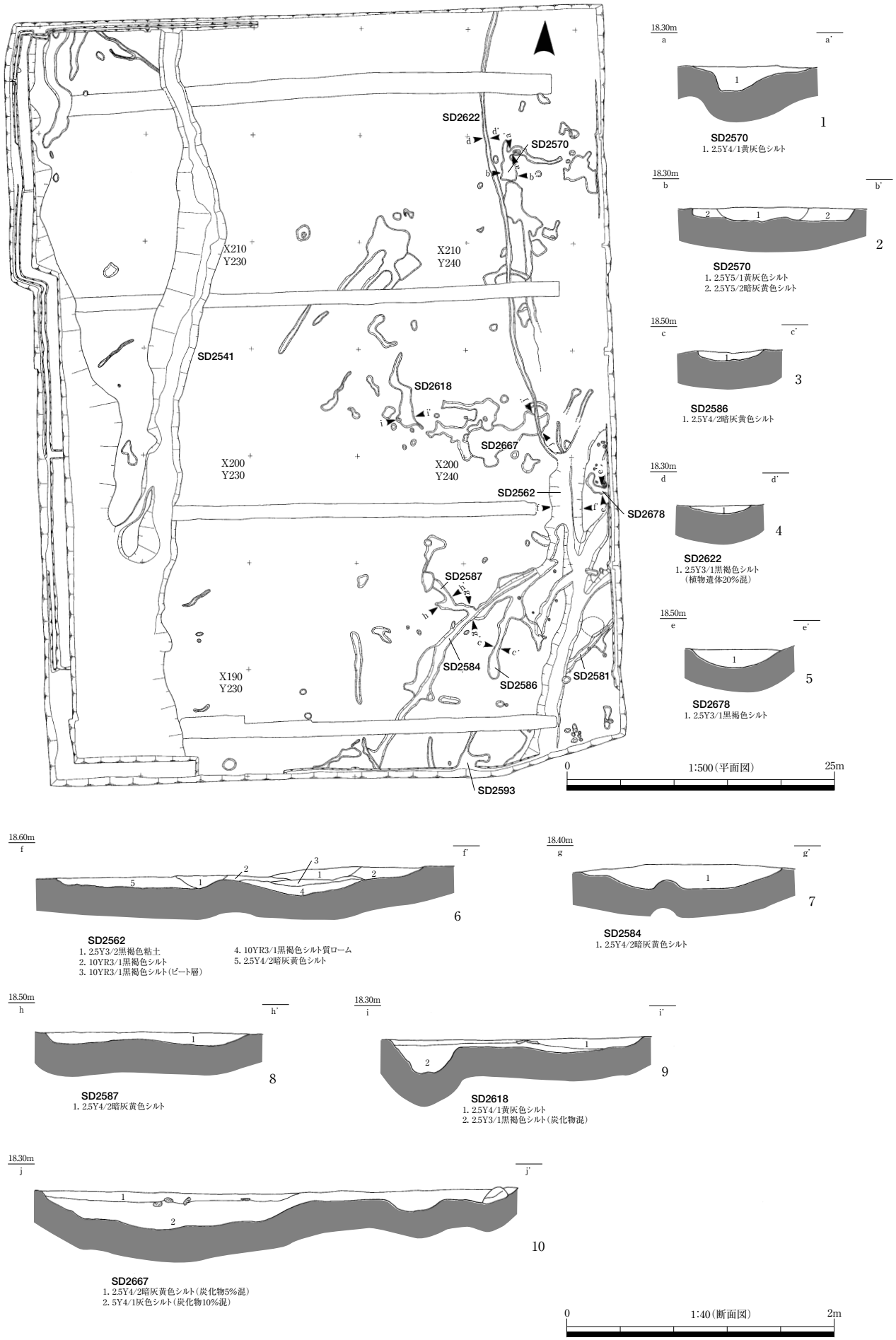
第264図　遺構実測図　(1/40・1/500)
B１地区　1・2.ＳＤ2352　3.ＳＤ2362　4.ＳＤ2403　5・6.ＳＤ2373



第265図　遺構実測図　(1/20・1/40・1/1000)
B２地区　ＳＤ2541

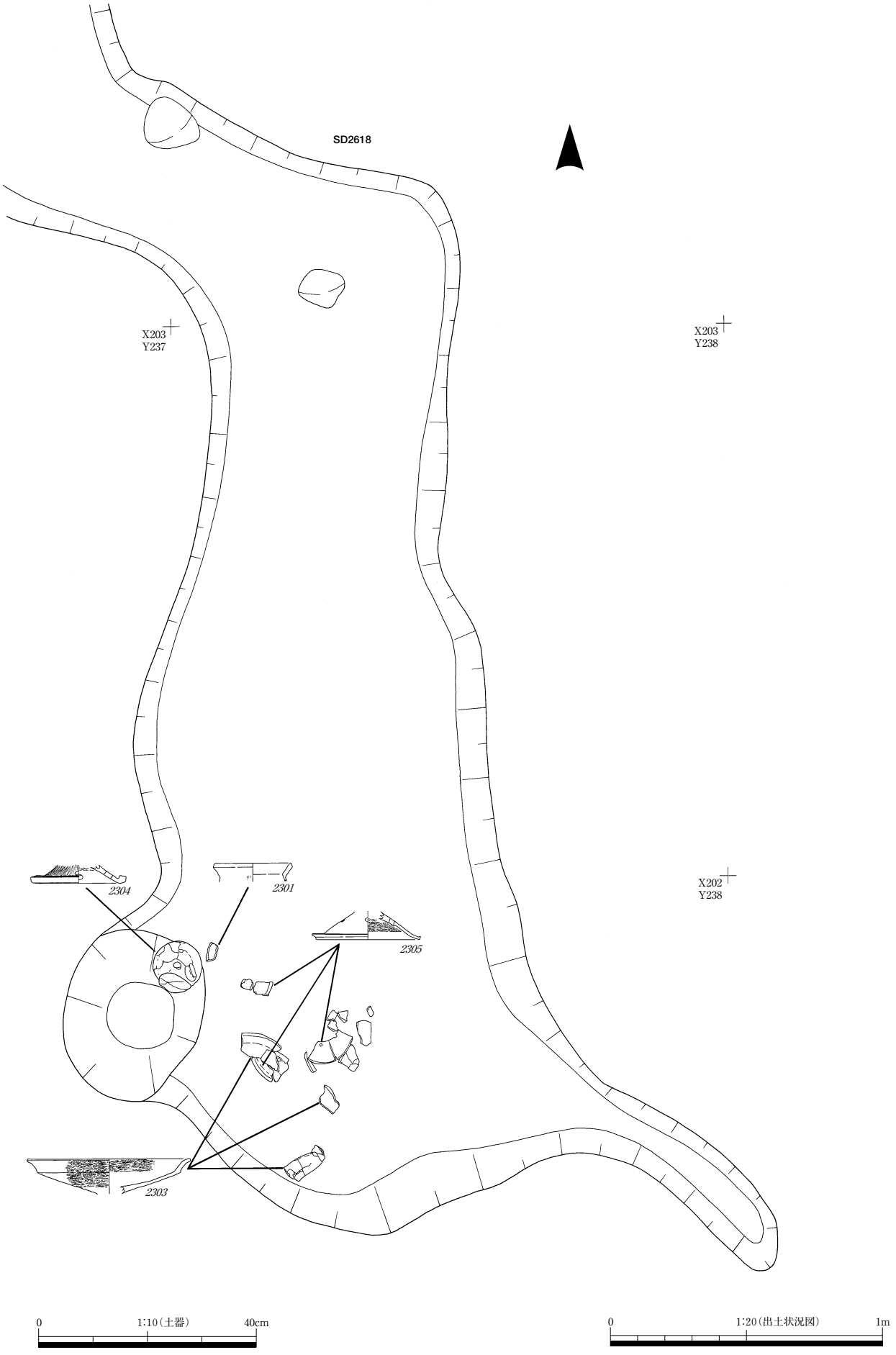


第266図　遺構実測図　(1/40)
B２地区　ＳＤ2541

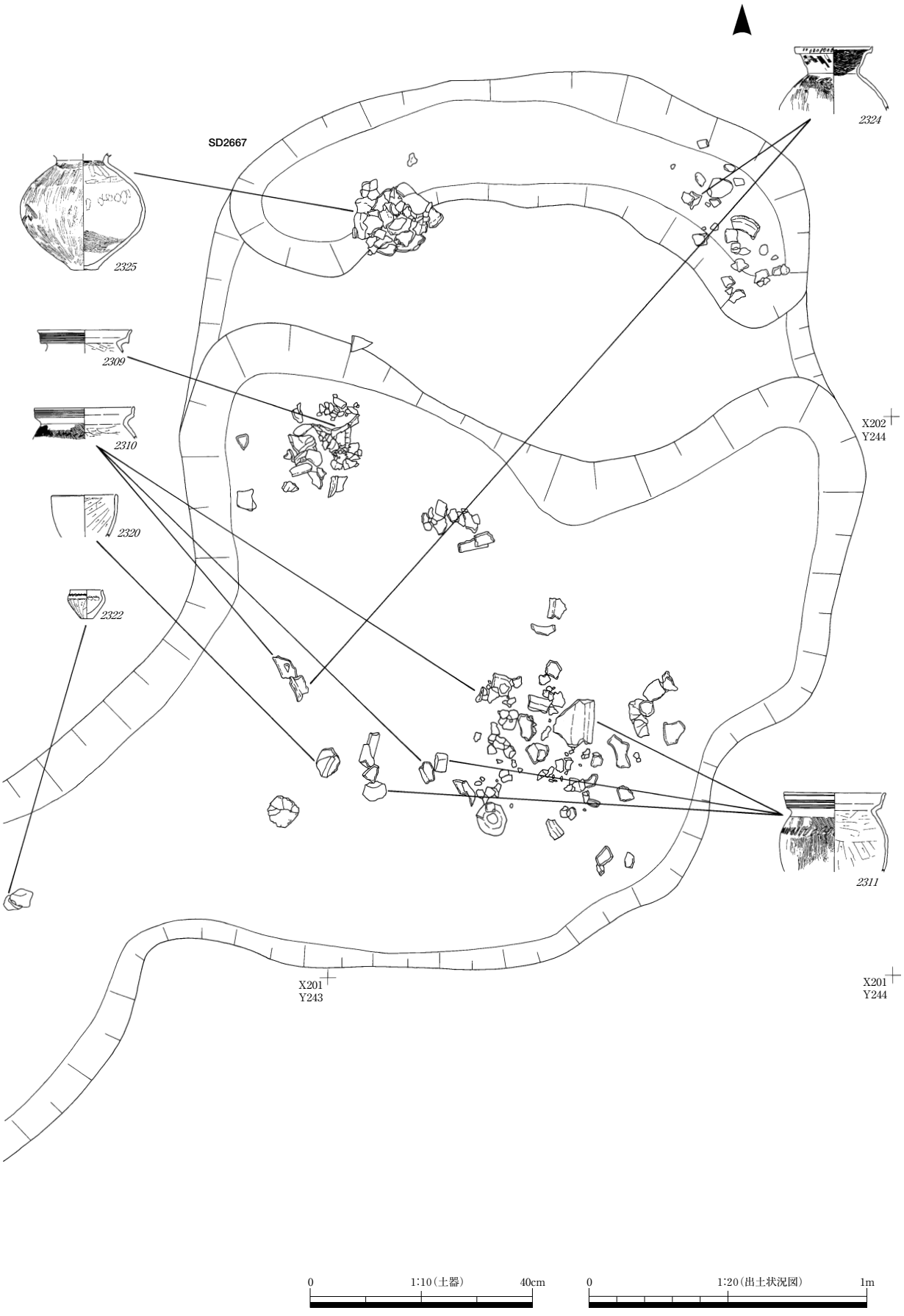


第267図　遺構実測図　(1/40・1/500)

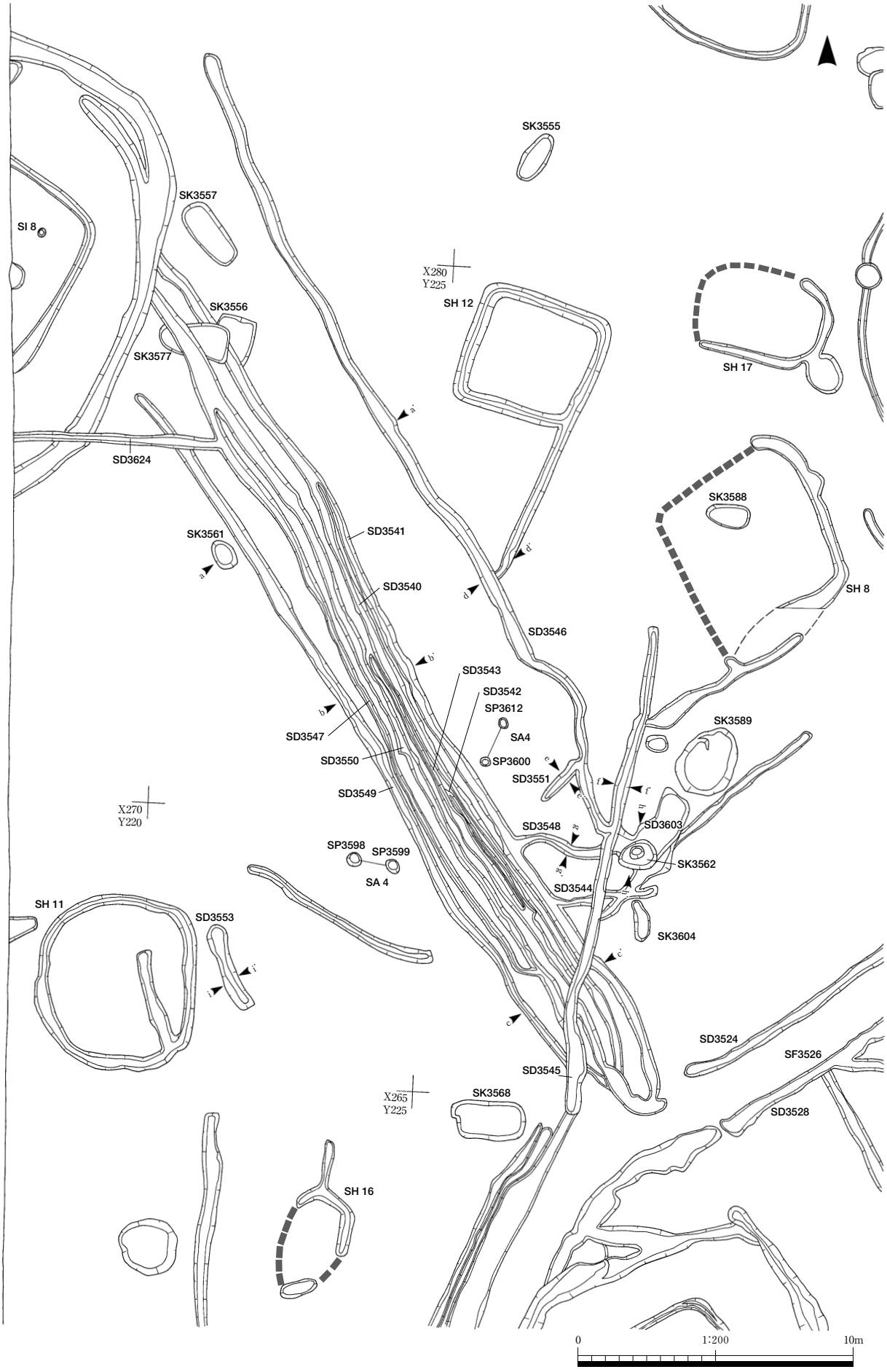
B２地区　1・2. S D2570　3. S D2586　4. S D2622　5. S D2678　6. S D2562
7. S D2584　8. S D2587　9. S D2618　10. S D2667



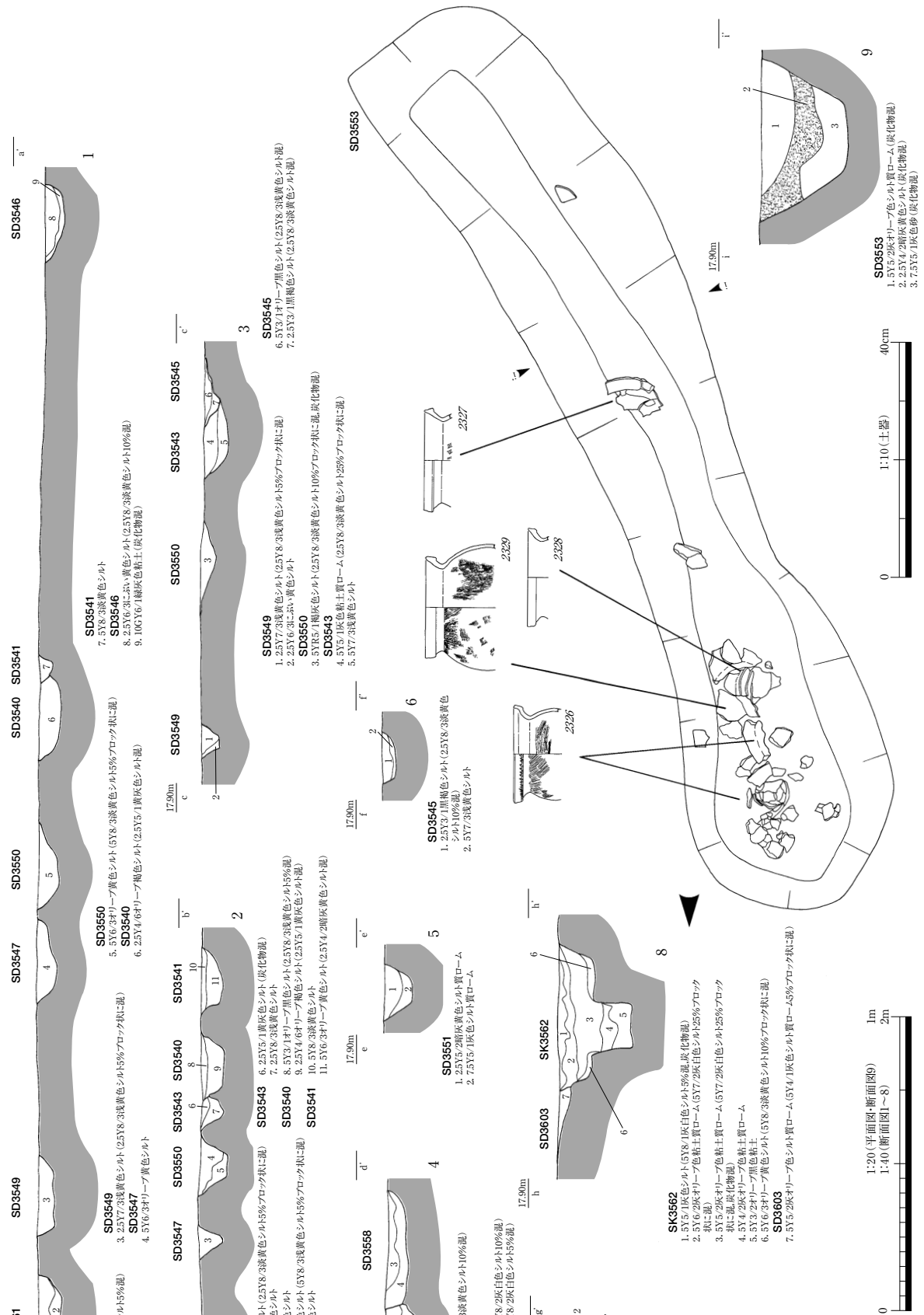
第268図　遺構実測図　(1/20，1/10)
B２地区　ＳＤ2618



第269図　遺構実測図（1/20，1/10）
Ｂ２地区　ＳＤ2667

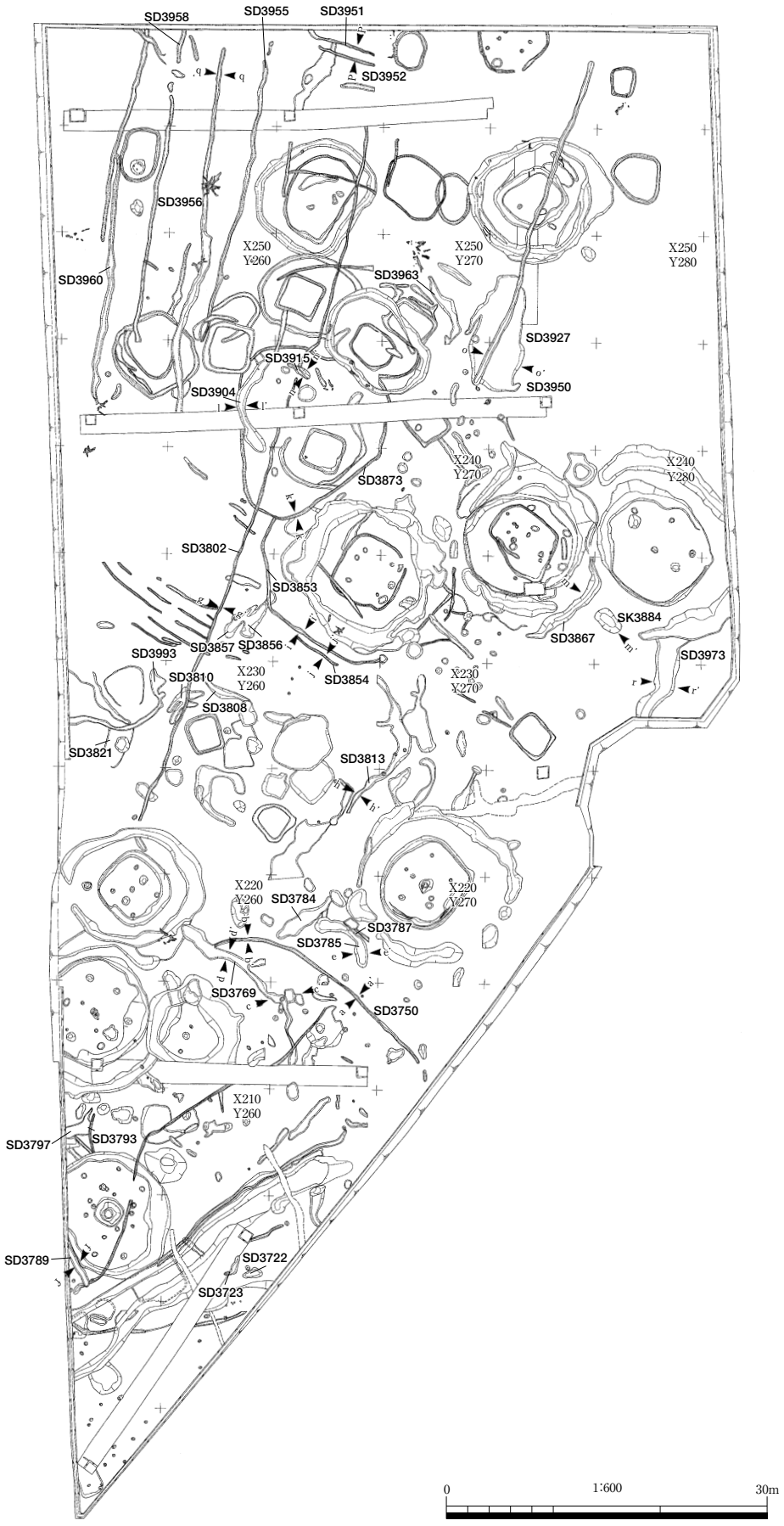


第270図　遺構実測図　(1/200)
B５地区　ＳＤ3540～ＳＤ3551・ＳＤ3553



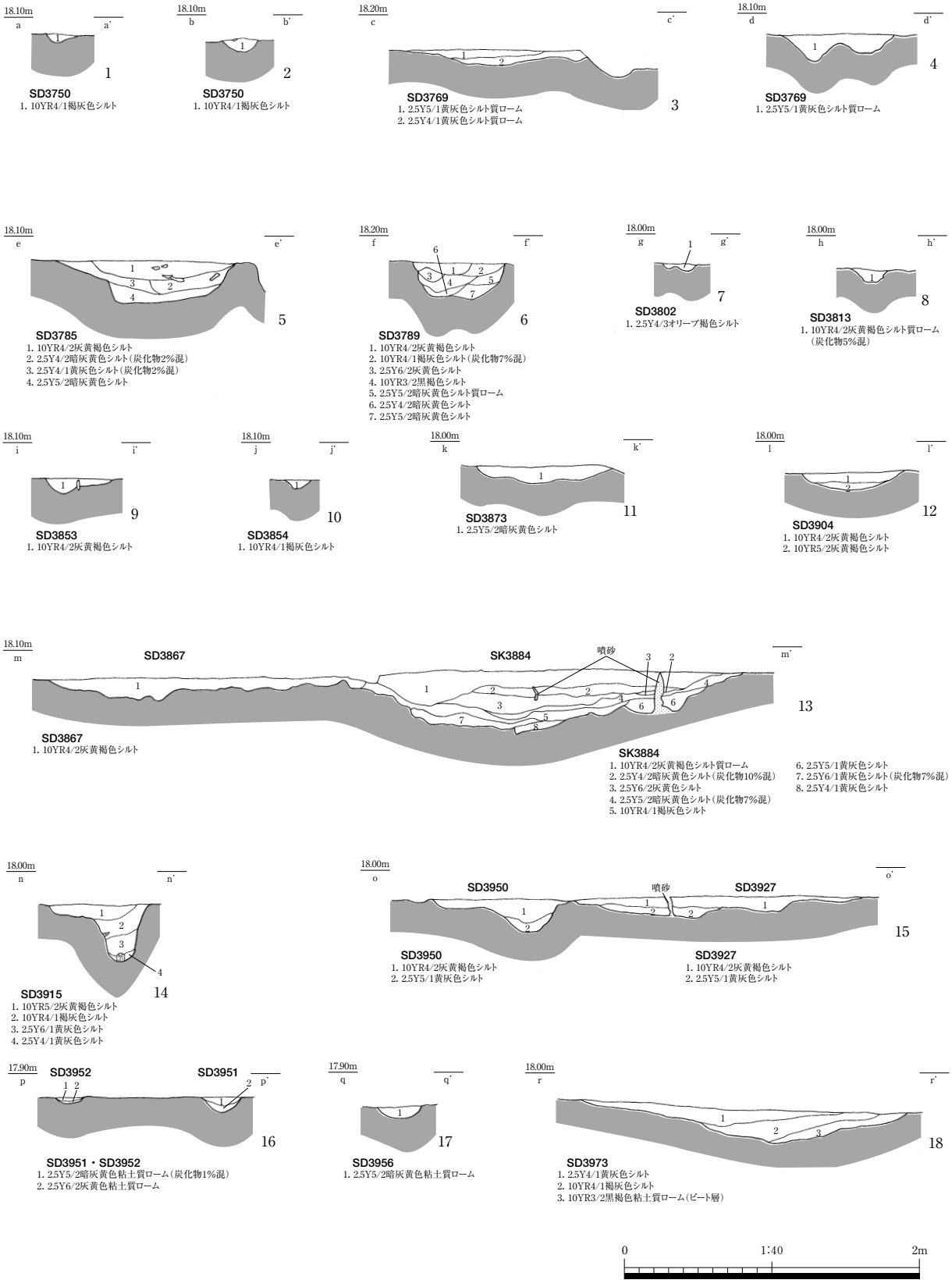
第271図　遺構実測図　(1/20・1/40, 1/10)

B５地区　1. S K3561・S D3540・S D3541・S D3546・S D3547・S D3549・S D3550
2. S D3540・S D3541・S D3543・S D3547・S D3549・S D3550
3. S D3543・S D3545・S D3549・S D3550　4. S D3546・S D3558
5. S D3551　6. S D3545　7. S D3548　8. S K3562・S D3603　9. S D3553



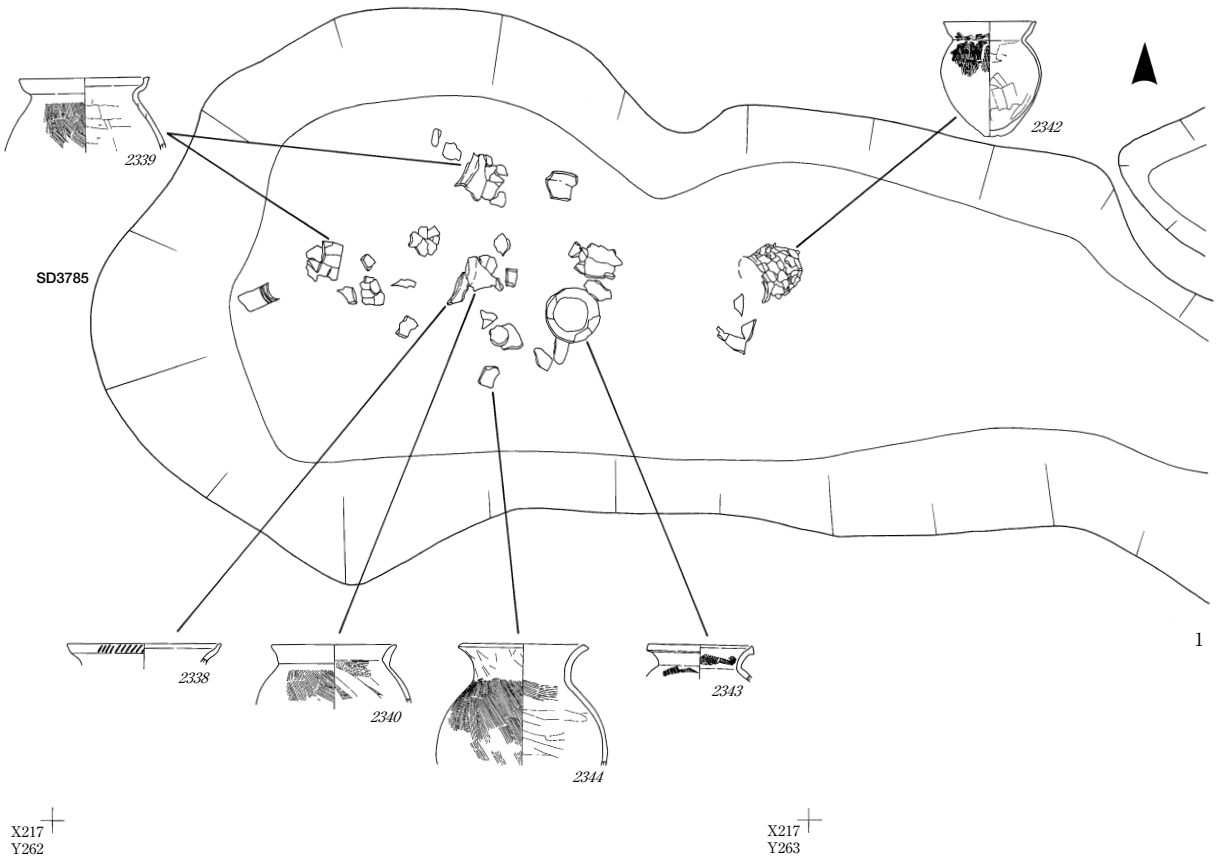
第272図　遺構実測図　(1/600)

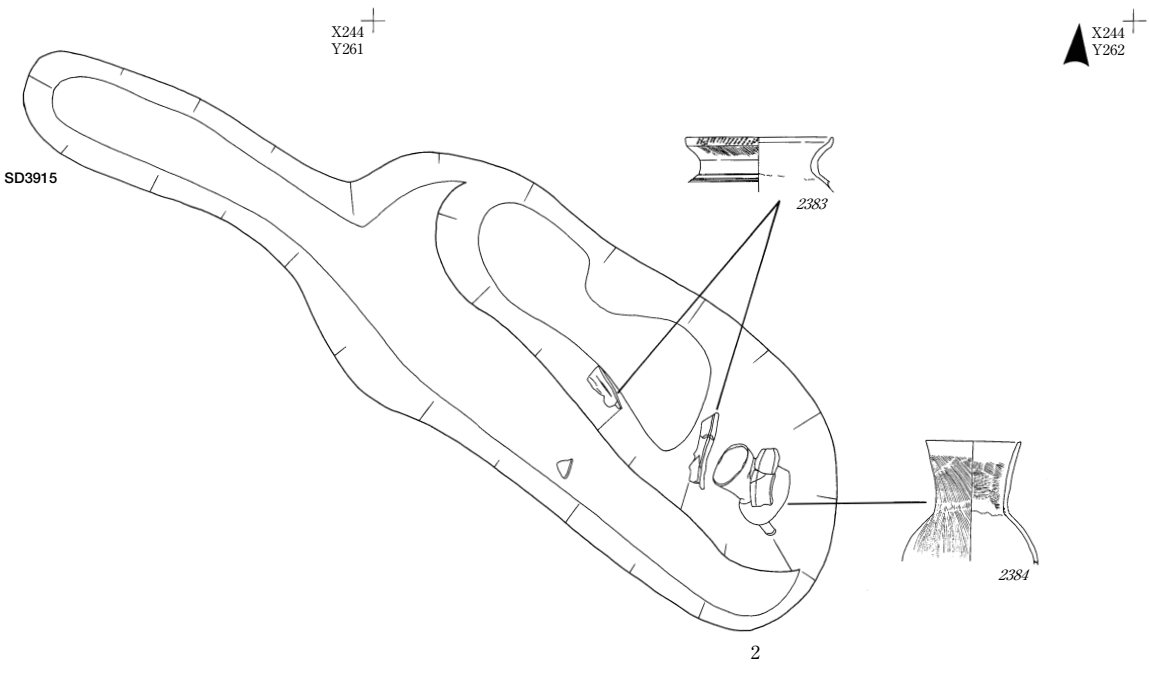
B６地区　ＳＫ3884・ＳＤ3750・ＳＤ3769・ＳＤ3785・ＳＤ3789・ＳＤ3802・ＳＤ3813・ＳＤ3853・ＳＤ3854・ＳＤ3867・ＳＤ3873・ＳＤ3904・ＳＤ3915・ＳＤ3927・ＳＤ3950・ＳＤ3951・ＳＤ3952・ＳＤ3956・ＳＤ3973



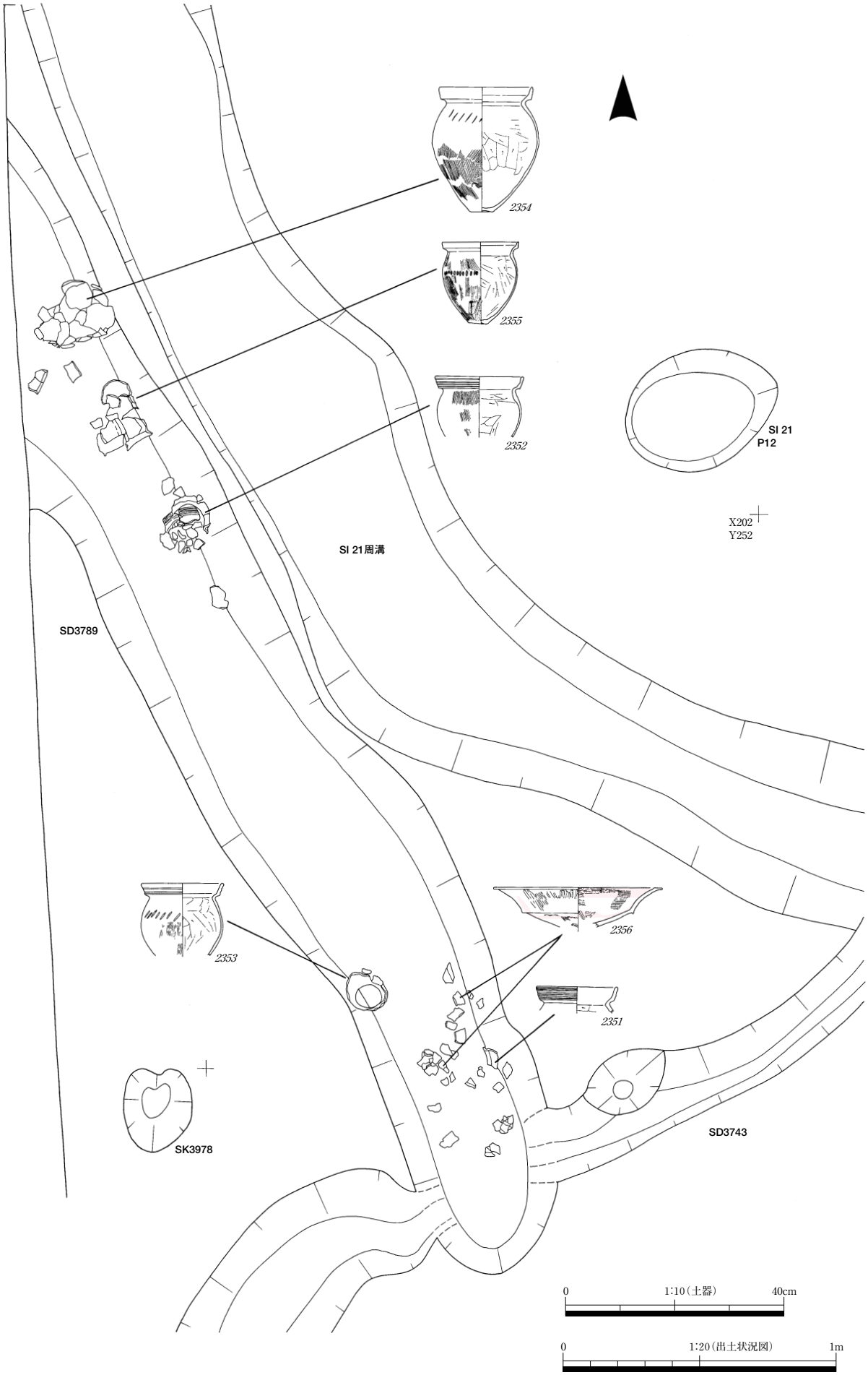
第273図　遺構実測図　(1/40)

B６地区　1・2. SD3750　3・4. SD3769　5. SD3785　6. SD3789　7. SD3802
8. SD3813　9. SD3853　10. SD3854　11. SD3873　12. SD3904
13. SK3884・SD3867　14. SD3915　15. SD3927・SD3950
16. SD3951・SD3952　17. SD3956　18. SD3973

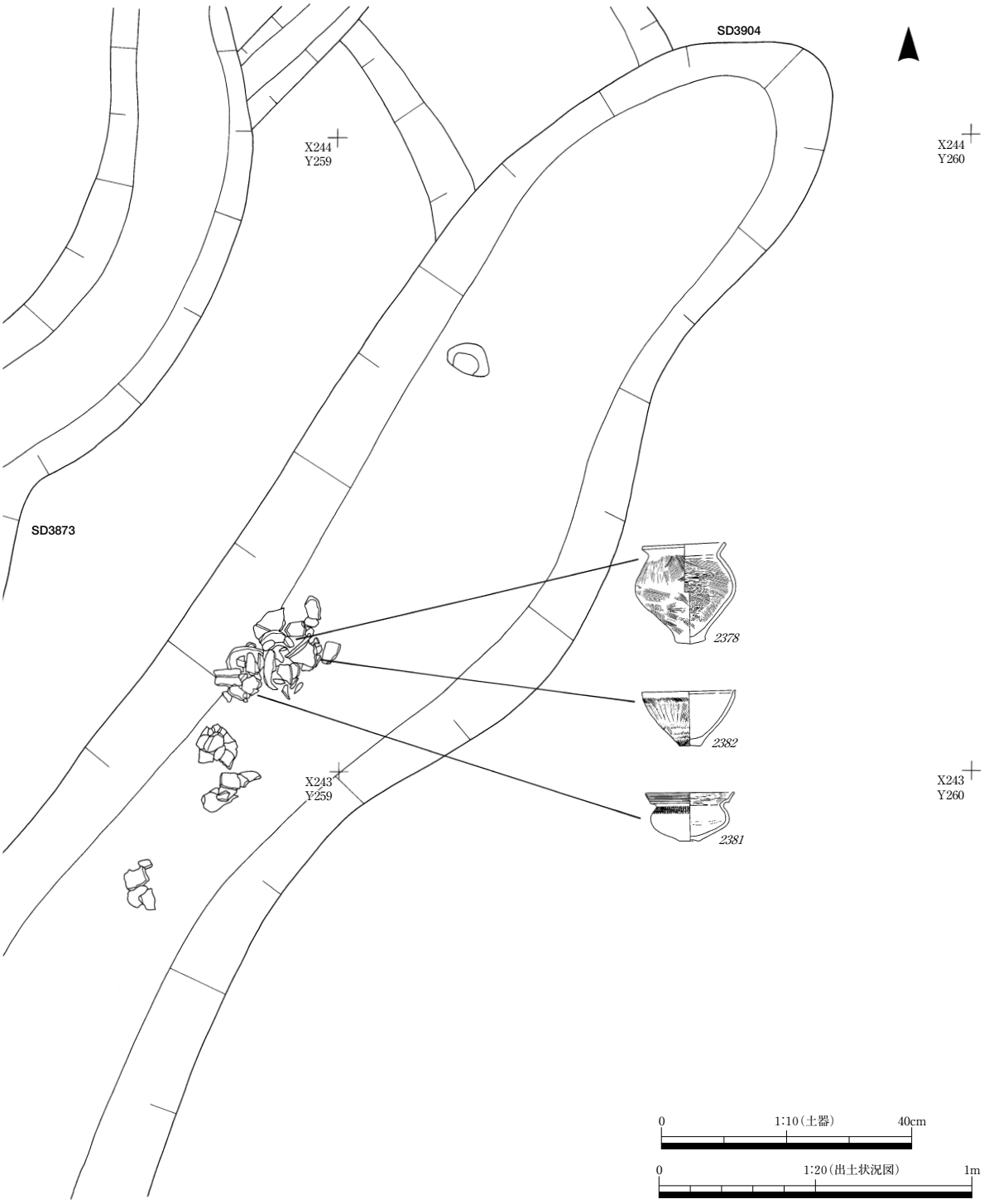




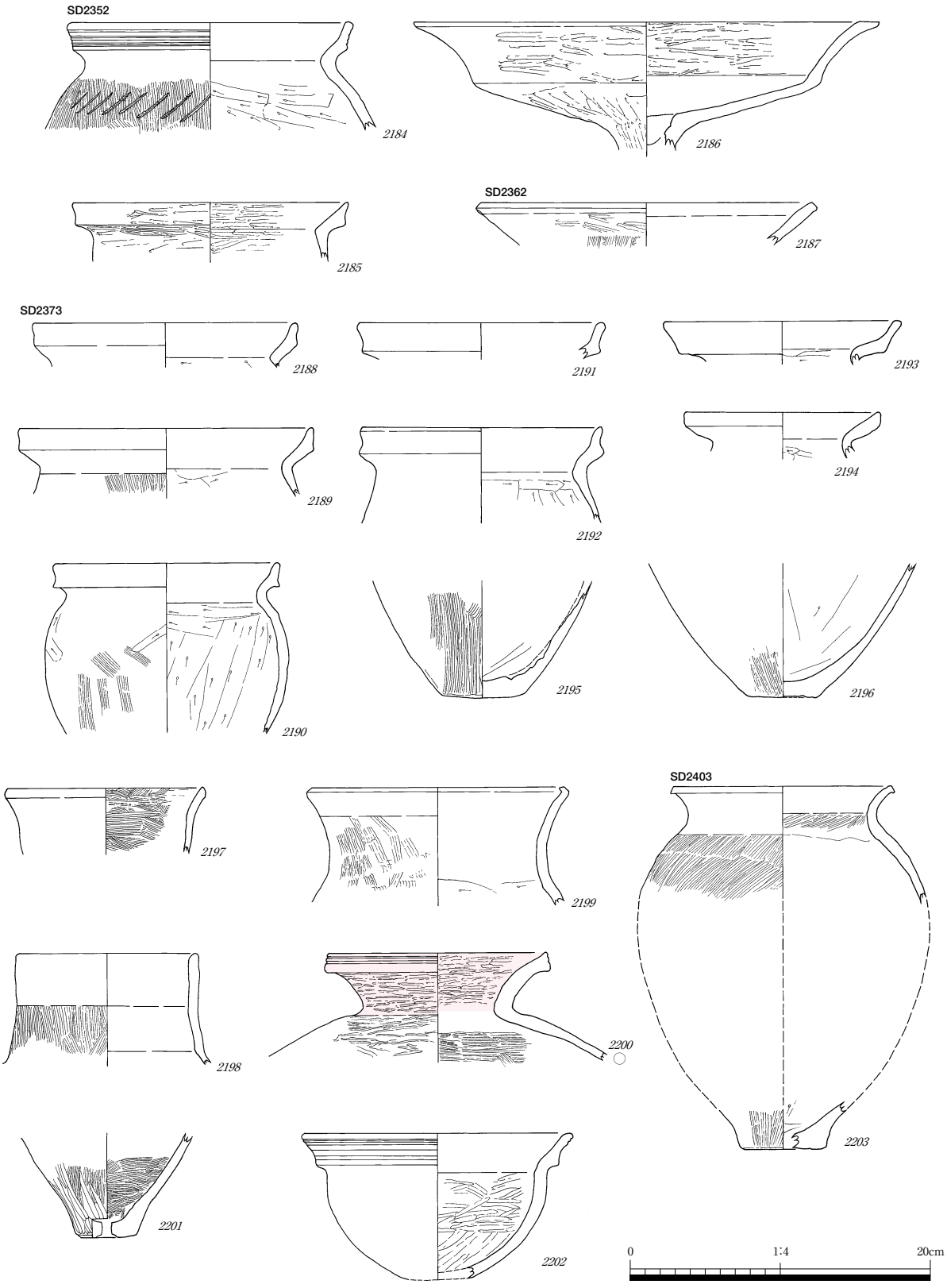
第274図　遺構実測図　(1/20，1/10)
B 6 地区　1. S D3785　2. S D3915



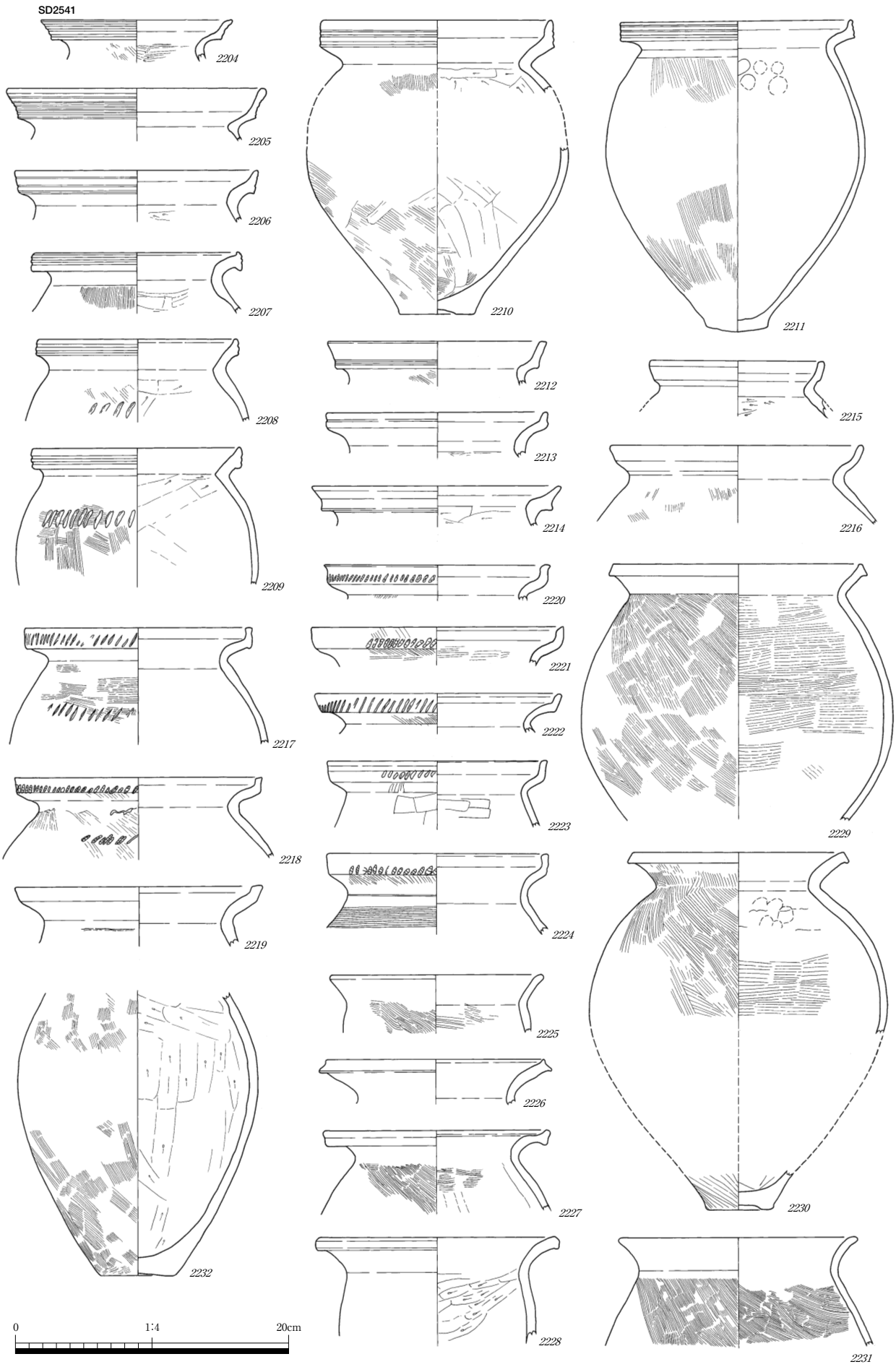
第275図　遺構実測図（1/20，1/10）
Ｂ６地区　ＳＤ3789



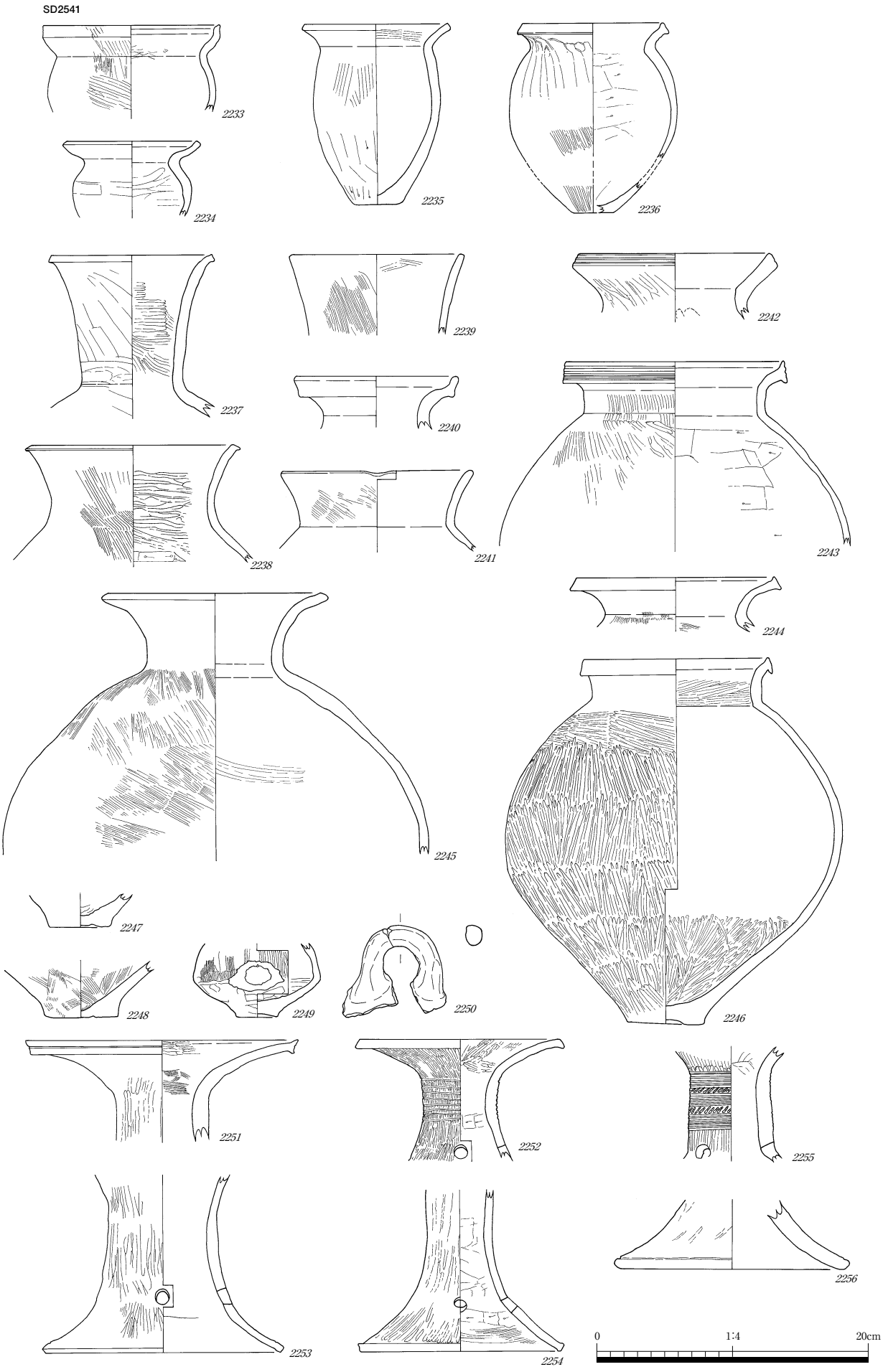
第276図　遺構実測図（1/20，1/10）
B 6 地区　S D3904



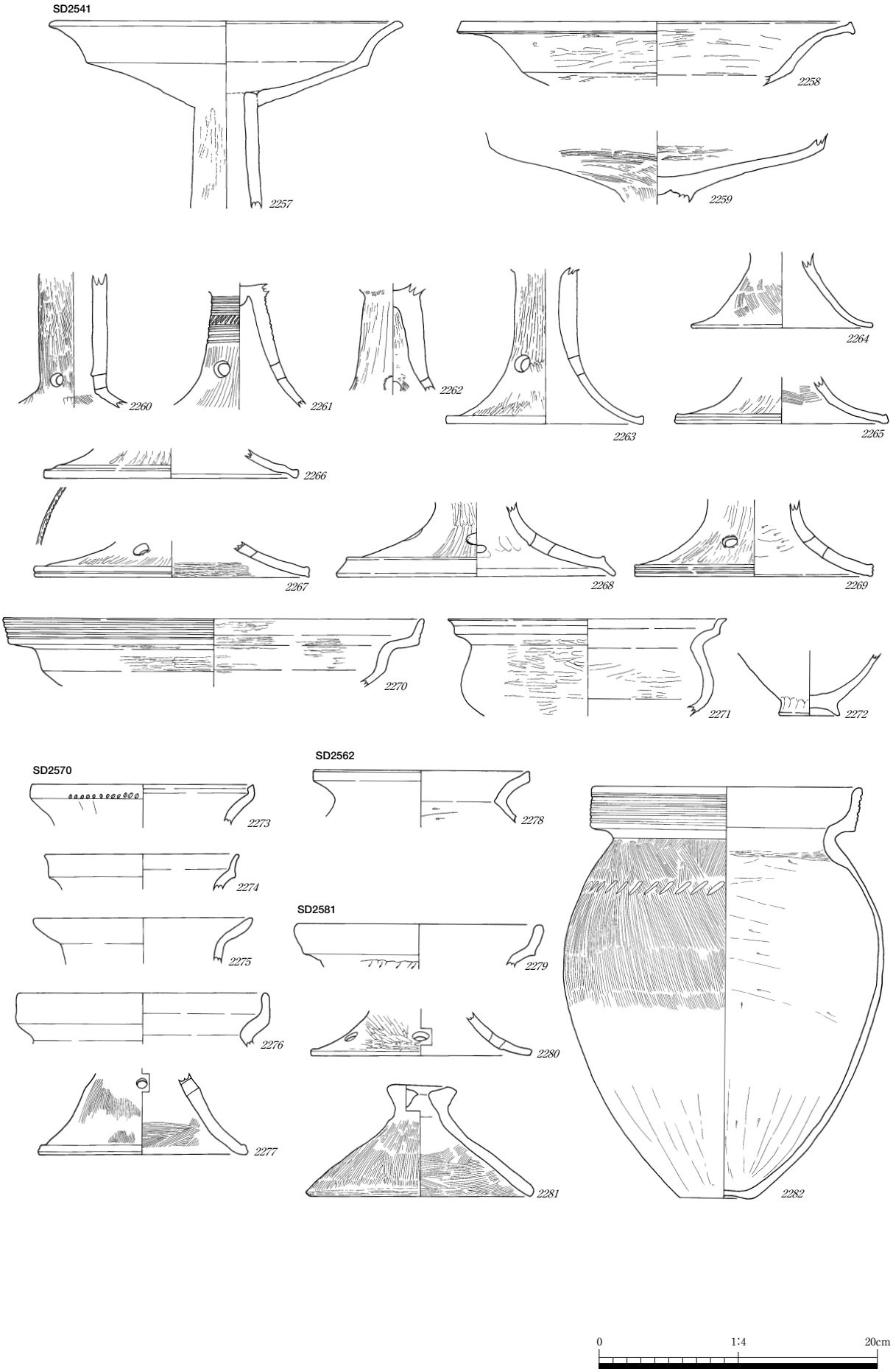
第277図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ１地区　ＳＤ2352(*2184～2186*)　ＳＤ2362(*2187*)　ＳＤ2373(*2188～2202*)　ＳＤ2403(*2203*)



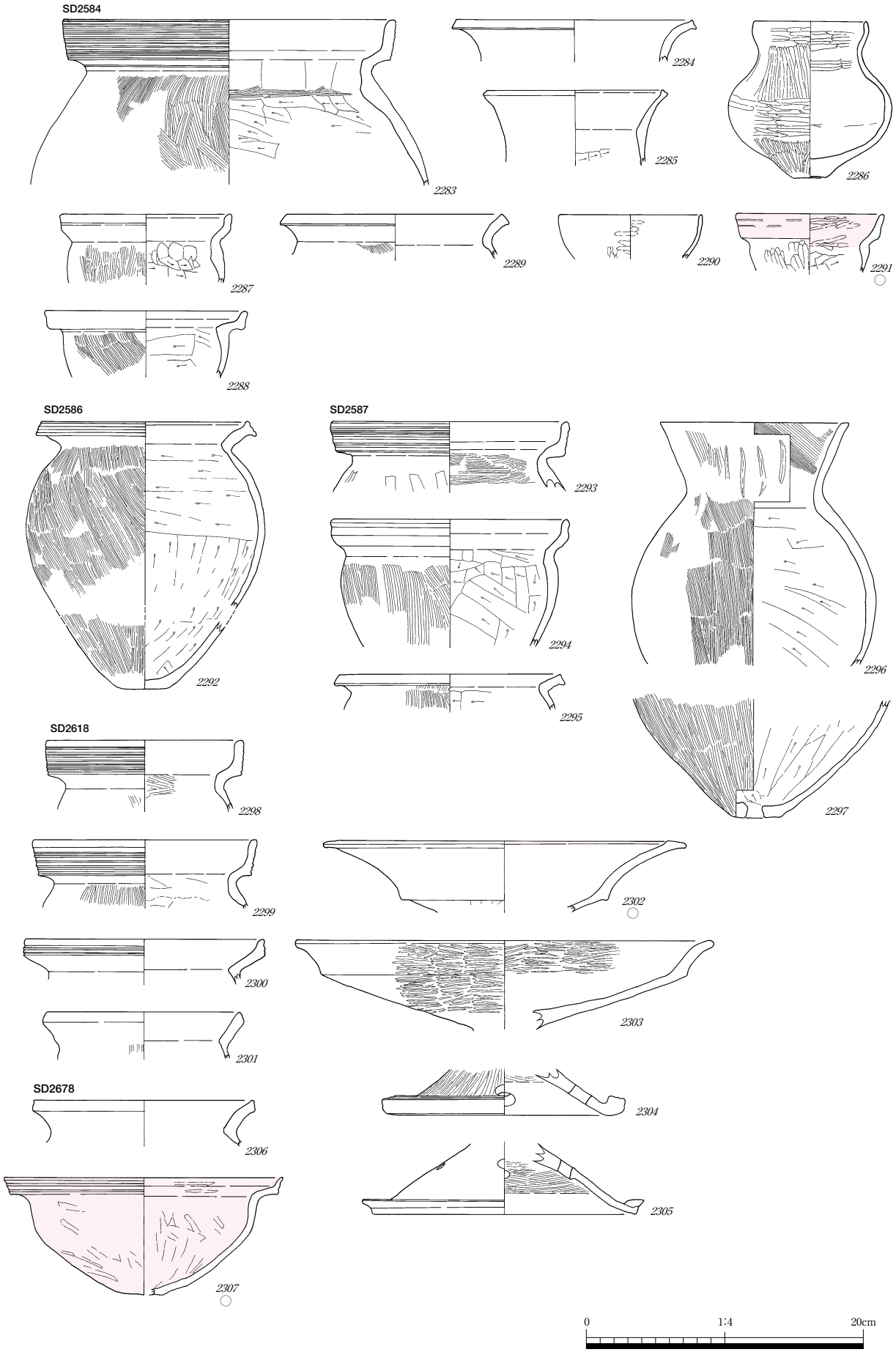
第278図　遺物実測図　(1/4)
B２地区　ＳＤ2541



第279図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ２地区　ＳＤ2541

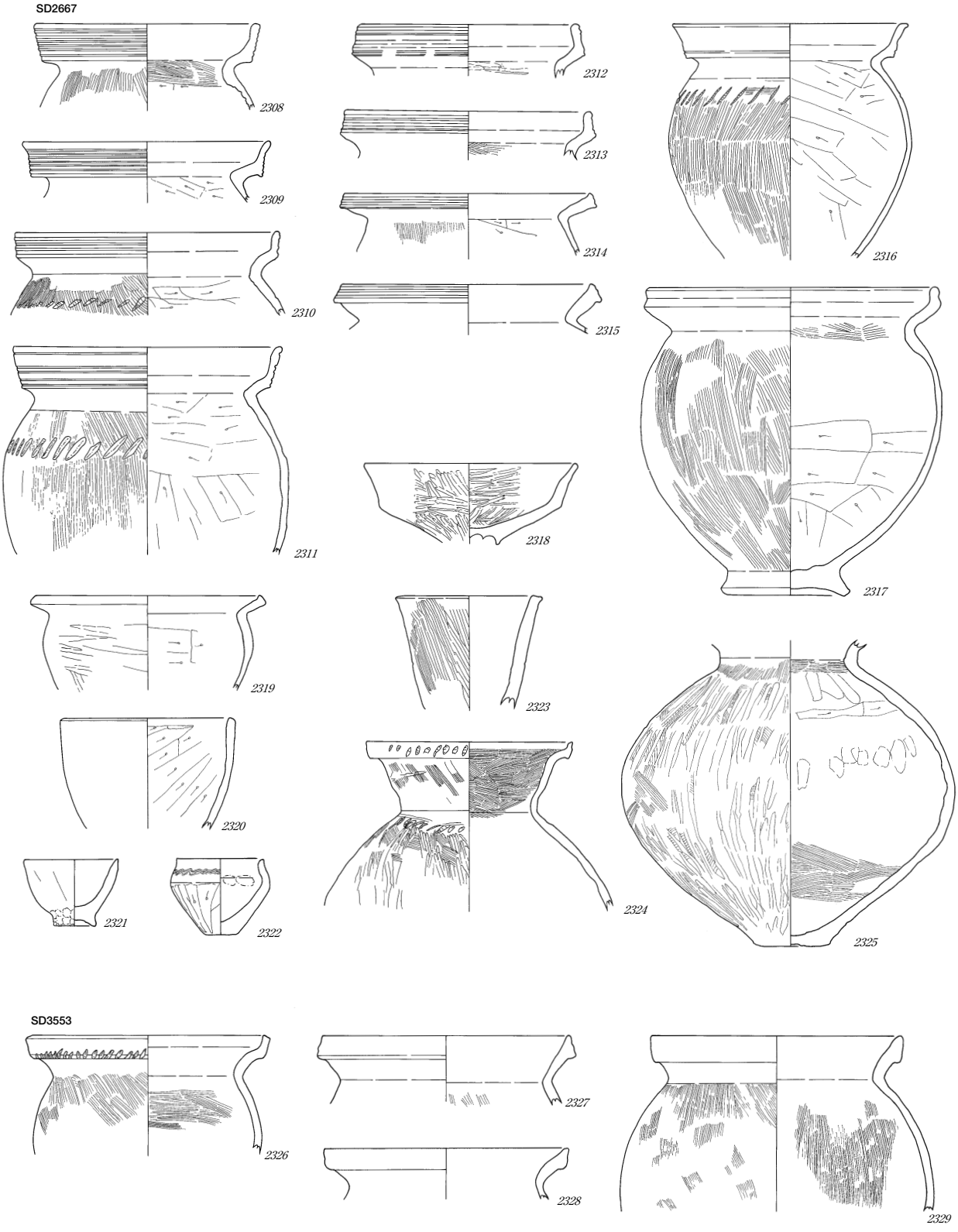


第280図　遺物実測図　(1/4)
B地区　SD2541(*2257～2272*)　SD2562(*2278*)　SD2570(*2273～2277*)　SD2581(*2279～2282*)

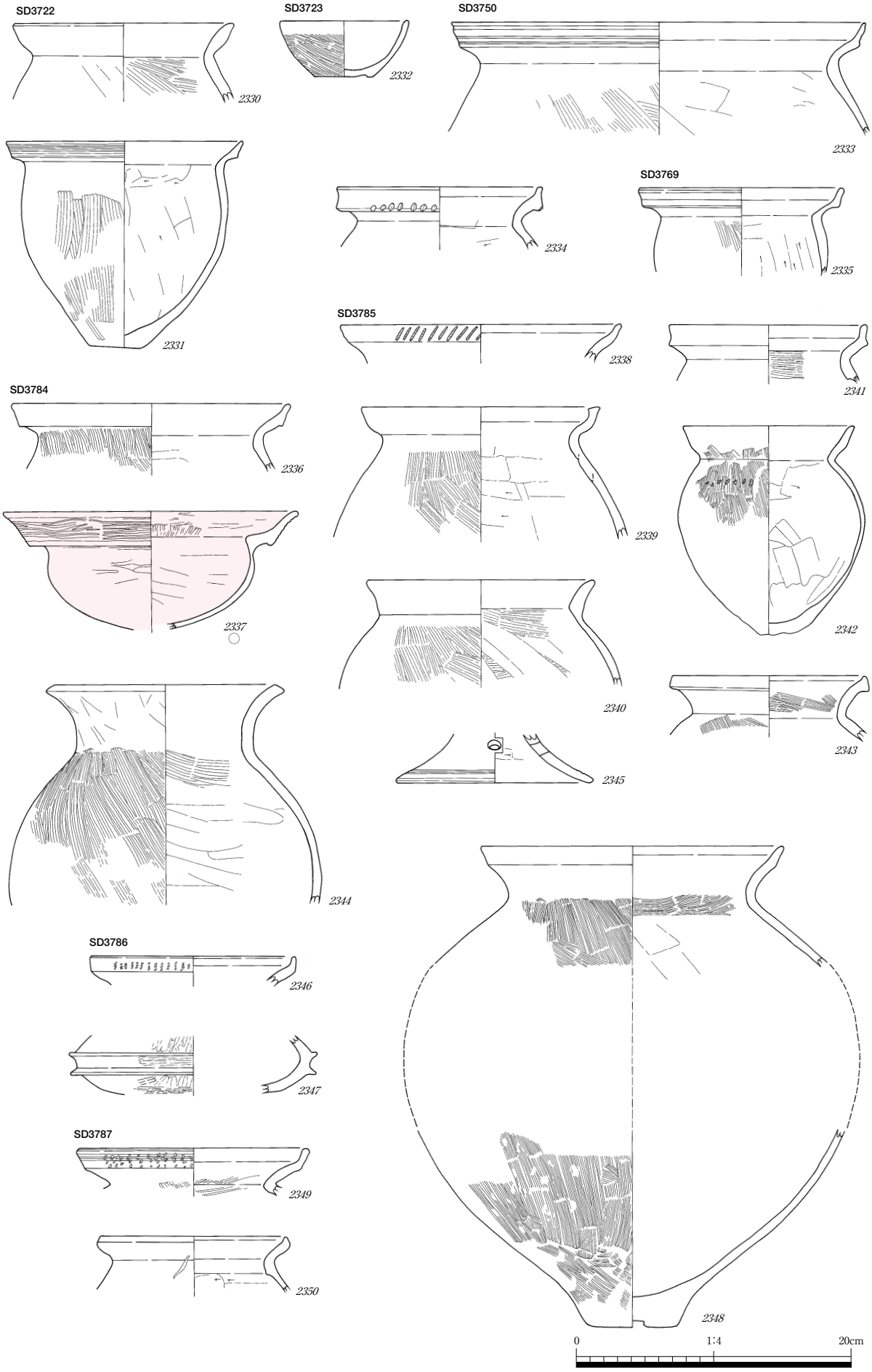


第281図　遺物実測図　(1/4)

Ｂ２地区　ＳＤ2584(*2283～2291*)　ＳＤ2586(*2292*)　ＳＤ2587(*2293～2297*)
ＳＤ2618(*2298～2305*)　ＳＤ2678(*2306・2307*)

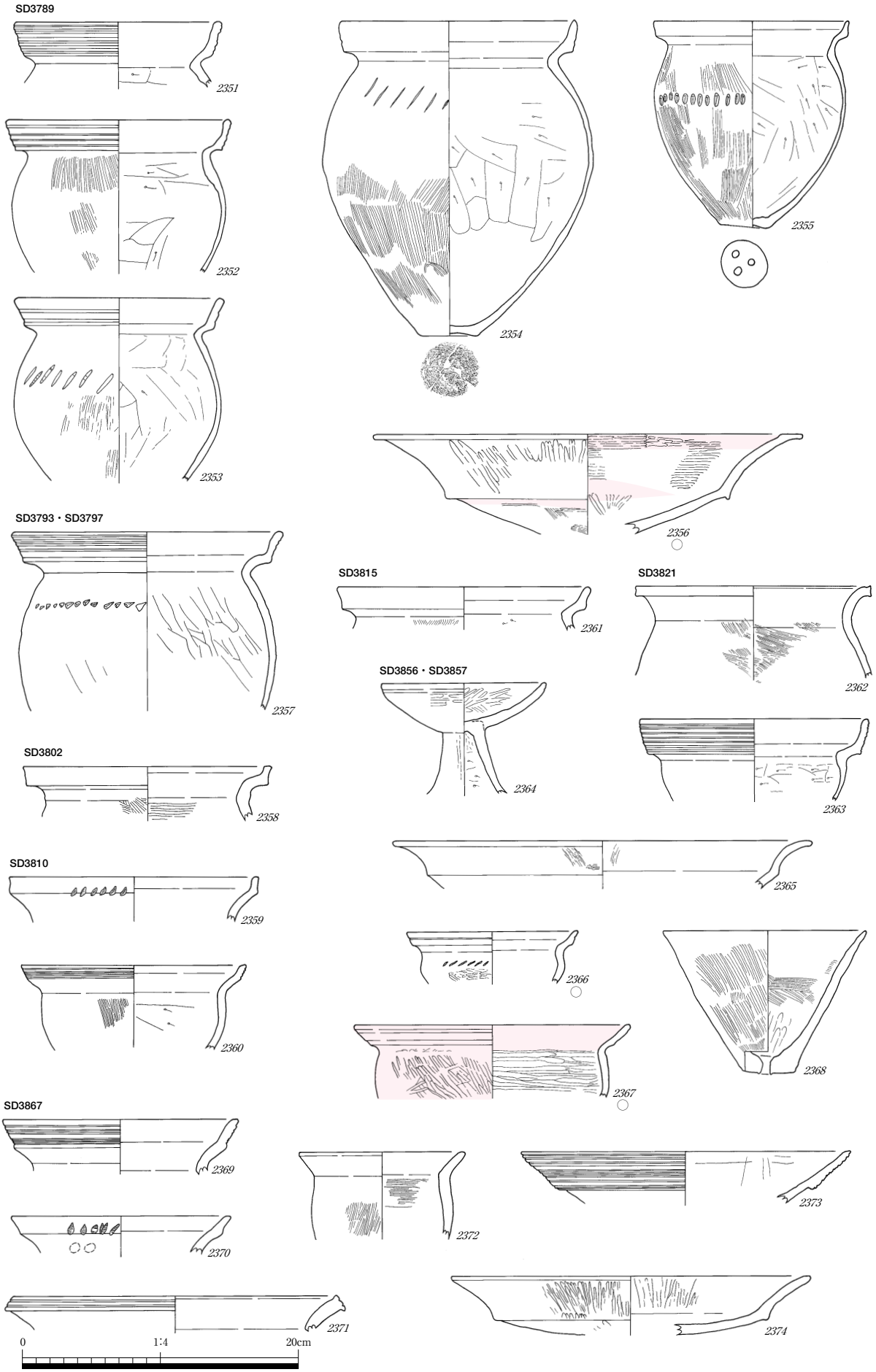


第282図　遺物実測図　(1/4)
B 2 地区　S D2667(*2008～2325*)
B 5 地区　S D3553(*2326～2329*)



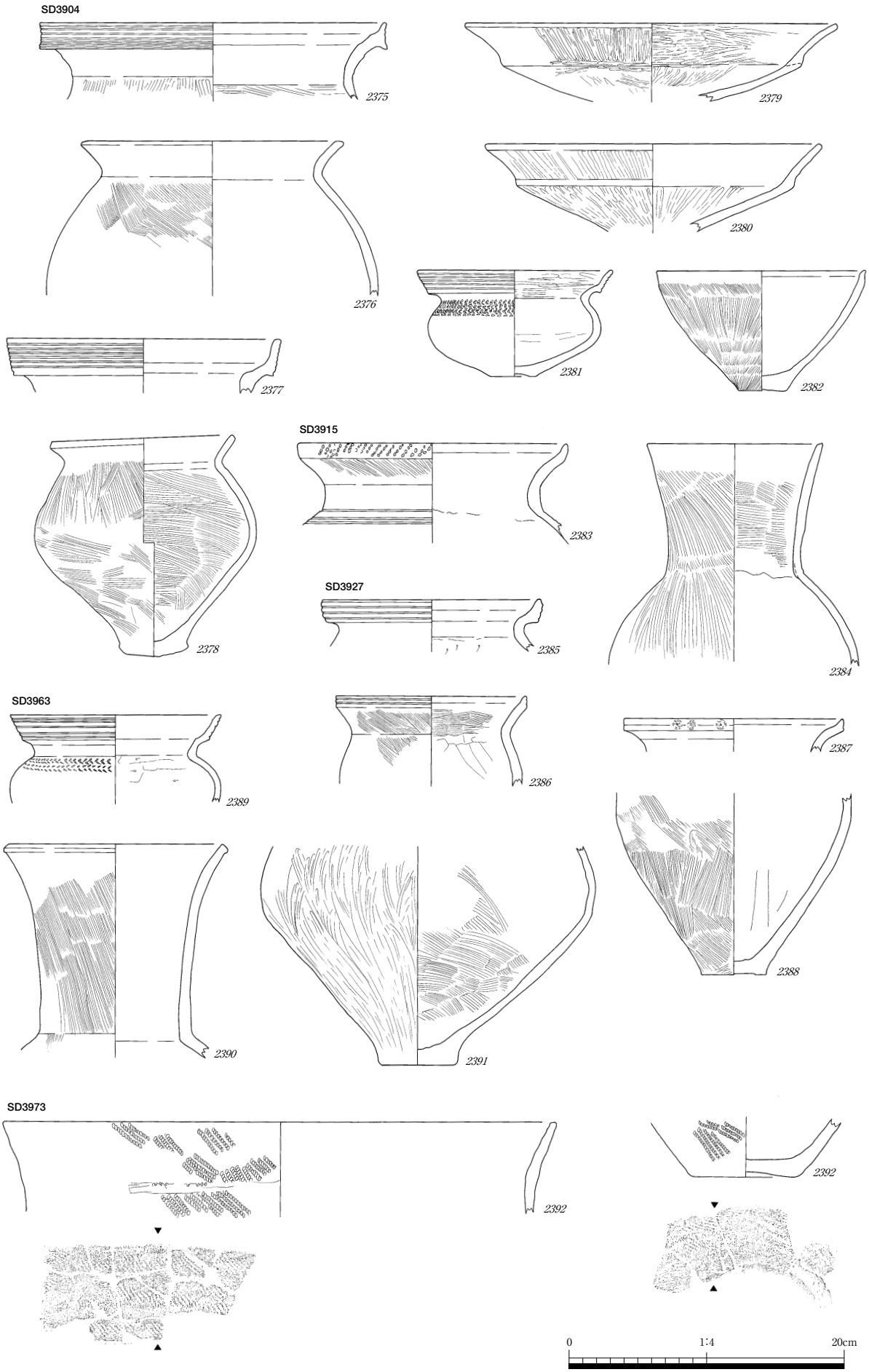
第283図　遺物実測図　(1/4)

B 6 地区　S D3722 (*2330・2331*)　S D3723 (*2332*)　S D3750 (*2333・2334*)　S D3769 (*2335*)
S D3784 (*2336・2337*)　S D3785 (*2338～2345*)　S D3786 (*2346～2348*)
S D3787 (*2349・2350*)



第284図　遺物実測図　(1/4)

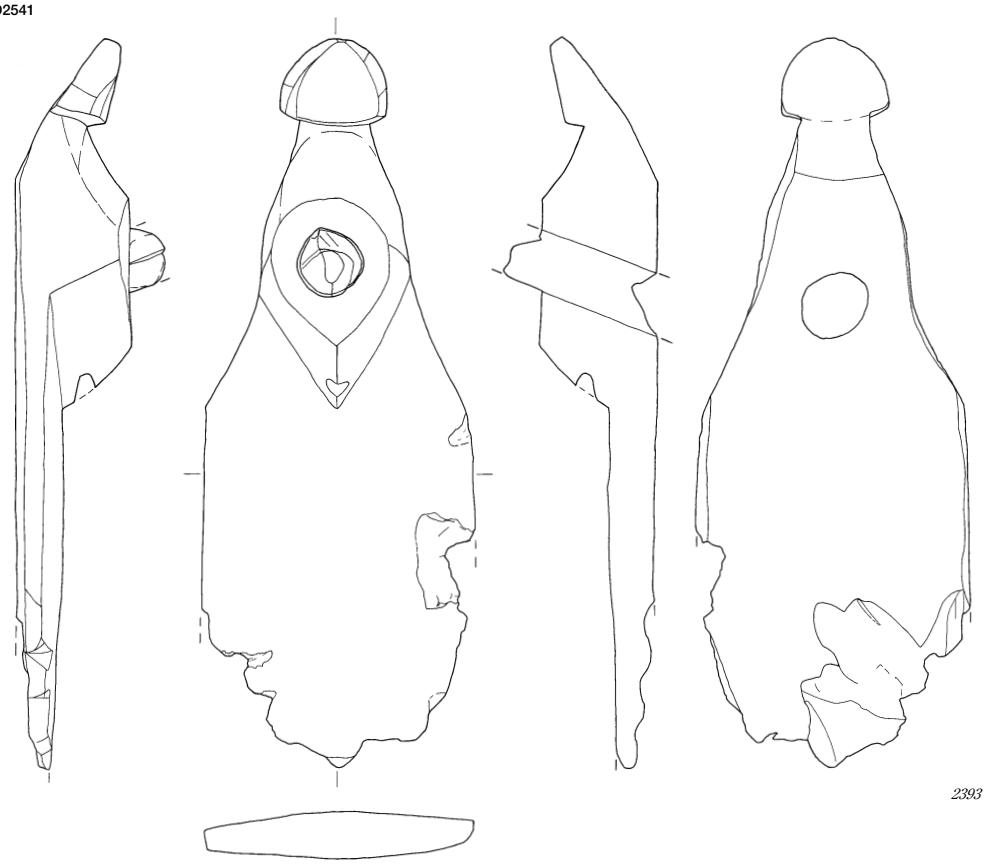
B 6 地区　S D3789(*2351～2356*)　S D3793・S D3797(*2357*)　S D3802(*2358*)
S D3810(*2359・2360*)　S D3815(*2361*)　S D3821(*2362・2363*)
S D3856・S D3857(*2364～2368*)　S D3867(*2369～2374*)

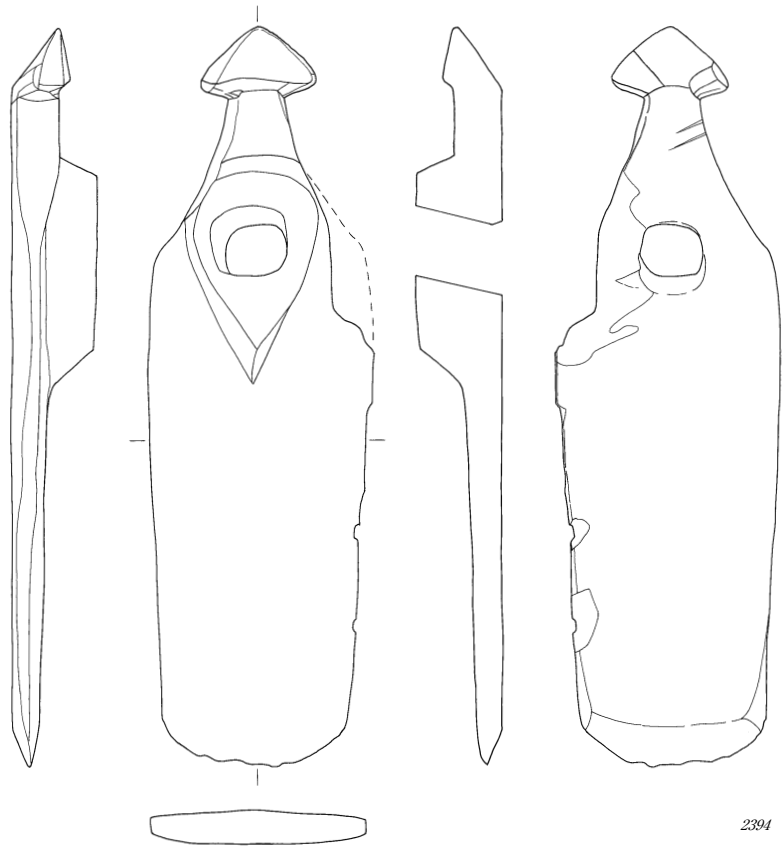


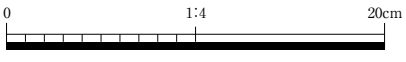
第285図　遺物実測図　(1/4)

Ｂ６地区　ＳＤ3904(*2375～2382*)　ＳＤ3915(*2383・2384*)　ＳＤ3927(*2385～2388*)
ＳＤ3963(*2389～2391*)　ＳＤ3973(*2392*)

SD2541

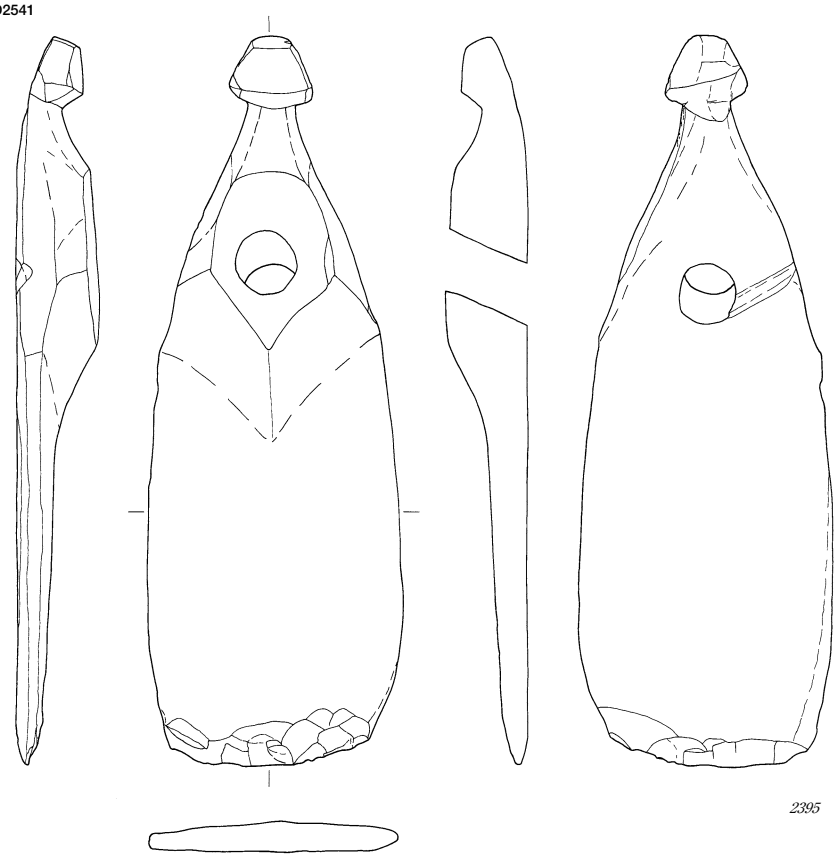


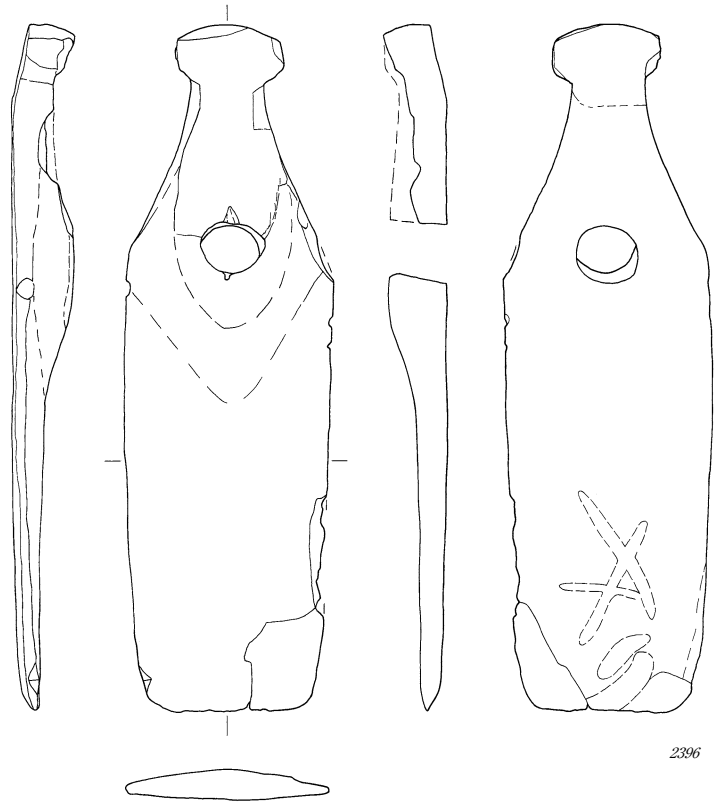




第286図　遺物実測図　(1/4)
B２地区　ＳＤ2541

SD2541

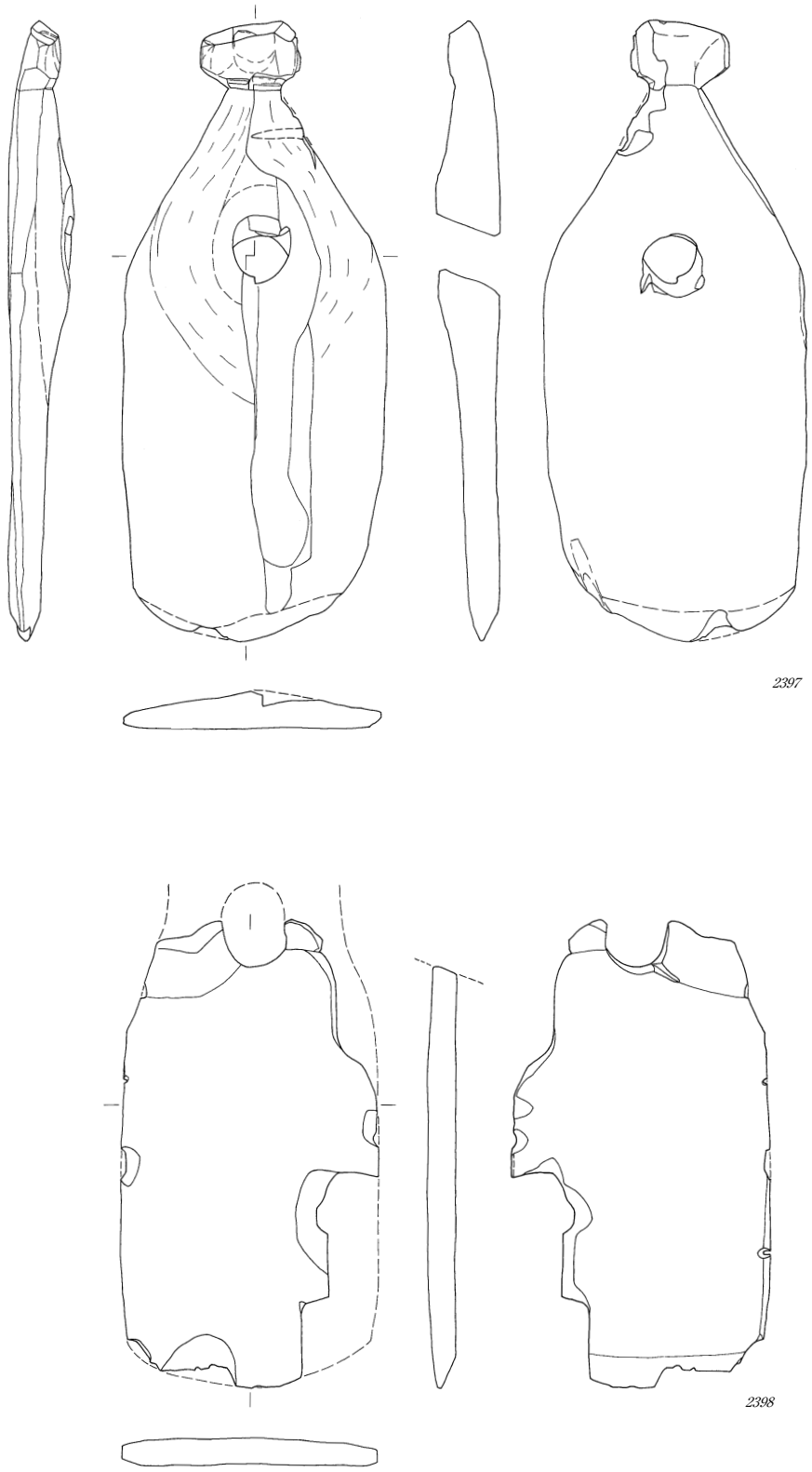




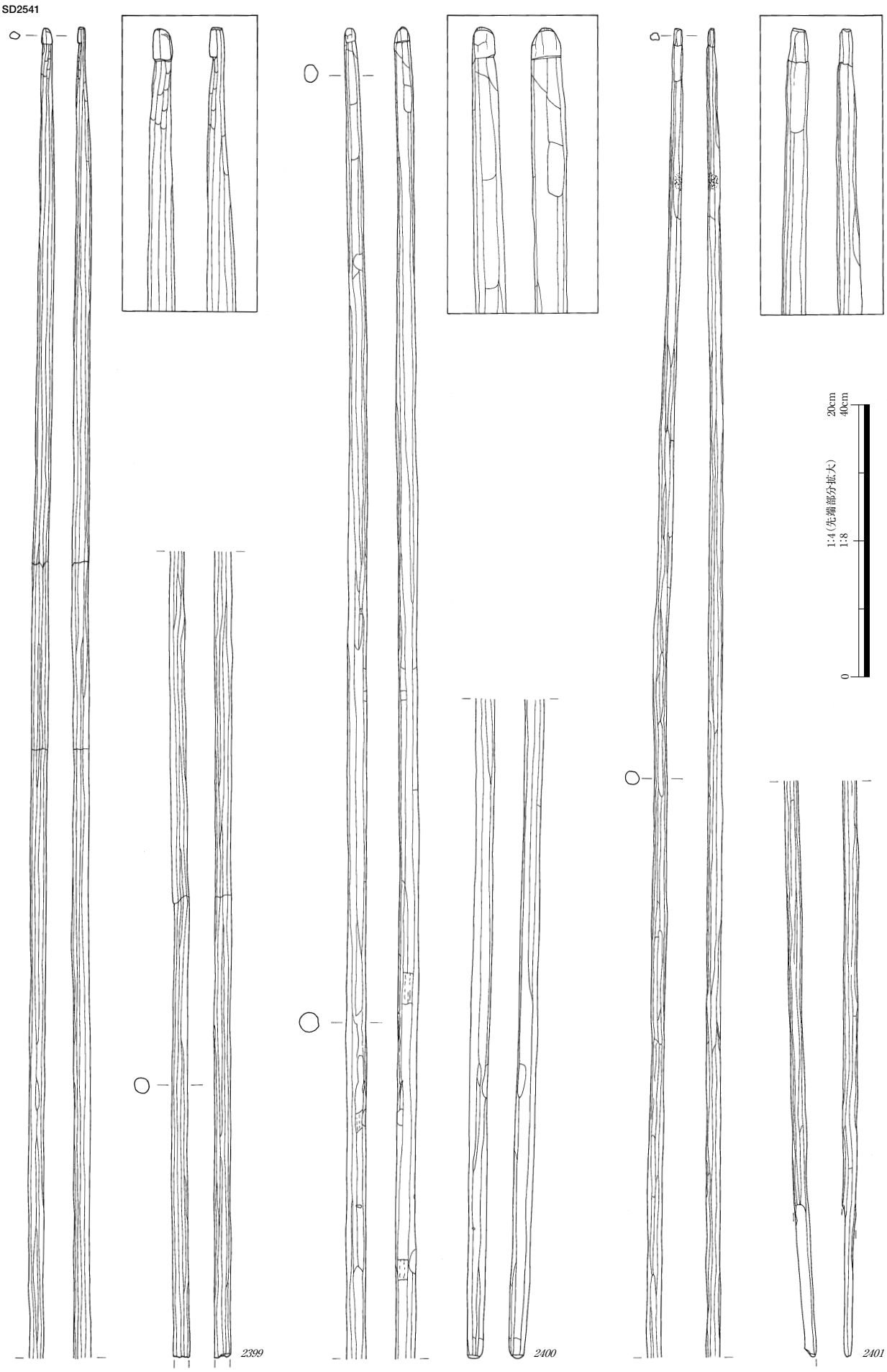
0　1:4　20cm

第287図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ２地区　ＳＤ2541

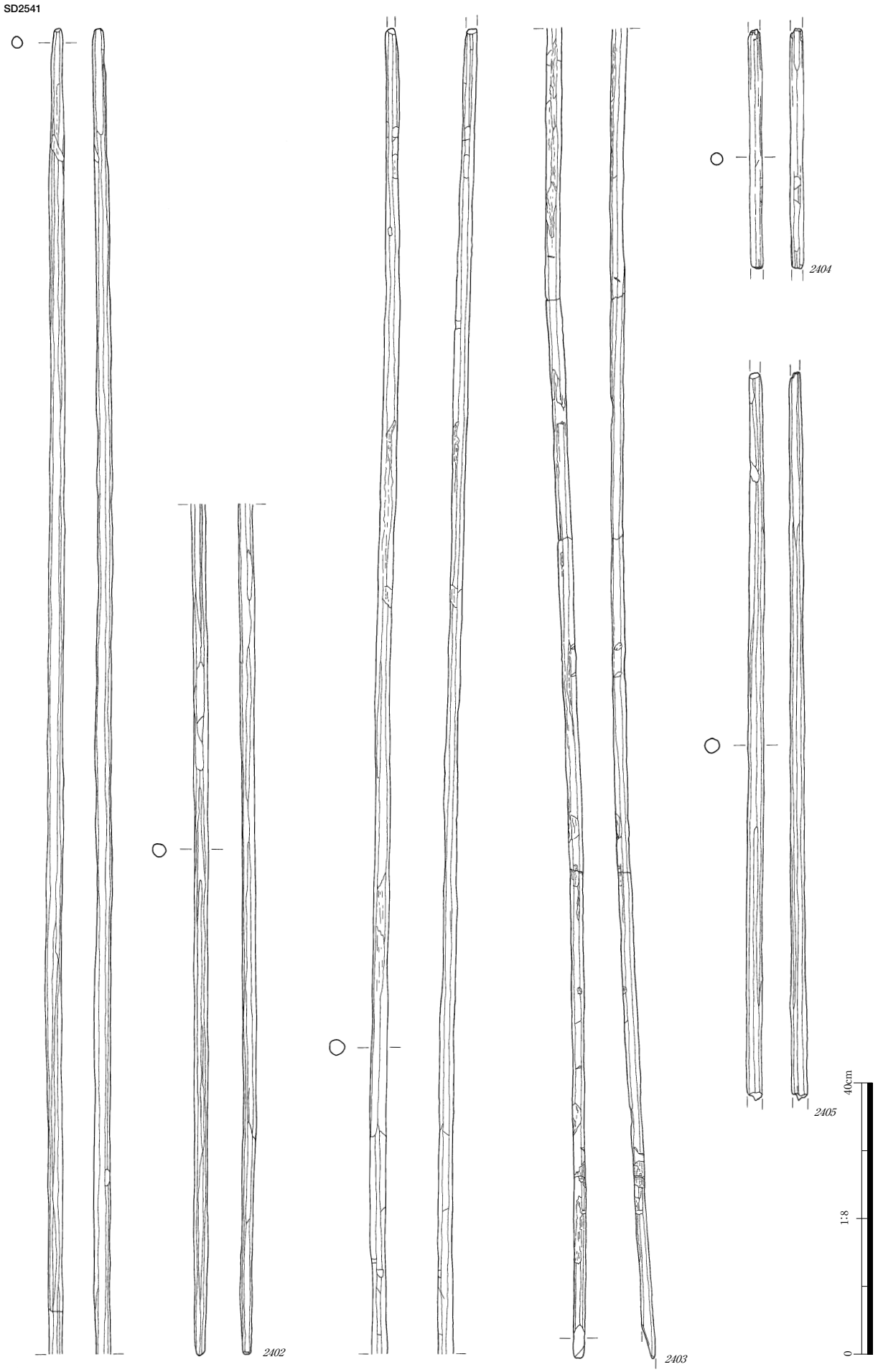
SD2541



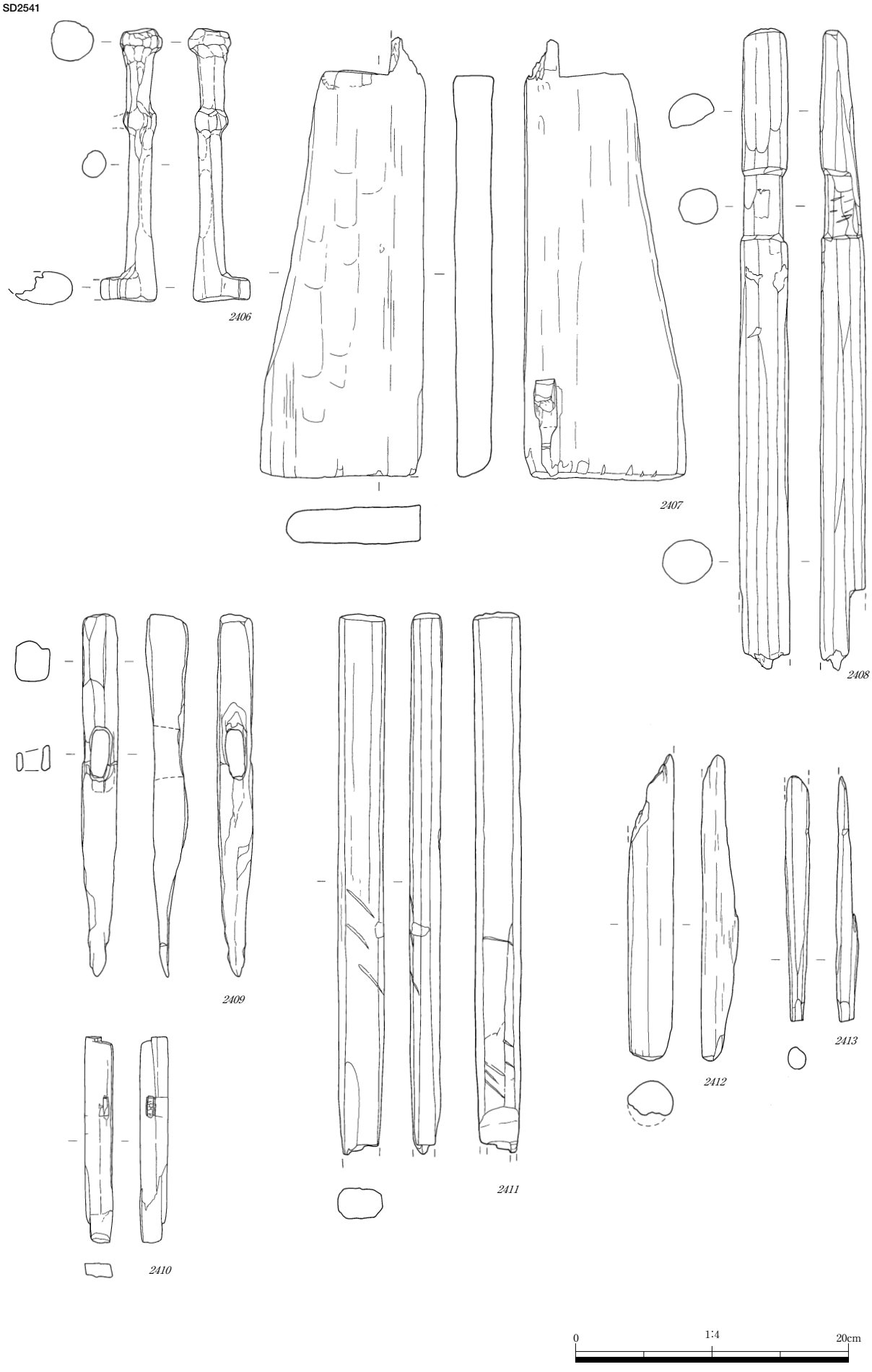
第288図　遺物実測図　(1/4)
B２地区　ＳＤ2541



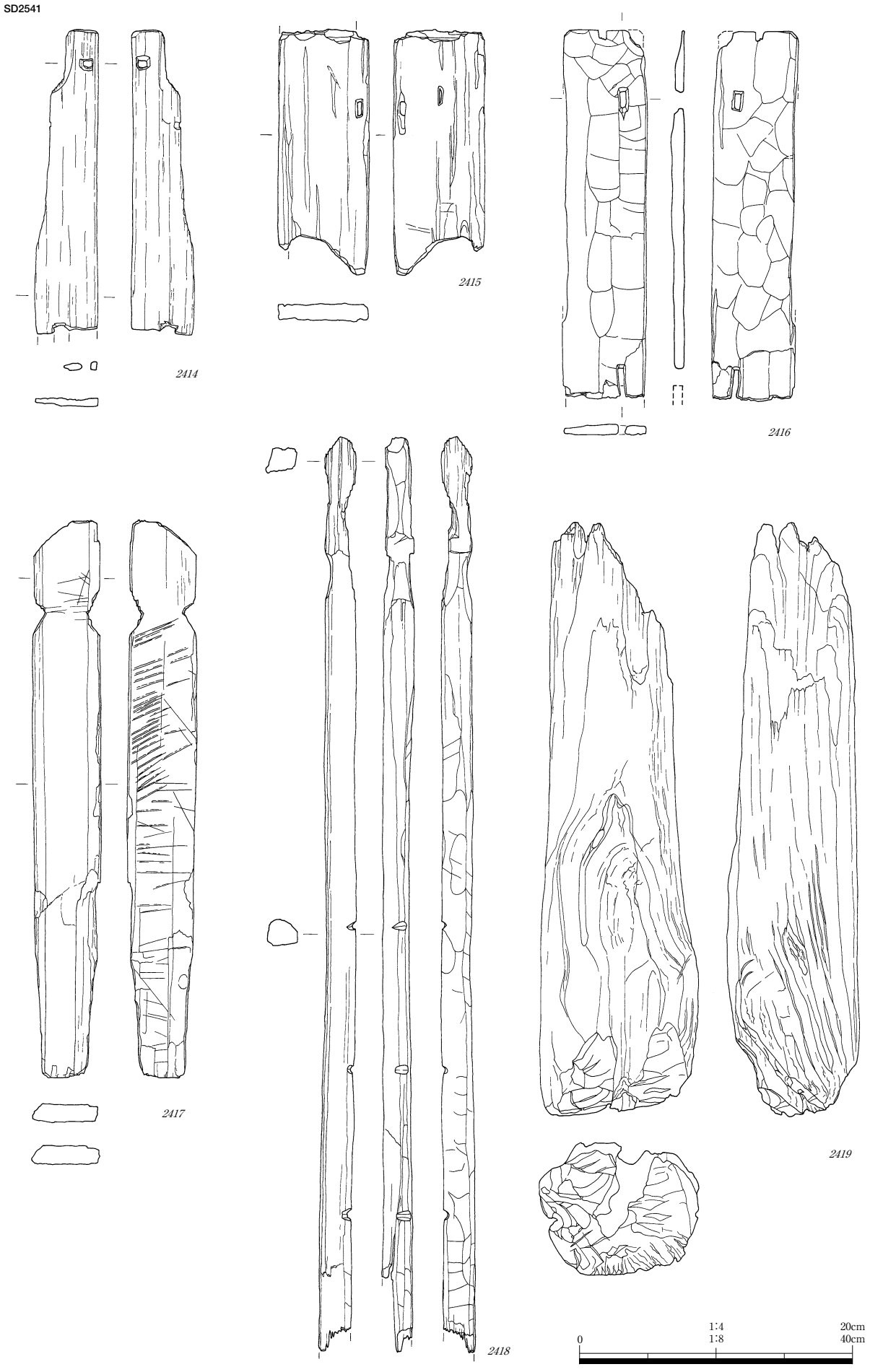
第289図　遺物実測図　(1/4・1/8)
Ｂ２地区　ＳＤ2541



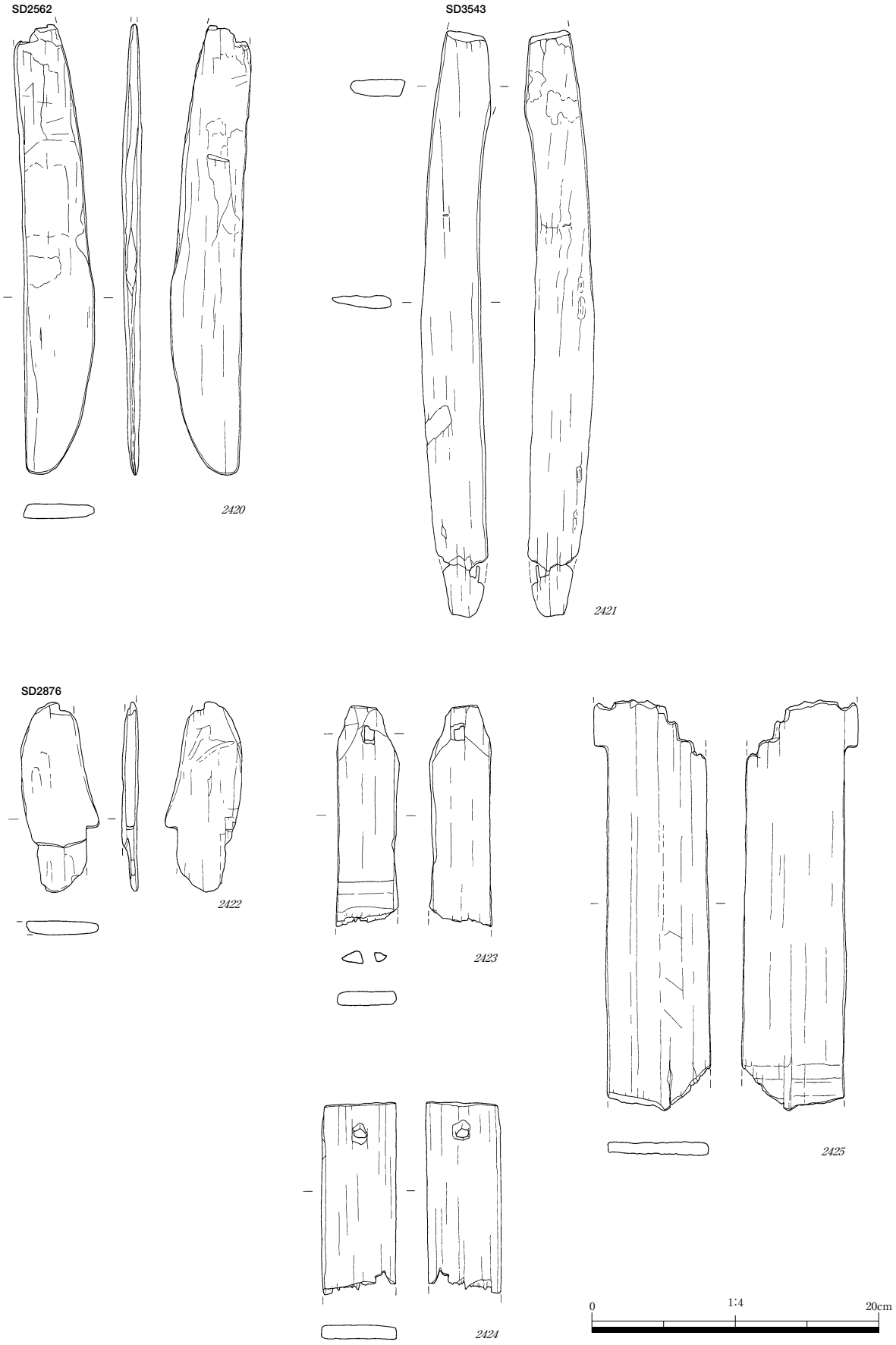
第290図　遺物実測図　(1/8)
B２地区　ＳＤ2541



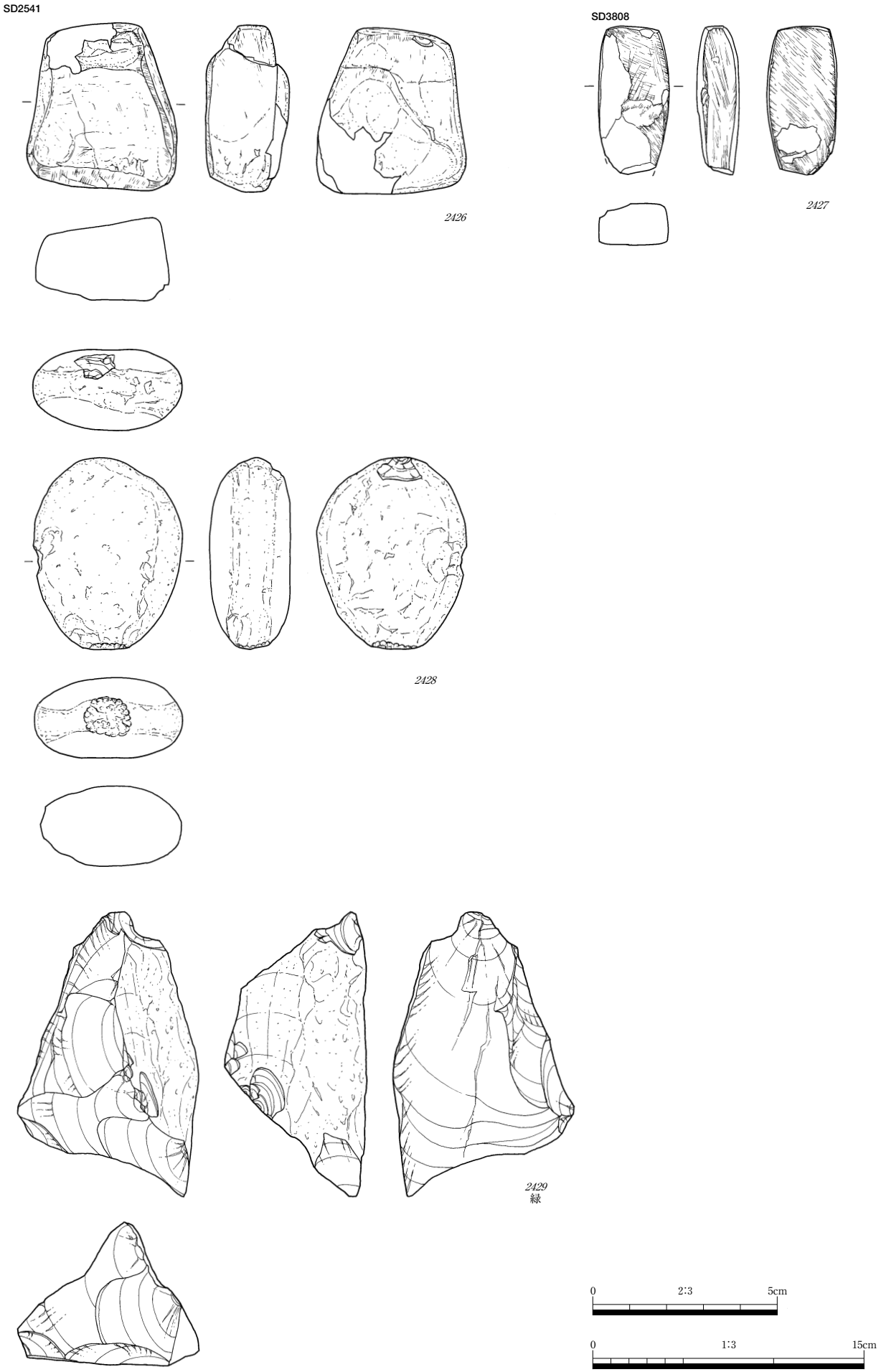
第291図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ２地区　ＳＤ2541



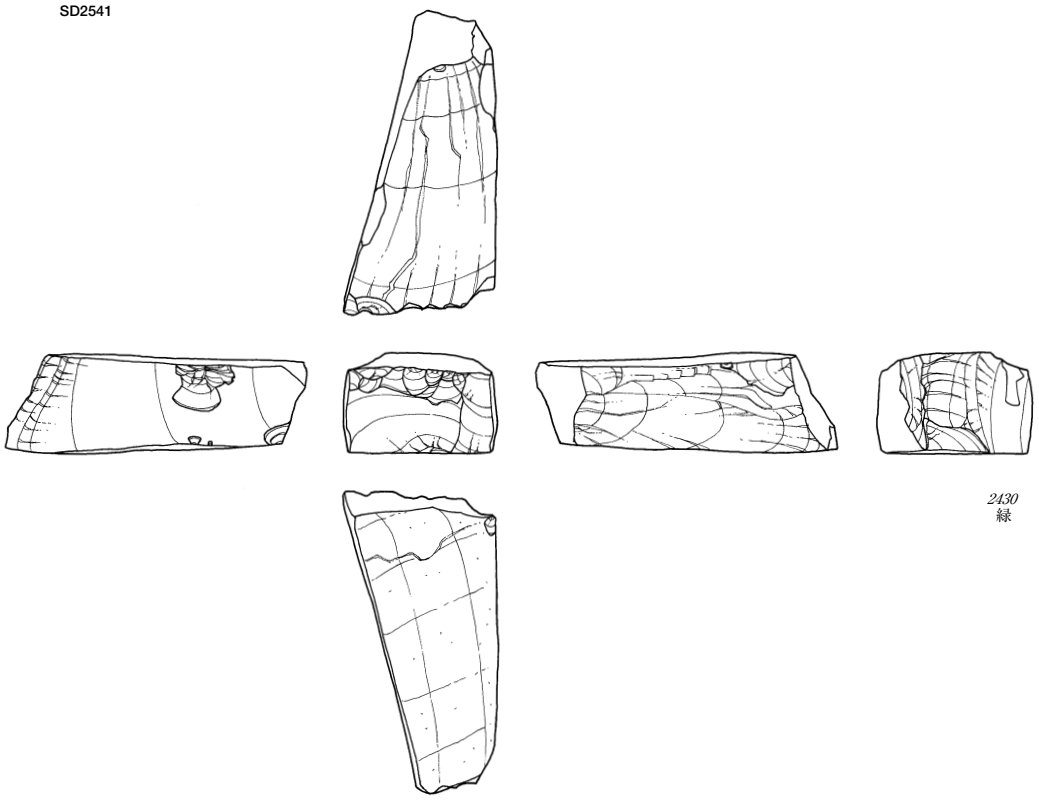
第292図　遺物実測図　(*2417*　1/4, *2414～2416・2418・2419*　1/8)
B２地区　ＳＤ2541



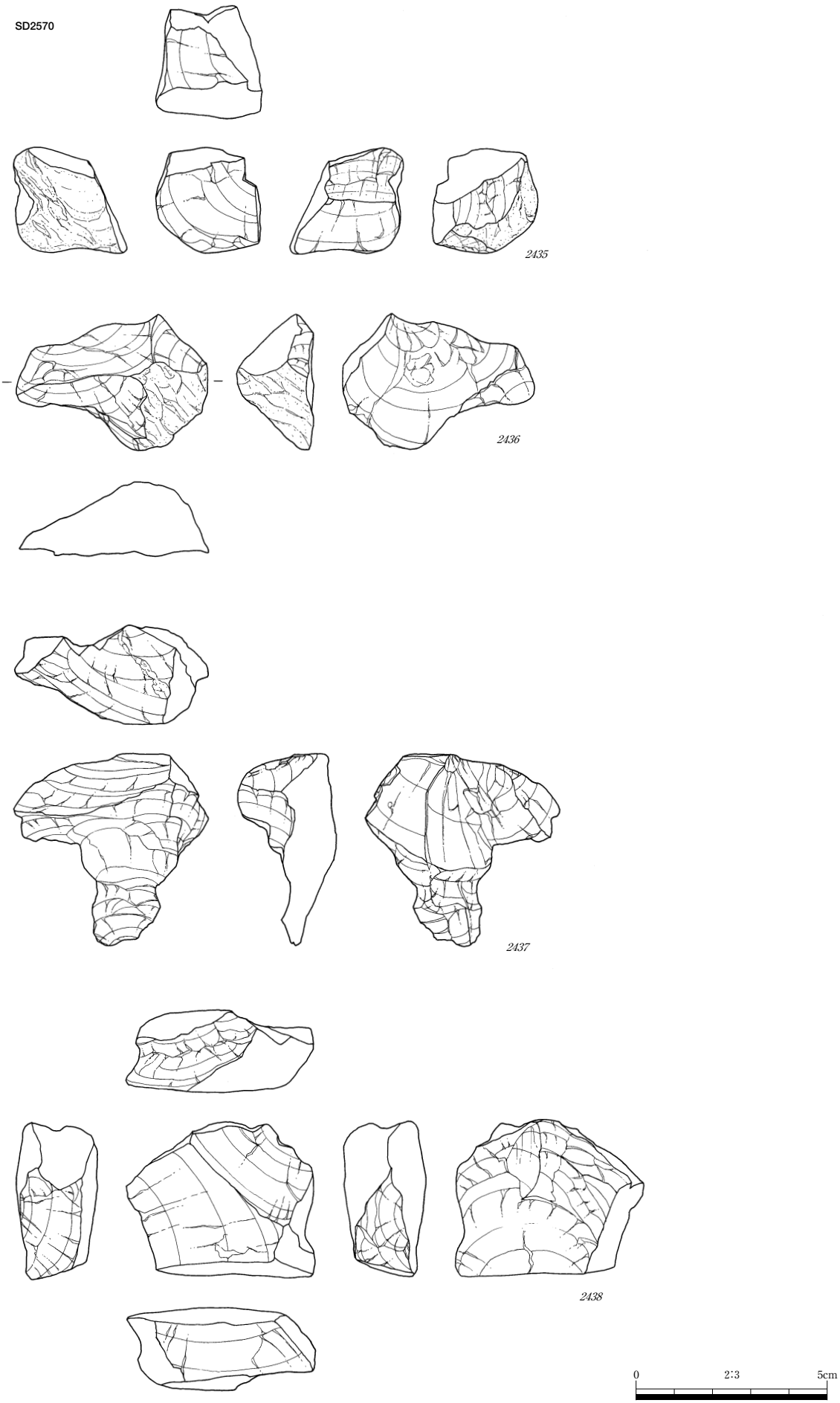
第293図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ地区　ＳＤ2562(*2420*)　ＳＤ2876(*2422～2425*)　ＳＤ3543(*2421*)



第294図　遺物実測図　(*2429*　2/3, *2426～2428*　1/3)
B地区　SD2541(*2426・2428・2429*)　SD3808(*2427*)



第295図　遺物実測図　(2/3)
B地区　ＳＤ2541(*2430*)　ＳＤ2570(*2434*)　ＳＤ3540(*2432*)　ＳＤ3553(*2431*)　ＳＤ3993(*2433*)



第296図　遺物実測図　(2/3)
B２地区　ＳＤ2570

H　畠

Ｂ１・３地区で検出したのは畠のさくで，南北方向と東西方向のものがある。畠はＢ１地区北側半分とＢ３地区西南側に広がっていた。またＢ６地区においては平行する溝群を検出し，畠とした。

2273号畠（ＳＤ2273，第297・298図）

Ｂ１地区北側中央に位置し，南北方向と東西方向に分岐している。幅38㎝，深さ４㎝，埋土はオリーブ黒色砂質ロームで，遺物は土師器が出土した。

2277号畠（ＳＤ2277，第297・298図）

Ｂ１地区北西側に南北に延び，北端で西に曲がっている。幅20㎝，深さ２㎝，埋土は灰オリーブ色砂質ロームである。

2284号畠（ＳＤ2284，第297・298図）

Ｂ１地区北西側に南北に延び，北端で東に曲がっている。幅44㎝，深さ４㎝，埋土は灰オリーブ色砂質ロームが主体である。

2289号畠（ＳＤ2289，第297・298図）

Ｂ１地区北西側に南北に延び，南端で東に曲がる。幅24㎝，深さ４㎝，埋土は黒褐色砂質ローム。

2309号畠（ＳＤ2309，第297・298図）

ＳＤ2284の南側に南北に延びており，途中で東に分岐している。幅20㎝，深さ４㎝，埋土は黒褐色砂質ロームである。

2314号畠（ＳＤ2314，第297・298図）

ＳＤ2277の南側に南北に延びている。幅26㎝，深さ４㎝，埋土はオリーブ黒色砂質ロームである。

2316号畠（ＳＤ2316，第297・298図）

Ｂ１地区中央西側に南北に延びている。幅16㎝，深さ４㎝，埋土はオリーブ黒色砂質ローム。

2321号畠（ＳＤ2321，第297・298図）

Ｂ１地区中央に南北に延びており，途中で東西に分岐している。幅28㎝，深さ３㎝，埋土は灰オリーブ色砂質ロームが主体である。

2335号畠（ＳＤ2335，第297・298図）

ＳＤ2316の東側に南北に延びており，途中で東に分岐している。幅52㎝，深さ５㎝，埋土は灰オリーブ色砂質ロームである。

2337号畠（ＳＤ2337，第297・298図）

ＳＤ2316の西側に南北に延びている。幅28㎝，深さ２㎝，埋土は黒褐色砂質ロームである。

2351号畠（ＳＤ2351，第297・298図）

Ｂ１地区中央西側に位置し，東西南北に分岐する。幅40㎝，深さ３㎝，埋土は黒褐色砂質ローム。

2827号畠（ＳＤ2827，第297・298図）

Ｂ３地区西南側に位置し，東西南北に分岐する。平均幅38㎝，深さ４㎝，間隔2.5ｍを測る。埋土は暗灰黄色シルトである。

3815～3820号畠（ＳＤ3815～3820，第284・299図）

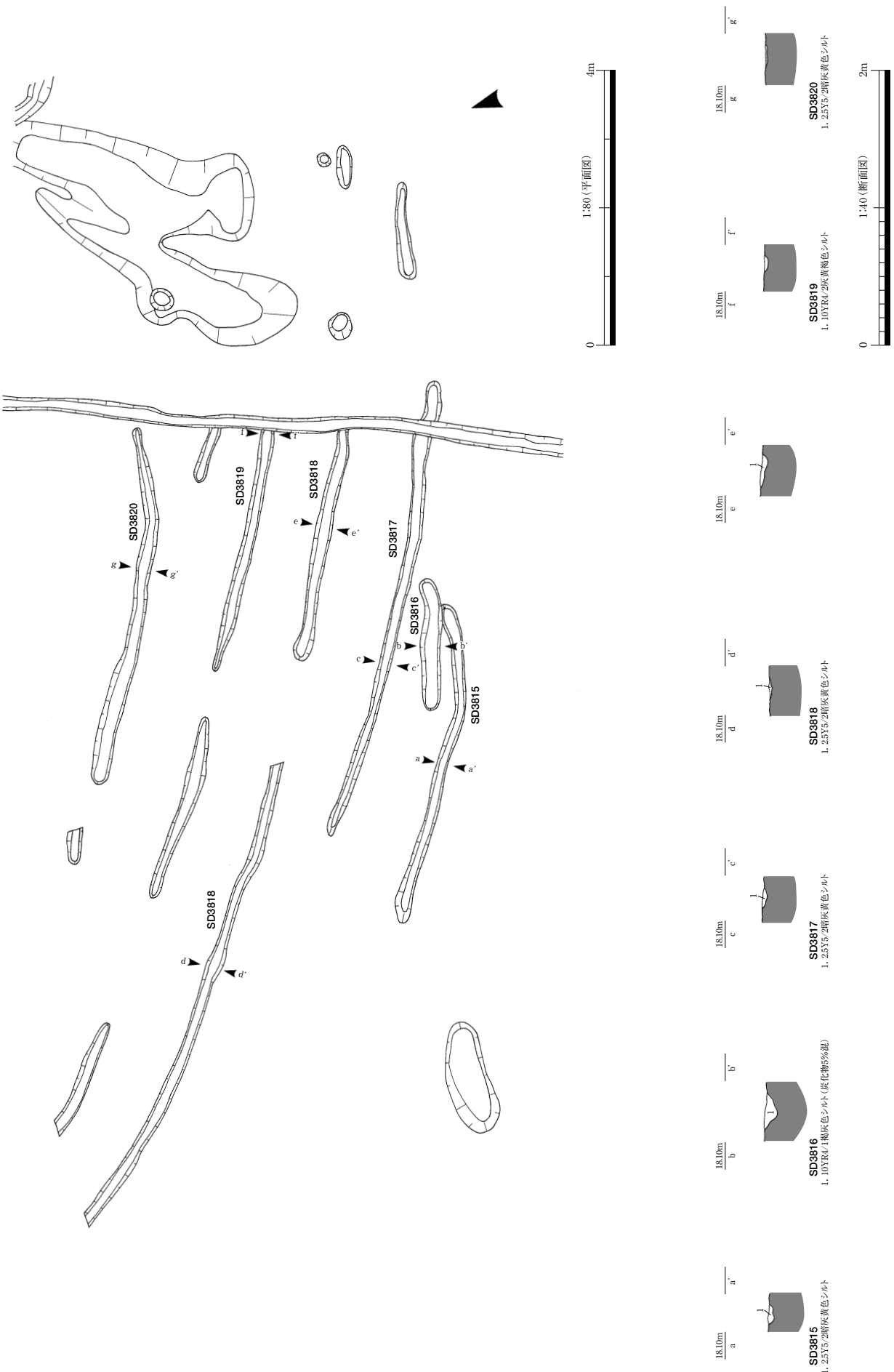
Ｂ６地区の中程西端に位置する。ＳＤ3816が若干ずれるが，主軸がほぼ北西方向に向いている。それぞれ80～110㎝の間隔で離れており，畠跡と考えられる。埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。遺物は弥生土器がＳＤ3815・3816・3818から出土した。有段口縁甕（*2361*）はＳＤ3815から出土した。

第297図　遺構実測図　(1/400)

B１・B３地区　SD2273・SD2277・SD2284・SD2289・SD2309・SD2314・SD2316
SD2321・SD2335・SD2337・SD2351・SD2827

第298図　遺構実測図　(1/4)

B１・B３地区　1. S D2273　2. S D2277　3. S D2284　4. S D2289　5. S D2309
6. S D2314　7. S D2316　8. S D2321　9. S D2335　10. S D2337
11・12. S D2351　13・14. S D2827



第299図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B 6 地区　S D3815～S D3820

（２）　包含層出土遺物

A　土器（第300～314図，図版113～129）

弥生時代中期後半の土器も少量混じるが，ほぼ弥生時代後期前半から後期後半の土器群で，主体は後期後半である。甕・壺・器台・高杯・鉢・蓋・ミニチュア土器・土製品がある。

甕（第300～304図，*2439*～*2574*）

甕には，擬凹線甕・有段甕・受口甕・くの字甕（平縁・付加状・丸縁）がある。その類別比率（実測個体数244点）は，擬凹線甕36％，有段甕９％，受口甕30％，くの字甕25％（平縁46％，付加状19％，丸縁35％）となる。

擬凹線甕（*2439*～*2490*）は，口縁部の形態や口縁帯の発達などで分類できる。*2439*～*2449*は内傾する口縁部に２・３条の擬凹線文を施す（15％）。胴部の調整は外面ハケ調整。内面ケズリ調整。口縁部の作りは胴部との境界が内厚で口縁部は短い。

2450～*2454*は有段風の擬凹線甕であるが，口縁部形態が断面三角形を呈し，擬凹線文を２・３条施す（６％）。*2454*は胴部上半にハケ状器具による連続刺突文を施す。

2455～*2490*は擬凹線甕の口縁部形態が有段を呈する（79％）。口縁部は直立あるいは，やや外傾するものがほとんどであるが，外傾度の強いもの（*2472*）も少量認められる。口縁帯の幅によって15㎜以下のもの（*2455*～*2460*），20㎜前後のもの（*2461*～*2472*・*2474*～*2479*），25㎜前後のもの（*2480*～*2488*），30㎜前後のもの（*2489*・*2490*）などがある。３～６条の擬凹線文を施したものが多い。胴部の調整は外面ハケ，内面はケズリ調整するものと，ハケの後ケズリ調整するものがあり，ハケ調整やナデ調整するものも少量認められる。*2461*は口縁端部上面に刻目を施す。また，胴部上半にハケ状器具による連続刺突文を施文するものも多い（*2455*・*2456*・*2469*～*2472*・*2478*・*2481*・*2485*）。*2486*は棒状器具による列点文を施す。*2473*は小型甕。

有段甕（*2491*～*2506*）も口縁部の形態によって分類できる。*2491*～*2494*は口縁部形態が断面三角形を呈する（17％）。*2495*～*2506*は口縁部形態が有段を呈する（83％）。口縁部は直立あるいはやや外傾するものがほとんどであるが，内傾するもの（*2500*）もある。有段部下端にヘラ状器具による連続刺突文を施すもの（*2494*・*2495*・*2497*）や胴部上半にヘラ状器具による刺突文を施すもの（*2493*）もある。調整は外面ハケ，内面ケズリのものが大半を占めるが，内面ハケだけのものやハケの後ケズリ調整されるものもある。

受口甕（*2507*～*2541*）は，文様の施文位置や施文具などで分類できる。*2507*～*2514*・*2519*・*2522*～*2525*・*2535*・*2536*は肩部に施文する刺突受口甕。*2507*～*2514*・*2519*は受口状口縁部下端に連続刺突文を施す。胴部の文様帯は，*2509*は櫛描直線文・櫛描列点文の２帯。*2511*・*2512*が櫛描直線文・ヘラ描刺突文の２帯。*2519*はヘラ描刺突文１帯。*2507*・*2508*・*2510*・*2513*・*2514*は櫛描直線文。内外面ハケ調整。*2512*は内面板状器具によるナデ。

2522～*2525*・*2535*・*2536*は受口状口縁部下端に櫛描列点文を施す。胴部の文様帯は，*2536*が櫛描列点文１帯。*2523*・*2524*・*2535*は櫛描直線文，櫛描列点文の２帯。*2522*・*2525*は３帯で，*2522*は櫛描直線文，櫛描列点文，櫛描直線文，*2525*は櫛描直線文，櫛描列点文，ヘラ描波状文で構成されている。内外面ハケ調整。

2515～*2518*・*2539*は肩部無文の刺突受口甕。いずれも連続刺突文を施す。内外面，縦・斜位のハケ。*2515*は外面カキ目状調整か。内面板状器具のナデ調整。

2520・*2521*・*2526*・*2538*は肩部に施文する受口甕。*2520*・*2521*・*2538*は連続刺突文，*2526*は

櫛描波状文を施す。外面ハケ，内面ハケ（*2521*・*2526*・*2538*），ケズリ（*2520*）調整。*2527*～*2534*・*2537*・*2540*・*2541* は肩部が無文の受口甕。口縁部ヨコナデ，胴部外面縦・斜位のハケ。内面ハケ，ハケの後ナデ，ハケの後ケズリ調整。

くの字甕（*2542*・*2544*～*2570*）は口縁部の形態により，平縁甕（*2542*・*2545*～*2547*・*2555*～*2561*・*2563*・*2564*・*2566*・*2567*・*2569*・*2570*）・付加状甕（*2548*～*2554*）・丸縁甕（*2544*・*2562*・*2565*・*2568*）がある。調整は口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ調整で，胴部内面ケズリ調整と，ハケ調整のものが多い。*2554* は胴部外面板状器具によるナデ調整。*2547*・*2549*・*2552*・*2555* は口縁部内面にハケが残る。*2542* は口縁部・胴部状半に連続刺突文を施す。内外面ハケ調整。外面胴部中位から下半はススが厚く付着している。*2558* は口縁端部にヘラによる連続刺突文。*2559* は胴部上半にハケ状器具による連続刺突文。*2562* は口縁端部上面に刻目。*2568*・*2569* は口縁端部にハケ状器具による連続刺突文を施す。

2571～*2574* は小型の甕。*2571* は受口状口縁か。外面ハケ，胴部上半に連続刺突文を施す。*2572* は口縁部に連続刺突文を施す。

壺（第305～307図，*2575*～*2648*）

壺には長頸壺・有段短頸壺・広口壺・有段広口壺・細頸壺・短細頸壺・短頸壺・把手付壺・無頸台付壺・長頸台付壺・大型壺・小型壺などの器形がある。

短頸壺（*2575*～*2578*・*2580*～*2582*・*2588*・*2597*）は，口頸部が直立あるいは，やや外反するものと，大きく朝顔形に開くもの（*2588*）がある。調整は，外面縦位及び斜位のハケ，内面は，口頸部横位のハケの後，内外面口頸部上半ヨコナデするものが多い。口頸部にヘラ状器具による三叉状の記号文（*2576*），U字形の記号文（*2575*）を施すものもある。*2597* は球形の胴部に直立する短い口縁部が付く。頸・胴部境に2孔1対の紐孔がある。外面の調整は胴部ハケの後縦位のミガキ。

有段短頸壺（*2583*～*2587*）は，口縁部が無文で有段の有段短頸壺（*2583*～*2585*・*2587*）と，口縁部に擬凹線文を施す擬凹線短頸壺（*2586*）がある。*2583* は大きく朝顔形に開く。調整は短頸壺と同様である。

長頸壺（*2579*）は球形に近い胴部に伸長した長い頸部を持つ。外面はハケ調整で仕上げる。胴部上半の一部に赤彩痕。下半スス付着。

細頸壺（*2589*・*2590*）は胴部以下欠損しており全形は不明であるが，細頸部がやや外方に開く長い頸部を呈する。調整は内外面ハケの後口頸部上半ヨコナデ調整。

短細頸壺（*2598*～*2600*）は，口縁部が広がらずに立ち上がるものと，わずかに内湾するものがある。*2598* は外面縦位のミガキで赤彩を施す。*2599* は外面縦位のミガキで口縁部下に1条の沈線が巡る。内面口縁部ヨコナデ，胴部ケズリ。*2600* は口縁端部上面を幅広く面取りする。胴部はハケ調整。

広口壺は口縁部の形態で細分が可能である。くの字口縁のもの，大きく朝顔形に開く口縁のもの，外反する口縁端部を肥厚させるもの，外反する口縁端部を垂下させるもの，頸部がほぼ直立し口縁部が外反，端部面取りするもの（*2629*・*2630*）などがある。

2593 は口縁端部下端にハケ状器具による連続刺突文を施す。*2595* は口縁端部を外方へ拡張し，上面に擬凹線4条を施したくの字口縁壺。*2603* は口縁端部に5条の波状文を施し，2個1対の円形浮文を付す。頸部はハケ調整，胴部はミガキの後上半に櫛描波状文と扇形文を施す。口縁部内面はミガキの後，波状文を施し，胴部はハケ調整。小松式。*2604* は口縁端部に2個1対の円形浮文を付す。*2605* は口縁部に2条の擬凹線文を施し，竹管文を施した4個1対の円形浮文を4箇所に配し，その間

にはヘラ状器具による刺突文を３段に施す。頸部及び内面は縦位の丁寧なミガキ調整。*2626* は口縁端部に竹管文を１列に施す。*2628* は口縁端部に浅い沈線文が３条巡る。

2629 は頸部にヘラ状器具による記号文を施す。

有段広口壺は，口縁部の形態によって，有段壺（*2601*・*2619*～*2623*）と擬凹線壺（*2596*・*2624*・*2625*）がある。調整は外面ヨコナデ，ハケ調整，内面ヨコナデ，ケズリ調整されるものが多いが，*2619* は外面縦位のミガキ，頸部内面横位のミガキ。

2621 はミガキで頸部に１条の沈線が巡る。*2622* は外面にスス付着。*2601* は内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。外面口縁部横位のミガキ。頸部縦位のハケでヘラ状器具による横位の刺突が全周する。内面口縁部ヨコナデ，頸部ミガキ。*2596* は口縁部が外反し，５条の擬凹線文を施し，内面縦位のハケ後ヨコナデ。*2624* は口縁部に２条の擬凹線文を施し，頸部縦位のミガキ。内面ハケの後ヨコナデ。

2625 は口縁部に１条の擬凹線文を施し，ハケ調整，内面胴部右上がりのケズリ，頸部ハケの後，内外面頸部上半ヨコナデ。*2624*・*2625* は口縁部内外面赤彩。

2591・*2592* は把手付壺。*2591* は外面スス付着。

台付壺（*2607*～*2613*）は，口縁部の形態によって細分できる。

2607・*2610*～*2613* は長頸台付壺。*2607* は口縁部に２条の沈線を施す。外面縦位のミガキ。*2610*～*2612* は胴部算盤玉形を呈し，胴部中位に粘土帯を貼り付ける。外面は縦位のミガキ。内面は*2610* はミガキ。*2611*・*2612* はナデ。*2611* は突帯部に２列の半截竹管による連続刺突文を２段に施す。外面赤彩。*2612* は竹管文と突帯部にハの字状刺突文を３列施す。*2613* は胴部に３本１組の棒状浮文を付し，脚柱部棒状脚裾部有段形態の脚部が付く。胴部内面は下半から底部はハケの後，部分的にミガキ調整。脚柱部に４条１組の沈線を４段に施す。有段部に３箇所，裾部に４箇所の透孔。

2608・*2609* は無頸台付壺。外面ミガキ，内面ナデ。無頸壺の形態で胴部と底部の境界の明瞭なもの（*2608*）と，明瞭で稜線があるもの（*2609*）がある。*2608* は口縁部及び胴部と底部の境界に帯状に赤彩。

2614・*2615* は大型壺の口縁部。装飾壺（*2614*）は双葉状刺突文，竹管文，双葉状刺突文２列を施す。内面にも双葉状刺突文を施すが，全周しない。*2615* は外面ヨコナデ，内面ミガキ不鮮明。*2614* は*785* の口縁部の可能性がある。

2616 は頸部と胴部の境に突帯を貼り付け，側面に連続刺突文を施す。外面縦位のミガキ，内面頸部横位のミガキ，胴部ケズリ。突帯上部赤彩。

2617 は大型壺の頸部で，胴部との境に２段以上の突帯を貼り付け段をなす。突帯上面，側面に２列の刺突文を施す。内外面ハケ調整。

2618 は頸部胴部境に突帯を巡らし，刻目を施す。胴部外面ハケ。内面胴部下半から中位左上がりのハケ，上半ナデ調整。

小型壺（*2637*～*2646*）　*2637*・*2638* は有段小型壺。*2637* は内外面ミガキ，胴部内面中位から底部黒色漆付着。外面スス付着。*2638* は口縁部内面及び外面密なミガキ，内面ケズリ。器壁は薄く丁寧なつくり。口縁部内面から外面赤彩。底部スス付着。

2639～*2641* は擬凹線小型壺。*2639*・*2640* は内面ミガキ。*2640* は内外面赤彩。*2641* は口縁部擬凹線の後横位のミガキ。胴部外面は縦・斜位のミガキ。内面は胴部ケズリの後ミガキ。

2642 は口縁部欠損。算盤玉形の胴部を呈す。頸部に紐孔。頸部内面及び外面はミガキ，器表面は風化著しく不鮮明。

2645・*2646* は広口小型壺。口縁部ヨコナデ，胴部ハケ調整。*2645* は底部は高台付で全面スス付着。

2647・*2648* は高台。*2648* はミガキで高台部外面ヨコナデ，内面ハケ調整。

器台（第308図，*2649*～*2679*）

器台には外反器台・有段器台・擬凹線器台がある。

外反器台（*2649*～*2654*・*2665*～*2667*・*2669*～*2673*）　*2665*・*2669* は受部と脚部の境界が明瞭で，*2665* は直線的にひろがる受部と裾部をもつ。外面縦位のミガキ，内面受部ミガキ，体部ケズリの後ナデ，ハケ調整。*2669* は受部と脚部境に不規則な沈線を10～11条施す。３箇所に透孔。高杯に類似する脚部がある（*2707*）。

2666・*2670*～*2673* は受部と脚部の境界が不明瞭。*2666* は口縁端部に３条の擬凹線文。外面縦位のミガキ。内面受部ミガキ，体部ケズリ，裾部ハケの後，端部ヨコナデ。上・下段に４箇所の透孔。上段の１孔は高さ異なる。*2670* は６箇所に透孔。外面ハケの後，縦位のミガキ。*2671* は上・下段に３箇所の透孔。外面ミガキ，内面ケズリ。*2672*・*2673* は４箇所に透孔。*2667* は受部と脚部の境界のない筒状を呈し，６箇所に透孔。外面縦位のハケの後，縦位のミガキ。内面受部ミガキ，裾部ハケ。

2649～*2654* は受部。*2651*・*2652* は口縁端部に竹管文を施す。*2653* は円形浮文を５箇所に配すが，貼り付け位置が片寄る。*2654* は３個１対の竹管文を施した円形浮文を４箇所に貼り付け，その間を双葉状刺突文で充填する。口縁部内面にも双葉状刺突文を施す。

有段器台（*2655*・*2656*）　*2655*・*2656* は文様，胎土，色調などからみて同一個体。口縁部及び裾部外面はヨコナデの後，同心円文の間を連続入組渦文のスタンプ文で飾る。体部外面はハケの後，縦位のミガキ。口縁部内面及び裾部内面にスス付着。

擬凹線器台（*2657*～*2664*）　*2657*～*2659* は有段部分が強調され，口縁部は直立もしくはやや外反する。内外面とも赤彩。*2657* は３条の擬凹線文の後，横位のミガキ。*2658* は11条，*2659* は９条の擬凹線文を施す。*2660* は器壁が厚くしっかりとしたつくりで，７条の擬凹線文を施す。受部下半及び内面は丁寧なミガキ。*2661* は受部が内湾気味に外上方へのび，５条の擬凹線文を施す。受部有段部内側はかろうじて有段状になっている。ハケの後ミガキ。

2662・*2663* は，受部有段部が大きく外反し，多条の擬凹線を施す。*2662* は16条，*2663* は摩滅で不鮮明。*2662* は内面に赤彩痕，端部に漆付着。*2664* は器壁が厚くしっかりしたつくりで，3条の擬凹線を施す。内外面ミガキ。

2668・*2674*～*2679* は擬凹線器台の脚，裾部。*2668* は脚部に逆Ｔ字状の透かしを４方に穿ち，有段部は赤彩され，３列の連続刺突文を施す。裾部には円孔，方孔の透しを穿つ（１つずつ遺存）。外面縦位のミガキ，内面ケズリ。*2674*・*2678*・*2679* は裾部が有段化しているが，脚部が棒状になりきっていないものである。*2674* は外面縦位のミガキ，裾部擬凹線，内面ケズリ。外面赤彩。*2678* は３箇所に透孔。外面縦位のミガキ，内面横位のハケの後，端部ヨコナデ。*2679* は外面ミガキ，内面ケズリ。*2675*～*2677* は有段裾部に擬凹線を施す。*2675* はその後ミガキ，有段部上面に浅い刻目を施す。外面赤彩。*2677* は裾部が外に開き出し，かろうじて有段状になっているものである。外面裾部赤彩。

高杯（第309～311図，*2680*～*2733*）

有段高杯・拡張有段高杯・有段鉢形高杯・鉢形高杯などがある。

有段高杯（*2680*～*2691*・*2693*・*2703*）　*2680*～*2683* は杯部上半が外反し，杯部が深い。杯部上半のミガキは横位。*2682* の脚部はラッパ状開脚で縦位のハケの後，縦位のミガキ。裾端部は面取りする。*2683* は器壁が厚く，杯部上半と下半境の稜は鈍い。杯部上半横位のミガキ。杯部下半及び脚部

は縦位のミガキ。杯部上半内外面及び脚部外面赤彩。杯部下半外面にU字状の赤彩文3箇所。

2684～*2686*・*2693* は杯部上半が外反し，杯部が浅く口縁端部を丸く収める。*2684* は杯部上半ヨコナデの後，一部横位のミガキ。*2685*・*2686* は杯部上半縦位のミガキ。

2687 は杯部上半が外反し，口縁端部を面取りする。口縁端部に2条の擬凹線を施す。杯部上半は2段に縦位のミガキ。

2688・*2689* は口縁端部内側に面をもつ。*2688* は杯部上半に8条の擬凹線文を施す。*2689* は内外面横位の丁寧なミガキ。

2690・*2691* は杯部上半が大きく外反し，杯部は浅い。杯部上半のミガキは*2690*・*2691* は横位。*2691* の脚柱部は棒状。

2693 は脚柱部棒状脚裾部有段形態の脚部が付く。端部は粘土帯貼り付け，有段部・裾部とも4箇所の透孔。有段部及び裾部に2列1組の刺突文6条，端部上面に2列1組の刺突文と竹管文。

2702 は口縁端部上面，側面を面取りする。杯上半部と下半部境に粘土帯を貼り付け，刻目を施す。

2705 は杯部上半が直立または外反し，口縁部はさらに外反し，端部は丸く収める。

拡張有段高杯（*2692*・*2694*～*2702*・*2704*・*2705*）　*2692* は口縁端部を水平方向に拡張する。*2694*・*2695* は杯部上半が大きく外反し，杯部は浅く，口縁部を拡張し，内面に面をもち，端部を面取りする。口縁部内面にハの字状刺突文を4列施す。杯部内外面とも縦位のミガキ。*2695* は脚柱部棒状裾部有段の脚部が付く。裾端部は粘土帯貼り付け。裾部に4箇所の透孔。棒状脚柱部は上から，平行沈線文2条，ハの字状刺突文，沈線文，ハの字状刺突文，沈線文，ハの字状刺突文，沈線文を施す。有段部の文様帯は剥落している。裾端部上面にもハの字状刺突文を3列施す。外面は縦位のミガキ，内面有段裾部斜位のハケ，端部ヨコナデ。

2696～*2701* は口縁端部上面に面をもち，外方向に拡張する。*2696*～*2698* は端部上面に1条の沈線を巡らす。*2698* は杯上半部と下半部境にも1条の沈線が巡る。*2701* は杯下半部に把手が剥落した痕跡が認められる。

2703 は有段鉢形高杯の系譜。

2727・*2728* は小型の高杯。内外面とも縦位のミガキ。

2729・*2730* は杯部箱形で，浅いものと深いものがある。*2729* は杯部上半と下半境に刻目を施す。

鉢形高杯（*2731*～*2733*）　*2731* は杯部上半ヨコナデ，下半ハケ。*2732* は口縁部に5条の擬凹線文を施す。杯部から脚部は縦位のハケ。杯部と脚部境に6～7条の不規則な沈線文を施す。外面杯部下半から脚部上半は赤彩。*2733* の杯部は摩滅が著しく調整不明。ラッパ状開脚の脚部で，端部は丸く収める。4箇所に透孔。縦位のミガキ。

2706～*2726* は脚・裾部。*2706*～*2712* は脚柱部棒状脚裾部開脚形態の脚裾部。*2706* は脚柱部棒状で外面縦位のミガキの後，下半部横位の丁寧なミガキ。*2707* は縦位のミガキ。脚柱部上半に9条の沈線文。3箇所に透孔。*2708* は裾端部面取り。1孔遺存。外面縦位のミガキ，赤彩。内面脚部左回りのケズリ，裾部粗いハケの後，端部ヨコナデ。*2709*～*2712* は端部粘土帯貼り付け。*2709* は4箇所に透孔。外面は縦位のミガキ，脚部と裾部境に2条の沈線文。裾端部上面に5列，側面に1列の連続刺突文を施す。内面ハケの後，端部ヨコナデ。*2710* は1孔遺存。外面は縦位のミガキ。端部上面1条の沈線を境に上に櫛描列点文，下に櫛描波状文を施す。内面ハケの後，端部ヨコナデ。*2711* は4箇所に透孔。外面摩滅著しくミガキ不鮮明。内面ケズリ，裾下半部ハケ。*2712* は4箇所に透孔。外面密で丁寧なミガキ。端部上面横位のミガキ，下半ハケ。赤彩。内面左上がりのハケ。

2713 ～*2719* は脚柱部棒状脚裾部有段形態の脚・裾部。*2716*・*2718*・*2719* は端部粘土帯貼り付け。*2717* は端部面取り。*2713* は裾部４箇所に透孔。杯部ハケの後，ミガキ。杯部･脚部境，横位のミガキ，脚部縦位のミガキ。有段部刻目。杯部内面スス付着。*2714* は内外面とも摩滅著しい。有段部側面にＣ字状の連続刺突文２段。*2715* は有段部を３段につくり出し，その上面，側面に連続刺突文を施す。*2716* は有段部及び裾部に上・中・下段４箇所ずつの透孔。上・下段は小孔。外面は縦位のミガキ。裾端部横位のミガキ。*2717* は有段部，裾部に４箇所ずつの透孔。沈線によって区画された有段部上面・側面及び裾端部にハの字状の連続刺突文を施す。*2718* は裾部に２孔遺存。外面縦位のミガキ，裾端部上面横位のミガキ，内面左回りのハケ，外面裾端部上面赤彩。*2719* は裾部に１孔遺存。外面密で丁寧なミガキ。端部上面連続刺突文を施す。内面はハケの後ヨコナデ。

2720 ～*2726* はラッパ状開脚形態の脚･裾部。裾端部は面取りをする。*2720* ～*2722* は縦位のミガキの後，沈線文・刺突文を施す。*2720* ・*2721* は３箇所に透孔。*2723* は３箇所に透孔。外面ハケの後，縦位のミガキ。裾端部ヨコナデ，内面横位のハケの後，端部ヨコナデ。内面端部スス付着。蓋として再使用されたものか。

2724 ・*2725* は小型の高杯。*2724* は縦位のミガキ，裾部の一部横位のミガキ。内面左回りのケズリ，裾部のヨコナデ。*2725* は縦位のハケの後，裾部ミガキ。内面ハケの後，ナデ。*2726* は縦位の丁寧なミガキ。内面裾部ハケの後，端部ヨコナデ。

鉢（第311～312図，*2734* ～*2781* ）

鉢には，擬凹線鉢・受口鉢・くの字鉢・無頸鉢・台付鉢・有孔鉢などがある。

2734 ～*2742* ・*2748* ・*2749* は擬凹線鉢。擬凹線甕と同様，口縁部形態によって分類できる。

2748 ・*2749* は内傾する口縁部に擬凹線を１～２条施す。内外面ミガキ。

2740 ・*2741* は口縁部断面三角形を呈する。*2740* は内外面ミガキの後，内外面赤彩。*2741* は体部内外面ハケ。外面スス付着。

2734 ～*2739* ・*2742* は口縁部が有段を呈する。*2734* は体部外面ハケ。内面ミガキ。風化摩滅著しく不鮮明。*2735* ～*2739* は体部外面及び内面ミガキ。*2735* は口縁部内面赤彩。*2736* は外面口縁部から内面赤彩。*2737* は内外面赤彩。*2742* は体部外面及び内面ミガキ。口縁部と体部境に櫛描列点文を施す。

2743 は受口鉢。受口状口縁端部に連続刺突文を施す。体部外面板状器具のナデ。内面ナデ。

2744 ～*2747* は有段鉢。*2744* は口縁部の形態が断面三角形を呈する。内外面とも横位のミガキ。*2745* ～*2747* は口縁部の形態が有段で，口縁部が直立あるいは外傾する。*2745* は外面及び口縁部内面横位のミガキ，体部内面左回りのハケ。*2746* は内外面とも口縁部・体部上半は縦位のミガキ。*2747* は外面縦位のハケの後ミガキ。内面口縁部横位のハケの後，横位のミガキ。体部縦位のミガキ。口縁部内外面赤彩。

2750 ・*2751* はくの字鉢。*2750* は受口風の口縁部で体部内外面ハケ。*2751* は内外面左上がりのハケの後，口縁部ヨコナデ。

2752 ～*2754* は台付鉢。*2752* は擬凹線鉢にラッパ状開脚形態の脚裾部が付く。鉢部は内外面丁寧なミガキ。脚部は縦位のミガキで３箇所に透孔。鉢部内外面赤彩。*2753* は高杯の杯部のように体部上半が立ち上がり，口縁部は外反する。外面体部下半ハケの後，口縁部及び内面ヨコナデ。*2754* は算盤玉形の体部に外反する口縁部をもつ。口縁部ヨコナデ。体部外面ハケの後ミガキ。体部内面上半は右回りのケズリの後，内面ミガキ。口縁部から体部上半に黒斑。

2755～*2757*は大型の鉢類。*2755*は有段鉢で，内外面とも横位の丁寧で密なミガキ。口縁部に黒斑。*2756*・*2757*は擬凹線鉢。*2756*は内外面とも横位のミガキ。*2757*は体部外面ハケの後，上半ナデ，中位ミガキ。体部内面横位の粗いミガキ。

2758～*2774*は無頸鉢。口縁部が内湾するもの（*2758*～*2761*）と，椀形を呈するもの（*2762*～*2772*）とがある。

*2758*は内外面ハケの後，口縁部ヨコナデ。*2759*は外面縦位のミガキ。内面縦位のハケ。板状器具のナデの後，体部中位から下半縦位のやや粗いミガキ。*2760*は口縁部が波状を呈し，外面ハケ，内面ケズリの後ハケ。*2761*は卵形の体部で外面ハケの後，ミガキ。体部中位から下半は丁寧で密なミガキ。内面ハケの後，下半部ナデ。

椀形を呈するものには，体部が内湾するもの（*2764*～*2767*・*2772*），体部が内湾気味で口縁部が外反するもの（*2762*・*2763*），体部が直線的に外上方へのびるもの（*2768*～*2771*）がある。

底部には，高台付（*2768*・*2771*・*2772*），輪台付（*2773*・*2774*），平底（*2770*）などがある。調整はハケ・ナデ調整のもの（*2762*・*2765*・*2767*・*2768*・*2771*）とミガキ調整のもの（*2763*・*2764*・*2766*・*2769*～*2772*）がある。*2769*は内外面赤彩。*2771*は，内面全面に赤色漆が付着。

2775～*2781*は有孔鉢。底部形態は平底であるが，全形を知り得るものはない。調整は内外面ハケ調整のもの（*2775*～*2778*），外面ナデ，内面ケズリ調整のもの（*2779*），内外面ミガキ調整のもの（*2780*・*2781*）がある。*2780*は底面及び孔側面も丁寧にミガキ調整が施されている。

2782・*2783*は有鈕蓋。つまみ部はナデ，体部ハケ。

*2784*は脚部。脚台部外面及び底面ミガキ，不鮮明。

2785～*2802*はミニチュア土器である。*2785*～*2787*は壺，*2788*～*2790*は甕，*2791*は高杯，*2792*は器台，*2793*～*2802*は鉢。調整はいずれも粗いナデ・ハケ調整であるが，*2791*はミガキが施されている。

2803～*2805*は土製品。*2803*・*2804*は土錘。*2805*は土鈴か。

天王山系土器（第313・314図，*2806*～*2859*）

2806～*2818*・*2822*～*2835*・*2839*～*2841*は甕の口縁部。*2806*・*2807*はススが厚く付着し不明瞭だが，外面にＬＲ縄文，内面にハケ，口縁端部に刻みを施す。*2809*は外面と面取りした口縁端部にＬＲ縄文を施す。*2808*は内外面にＬＲ縄文，口縁端部に両側から刻みを施す。*2814*は受口状の口縁で，端部に外側から刻みを施す。*2811*はススが厚く付着し不明瞭だが，外面に縄文を施す。口縁端部は外側からユビオサエし，小波状とする。*2813*は外面ナデ，内面ハケのくの字状口縁の甕。口縁端部は面取りし，５または６個を１単位として向きを変える刻みを施す。*2812*は外面をＬＲ縄文，内面をハケ。口縁部は受口状口縁に近い形状で端部にも縄文を施す。*2822*～*2835*・*2839*～*2841*は小破片で口径が出ないもの。*2816*～*2818*・*2822*・*2824*・*2826*・*2834*は外面に交互刺突文・結合部に刺突を入れる連弧文・平行沈線文の文様を施し，口縁端部を両側から刻む。*2816*・*2822*は棒状器具で突起部にも刻みを入れる。*2823*は外面をＲＬ縄文に平行沈線文２条・連弧文２条・１列に並ぶ竹管文・平行沈線文，内面をＲＬ縄文とそれを２条押しつけたものが見られる。*2827*・*2828*は外面に平行沈線文・山形文，口縁端部に両側から刻みを施すものであるが，描線は異なり，*2827*は細く，*2828*は太い。*2829*は*2823*と同様の文様であるが，描線は太く，連弧文は接合せず短線，竹管文は連弧文の結合部下，口縁端部に両側から刻みなどの相違がある。*2830*・*2831*は外面に平行沈線文・山形文を施す。*2832*は外面に交互刺突文・平行沈線文３条・指でつまみ上げた突起に刺突，口縁端部に縄文，

内面にハケの後に縄文（絡条体圧痕）を施す。*2833* は外面にＲＬ縄文に平行沈線文２条・連弧文１条，内面に平行沈線文２条を施す。*2835* は平行沈線文２条の間に連続刺突文を入れ，その下にＲＬ縄文を施す。*2839* は外面に浅く粗雑な平行沈線１条と２本１単位の短沈線，口縁端部に外側から刻みを入れる。*2841* は外面を摩滅したＬＲ縄文に粗雑な平行沈線文と山形文？，口縁端部を外側から刻む。*2815* はくの字状口縁の甕。調整は内外面板状器具によるナデと見られる。頸部下には焼成後の穿孔がある。

2820 は全体の破片があり，復元できた甕。くの字状口縁だが，口縁端部を面取りし，内側につまみ上げる。調整はＲＬ縄文のみで，胴部上半に焼成後の穿孔がある。*2819* は宇津ノ台式系統[注23]の重菱形文の甕で，口縁端部を欠損する。外面は胴部上半を細い描線の重菱形文，胴部下半をＲＬ縄文にススが厚く付着し不明瞭だが，波状文と連弧文を施す。内面はナデで胴部下半に炭化物が付着する。七尾市矢田遺跡[注24]に類例がある。

2836 ～*2838* ・*2842* ～*2856* は胴部の小破片。*2838* は描線の細い平行沈線文７条・ハケ・ハケと同じ工具による連続刺突文を施す。*2837* ・*2838* ・*2845* は連弧文を施す。*2842* ・*2852* はＬＲ縄文に交互刺突文の崩れたハの字状刺突文・連弧文を施す。*2843* はＲＬ縄文に重菱形文と見られる沈線文を施す。*2844* は甕の頸部から胴部の破片で，頸部に交互刺突文，胴部にＬＲ縄文を施す。*2849* は縦長の山形文と横長の山形文を上下交互に施す。*2846* ・*2847* は重菱形文と見られる沈線文を施す。描線は*2846* が太く，*2847* が細い。*2848* は描線が浅く太い重菱形文を施す。*2850* は壺の口縁部と見られ，縄文（絡条体圧痕）と刻みを施す。内面はハケ。*2851* は浅い描線で平行沈線文・連弧文２条を施す。壺か。*2854* は連弧文４条とその下に櫛歯状刺突を施す。*2855* はＲＬ縄文に重弧文を施す。*2856* は交互刺突文とその下に工字文状の重菱形文を施す。内面はハケ。

2821 は壺の上半部。文様は頸部から胴部上半にかけて太い描線の平行沈線文３条の間に背中合わせの弧線を２段・平行沈線文３条・連弧文３条を施す。調整は外面をＲＬ縄文，内面をケズリ，口縁端部は縄文を内側から刻む。*2853* は描線が浅いがこれと同形と考えられる。

2857 は把手状の突起部に上下から２箇所穿孔したもの。文様は描線の太い沈線で山形文？を施す。県内には類例はないが，形状から注口土器の胴部か。

2858 ・*2859* は底部。*2858* はＬＲ縄文，*2859* はＲＬ縄文を施す。*2858* の底面はミガキ状の光沢がある[注25]。

B　石製品（第315～317図，図版149～152・154）

石製品は石鏃・二次加工剥片・石錘・敲石・砥石・軽石が出土した。

2860 ・*2861* は石鏃である。*2860* は白色のめのう製の有茎石鏃。先端は鋭く残り，茎部は欠損している。*2861* は濃飛流紋岩製のアメリカ式石鏃。左右とも均整のとれた形状で，先端は欠損している。

2862 ～*2864* は二次加工剥片である。*2863* ・*2864* は赤色の流紋岩製の二次加工剥片。近くで出土した２点は接合可能で，それぞれ縁辺の一部に二次的な加工がみられる。*2862* は泥岩製の二次加工剥片。縁辺の一部に二次的な加工がみられる。

2866 は安山岩製の石錘。扁平礫の両側辺に敲打により紐掛け部を作出している。

2867 は花崗斑岩製の敲石。一部欠損しているが，地面と右側辺の一部に敲打痕が残る。

2868 ～*2878* は砥石である。*2869* は凝灰岩製の砥石である。表面は細かな線状痕がみられる。右側面は成形した際の打割痕が残存し，その後整形の研磨が若干加えられているようである。*2873* は砂岩製の砥石。欠損しているが４面の砥面が残存する。表面は中央に研磨によって生じた幅約１㎝の浅い

注23　石川日出志　1990「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学　第３号』北越考古学会
注24　土肥富士夫　1986『矢田遺跡』七尾市教育委員会
注25　天王山系土器については，弥生時代研究会　1990『天王山式期をめぐっての検討会記録集』や石川日出志氏の研究を参考とした。

溝が観察できる。砥面は平滑で中～仕上げ砥と思われる。*2876* は安山岩製の砥石。4 面の砥面が残存し平滑であるが，表裏面に長軸方向に沿って，断面コの字状の荒い線状痕がみられる。*2877* は凝灰岩製の砥石。右側面・裏面に成形した際の打割痕が残存する。砥面は平滑で中～仕上げ砥と思われる。*2878* は凝灰岩製の砥石。よく使い込まれているのは表面のみで，表面の中心は若干窪んでいる。砥面は平滑で細かな線状痕をもつ。中～仕上げ砥と思われる。

2879 ～*2889* は軽石である。表面には擦痕が残るものが多く，砥石としての用途が主だったと思われるが，特に多く出土していることからそのほかの石材の砥石とは分けて記述した。*2880* は表面に擦痕があり，表裏面は回転により円筒状にそれぞれ 1 箇所ずつ窪んでいる。表面の窪みの直径は 5 ㎜強で，窪みの底面中央が突起状にわずかに盛り上がっている。先端に丸みのある竹管状のものや中心に窪みのある工具で形成されたと思われる。裏面は深いところで 1 ㎝強窪んでいる。突起状の盛り上がりはみられない。表面とは直径はあまり変化ないが，先端の形が異なるもので形成された窪みである。同様なものの出土例が石川・富山県などでみられるが，用途は明らかになっていない。*2881* は表面に荒い線状痕がみられ，砥石としての使用が考えられる。*2882* は表面に擦痕がみられる。若干溝状に窪んでおり，砥石としての使用が考えられる。*2884* は表裏面に線状痕がみられ，砥石としての使用が考えられる。*2886* は表面の欠損部分が多いが，擦痕が観察でき，さらに面も形成されている。砥石としての使用が考えられる。*2887* ・*2888* は表面が摩耗しており擦痕は観察できないが，面が形成されており，砥石としての使用が考えられる。*2889* は擦痕が観察でき，さらに面も形成されている。手持ちの砥石としての使用が考えられる。

C　石製玉作関連遺物（第318～347図，図版155～157・160・161・163～165・167・168）

石製玉作関連遺物が出土した建物の周辺を中心に各工程のものがみられる。建物は土壌洗浄で得た細かな遺物が多かったが，包含層では土壌洗浄を行っていないこともあり，荒割・形割工程品など大型の遺物が目立つ。ここでは石材別かつ工程順に述べていく。なお，工程の分類については，第Ⅹ章考察に譲る。

緑色凝灰岩（第318～344図）

荒割工程品（*2890* ～*2938* ・*2965*）

2934 ～*2938* は自然面の残るものが多い。左右天地面を若干整形したものもあるが全体の形が整っておらず，素材とならない剥片と思われる。*2936* は自然面を剥離しようと，地面の左右から剥離しているが，中心部分が残っている。

2890 ～*2928* ・*2965* は角状・板状や柱状に整形したもの。*2890* は天地面と左右側面を同じ厚さになるよう整形し，その後表面から打割を行っている。なお裏面には自然面が残る。*2892* は表面に研磨による整形痕がみられる。*2893* は左右側面を同じ厚さになるよう分割し，表裏面も分割を行い，板状に整えられている。その後地面側の分割を行っており，さらに薄い板状に剥離したものと考えられる。*2894* も板状に整えられており，同様な工程へ進むものと考えられる。*2896* は表裏面を同じ厚さになるよう分割し，その後右側面の分割を縦方向に行い柱状にしている。*2895* も柱状に整えられている。ここからさらに板状に剥離したものと考えられる。*2898* の裏面と*2899* の裏面は接合する。次の工程の素材とするため*2898* を剥離したと考えられる。*2908* は天地面を同じ厚さになるよう分割し，地面からの打撃で形割工程品を製作するための素材を得ていたと考えられる。*2909* は正面に若干の研磨痕が残る。剥離の切り合い部分で山状になっており，これを平坦にするための研磨と思われる。*2910* は天地面を同じ厚さになるよう分割し，表面側から天面に打撃を加えて分割を行っている。*2911* は

表裏面を同じ厚さになるよう分割し，さらに天地面・左右側面に調整剥離を行い，板状に整えている。*2916* は地面に自然面，天面に節理面を持ち，ほぼ同じ厚さで平坦になっている。側面は折り取りにより分割される。表面・右側面は若干の研磨により整形されている。*2930* は裏面に自然面が残る。地面はわずかな面を持ち，研磨を行っている。その後右側面から剥離を行い，形割工程品を製作するための素材を得ている。*2907* の右側面と *2906* の右側面は接合する。*2906* ・*2907* は天地面を平たくなるよう整え，表裏面も同様に整えた後，天面からの打撃で分割している。それぞれ分割後の加工はみられない。これらが出土したＢ４地区は大型の管玉形割工程品が多く，*2906* ・*2907* はここから分割は行わず，調整剥離のみで形割品を製作した可能性がある。その場合は*2906* ・*2907* が形割工程品となる。*2917* は板状の剥片を分割した際の残核と考えられる。*2922* は硬質で濃緑色，表裏面・左右側面が同じ厚さになるよう整形され，表面から天面を分割している。*2921* は淡色だが硬質の石材。斑状や縞状の石の紋様が観察できる。天面・左側面を平坦に整えている。*2912* ～*2914* ・*2924* は板状に整形したもの。形や厚さから，これを分割して形割工程品を製作していたと考えられる。*2925* の表面左側と *2926* の裏面，*2926* の右側面と *2927* の表面右側は接合する。これはもともと板状に整形されたものであるが，*2927* を分割することで厚さを小さくしている。その後*2925* の厚さを整形するために *2926* が分割されたと考えられる。*2925* は先に述べた*2924* などと同じ工程と思われる。

管玉形割工程品（*2939* ～*2964* ・*2966* ～*3012*）

管玉の完成品の法量に近い，四角柱状の未成品。場合によっては側面調整を施すこともある。*2943* は表裏面を同じ厚さになるよう分割し，その後天地面の厚さの違いも地面側の剥離により整えられている。さらに左右側面も調整剥離で面を整えている。*2949* の右側面と *2950* の裏面は接合し，天面から地面にかけて分割を行っている様子が確認できる。そしてそこからさらに*2949* は４箇所の長辺，*2950* は表面と天面に調整剥離を施している。*2951* の天地面は荒割工程の際の分割面である。*2951* の半分ほどの長さしかない*2953* は天地面を形割工程時に分割している。長さの調節が行われたようである。*2958* の裏面と *2959* の裏面は接合し，側面から分割を行っている様子が確認できる。*2958* の裏面には明瞭な打点を持つ辺の対辺にもわずかな打点がみられる。両極打撃で分割した様子が確認できる[注26]。*2959* は分割後左側面に調整剥離を施している。*2966* の右側面と *2965* の裏面は接合する。*2965* は荒割工程品であるが，*2966* と接合したためここに掲載した。*2966* は短辺の天面側から打撃を加え分割を行っている。*2974* は右側面に自然面を残す。*2989* は裏面以外に調整剥離を加えている。石材は硬質，色調は淡緑色で一部緑の濃くなる部分がある。Ｂ５地区ＳＩ11出土の石核*1425* に類似しており，これと同一の母岩の可能性がある。

2947 ～*2968* が出土したＢ４地区の包含層資料では同石質でほぼ同規格のものがまとまって出土している。出土地点ではＸ257Ｙ213付近に集中しており，この周辺での玉作りが考えられる。検出はできなかったが，建物や廃棄土坑などがあった可能性はある。形割工程品の形状から中～太型の管玉を中心に製作していたと思われるが，形割工程以降へ進んだ中～太型管玉の未成品はごくわずかしか出土しておらず，どのような規格の完成品を目指したものなのかは不明である。

2972 は天面から表面・右側面・裏面の３面，地面からは左側面を施溝分割している。Ｂ３地区で出土した。当遺跡の緑色凝灰岩では施溝分割痕のある未成品はこの１点のみである。

管玉研磨工程品（*3013* ～*3028*）

形割工程品に若干の研磨を施したものから，さらに進んで，多角柱状に研磨を施したものまでがある。*3024* ・*3025* のように四角柱状に研磨されているものもある。

注26　分割方法については，第Ⅵ章３管玉製作工具と分割技法・二次加工方法の推定分析において，実験を行っている。

管玉穿孔工程品（*3029* ～*3036*）

3029 ・*3031* は両側穿孔。*3032* は四角柱状に研磨したものに穿孔を行っている。*3036* は太型の管玉の未成品破片である。

管玉完成品（*3037* ・*3038*）

3037 は破片。*3038* は孔内壁中央付近が若干盛り上がっており，両側穿孔である。

鉄石英（第344・345図）

荒割工程品（*3039* ～*3043*）

3040 は天面に礫面が残存している。*3041* は打割で厚さ34.5㎜程に整えられている。左側面・裏面・地面は礫面で，原石が円礫であったことがいえる。*3042* ・*3043* はそれぞれ打割で厚さ20.2㎜・17.9㎜の板状に整えられている。*3039* も板状で，形割工程品を作り出す素材になると思われる。

管玉形割工程品（*3044* ～*3048*）

鉄石英の管玉未成品を多く出土したＢ５地区ＳＩ10の周辺から出土した。分割や調整により四角柱状になるように整えている。大きさは長さ14.7～19.48㎜，厚さ6.4～9.71㎜に収まる。

石英石核（第345図，*3049* ・*3050*）

3049 ・*3050* は石英の円礫を打割したもの。*3049* は火を受けたためか黒くなっている。

ひすい石核（第346図，*3051* ・*3054* ～*3058*）

3051 ・*3056* は礫面が残っており，円礫を分割したもの。*3056* は分割後左側面に研磨を行っている。*3057* は打割により厚さ20.2㎜程，*3054* は同じく厚さ12.5㎜に整えられている。*3057* の表面には節理面が残る。*3055* は打割により分割を行ったもの。

ひすい剥片（第346図，*3052* ・*3053*）

3052 ・*3053* は剥片。当遺跡出土のひすい製品がこれらよりも大きいため，玉の素材剥片とはならないと思われる。

蛋白石石核（第346図，*3058*）

3058 は色調は淡青色で光を通し，ガラス質で分割面は光沢をもつ。打割により加工される。当遺跡と比較すると新しい時期になるが，加賀市片山津玉造遺跡では蛋白石製の勾玉未成品・管玉未成品の出土が報告されている[注27]。当遺跡でも同様にこの石材で玉を作っていたのだろうか。蛋白石はほかにＢ５地区ＳＩ７でも小剥片が出土した。なお加工の際に生じる多くの細かい剥片は土壌洗浄でも見つからなかった。

勾玉未成品（第347図，*3059* ～*3067*）

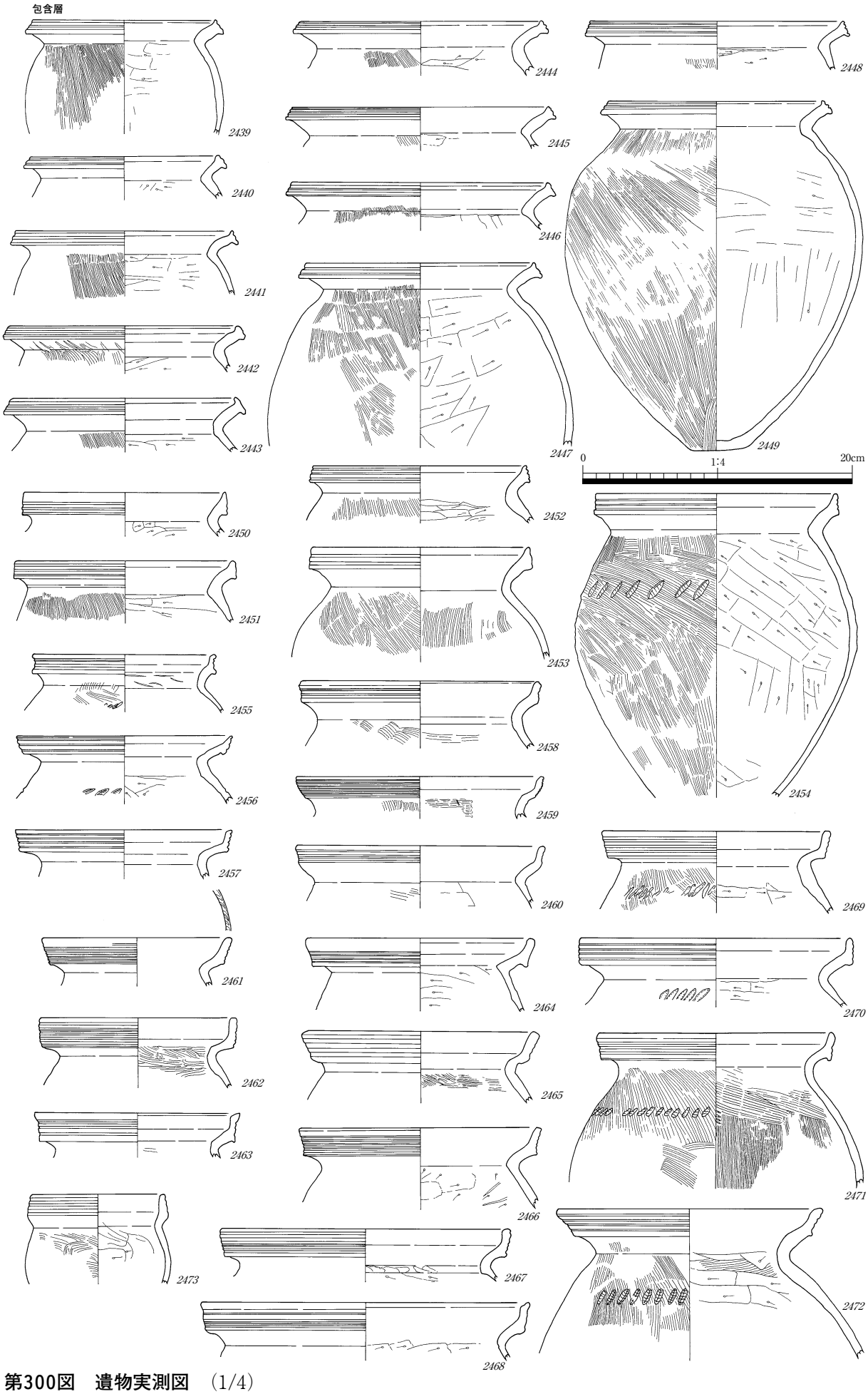
3059 は灰色がかった緑色で，石材不明。半円形になるように研磨を行っているが，円弧部分が凹凸しており，整形できていない。*3060* は若干光を通す濃緑色で，石材不明。研磨によって半円形に整形される。さらに仕上げに近い光沢をもつ研磨を施している。*3061* ～*3064* は石材不明であるが，４点とも灰色をした同石材である。研磨により半円形に整形されている。

3064 の裏面には回転によって窪みが付けられている。半円形の直縁部分に抉りを入れたものは *3065* ～*3067* の３点出土した。*3066* ・*3067* はひすい，*3065* は白灰色で部分的に黒くなるが，石材は不明である。

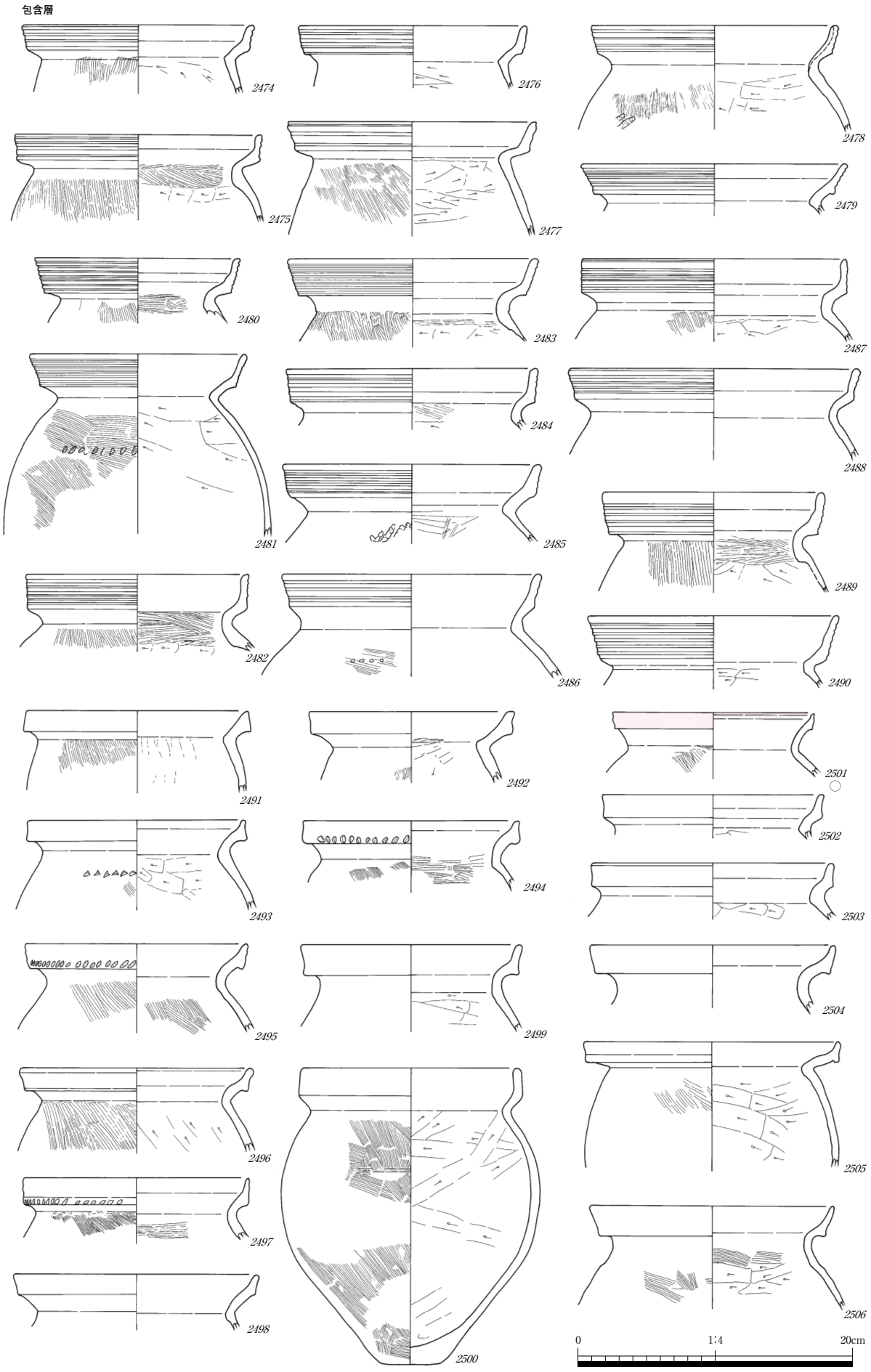
勾玉完成品（第347図，*3068*）

3068 はひすい製。穿孔方向は片側である。光沢をもつように研磨し，仕上げられている。

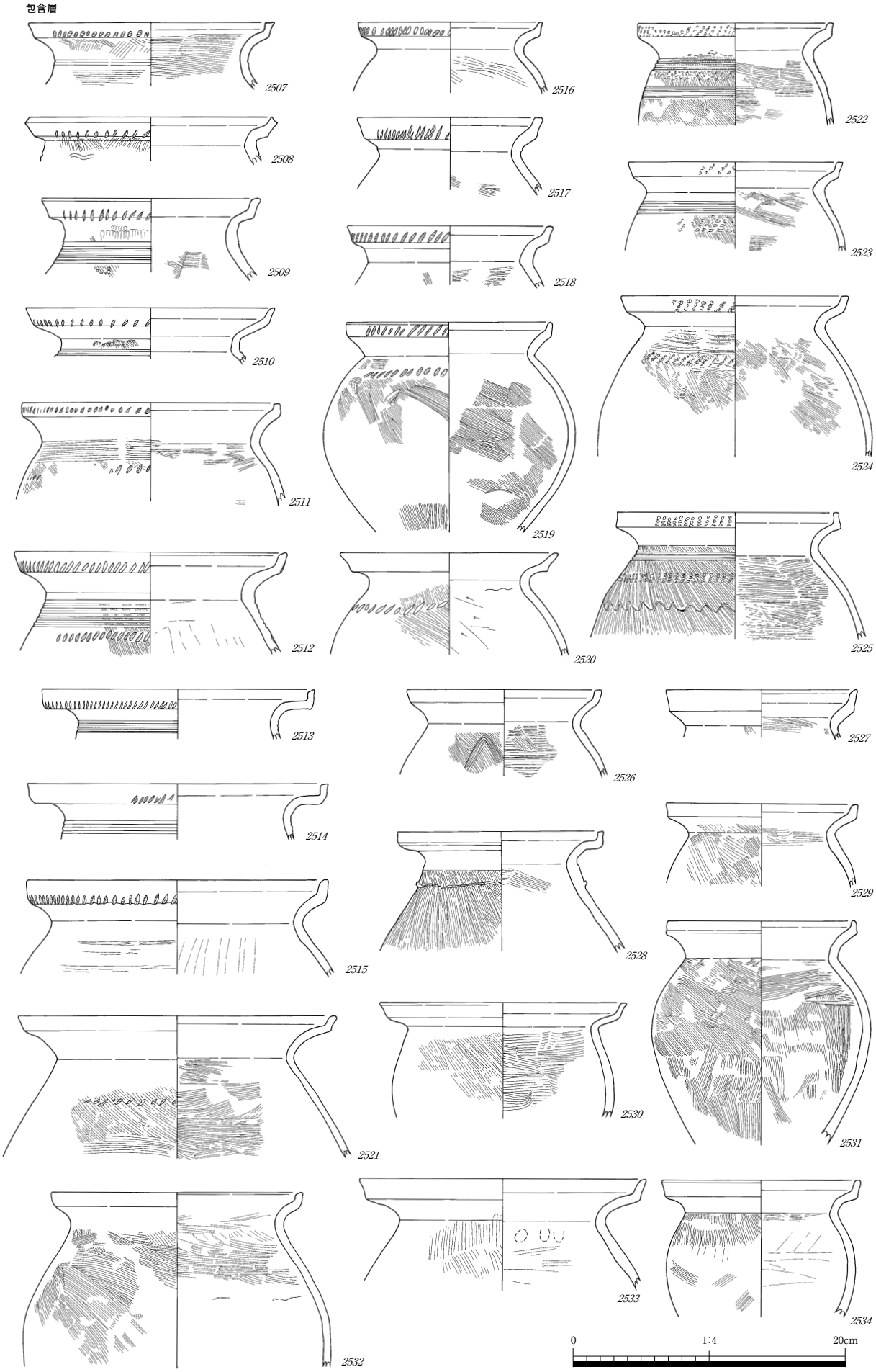
注27　加賀市教育委員会　1963年『加賀片山津玉造遺跡の研究』



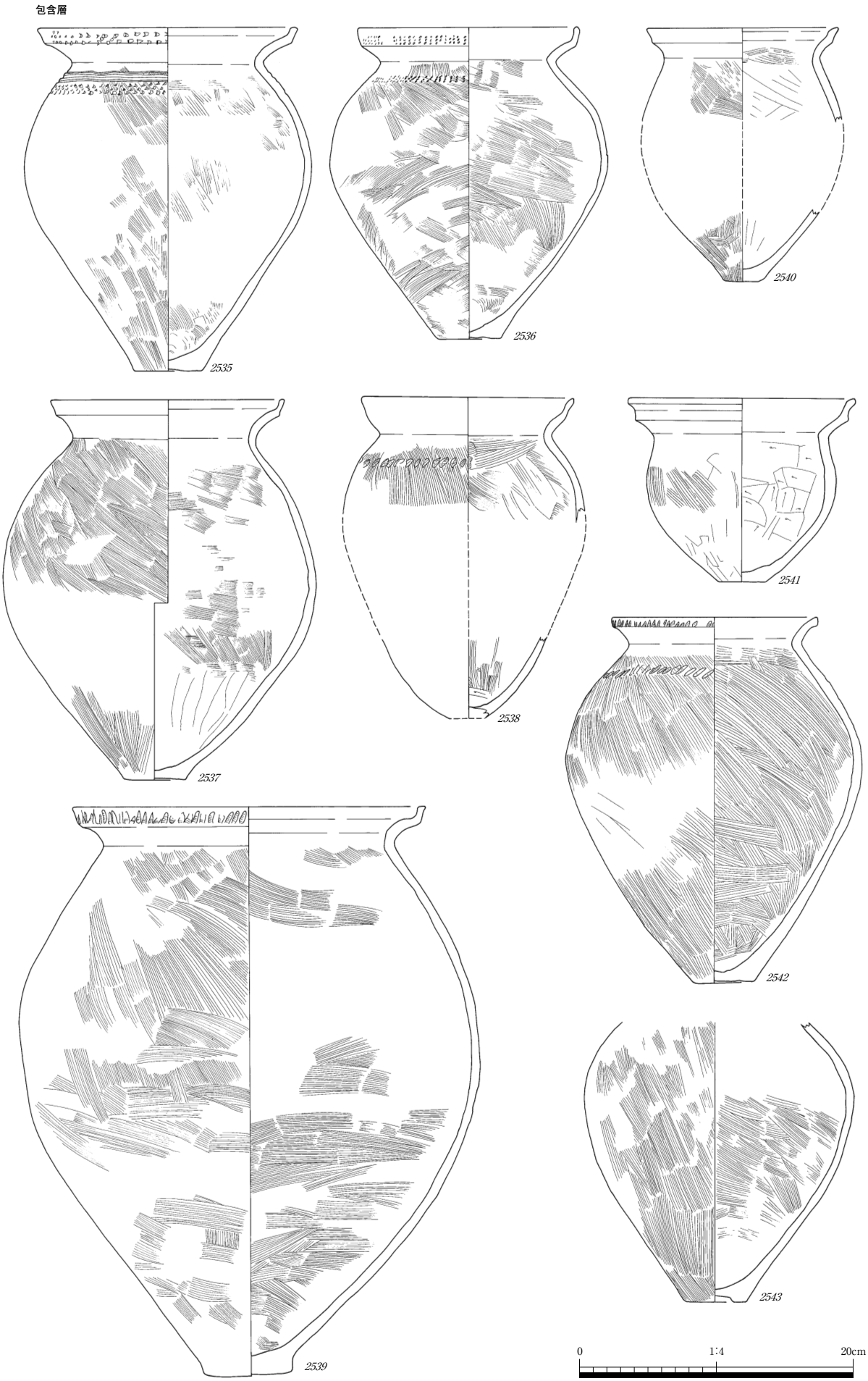
第300図　遺物実測図　(1/4)
B地区　包含層



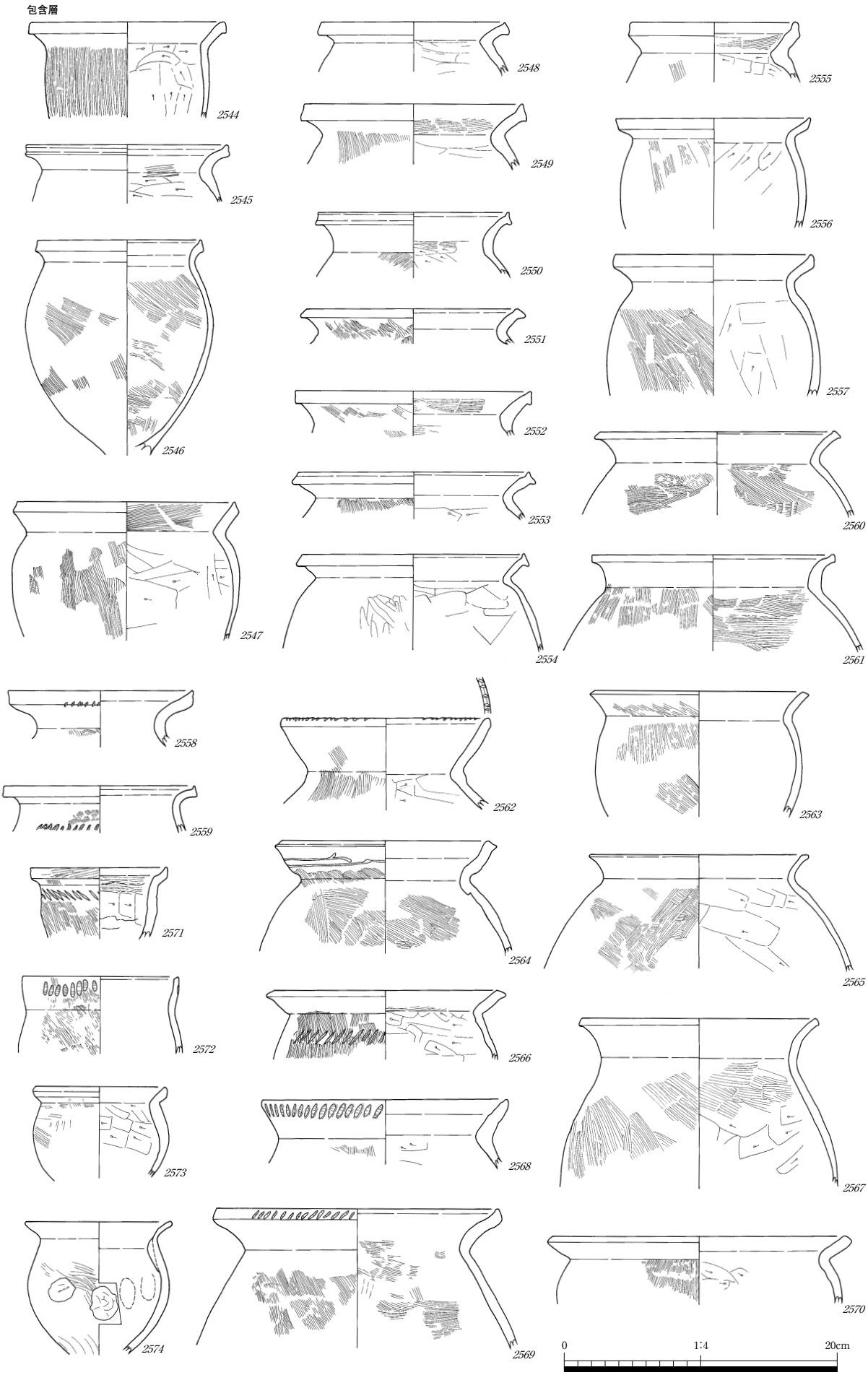
第301図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ地区　包含層



第302図　遺物実測図　(1/4)
B地区　包含層

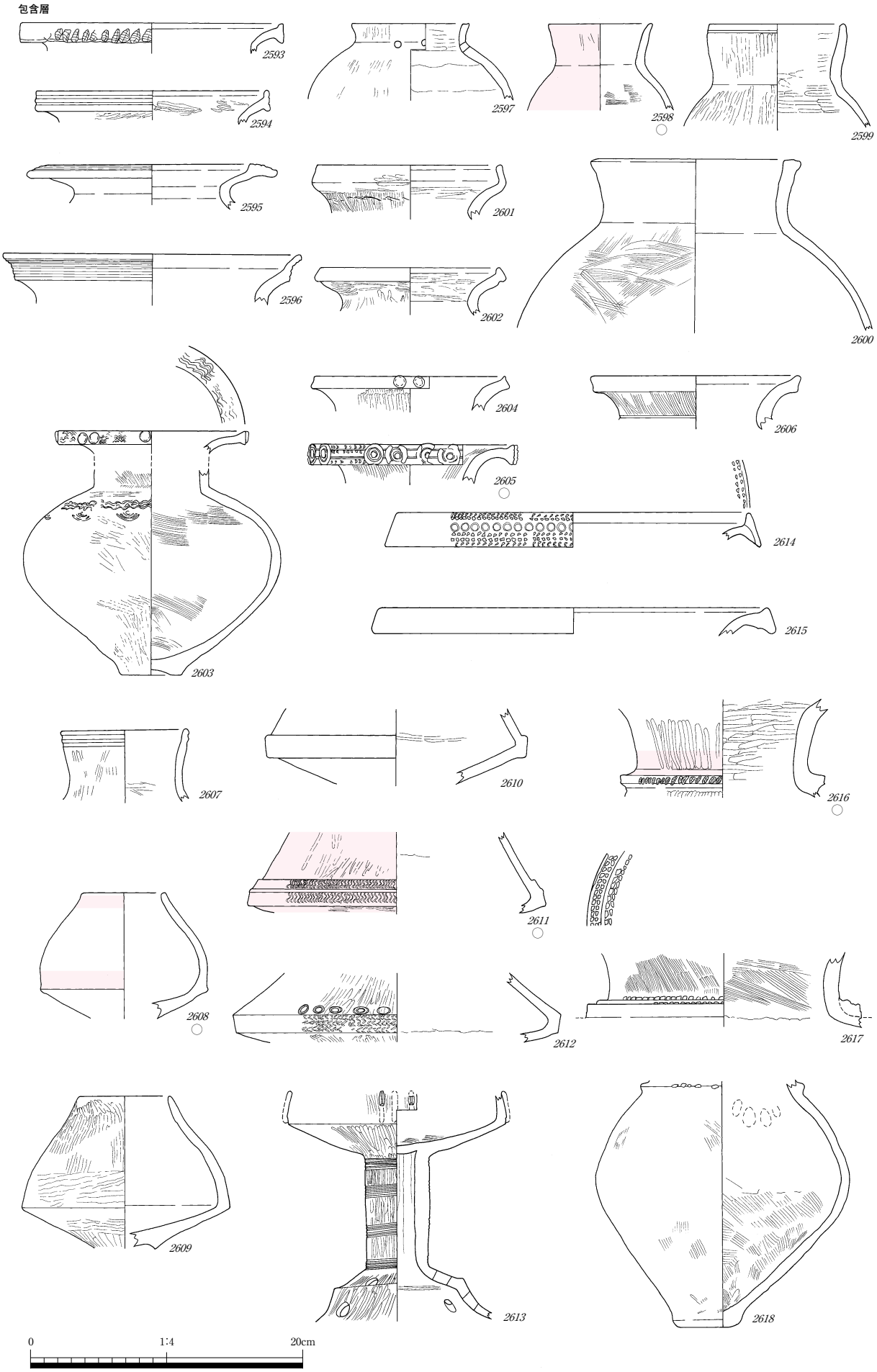


第303図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ地区　包含層

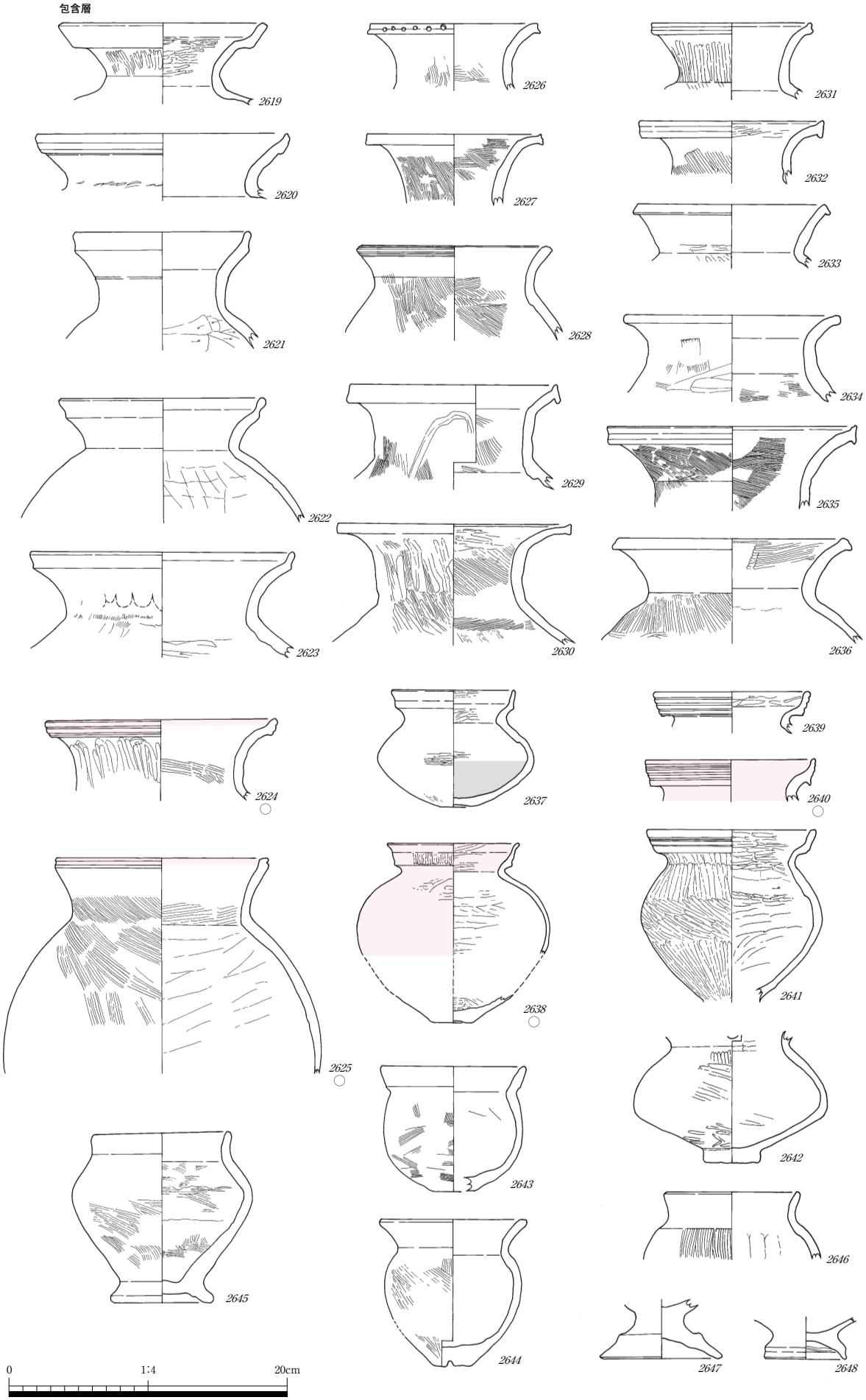


第304図　遺物実測図　(1/4)
B地区　包含層

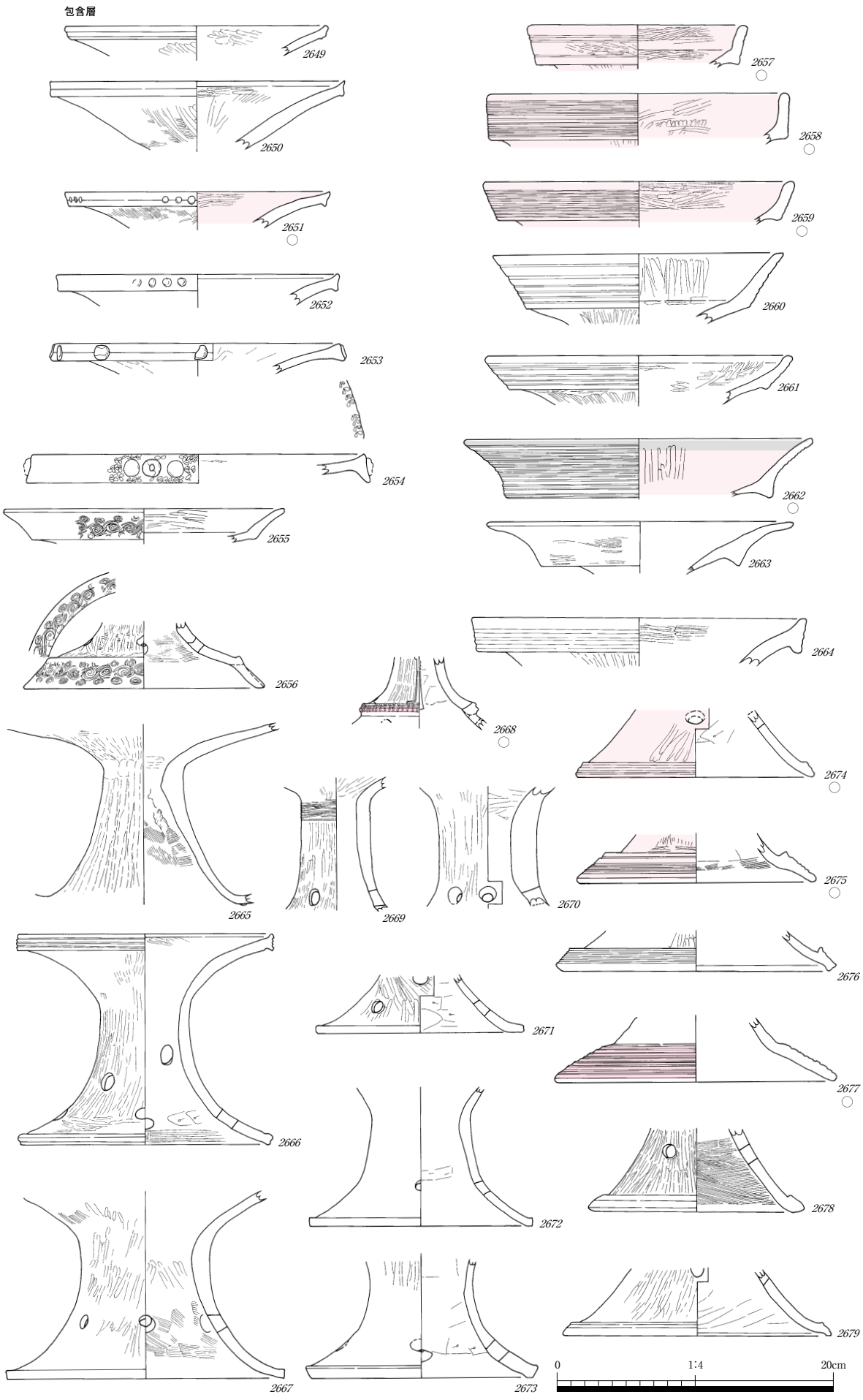
第305図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ地区　包含層



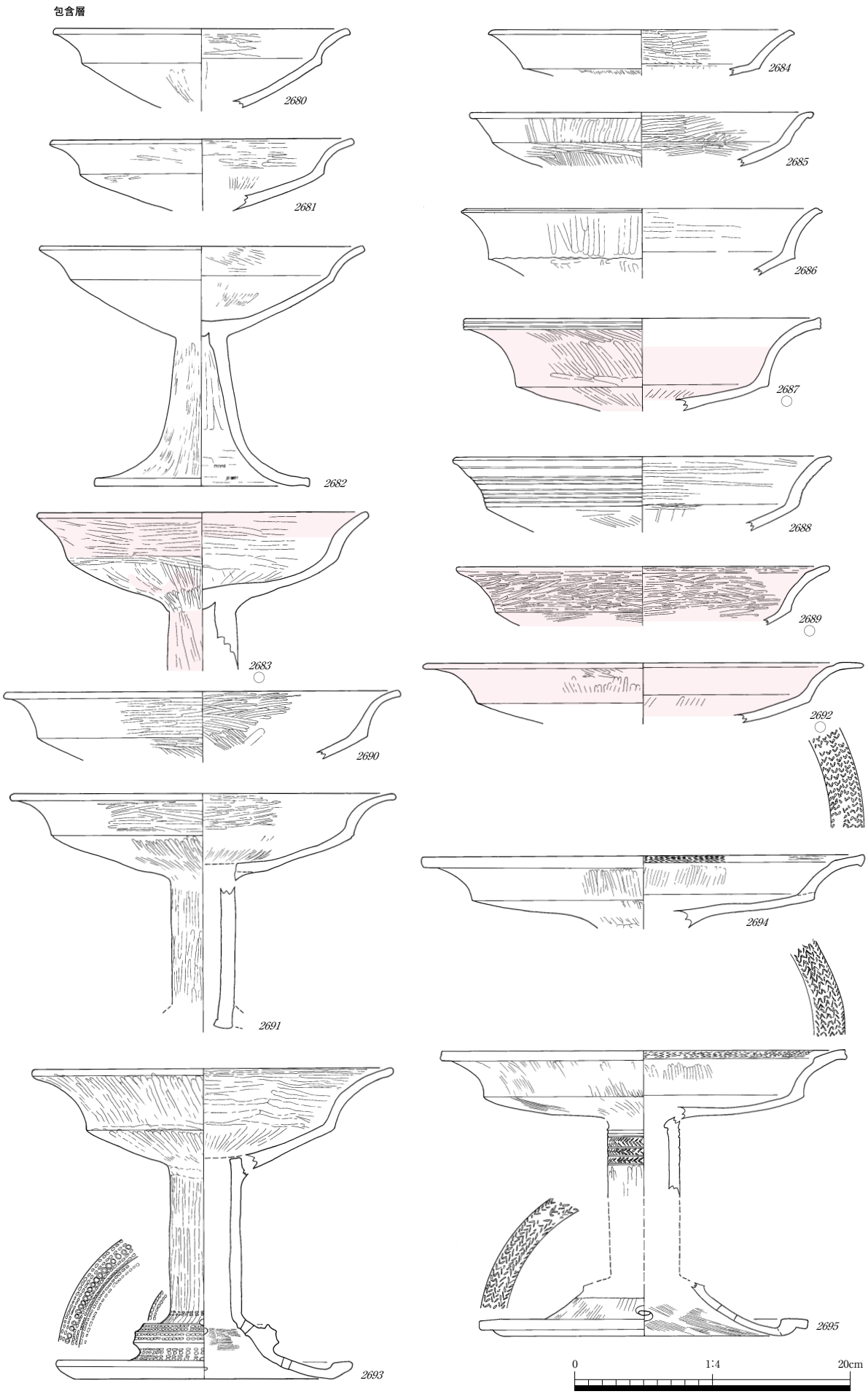
第306図　遺物実測図　(1/4)
B地区　包含層



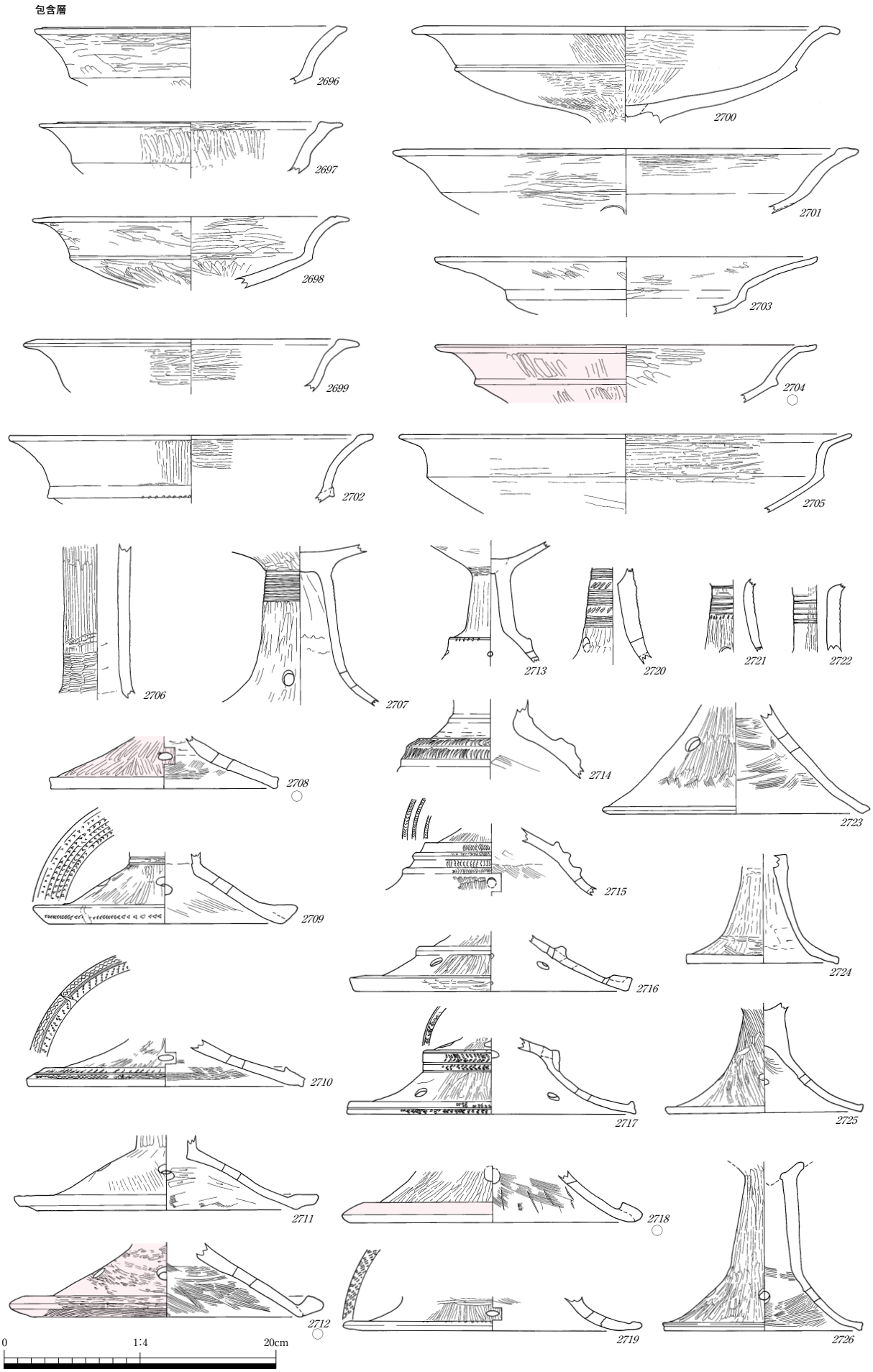
第307図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ地区　包含層



第308図　遺物実測図　(1/4)
B地区　包含層



第309図　遺物実測図　(1/4)
B地区　包含層



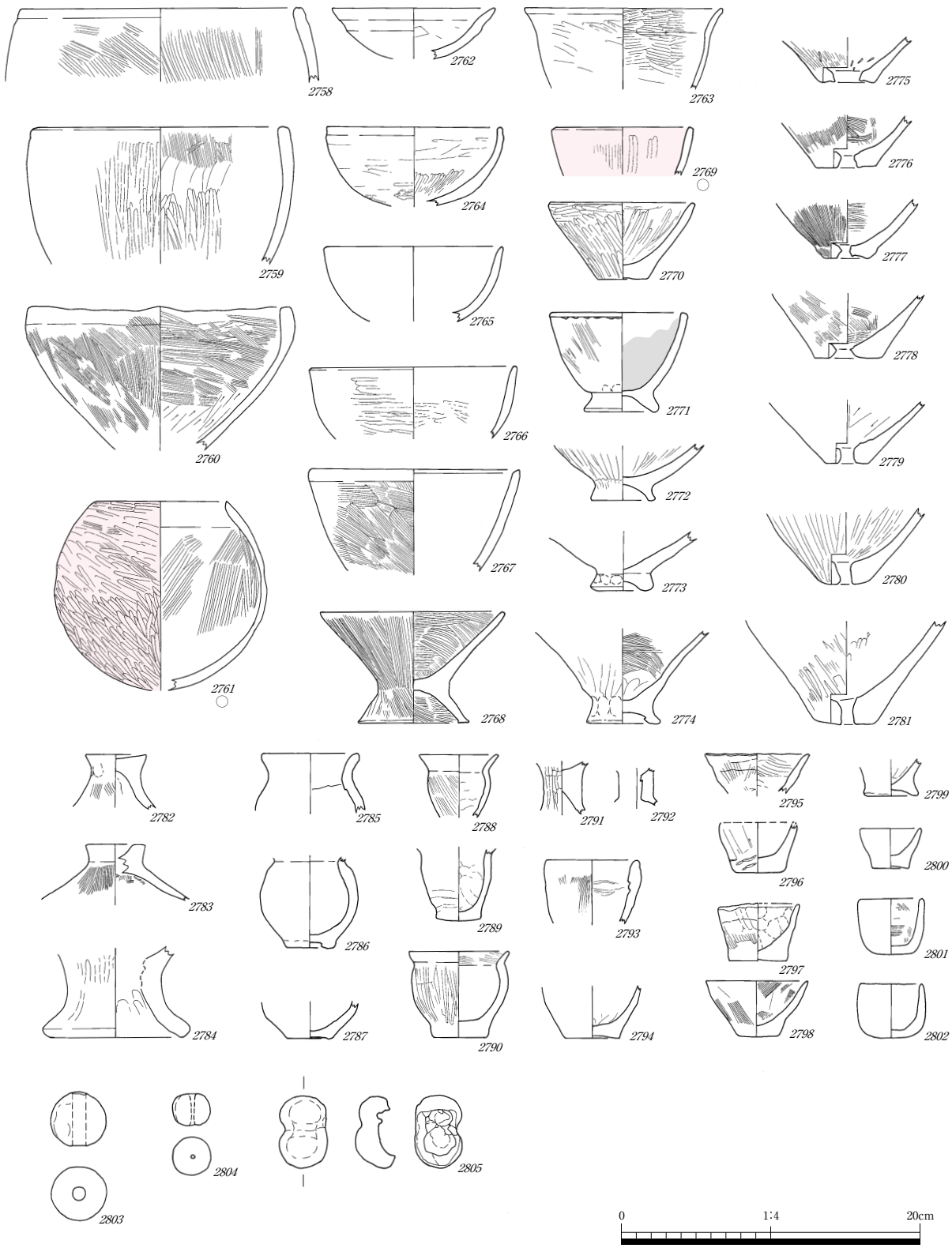
第310図　遺物実測図　(1/4)

B地区　包含層

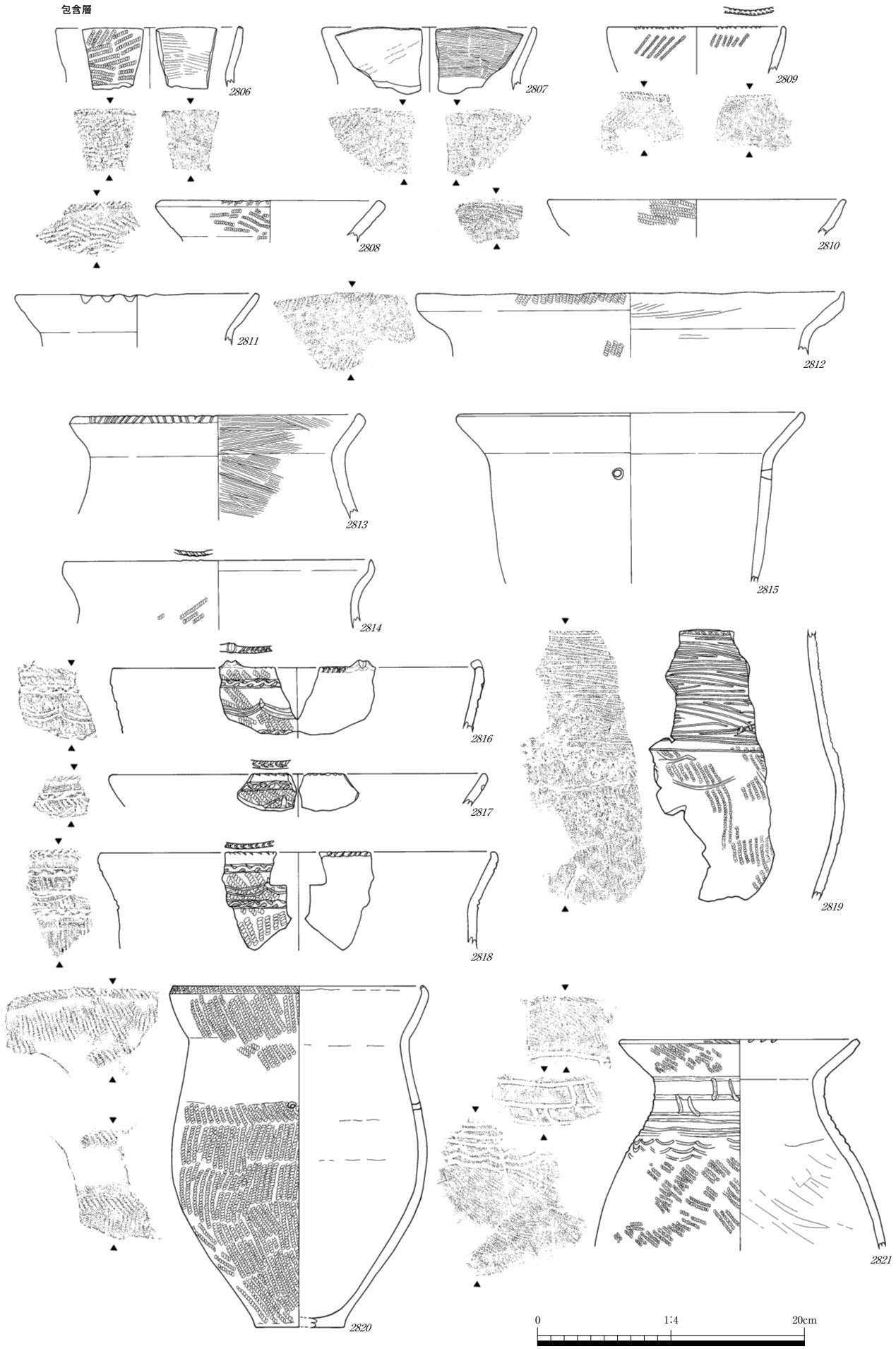
包含層

第311図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ地区　包含層

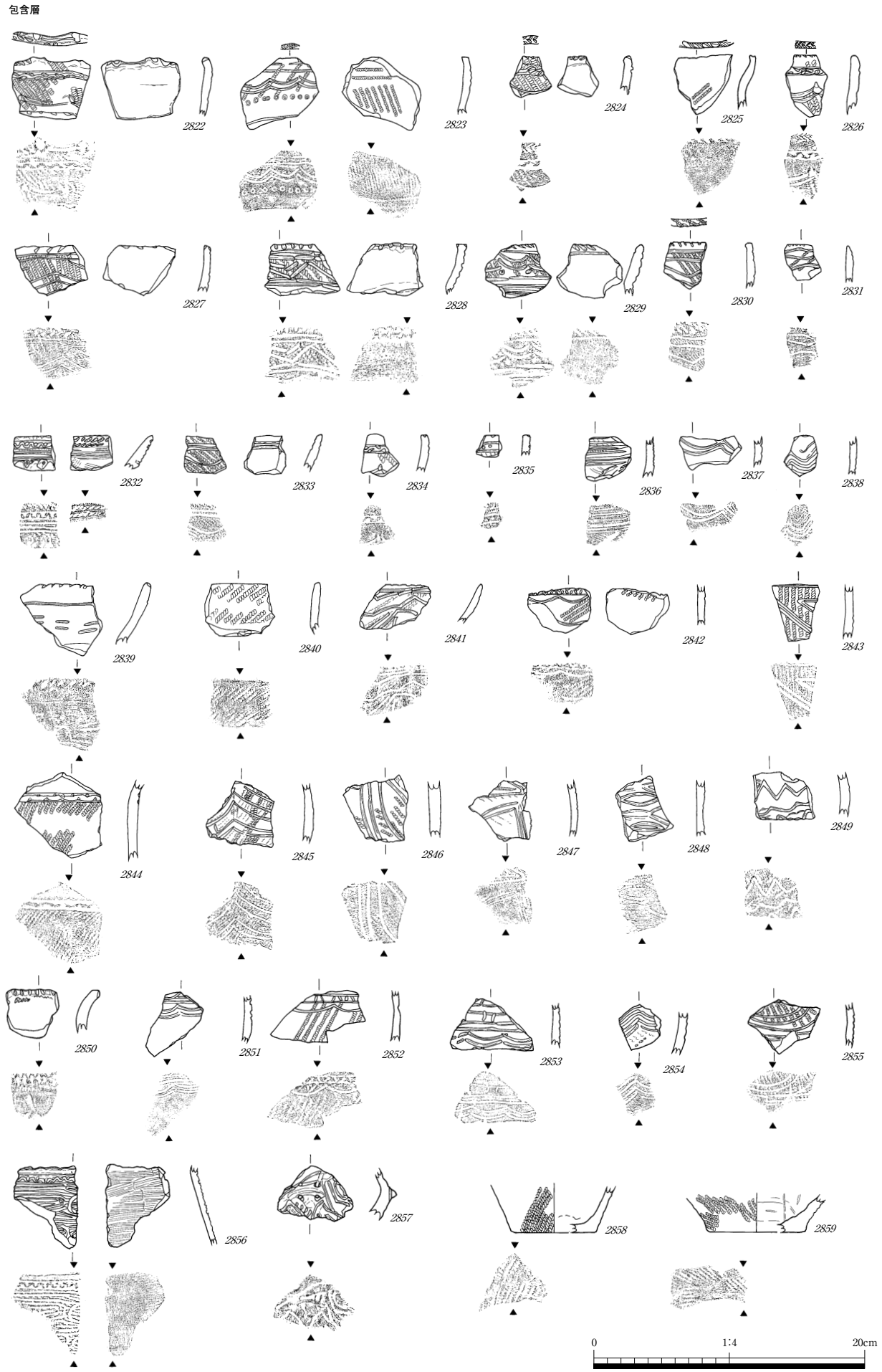
包含層



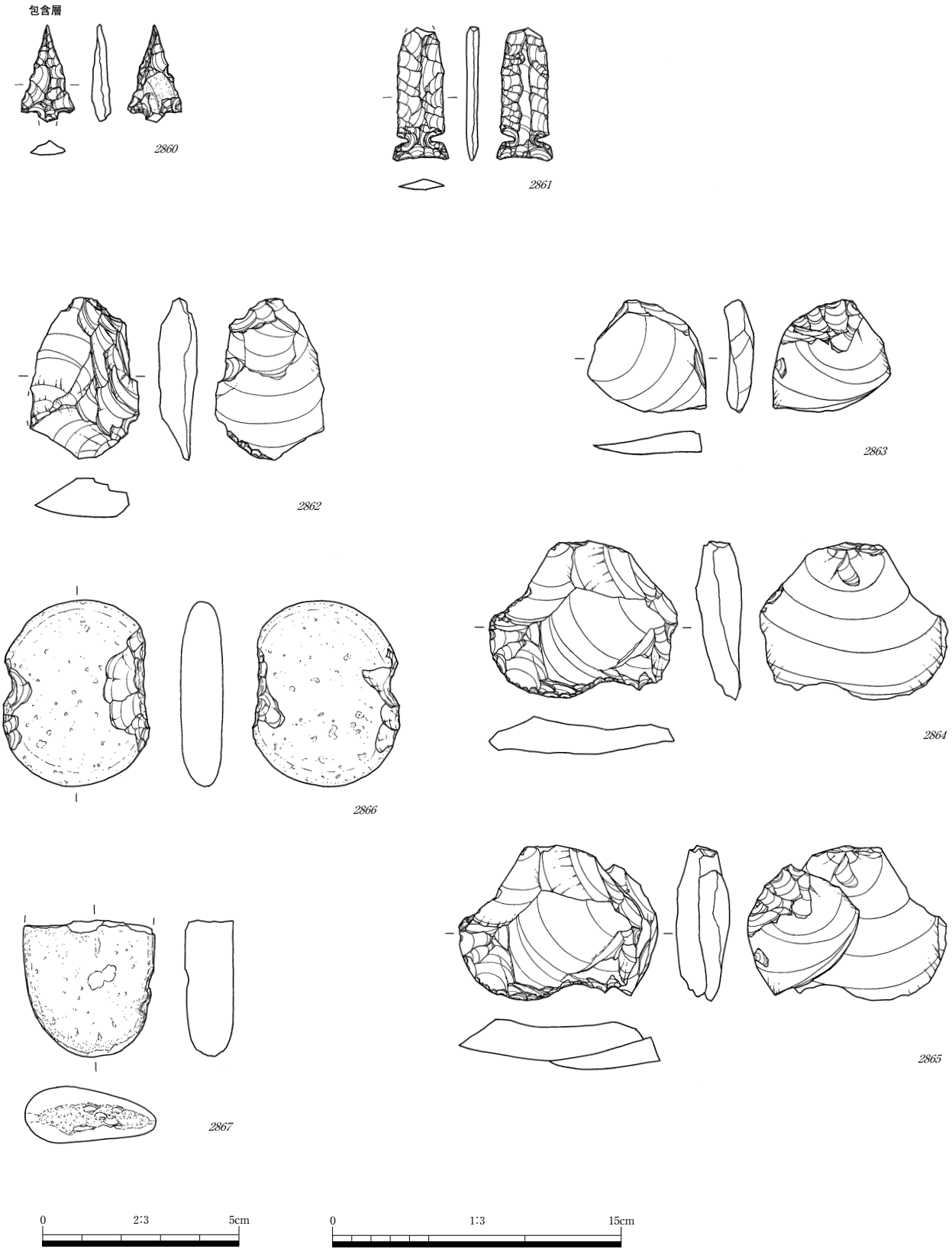
第312図　遺物実測図　(1/4)
B地区　包含層



第313図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ地区　包含層

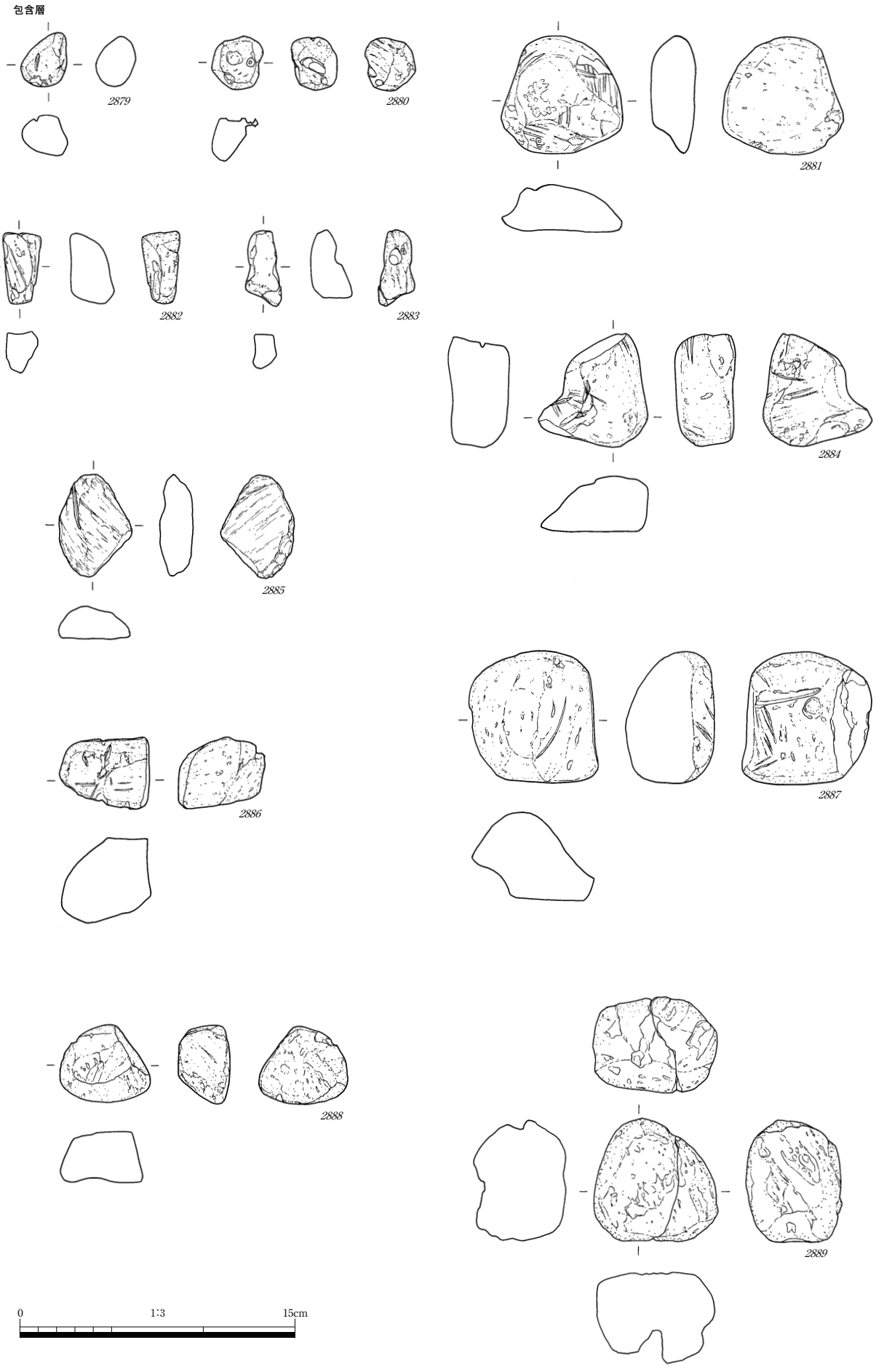


第314図　遺物実測図　(1/4)
B地区　包含層

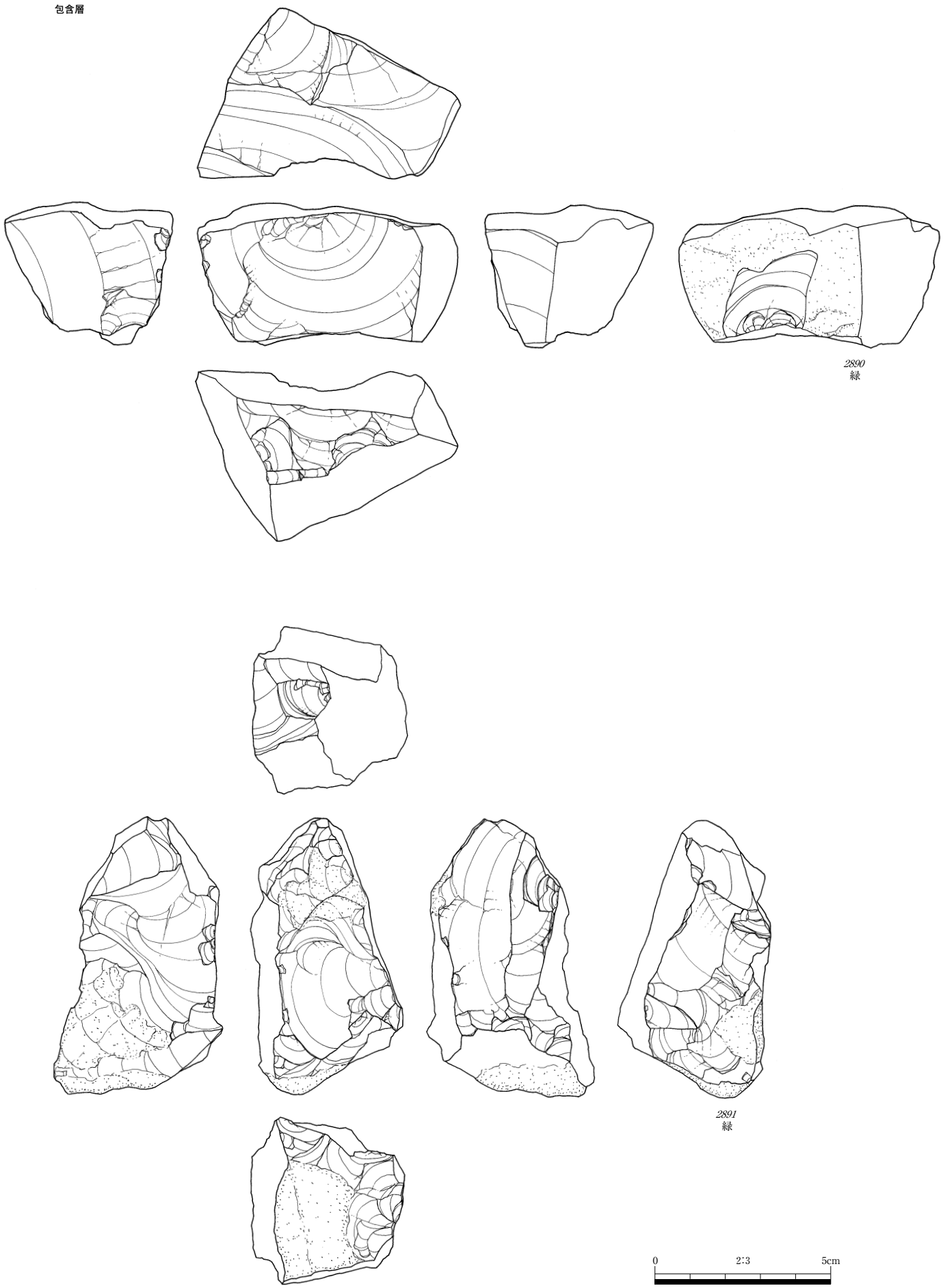


第315図　遺物実測図　（*2860～2865*　2/3，*2866・2867*　1/3）
B地区　包含層

第316図　遺物実測図　(1/3)
B地区　包含層

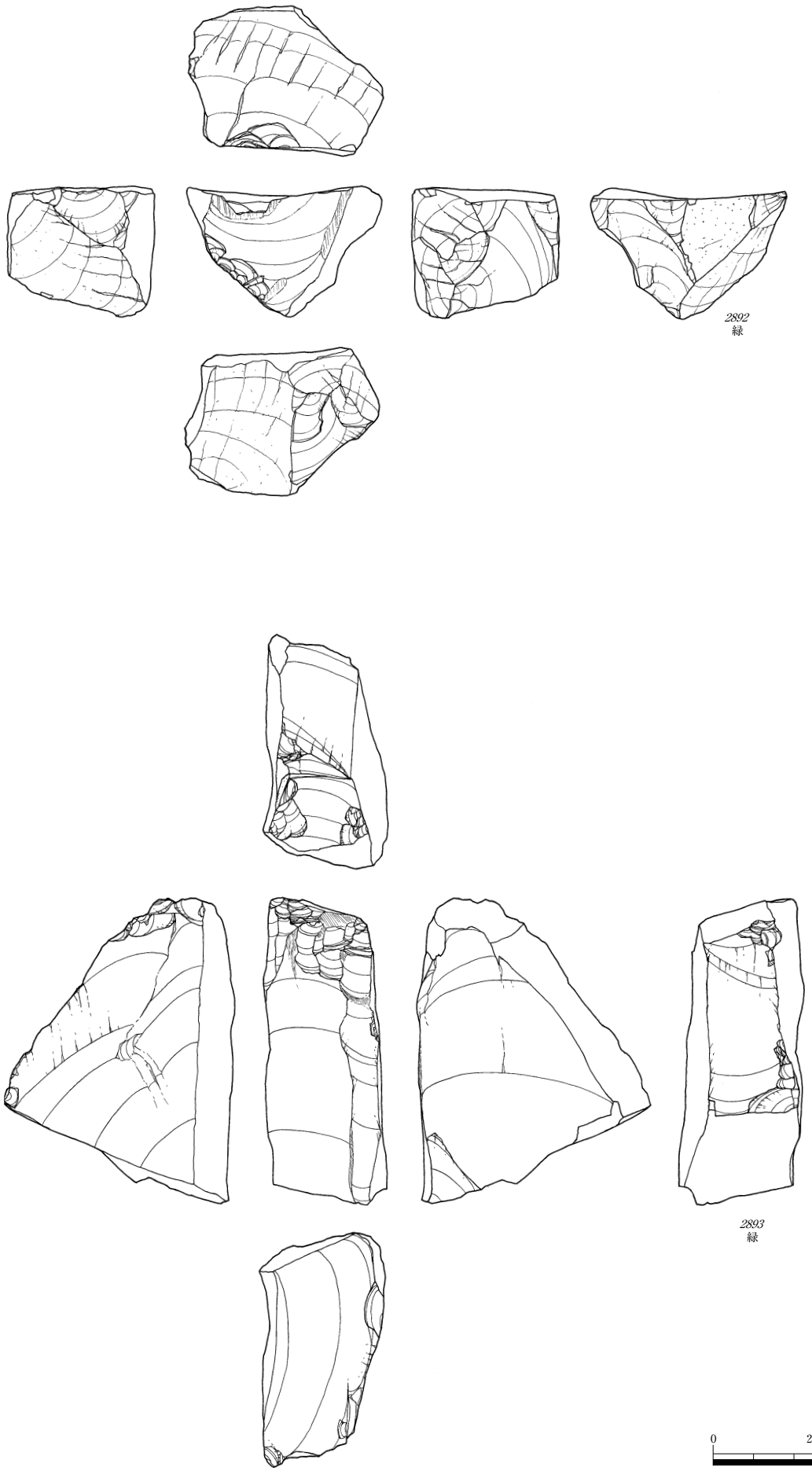


第317図　遺物実測図　(1/3)
Ｂ地区　包含層



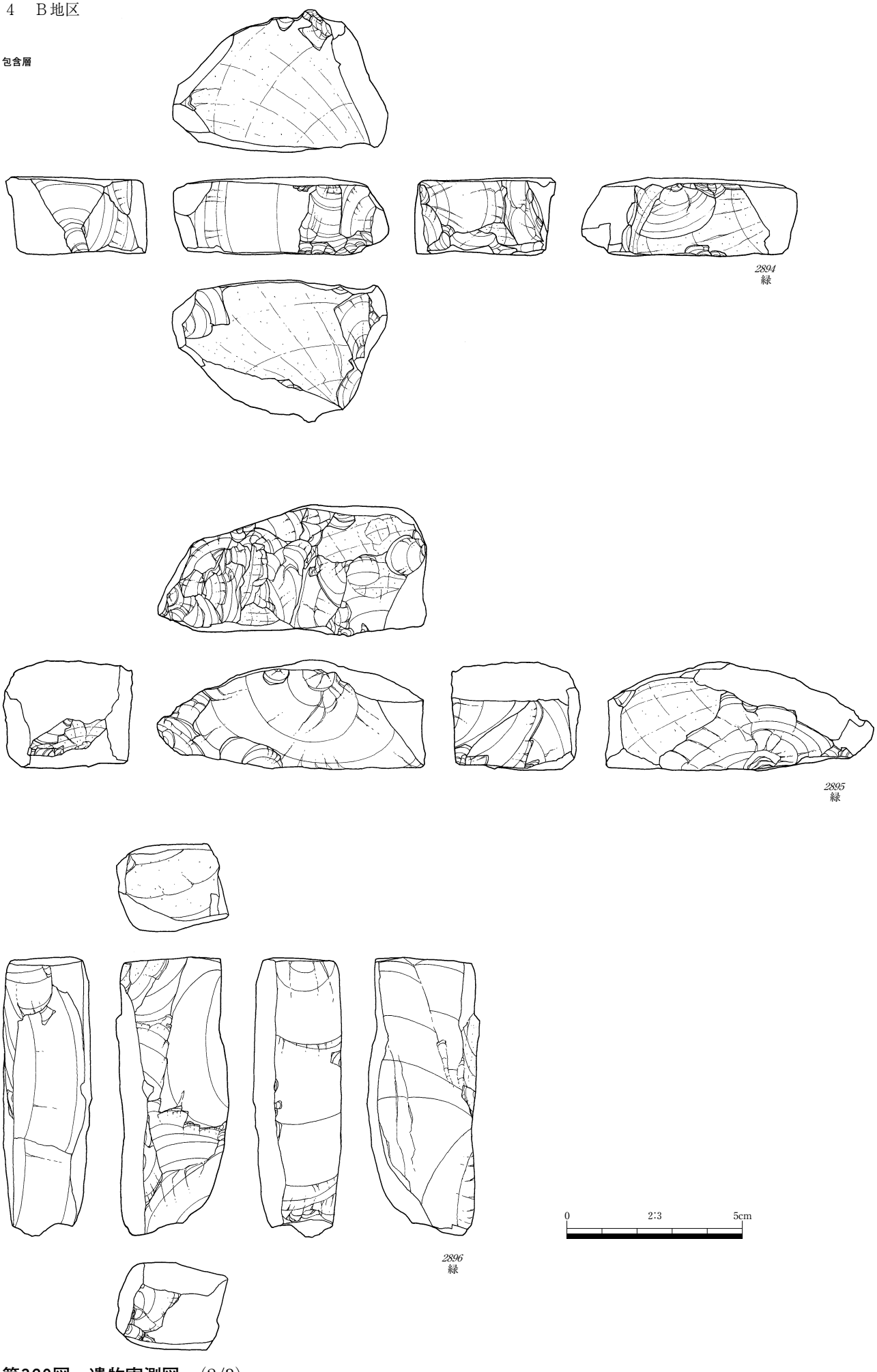
第318図　遺構実測図　(2/3)
B地区　包含層

包含層

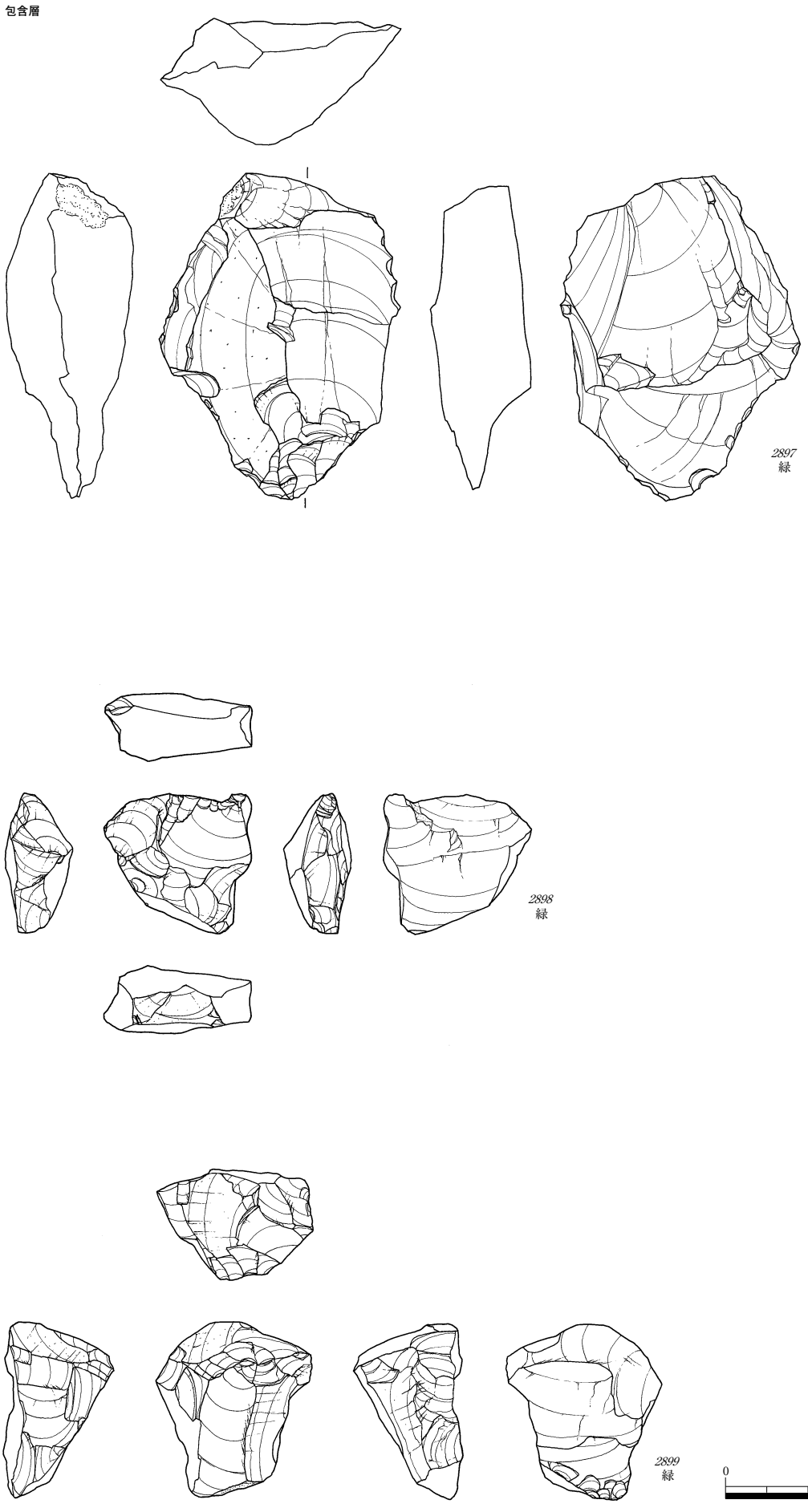


第319図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ地区　包含層

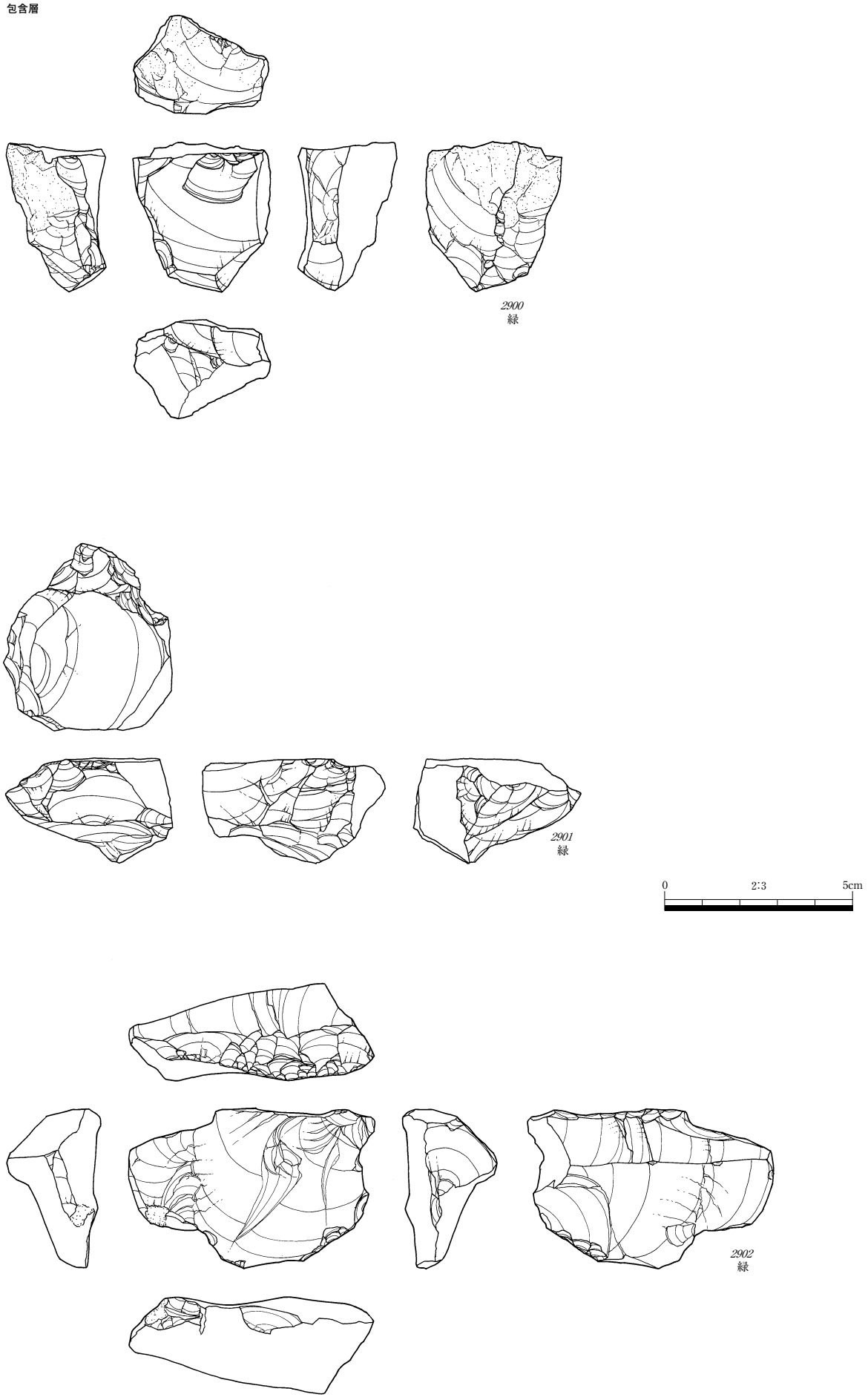
包含層



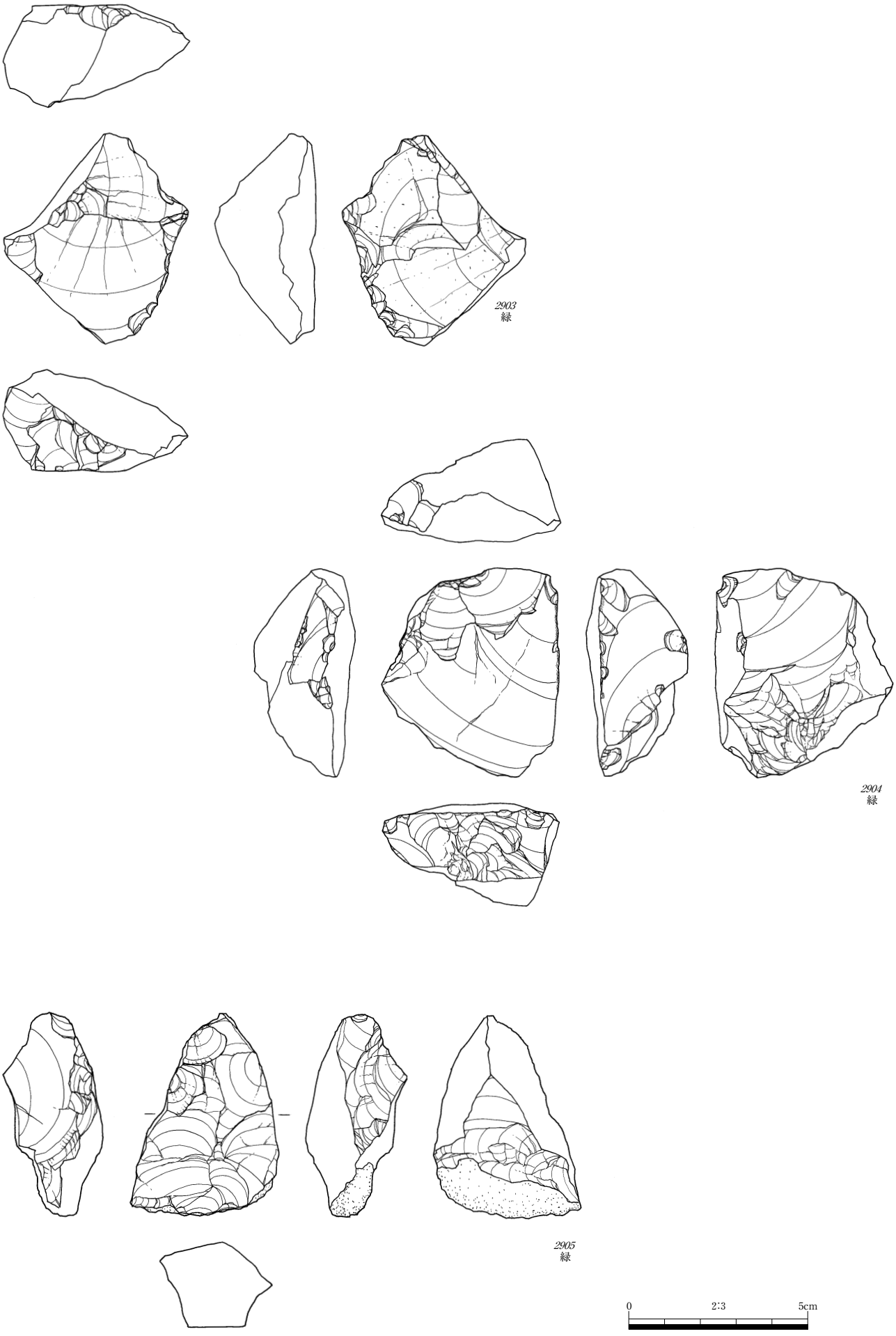
第320図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層



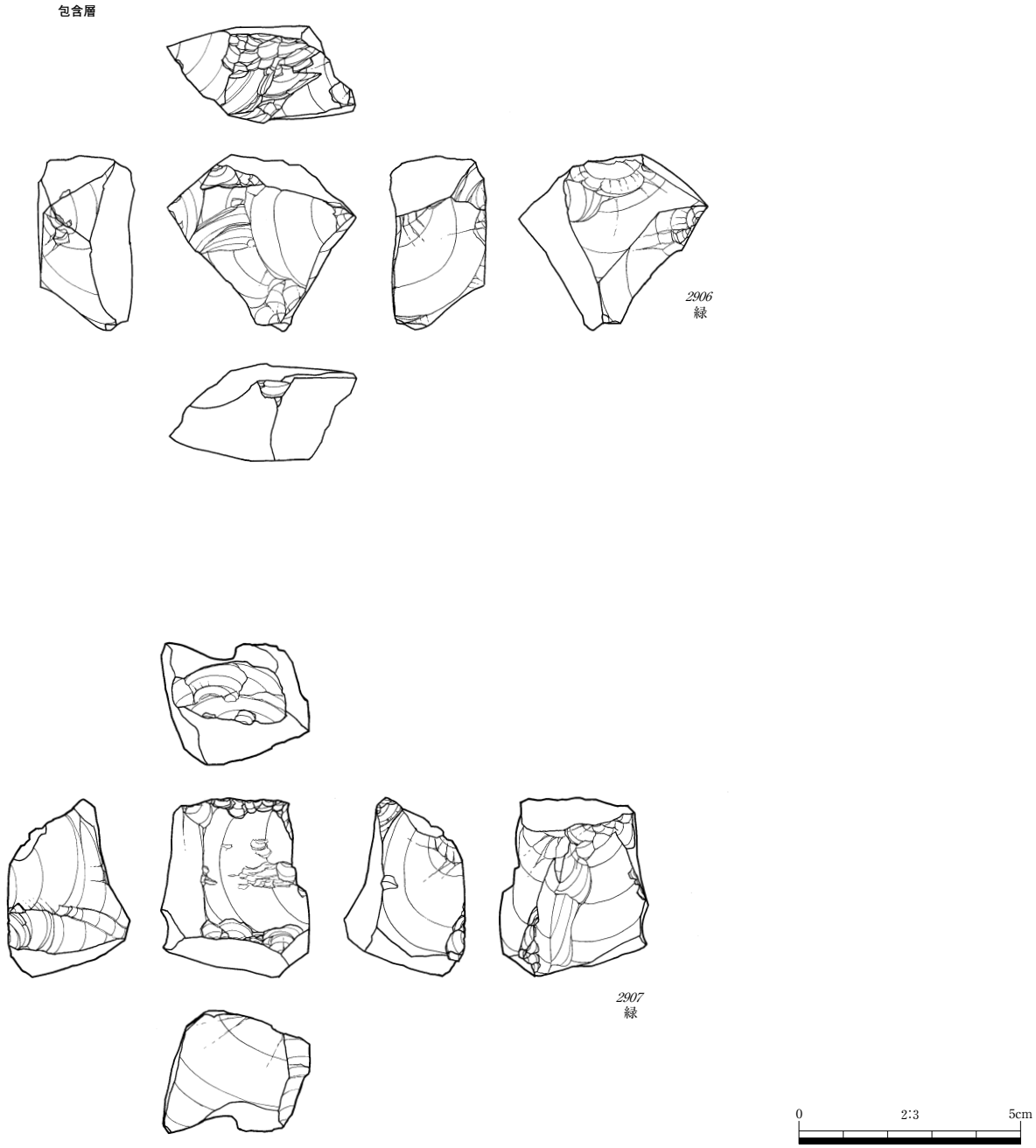
第321図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ地区　包含層



第322図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

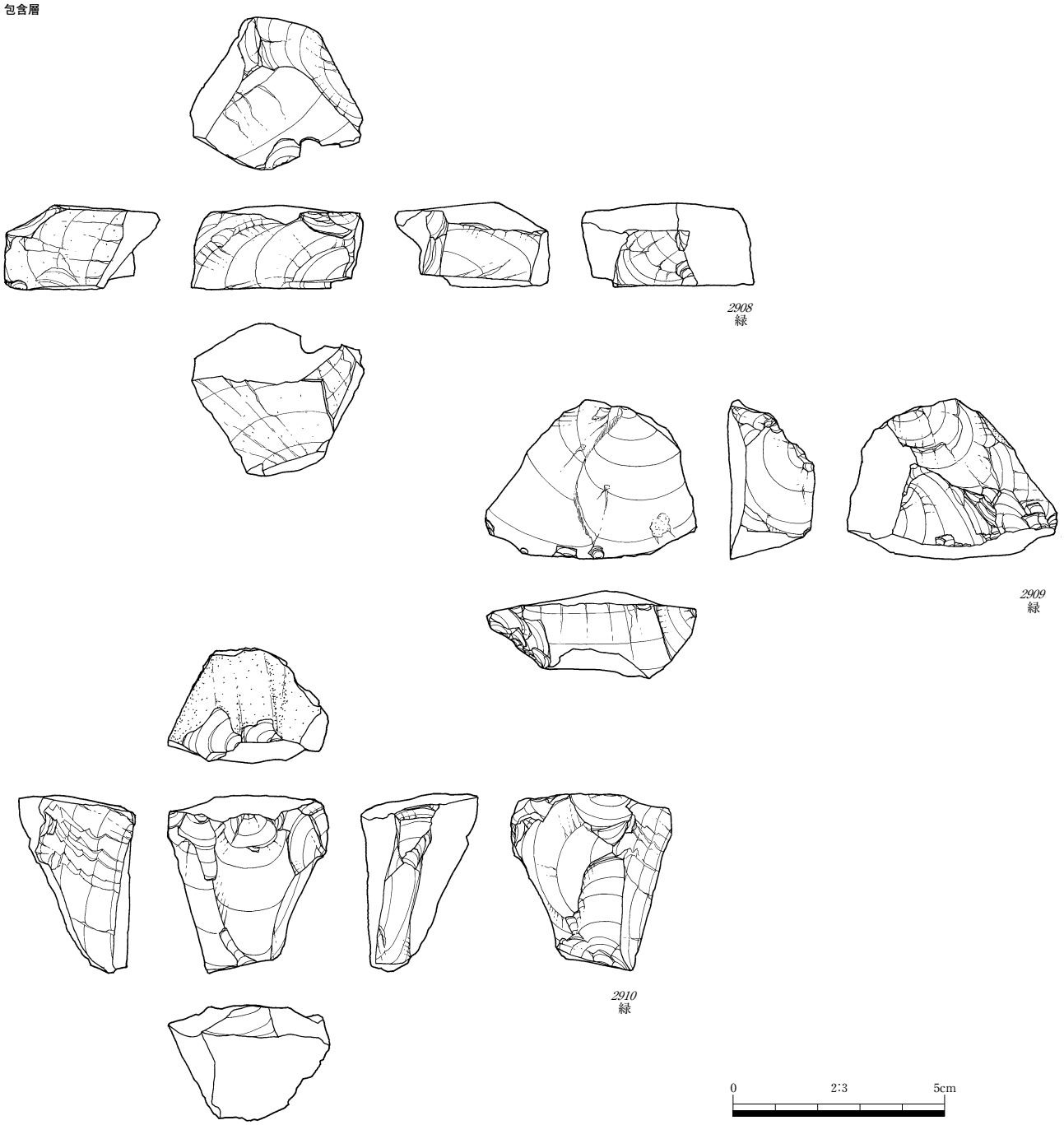


第323図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層



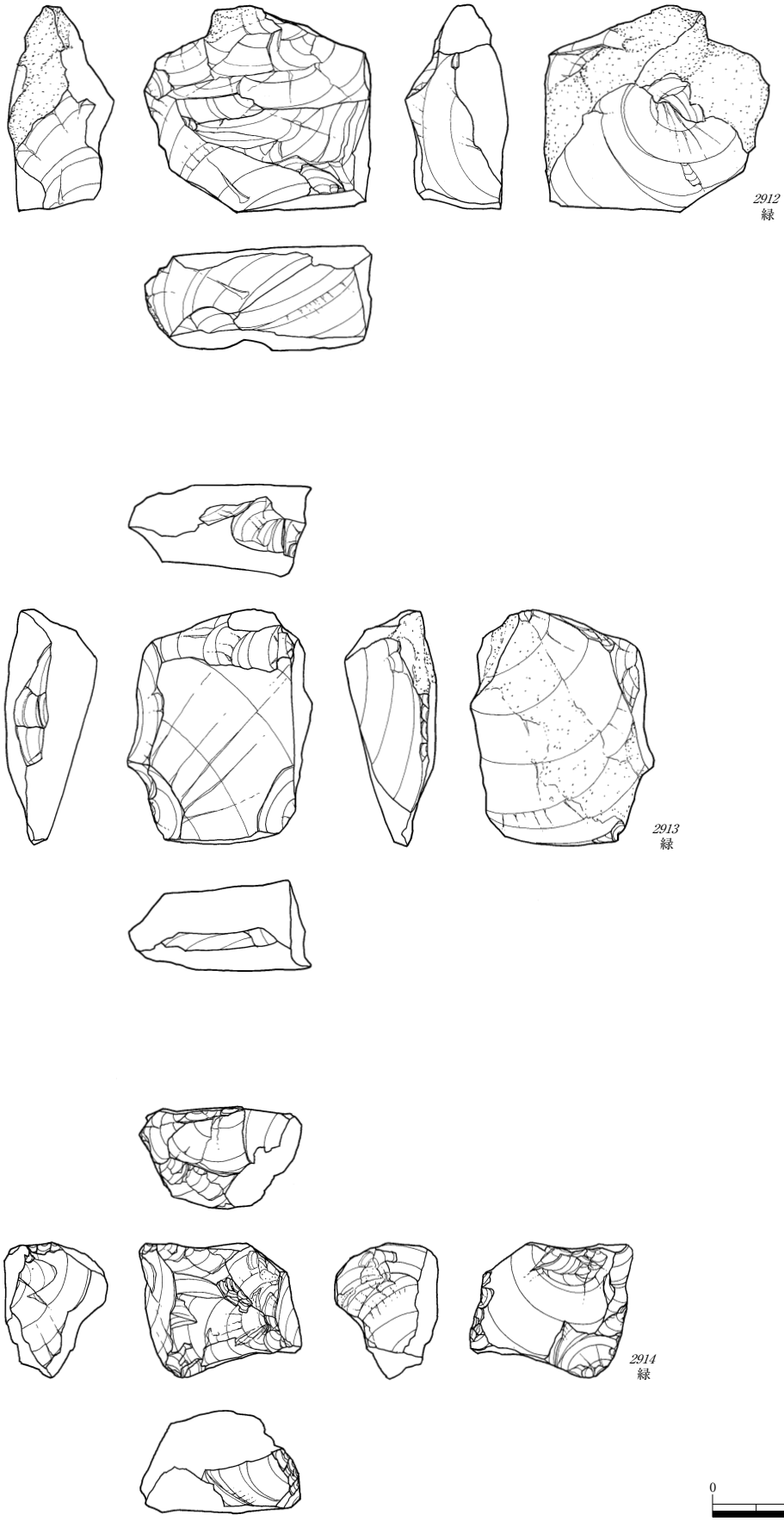
第324図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

包含層

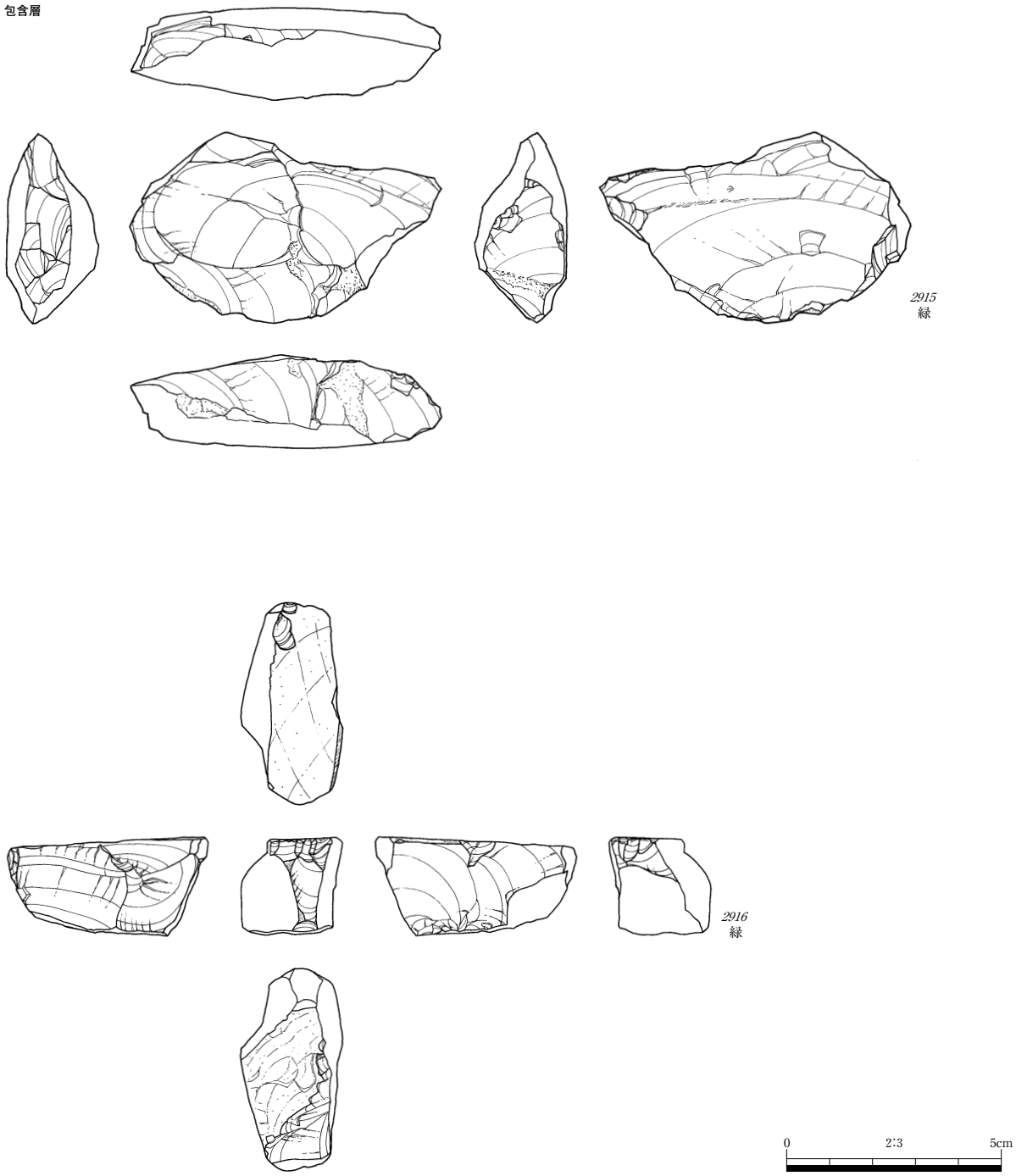


第325図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

包含層

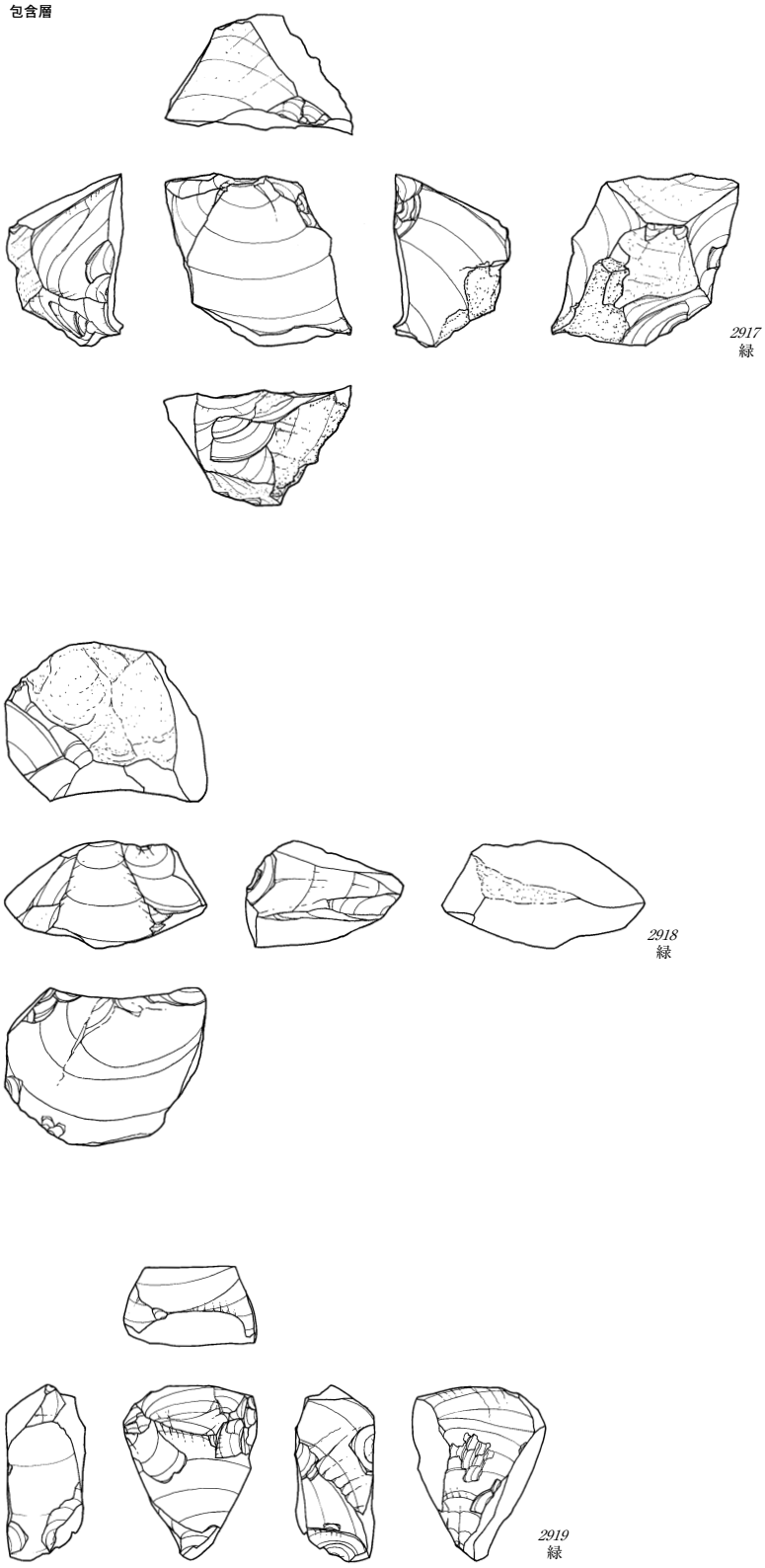


第326図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層



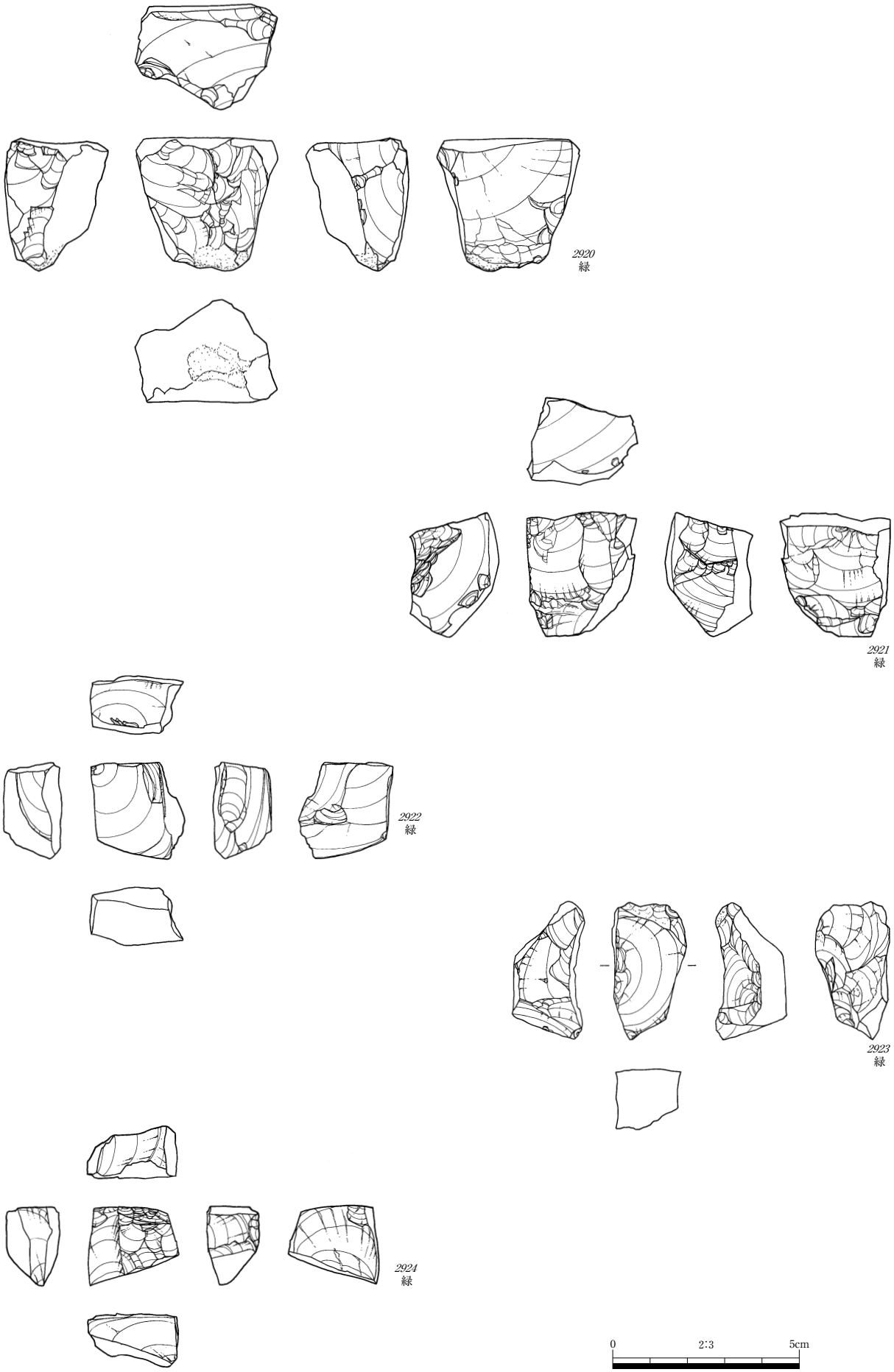
第327図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ地区　包含層

包含層



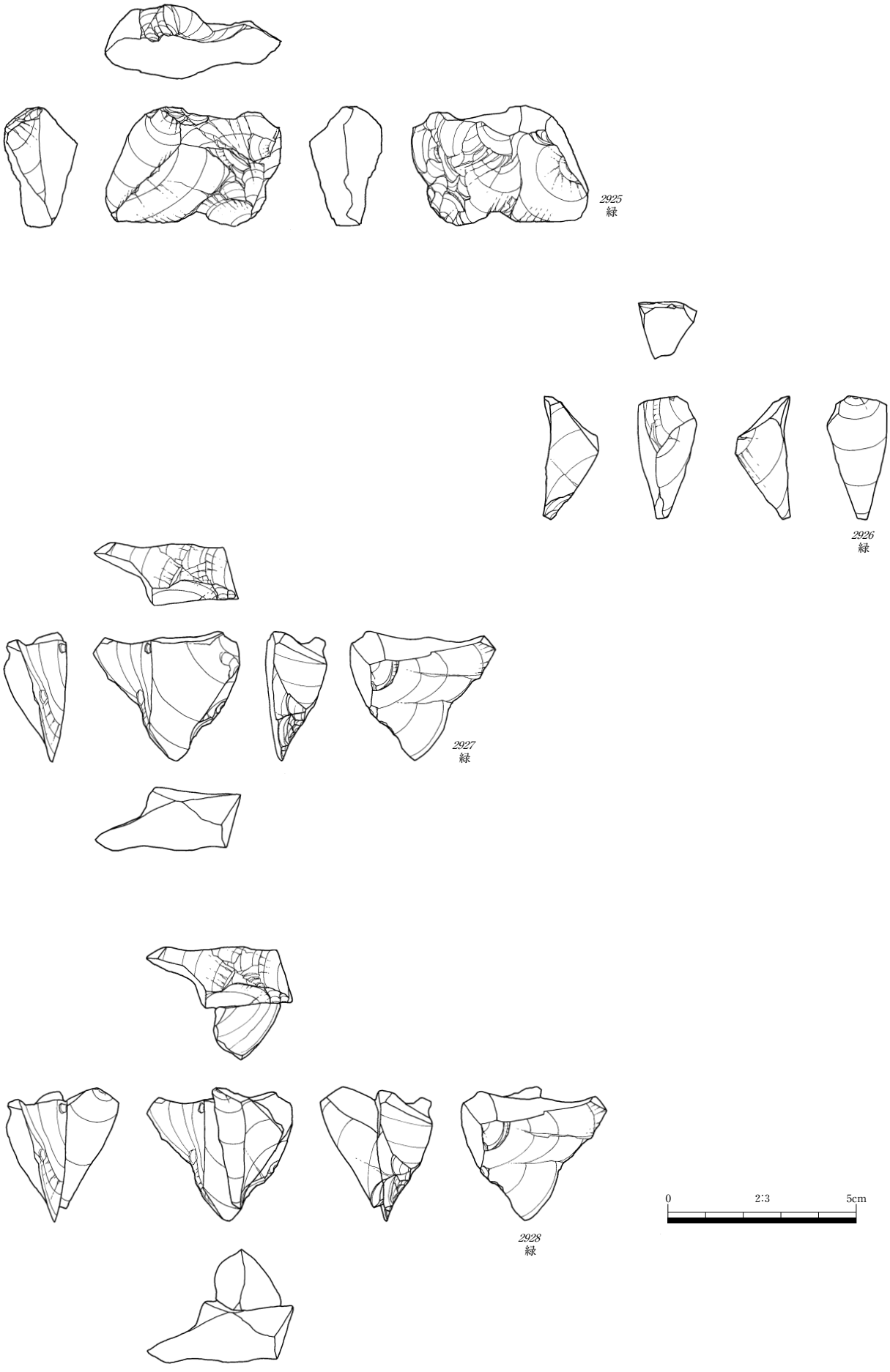
第328図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

包含層



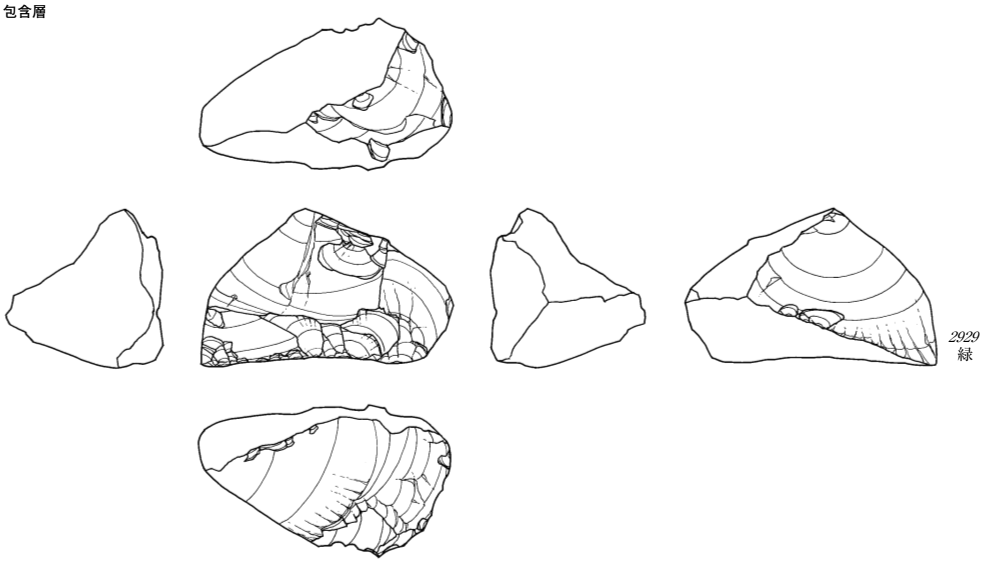
第329図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

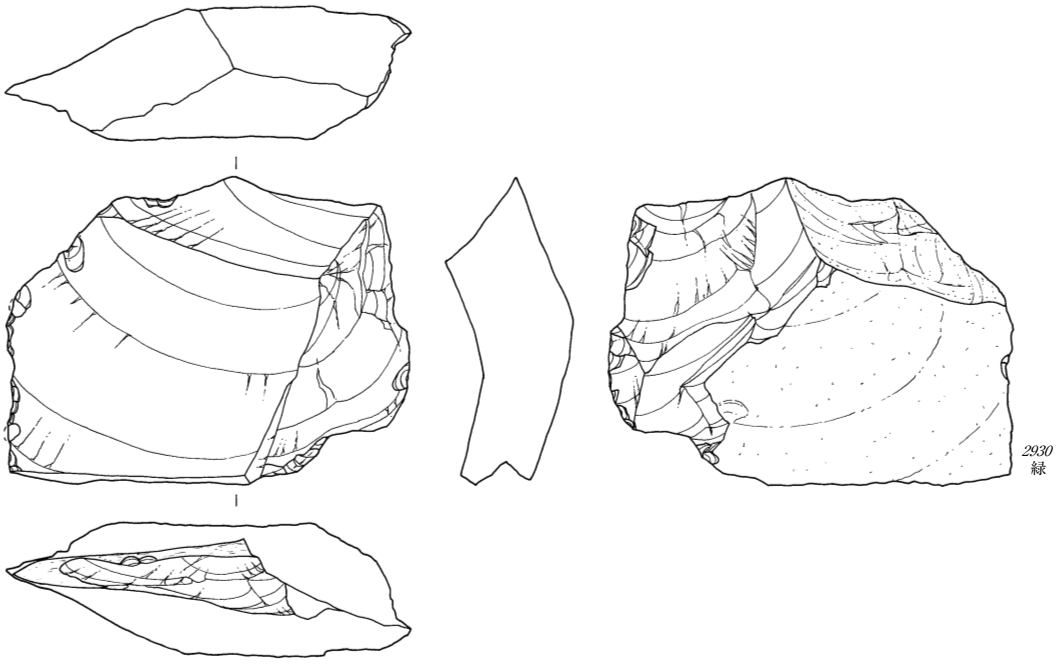
包含層



第330図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

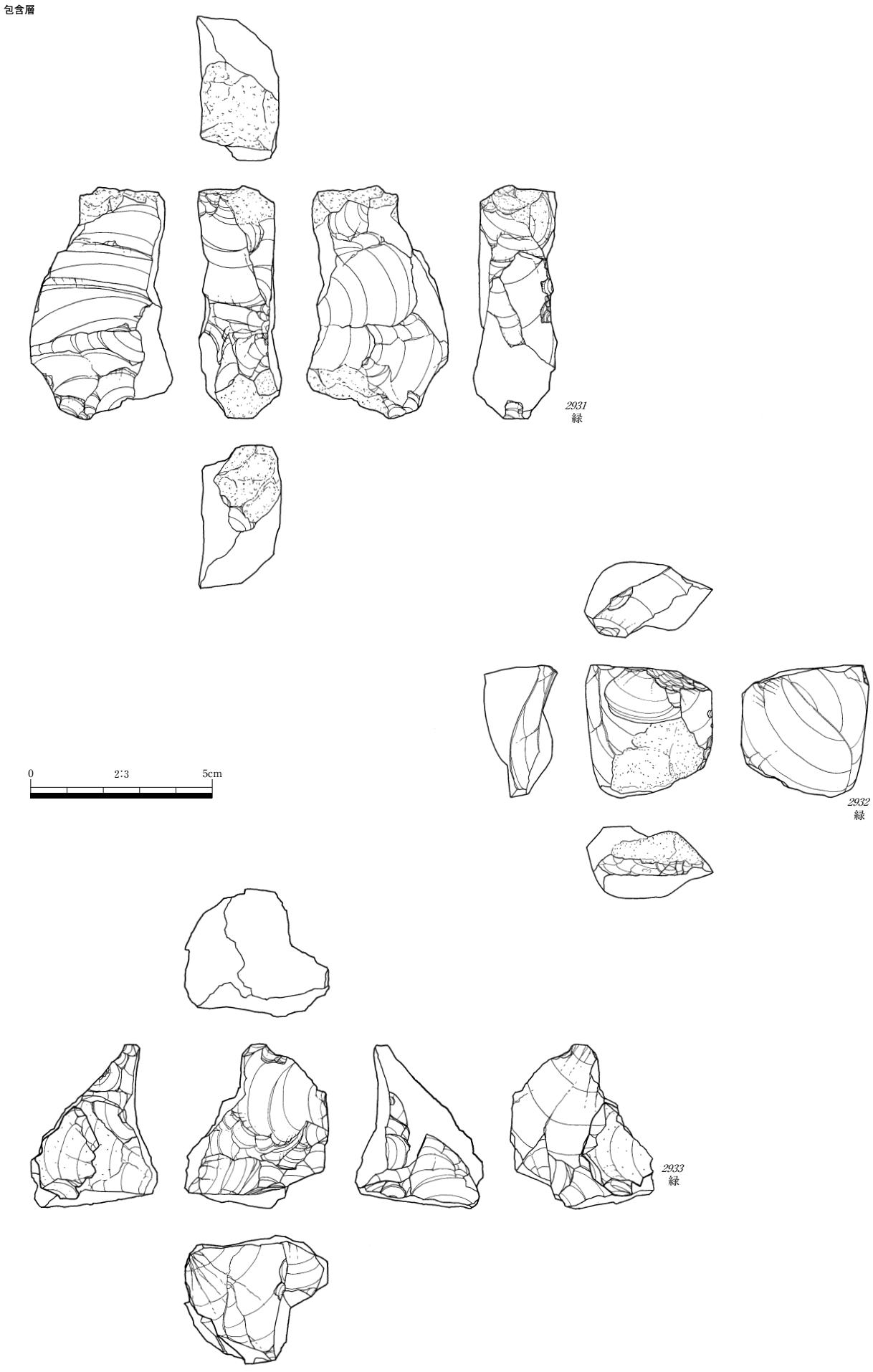
包含層





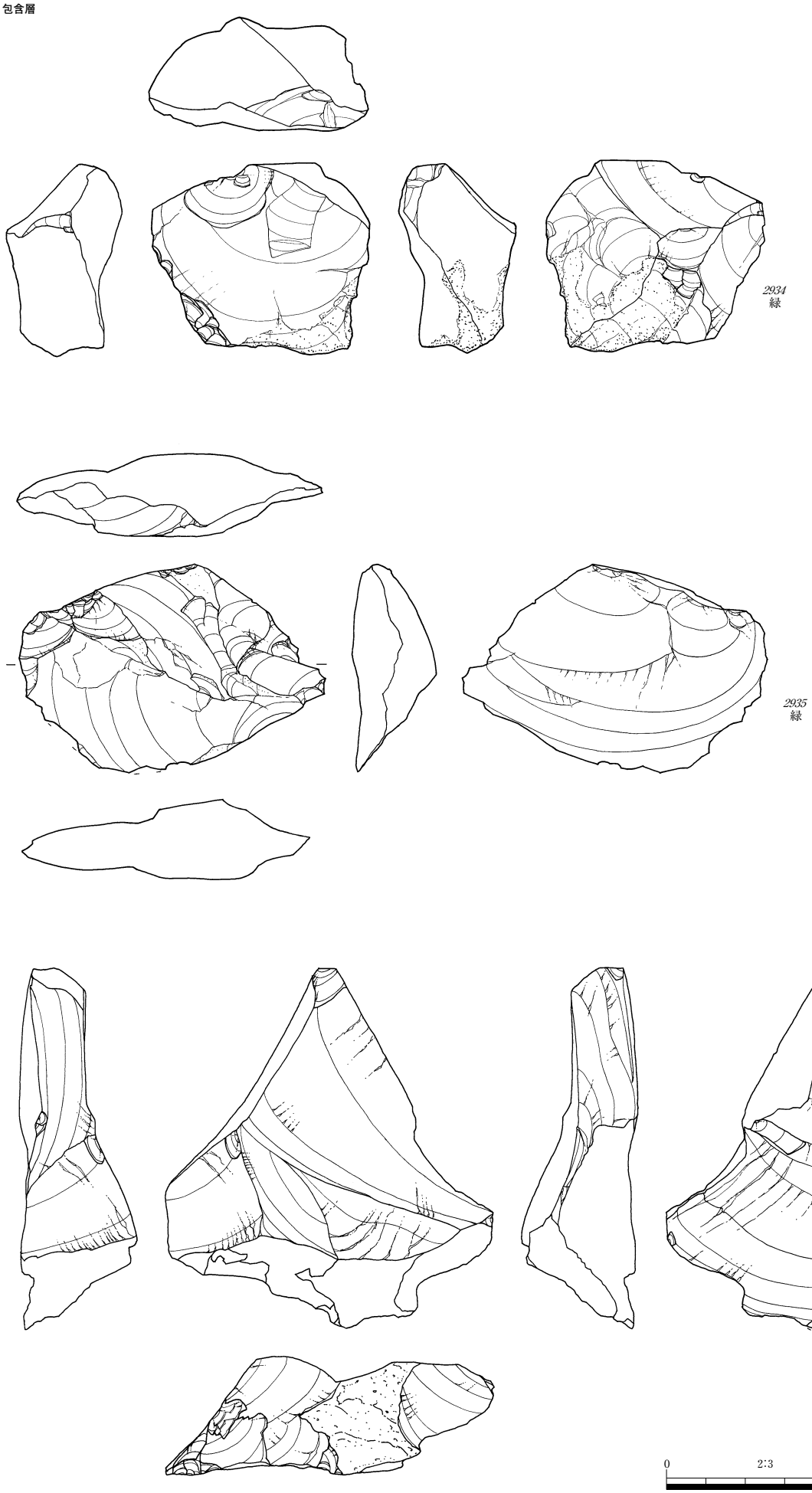
0　2:3　5cm

第331図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

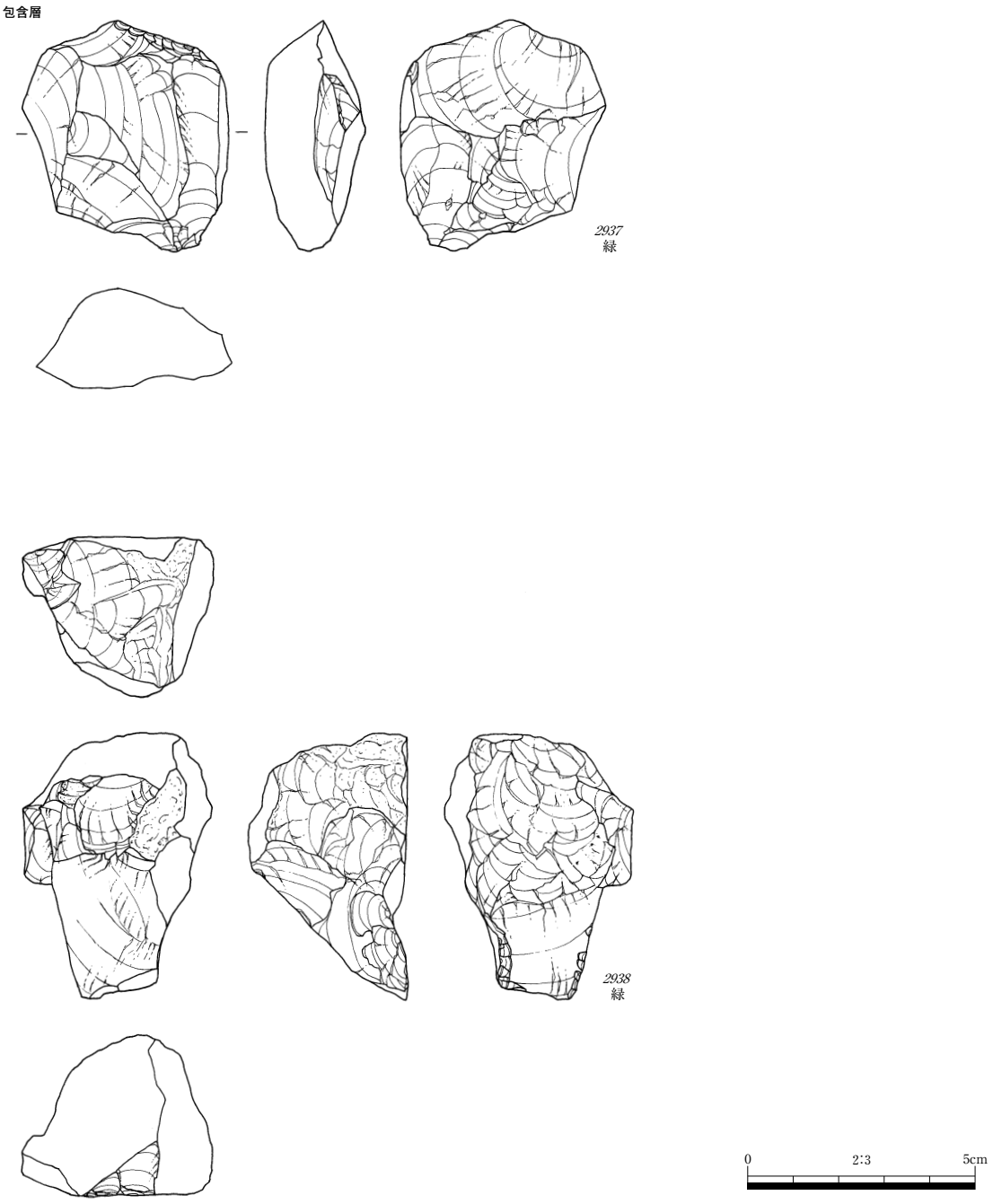


第332図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

包含層

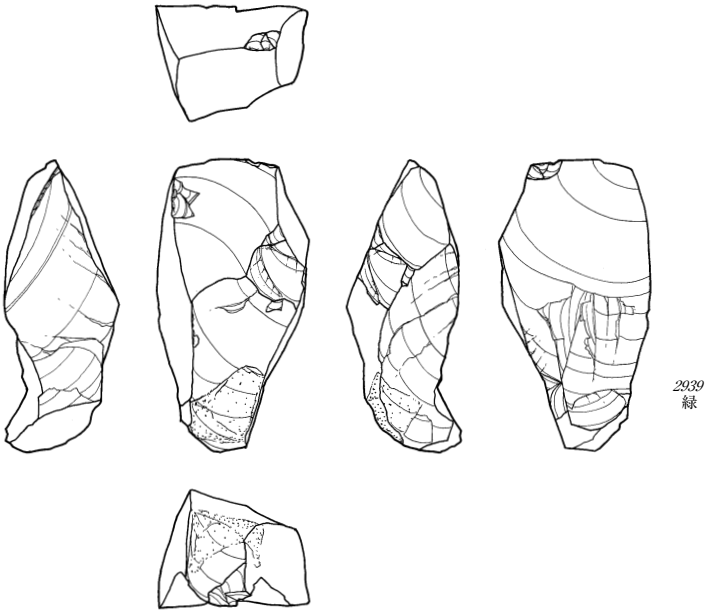


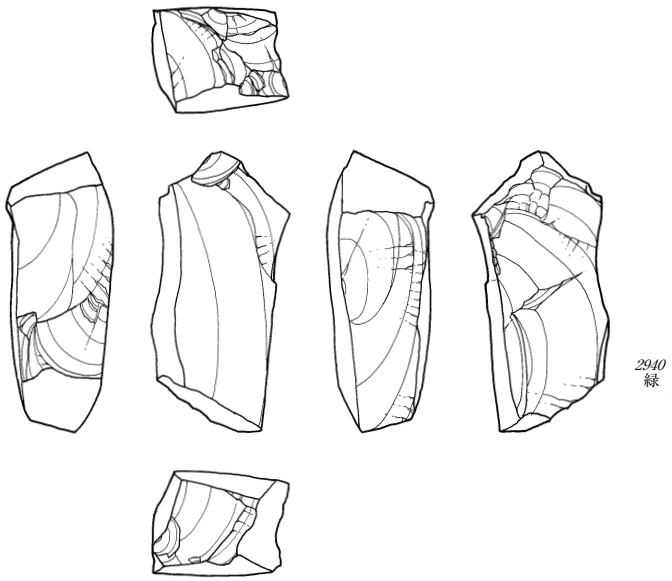
第333図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

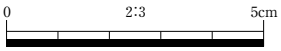


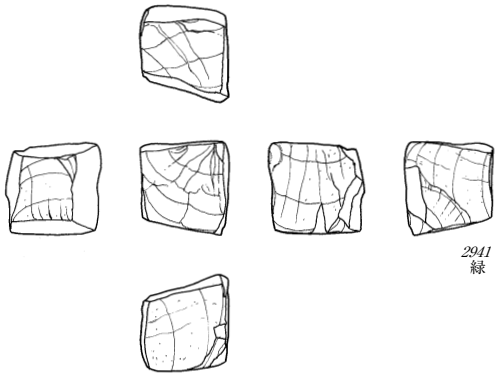
第334図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

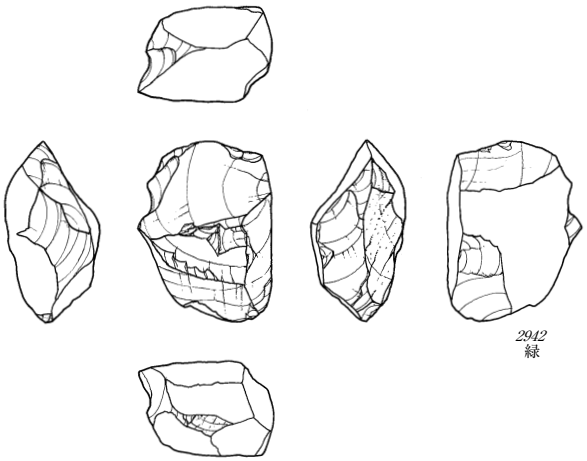
包含層









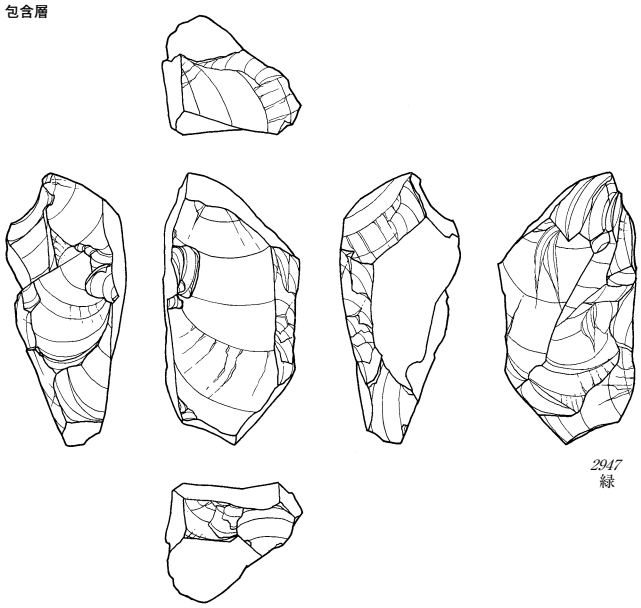


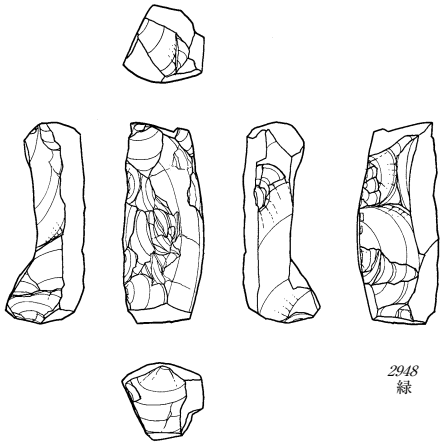
第335図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

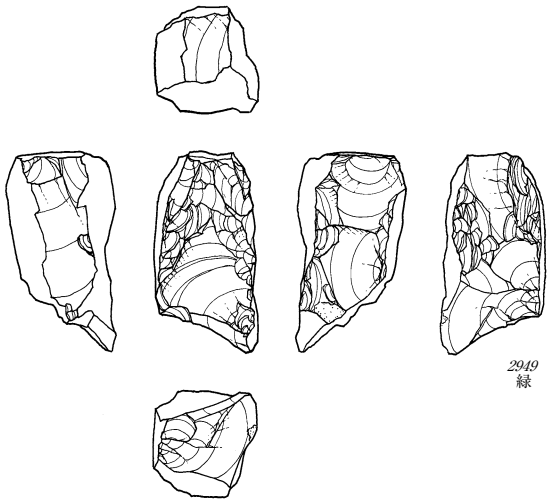
包含層

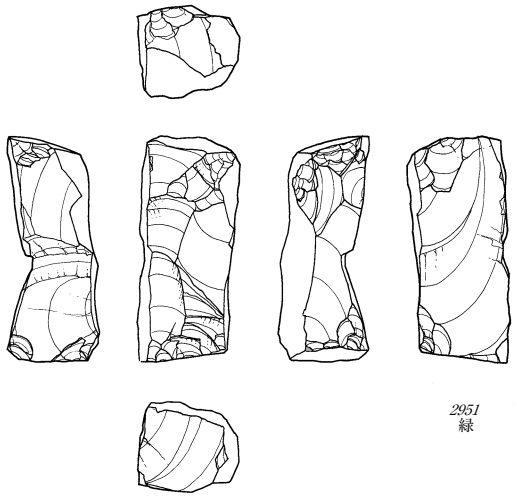
第336図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

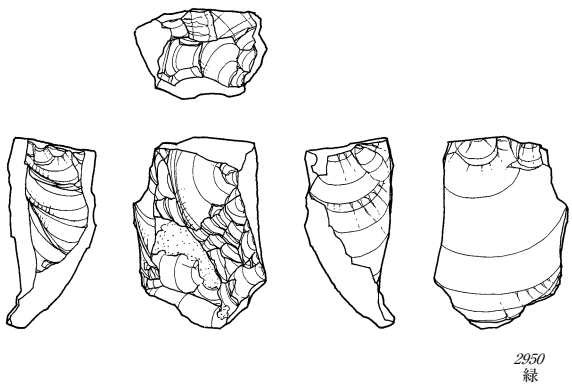
包含層

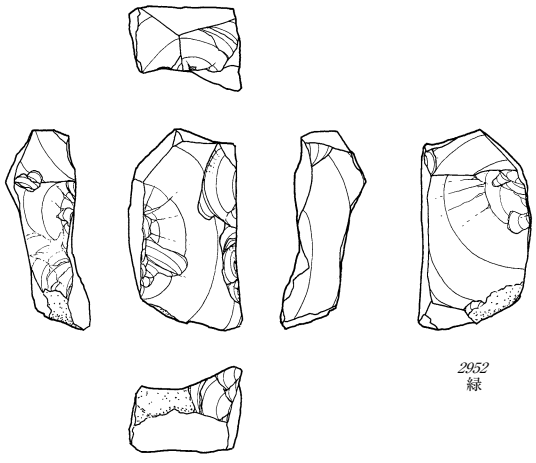


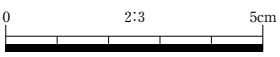






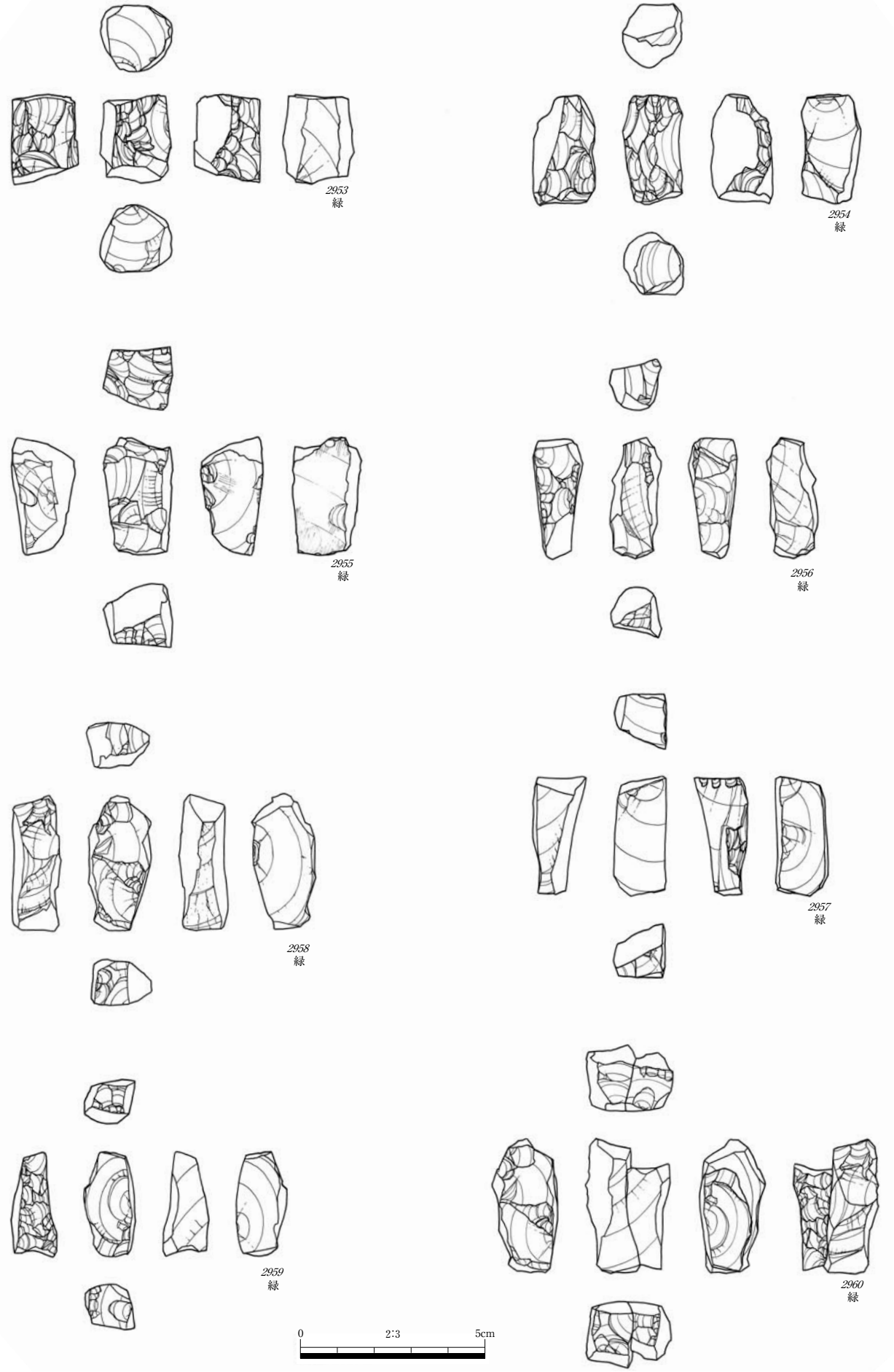






第337図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ地区　包含層

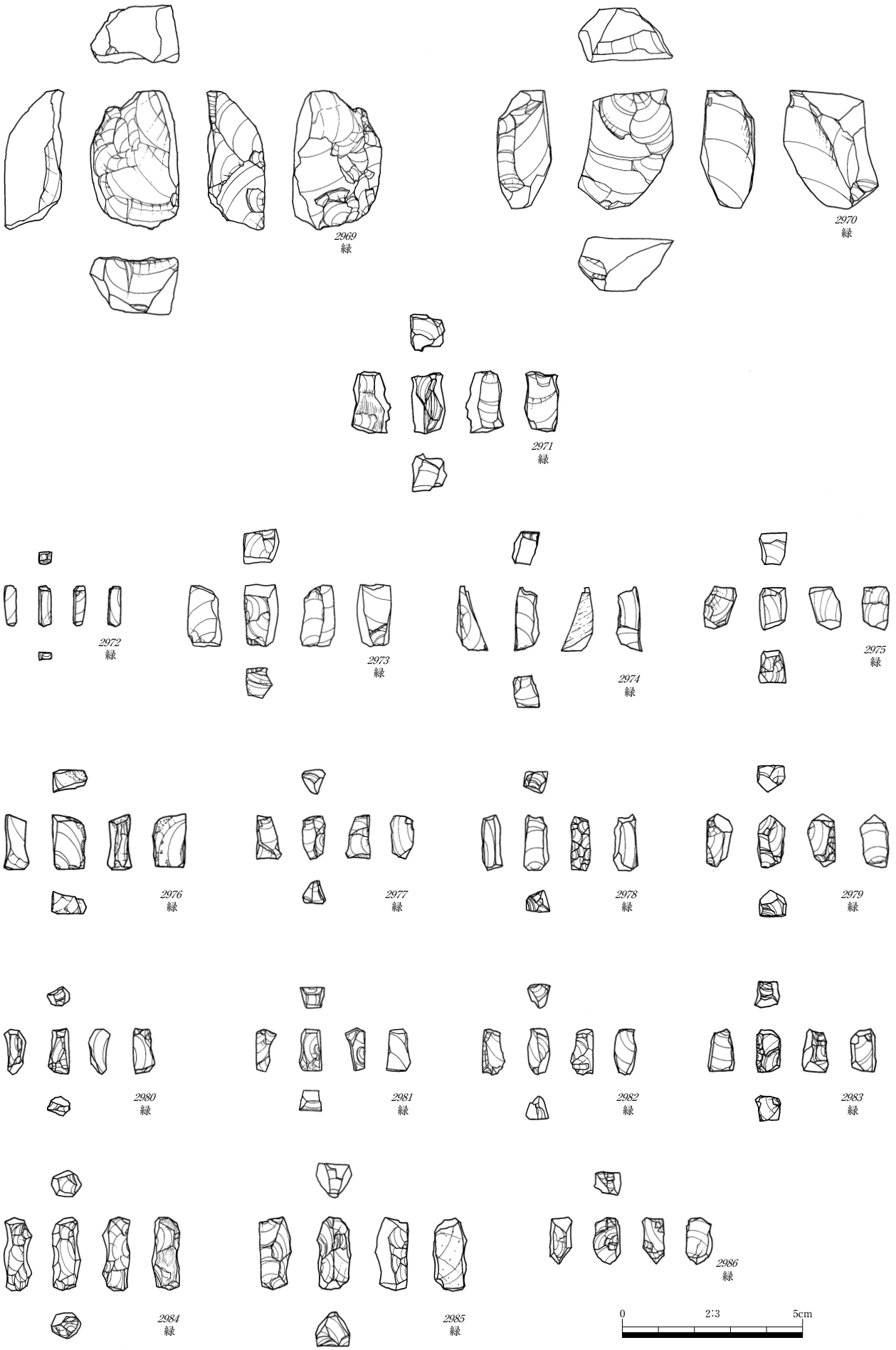
包含層



第338図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

第339図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

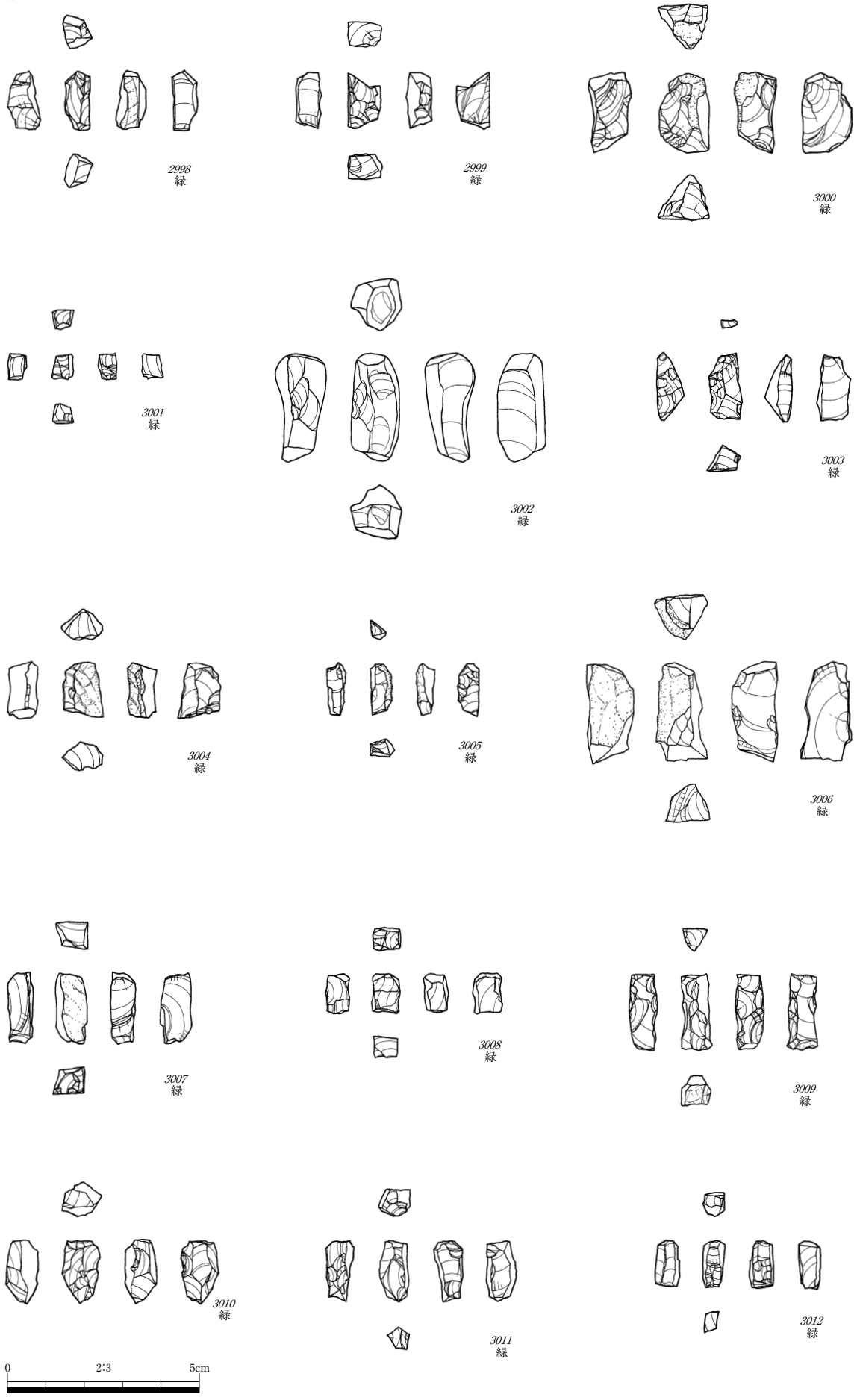
包含層



第340図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

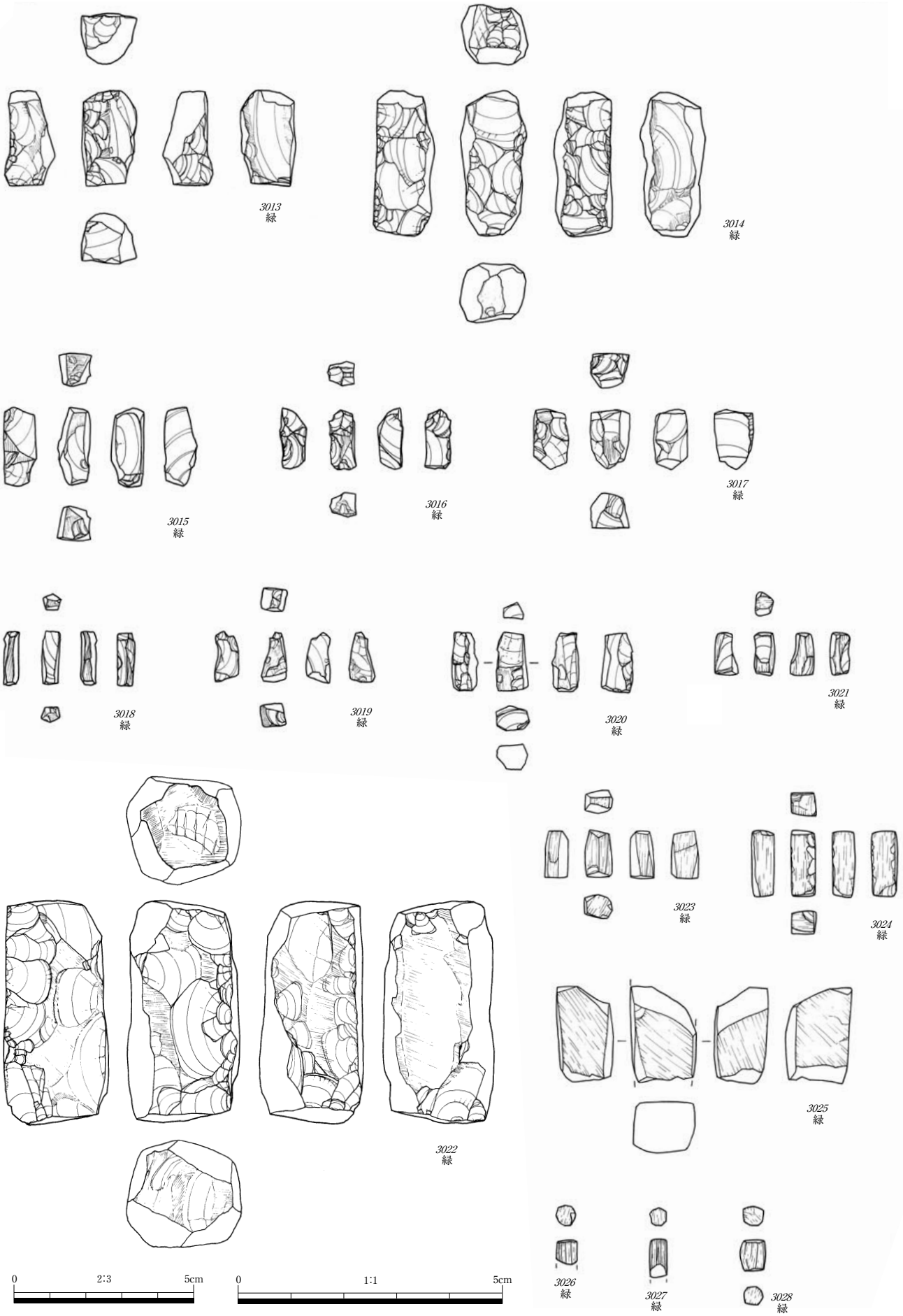
第341図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

包含層



第342図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層

包含層

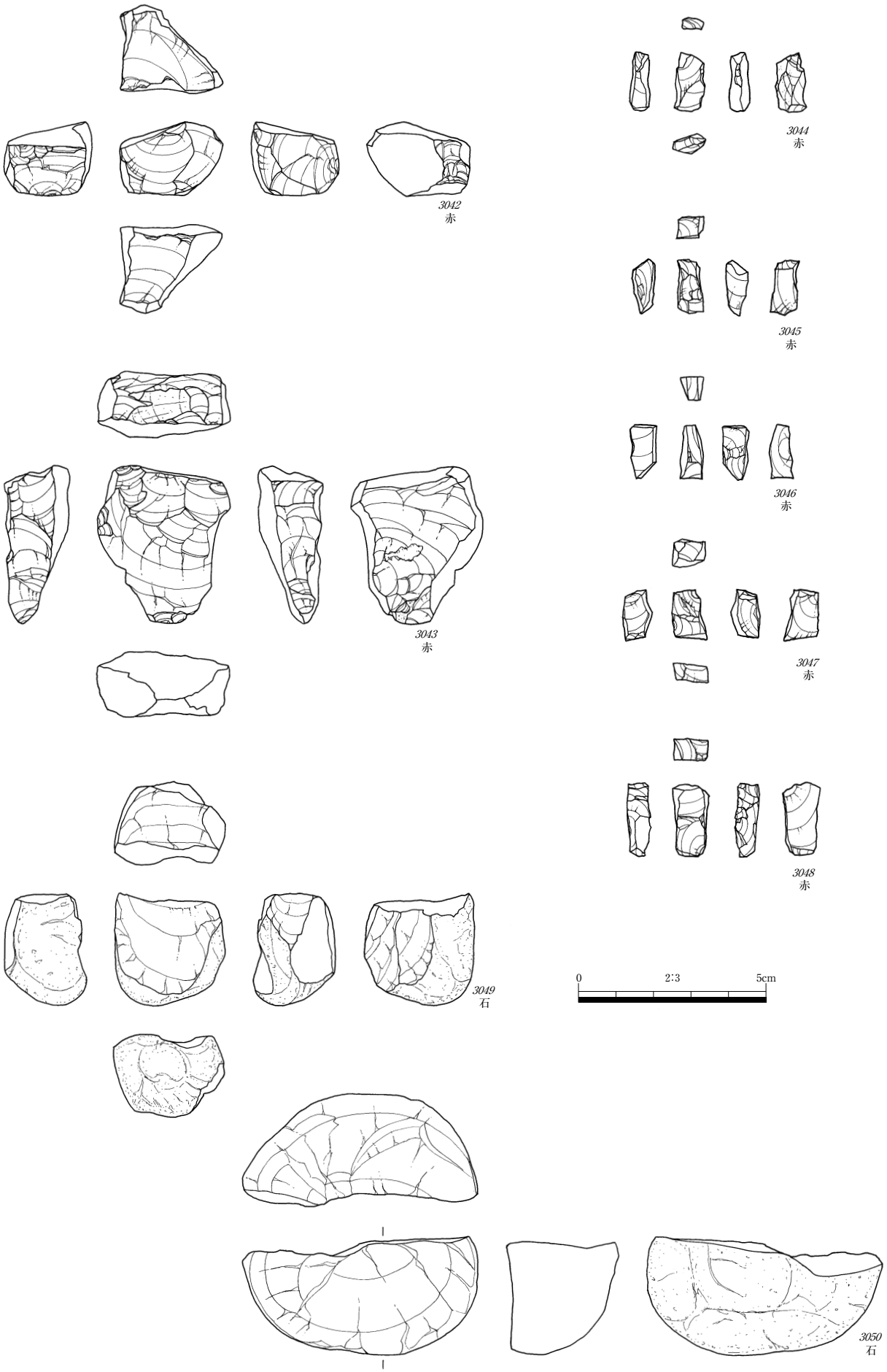


第343図　遺物実測図　（*3020～3028*　1/1，*3013～3019*　2/3）
Ｂ地区　包含層

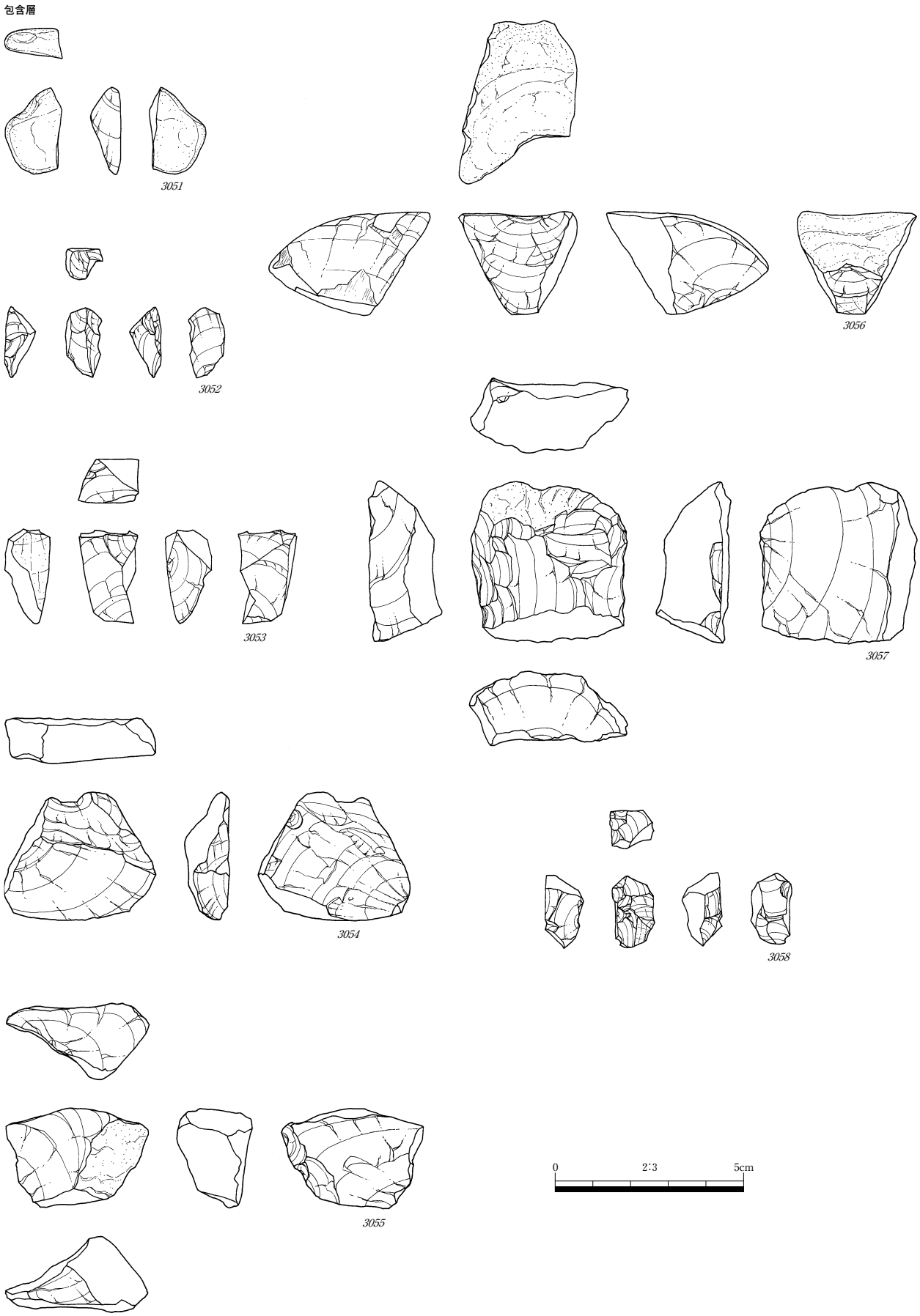
包含層

第344図　遺物実測図　(*3029～3038*　1/1, *3039～3041*　2/3)
B地区　包含層

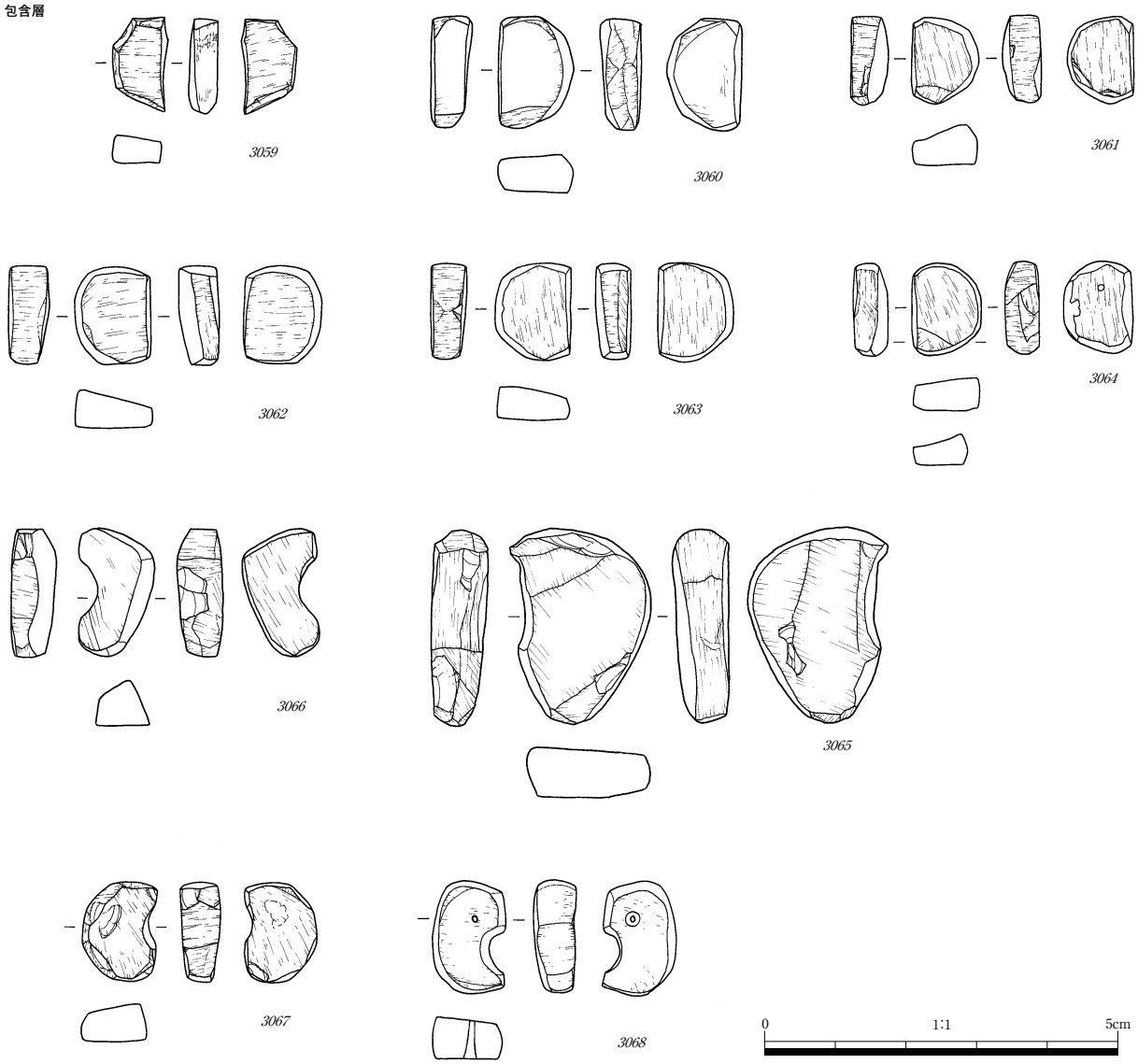
包含層



第345図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層



第346図　遺物実測図　(2/3)
B地区　包含層



第347図　遺物実測図（1/1）
Ｂ地区　包含層

5　C・D地区

（1）C地区の遺構と遺物

C地区はA・B地区とは異なり，弥生時代の包含層がみられなかった。上層はほとんどが攪乱を受けており，それが検出面にも及んでいたため，遺構の残存状況は不良と考えられる。このため建物については，柱根が残る柱穴をもとに積極的な解釈を含んだものであることをお断りしておく。

A　竪穴建物

柱穴だけが残存しているものとして，2棟が考えられる。

27号竪穴建物（SI27，第349・353図，図版39）

C1地区北東寄りに位置する，5本柱の建物とみられる。2基の柱穴で柱根が残っており，放射性炭素年代測定からは，およそ紀元前2世紀という結果を得た。柱穴以外の附属施設については確認していないが，直径6～7m程度の円形あるいは隅丸方形の建物ではないかと想像される。

遺物はSP4145から柱根（*3087*）が出土している。側面・木口ともに加工痕が残り，木口は3方向から加工して平坦面を作り出す。樹種はトネリコ属。放射性炭素年代測定をかけており，^{14}C年代では1800±40と測定されている。図示していないが，SP4147からも柱根が出土し，この^{14}C年代は1830±40と測定されている。

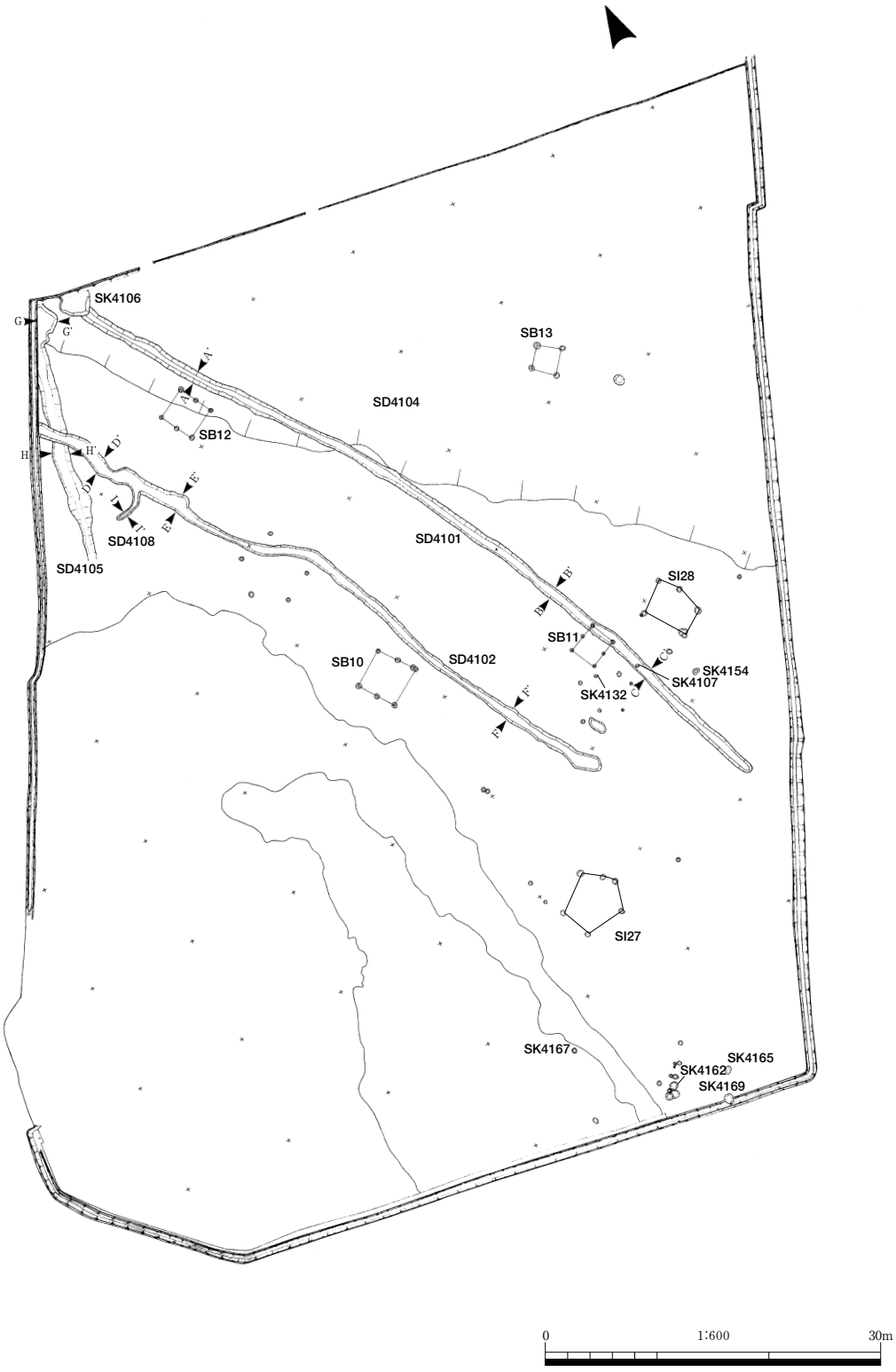
28号竪穴建物（SI28，第349・353・354図）

C1地区中央東寄りに位置する，5本柱の建物とみられる。4基の柱穴で柱根が残っており，SI27と同様の年代測定結果を得た。規模や構造についてもSI27と似たものであろうと考えられる。

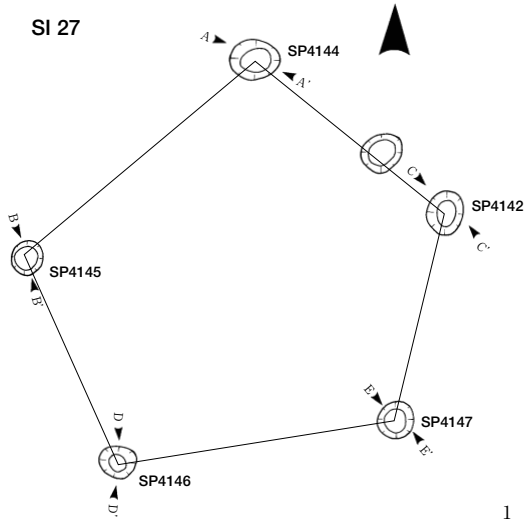
遺物はSP4109から柱根（*3088*）・礎板（*3091*）が出土している。

3088 は木口周辺に伐採痕が残るものの，削って平坦面を作り出す。樹種はトネリコ属。放射性炭素年代測定をかけており，^{14}C年代では1800±40と測定されている。図示していないが，SP4134・4136・4176からも柱根が出土し，これらの^{14}C年代はいずれも1830±40と測定されている。

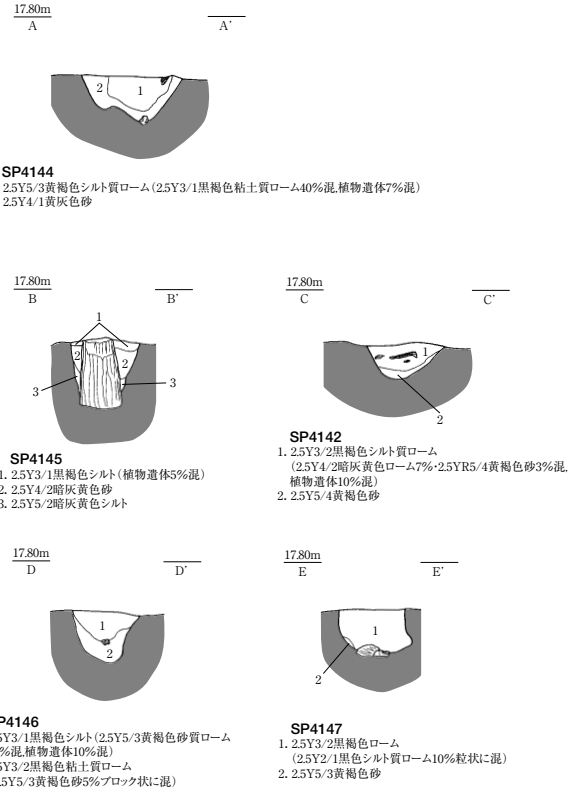
3091 は表面に粗い加工痕の残る礎板である。樹種はスギ。

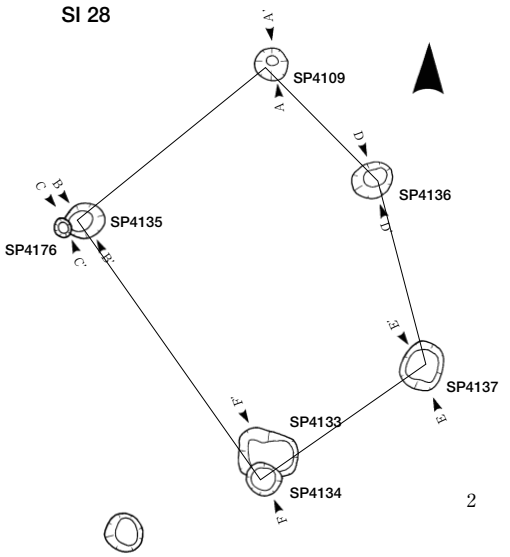


第348図　C地区全体図　(1/600)

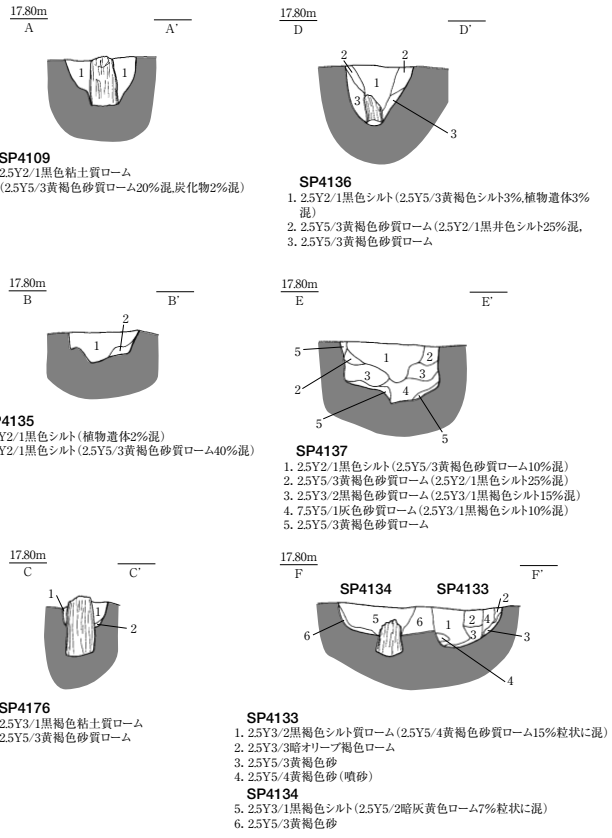


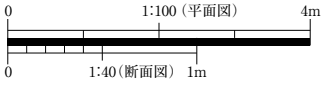
1





2





第349図　遺構実測図　(1/40・1/100)
C１地区　１.ＳＩ27　２.ＳＩ28

B　掘立柱建物

4棟を確認したが，ほかにも柱根が残る柱穴が散見しており，まだ数棟存在した可能性がある。また，柱穴の規模は直径30～50㎝，深さ20～30㎝を中心とするが，削平の影響があり，本来の規模ではないと考えられる。

10号掘立柱建物（ＳＢ10，第350図，図版38）

Ｃ1地区ほぼ中央に位置する，2間×1間の建物である。桁行3.7m，梁行3.7mで，柱間は桁行が梁行のほぼ半分である。平面積13.7㎡で，主軸はＮ－36.5°－Ｅの南北棟である。遺物は出土していない。

11号掘立柱建物（ＳＢ11，第350・353図，図版39）

Ｃ1地区中央やや東寄りに位置しＳＤ4101を切る。2間×1間，桁行2.9m，梁行2.5mでＳＢ10と同様に桁行の柱間が狭い。平面積7.3㎡，主軸はＮ－64°－Ｅの東西棟である。

遺物はＳＰ4128から柱根（*3089*）が出土している。遺存状態は悪く，木口の加工痕は明瞭ではないが，平坦面を作り出している。樹種はコナラ属。放射性炭素年代測定をかけており，^{14}Ｃ年代では1730±40と測定されている。

12号掘立柱建物（ＳＢ12，第350図）

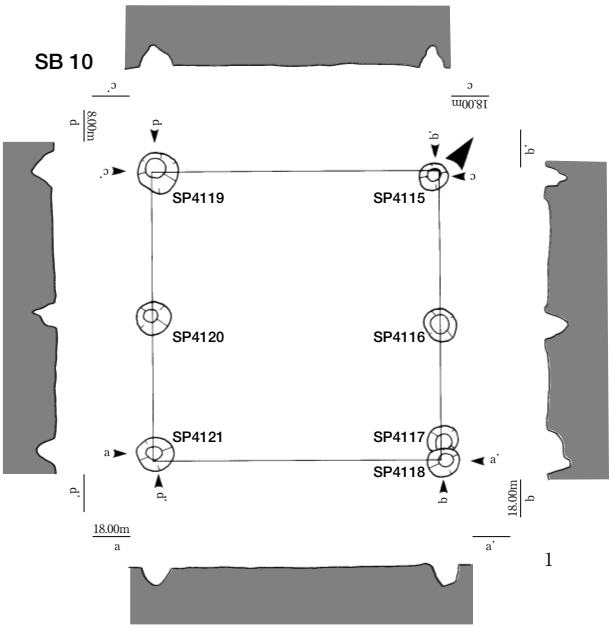
Ｃ1地区北西に位置する2間×1間の建物である。桁行3.3m，梁行3.0mで平面積9.9㎡，主軸はＮ－30°－Ｗの南北棟である。遺物は出土していない。

13号掘立柱建物（ＳＢ13，第350・354図，図版38・39）

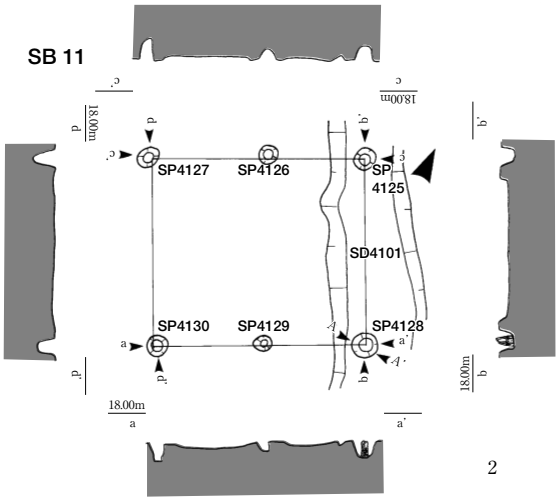
Ｃ1地区北東寄りに位置する，1間×1間の建物である。桁行2.4m，梁行2.3mで平面積5.5㎡，主軸はＮ－50°－Ｗの南北棟と考えられる。この掘立柱建物は先述した3棟とは異なり，柱穴の平面は楕円形を呈し，規模はやや大きめである。

また，それぞれの柱穴の底に角材が横位に据えられており，礎板と考えられる。この礎板の据え方には2方向あり，ＳＰ4138・4139では北西～南東方向，ＳＰ4140・4141では北東～南西方向である。

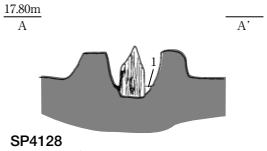
遺物はこの礎板（*3092*～*3094*）のみで，いずれも下部は石製工具によって大きく斜めに削られている。この加工痕は粗く，伐採時のものかと考えられる。上部は平らに加工される。*3093* は中ほどが4方から抉られて，わずかに凹んでいる。樹種はすべてコナラ節である。いずれも放射性炭素年代測定をかけており，^{14}Ｃ年代では*3092* が1840±40，*3093* が1900±50，*3094* が1900±40と測定されている。図示していないが，ＳＰ4138の礎板の^{14}Ｃ年代は1870±40と測定されている。



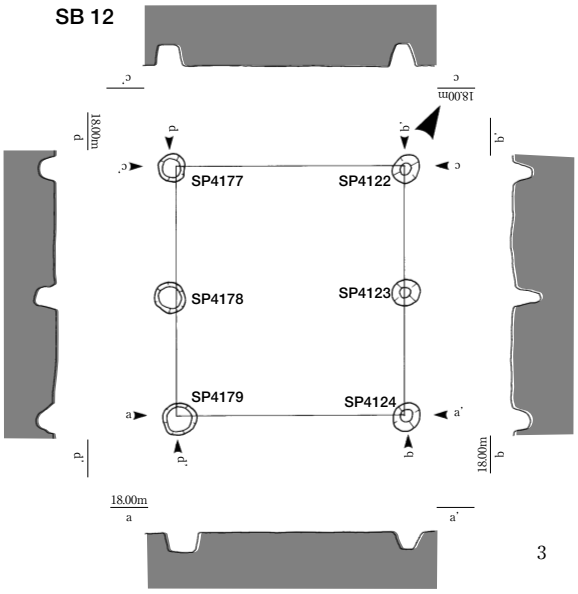
1



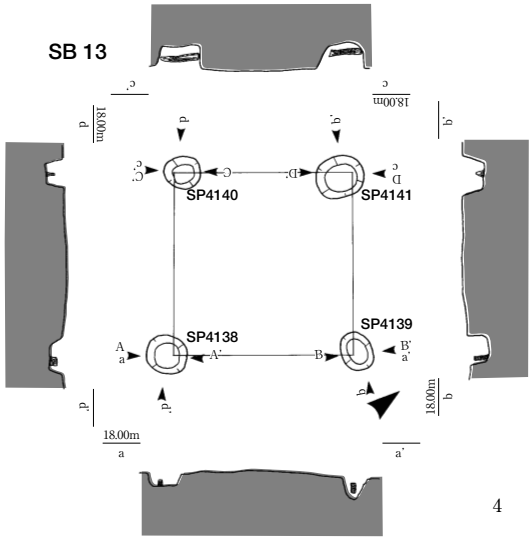
2



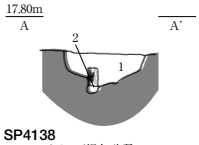
SP4128
1. 2.5Y3/2黒褐色シルト



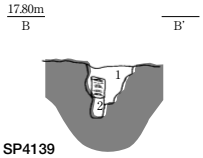
3



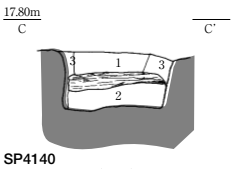
4



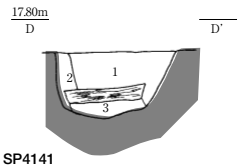
SP4138
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質ローム
（2.5Y2/1黒色シルト10%・2.5Y5/3黄褐色砂質ローム10%混）
2. 2.5Y6/2にぶい黄色粘土



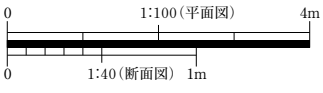
SP4139
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質ローム
（2.5Y2/1黒色シルト10%・2.5Y5/3黄褐色砂質ローム10%混）
2. 2.5Y6/2にぶい黄色粘土



SP4140
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質ローム
（2.5Y6/3にぶい黄色粘土15%・2.5Y3/1黒褐色シルト7%混）
2. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム
3. 2.5Y6/3にぶい黄色粘土



SP4141
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色ローム
（2.5Y6/3にぶい黄色粘土40%・2.5Y3/1黒褐色シルト5%混,植物遺体2%混）
2. 2.5Y6/3にぶい黄色粘土
3. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム



第350図　遺構実測図　（1/40・1/100）
C１地区　1.ＳＢ10　2.ＳＢ11　3.ＳＢ12　4.ＳＢ13

C　土坑

4132号土坑（ＳＫ4132，第351図）

ＳＢ11の南に位置する，長径29㎝，短径26㎝，深さ12㎝の土坑である。柱根が残っており，建物の柱穴であった可能性が高い。

4154号土坑（ＳＫ4154，第351・354図）

ＳＩ28の南東に位置する，長径63㎝，短径45㎝，深さ30㎝を測る楕円形の土坑である。わずかに板材が残っており，建物の柱穴であった可能性が高い。

遺物は弥生土器片のほか，用途不明材（*3098*）が出土している。*3098* は縦断面が三角形になる板材で，上端は厚みが薄くなる。樹種はスギ。

4162号土坑（ＳＫ4162，第348・354図）

Ｃ１地区南東隅に位置する，長径75㎝，短径70㎝，深さ25㎝を測る楕円形の土坑である。

遺物は礎板（*3095*）が出土している。木口両端を粗く切り落としたもので，樹種はスギ。

4165号土坑（ＳＫ4165，第351・352図）

Ｃ１地区南西隅に位置する，長径72㎝，短径46㎝，深さ８㎝を測る楕円形の土坑である。削平のためか浅いが，埋土には炭化物が混ざり，弥生土器が出土した。*3069* は外反先細りの有段口縁に擬凹線を施し，口縁部内面には指頭圧痕，小さな底部をもつ倒卵形の器形などから，いわゆる月影式の甕とみられる。外面には粗いハケ調整，内面は削られ器壁は薄い。外面全体と内面下半部にはススが付着している。

4167号土坑（ＳＫ4167，第351・353図）

Ｃ１地区南西に位置する，長径36㎝，短径33㎝，深さ10㎝の土坑である。柱根が残っており建物の柱穴であった可能性が高い。

遺物は柱根（*3090*）が出土している。側面の加工は遺存状態が悪く不明だが，木口は３方向から細かく削って，平坦面を作り出す。樹種はクワ属。

4169号土坑（ＳＫ4169，第351・354図）

Ｃ１地区南西隅に位置する，長径92㎝，短径78㎝，深さ18㎝の土坑である。埋土は黒褐色シルトの単層，炭が混ざる。柱根が残っており，建物の柱穴であった可能性が高い。

遺物は弥生土器片・礎板（*3096* ・*3097*）が出土している。*3096* は木口両端を粗く切り落としたもの。*3097* は下部を石製工具によって大きく斜めに削られており，表面と側面は細かく削って平坦に仕上げる。樹種はいずれもスギ。

D　溝・自然流路

4101号溝（ＳＤ4101，第351・352・354図，図版154）

Ｃ１地区南東から北西に向かって流れる，最大幅1.08m，深さ40㎝を測る溝である。ＳＰ4125・4128，ＳＫ4106・4107より古い。埋土は黒褐色シルト，暗灰黄色砂質ローム，黒褐色シルト質ローム，にぶい黄色粘土質ローム，黒褐色シルトなどがレンズ状に堆積している。

遺物は弥生土器・石包丁が出土した。*3070* は甕か。底部のみで，内外面ともに細かいハケ調整がみられる。*3099* は白色系の凝灰岩製の磨製大型石包丁。長さ6.88㎝，幅17.76㎝，厚さ1.33㎝を測る。全体の1/3程度が欠損していると思われる。紐孔は１箇所のみが残存する。穿孔の際の回転痕が明瞭に残っているが紐ずれはみられず，紐孔からは使用された様子は窺えない。刃部側は大部分が欠損し，使用痕は不明である。軟質な石材で使用方法は不明であるが，同様の石材の石包丁が「北加賀地域を中心として砺波平野にまで及ぶ広範囲の流通圏があること」を松尾実氏は指摘しており(注25)，一定の需要があり生産されたものであることが考えられる。

4102号溝（ＳＤ4102，第351・352図）

ＳＤ4101の西側に並行して走る，最大幅1.38m，深さ16㎝を測る溝である。ＳＤ4105・4108より新しい。埋土はおもに黒褐色ロームで非常に浅いが，上部は削平されたものと考えられる。

遺物は弥生土器が出土した。*3071* ・*3072* は甕の口縁。*3071* の端部は上下から櫛状工具による刻みが連続で施される。*3072* は端部に刻目，口縁部内面は赤彩され，竹管による連続刺突が数条巡る。*3074* は球状の土製品で，中空とみられる。*3075* は蓋。外面が赤彩される。*3076* は鉢。口縁部の突起には２個１対の孔があり，蓋孔と考えられる。外面は赤彩され，口縁下には櫛状工具による直線文と波状文が交互に施される。

4104号溝（ＳＤ4104，第348・352図）

北に向かって落ち込む谷状の遺構で，Ｄ地区へと続く可能性がある。遺物は縄文土器が出土した。*3078* ・*3079* は深鉢。*3078* の外面には二枚貝とみられる斜方向の条痕文，口縁部内面には帯状にミガキがある。*3079* は底部に編物状の圧痕が残る。これらは晩期後半（長竹式併行）に帰属すると考えられる。

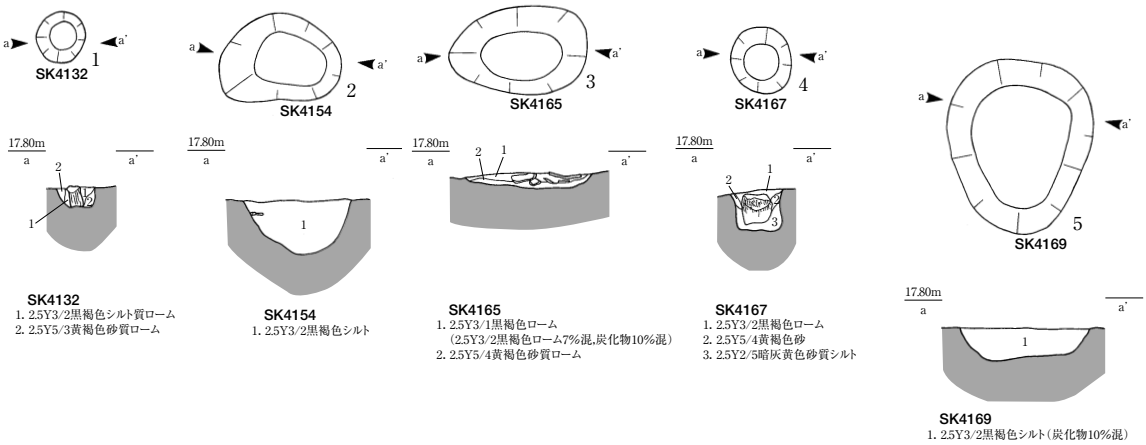
4105号溝（ＳＤ4105，第351・352図）

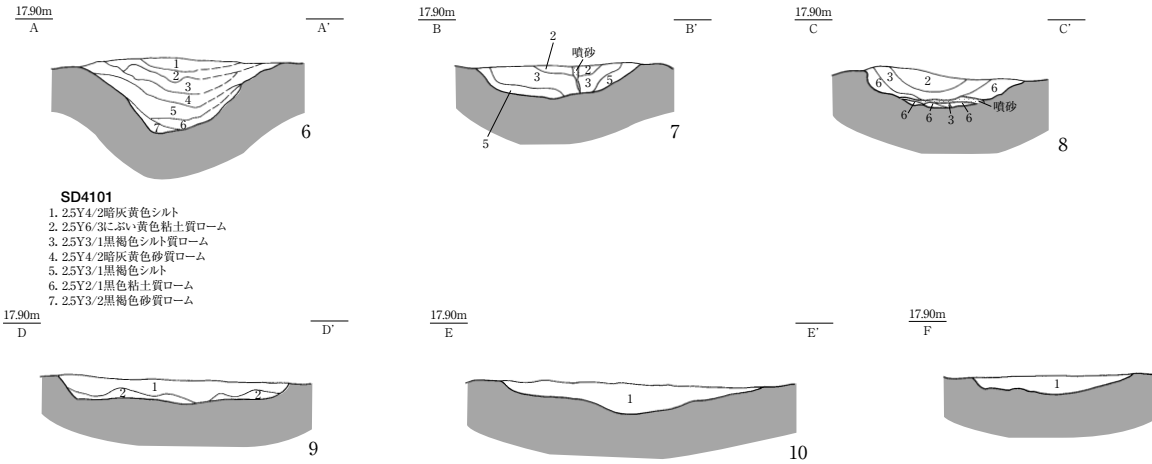
北西端を南北に走る，最大幅1.48m，深さ36㎝を測る溝で，ＳＤ4102より古い。埋土は黒褐色シルト質ローム，黄褐色砂，黄灰色粘土質ローム。遺物は弥生土器のほか，混入した近世陶磁器が出土した。*3080* ～*3082* は甕。*3080* は大きく開く有段口縁をもち弥生時代後期～終末期に帰属するが，*3081* ・*3082* は形態から中期とみられる。*3083* ～*3085* は高杯。*3083* の杯部は大きく外反し，口縁端部は幅広の面をもつ。一部欠損しているが棒状有段脚が付くとみられ，段部分や脚端部には粘土帯を貼り付け肥厚させている。脚部および裾部には透孔がある。外面は丁寧なミガキを施し，赤彩される。*3084* も*3083* と同様な器形とみられ裾部には２個１対の透孔が３箇所にみられる。*3086* は小型の鉢。口縁端部が欠損している。

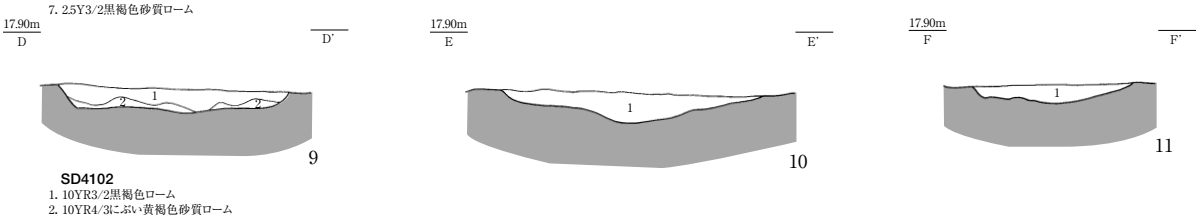
4108号溝（ＳＤ4108，第351・352図）

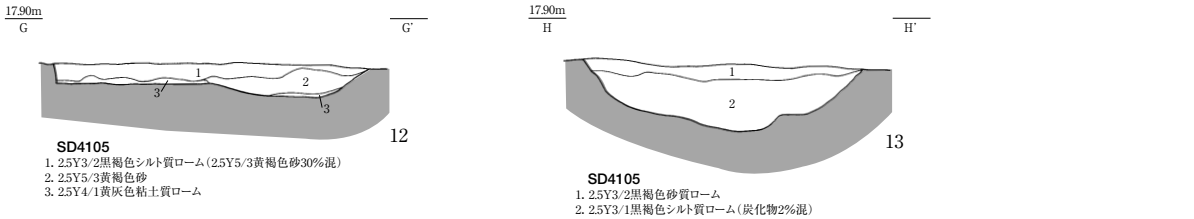
ＳＤ4102の支流とみられる短い溝で，最大幅42㎝，深さ９㎝を測る。埋土はおもに黒褐色ロームの単層でごく浅い。遺物は弥生土器が出土した。*3077* は甕。口縁端部は内面から刻目が施され，外面はハケ調整，内面下半部は板状工具により縦方向にナデられる。

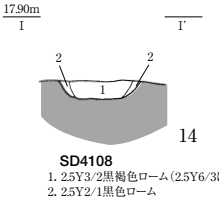
注25　松尾　実　2004「石川県における磨製石包丁研究についての現状と若干の考察」『石川県埋蔵文化財情報』第12号　財団法人石川県埋蔵文化財センター

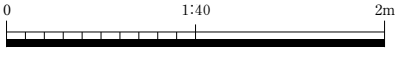






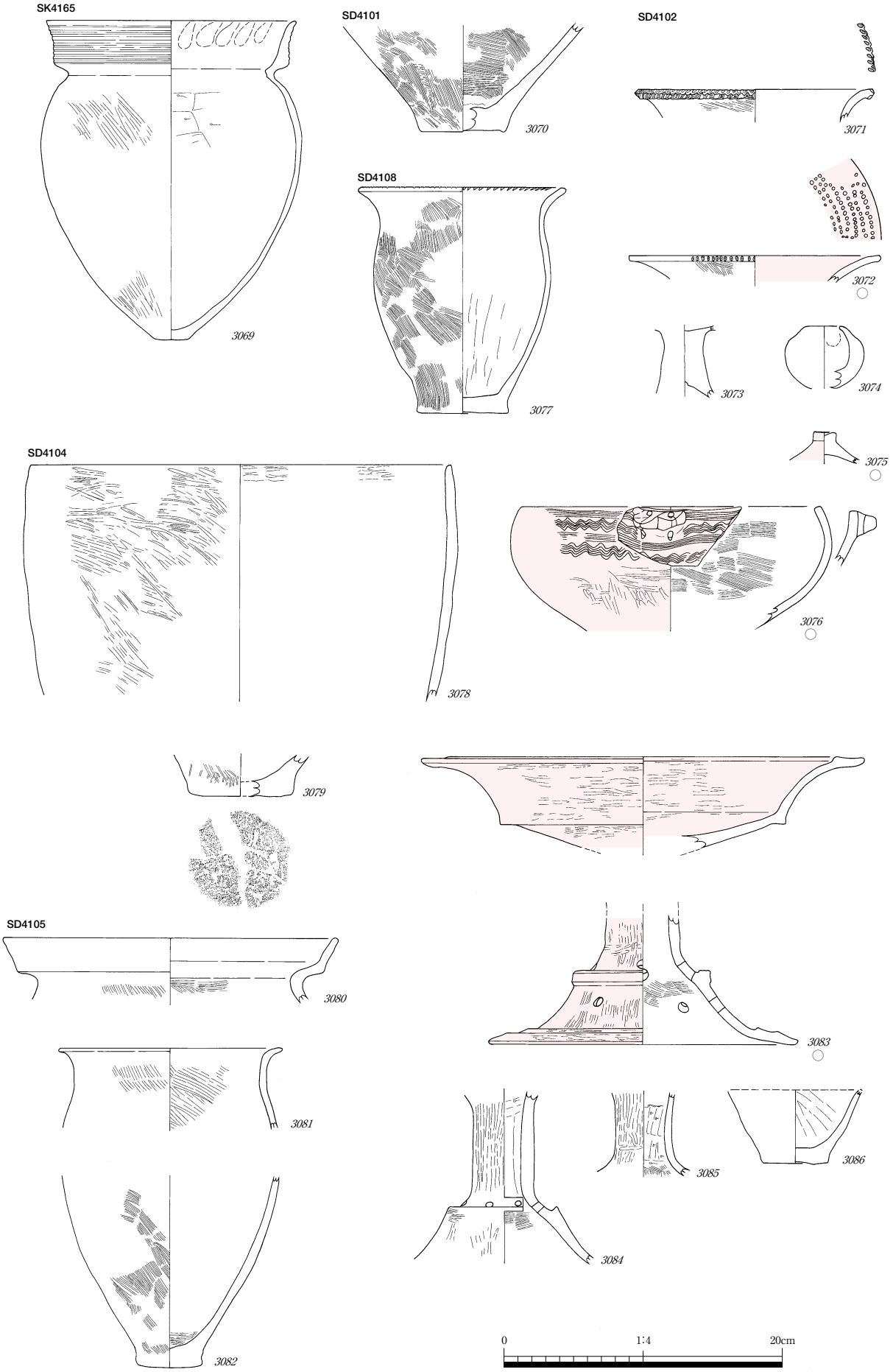






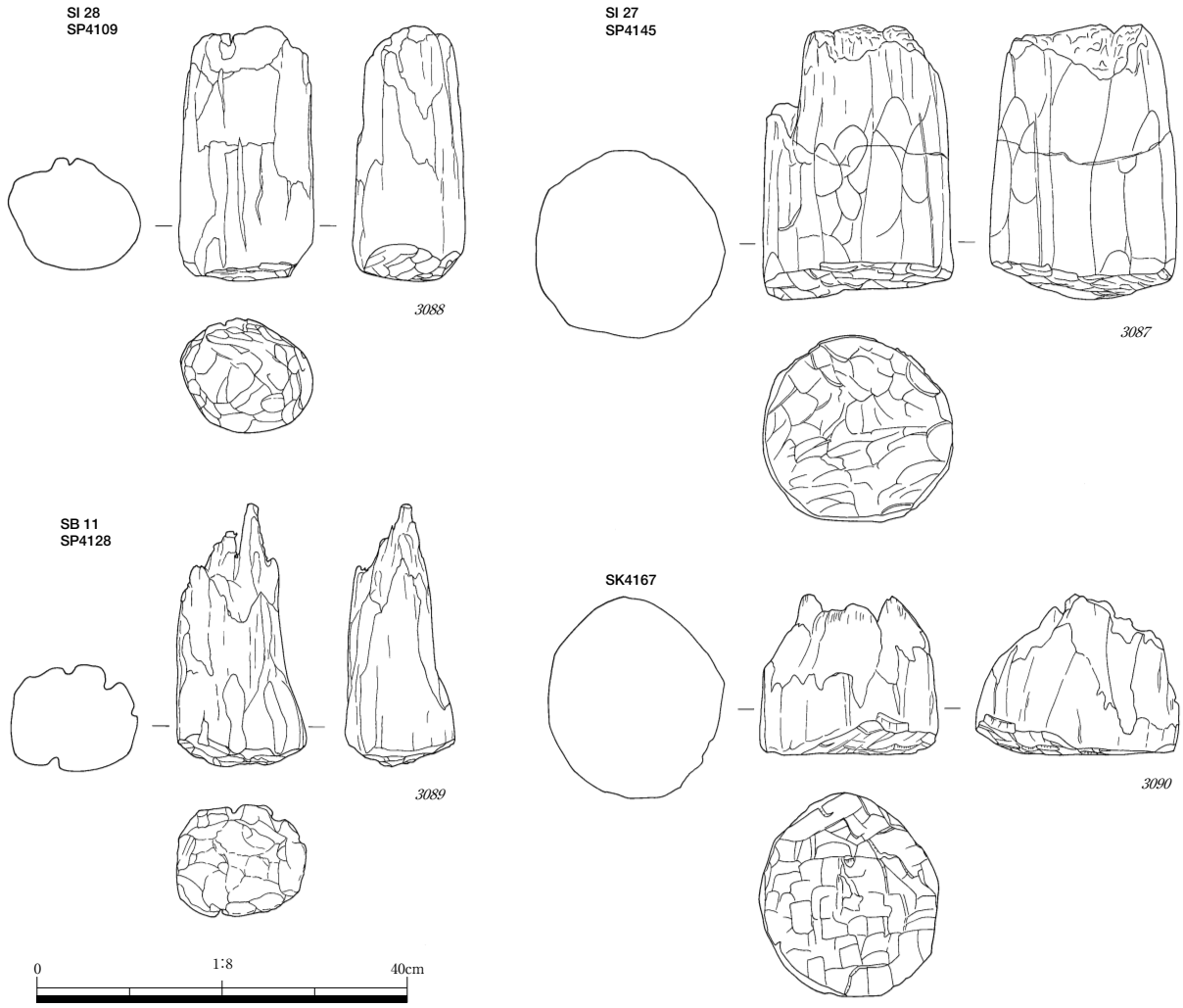
第351図　遺構実測図　(1/40)

C１・C２地区　1.ＳＫ4132　2.ＳＫ4154　3.ＳＫ4165　4.ＳＫ4167　5.ＳＫ4169
6～8.ＳＤ4101　9～11.ＳＤ4102　12・13.ＳＤ4105　14.ＳＤ4108

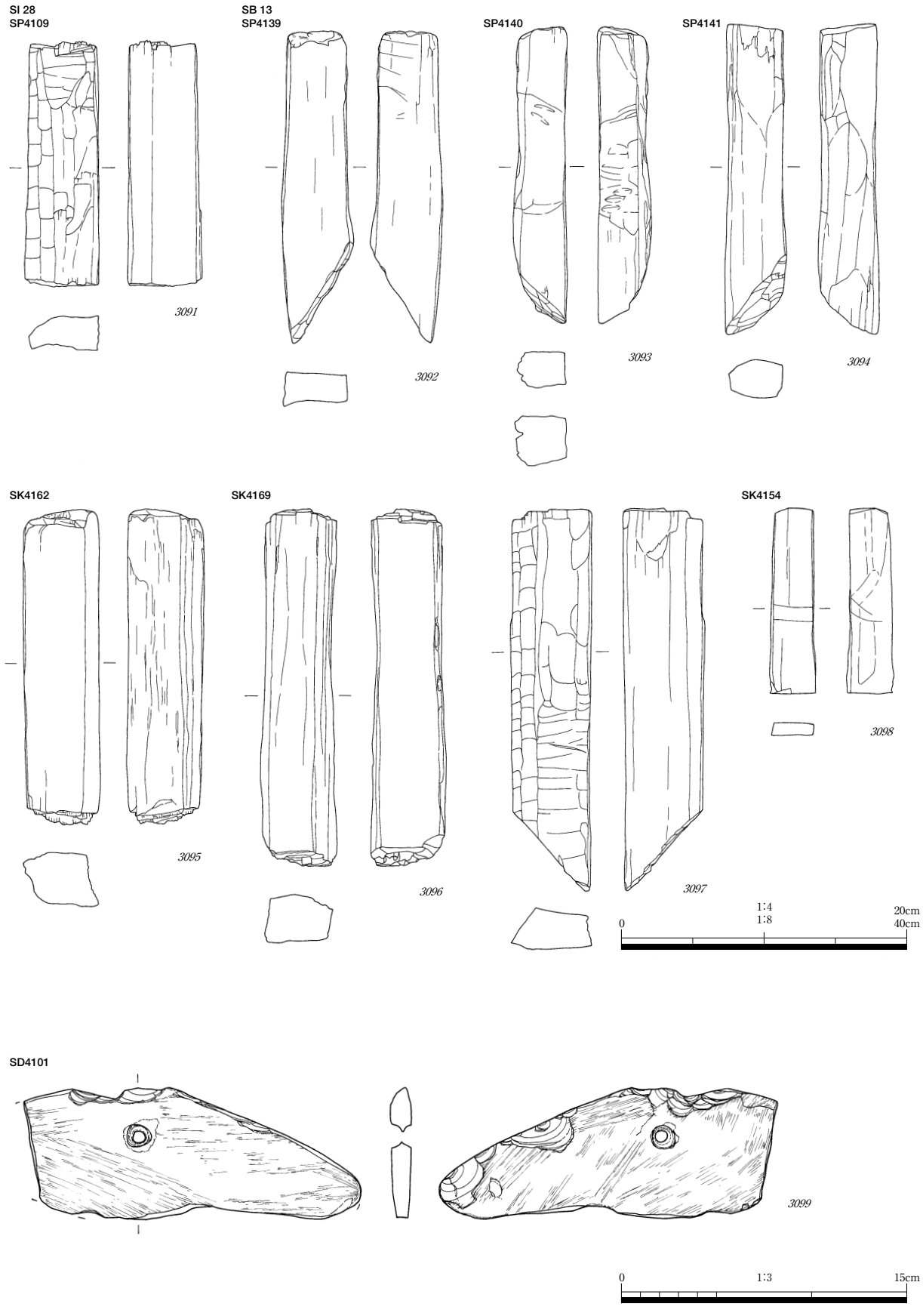


第352図　遺物実測図　(1/4)

C１地区　ＳＫ4165(*3069*)　ＳＤ4101(*3070*)　ＳＤ4102(*3071～3076*)　ＳＤ4104(*3078・3079*)
ＳＤ4105(*3080～3086*)　ＳＤ4108(*3077*)



第353図　遺物実測図　(1/8)
Ｃ１地区　ＳＩ27　ＳＰ4145(*3087*)　ＳＩ28　ＳＰ4109(*3088*)　ＳＢ11　ＳＰ4128(*3089*)
ＳＫ4167(*3090*)



第354図　遺物実測図　(*3099*　1/3, *3098*　1/4, *3091*～*3097*　1/8)

C１地区　ＳＩ28　ＳＰ4109(*3091*)　ＳＢ13　ＳＰ4139(*3092*)　ＳＰ4140(*3093*)
ＳＰ4141(*3094*)　ＳＫ4154(*3098*)　ＳＫ4162(*3095*)
ＳＫ4169(*3096*・*3097*)　ＳＤ4101(*3099*)

（2）C・D地区包含層出土遺物

A　土器（第355図）

出土した土器には，中期のものと後期のものがある。

3100・*3101* は中期の壺。

3100 は口縁端部に刻目を施し，外面には竹管文を2列以上施す。*3101* は口縁端部を面取りし，上下に刻目を施す。内外面とも横位のミガキ。

3102～*3111* は後期。

3102 は小型壺で胴部外面を細かい丁寧なミガキ，赤彩を施す。内面はヘラケズリの後左上がりのハケ。*3109* は台付壺で胴部外面ミガキ。台部は縦位のハケの後ナデ。内面は左上がりのハケの後，底部及び胴部中位ケズリ。

3103 は有段甕で外面の一部にスス付着。調整は外面ナデ，胴部内面左回りのケズリ。

3104・*3105* は高杯。*3104* は杯部上半外面に横位の細かい丁寧なミガキ。杯部下半は外面及び内面摩滅著しく不鮮明。

3106 は有段鉢で底部を穿孔し，有孔鉢に転用している。調整は口縁部をヨコナデ，体部外面をハケの後ミガキ。内面はケズリの後ミガキだが不鮮明。

3107・*3108* は台付鉢の台。*3107* は底部内面をハケ。*3108* は摩滅著しく不明。

3110 は有鈕蓋のつまみ部で外面ミガキ，内面ハケ。*3111* はミニチュア土器。

B　石製品（第355図，図版153）

出土した石製品には，扁平片刃石斧がある。

3112 は小型の扁平片刃石斧で，右側面に擦り切り痕が残る。石材は滑石か。使用痕分析によれば，刃部両面に直交する線状痕があり，横斧タイプの装着が想定される。

C　石製玉作関連遺物（第355図）

緑色凝灰岩荒割工程品が出土した。*3113* は淡緑色硬質の石材。*3114* は淡緑色軟質の石材で，全体に磨耗している。C地区の建物周辺では，石製玉作関連遺物が出土していない。*3113*・*3114* はB地区からの流れ込みと考えられる。　（伊藤・岡本・島田・新宅・髙栁・細辻・町田賢一・町田尚美）

参考文献

佐原　眞　1979「3　土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ』(2)　株式会社有斐閣

佐原　眞　1964「弥生式土器の制作技術」『紫雲出』詫間町文化財保護委員会

外山　和夫　1987「器形の消長と生活の変化」『季刊　考古学』第19号　雄山閣出版株式会社

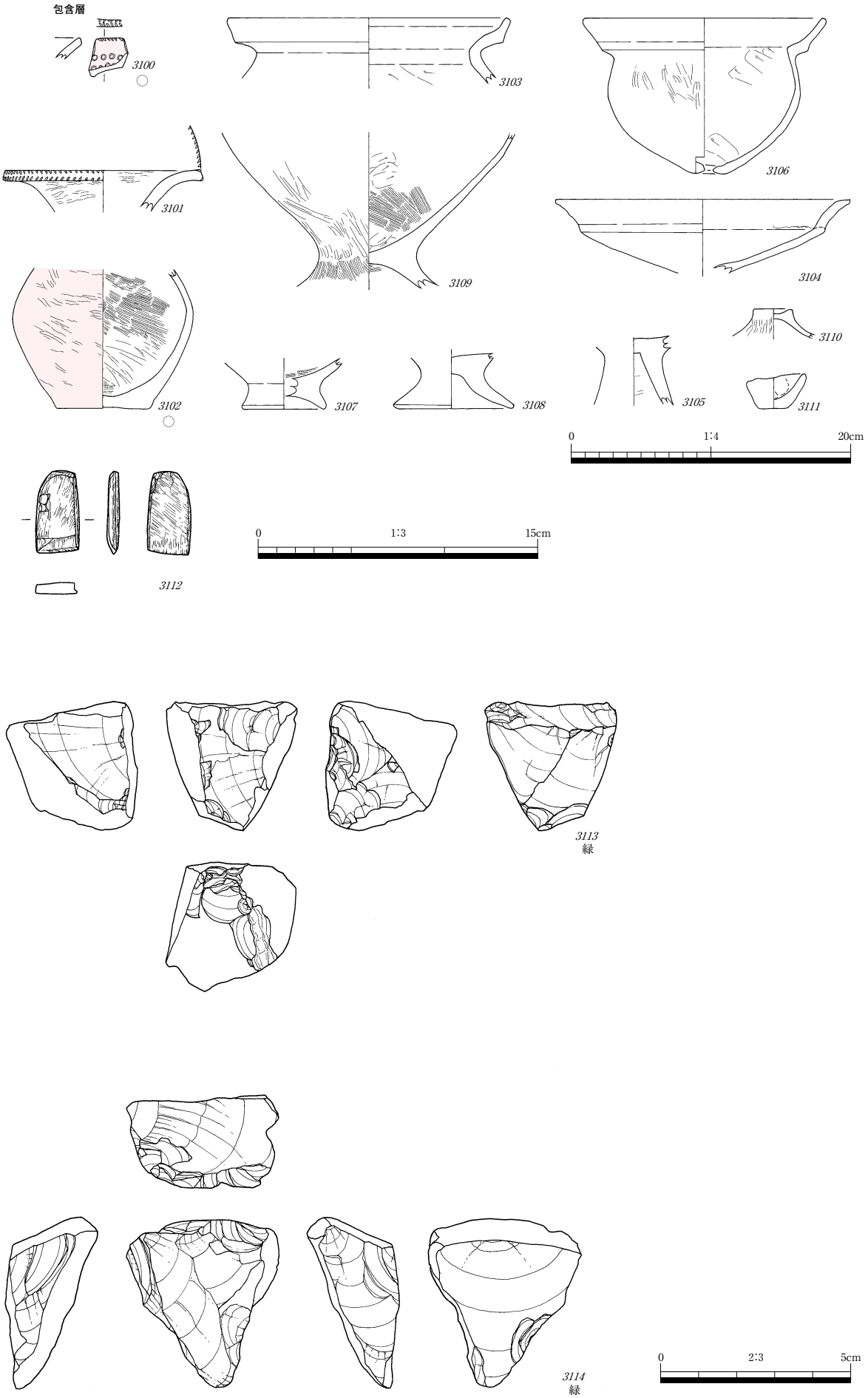
工楽　善通　2002「櫛歯文」『日本考古学事典』株式会社三省堂

寺沢　薫　1986「古式土師器の調整手法」『矢部遺跡－国道24号線橿原バイパスに伴う遺跡調査報告（Ⅱ）－』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊）奈良県立橿原考古学研究所

西村　歩　1996「土器の観察」『下田遺跡－都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書－』（『㈶大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第18集）財団法人大阪府文化財調査研究センター

山本　忠尚　2001『和英対照日本考古学用語辞典』株式会社東京美術

正岡　睦夫　1986「凹線紋・擬凹線紋」『弥生文化の研究』3弥生土器Ⅰ　雄山閣出版株式会社



第355図　遺物実測図　(*3113・3114*　2/3, *3112*　1/3, *3100～3111*　1/4)
C1・C3・D1・D2地区　包含層

第Ⅵ章　古墳時代の遺構・遺物

1　古墳時代の概要

古墳時代の遺構と遺物は，Ａ８地区からＣ１地区で検出した。これは弥生時代の遺構を検出した範囲とほぼ同じ広がりをもっているが，弥生時代が集落跡であったのに対し，この章で取り扱うのは弥生時代後期から古墳時代中期の自然流路と水田跡である。

Ｂ７地区からＣ１地区にかけては，規模の大きな自然流路を検出した。この自然流路からは縄文時代晩期から近世にわたる遺物が出土しているが，弥生時代の周溝式竪穴建物ＳＩ19の項でも述べたとおり，弥生時代においてもこの自然流路が利用され，また自然流路の肩近くから古墳時代前期後半の大型壺が出土していることから，その存続時期は弥生時代後期から古墳時代中期と推測している。

Ａ８地区からＢ６地区にかけては，調査前に行ったプラント・オパール分析の結果をふまえ，Ⅳａ層，Ⅳｂ層上面で，２時期の水田を検出した。水田の時期は弥生時代後期後半から古墳時代中期と推測するが，これは水田面上面で出土した古墳時代の土師器の年代を下限とし，その下層である弥生時代の集落から出土した遺物を上限とするものである。平面での水田面の検出は困難であったが，水田に付属する小畦畔・大畦畔・水口・水路などを検出し，また，弥生時代の道路ＳＦ3526の項で述べたとおり，弥生時代後期から続く道路跡を検出している。平面的に水田を検出できなかったＢ７・Ｃ１地区においても，プラント・オパール分析では高い数値を得ており，この一帯では広く水田経営が行われていた可能性が高い。

包含層出土遺物では，Ⅲ層と水田検出面であるⅣ層から出土した古墳時代の遺物を掲載した。前期から後期にわたる遺物が出土しているが，特に水田面近くに中期の遺物が多い。県内では調査例の少ない時期であるため，貴重な例になるとともに，今後の資料の増加を待って，富山県下における古墳時代の人々の営みを明らかにしていきたい。

2　Ａ・Ｂ・Ｃ地区

（1）Ｂ７～Ｃ１地区の遺構と遺物

4001号自然流路（ＳＤ4001，第357～359図，図版169）

Ｂ７地区の北東部からＣ１地区の南西部にかけて，西側へ湾曲しながら流れる自然流路である。Ｂ７・Ｃ１地区は地山近くまで削平を受けており，この流路も弥生時代の遺構検出面で確認したが，後述するように弥生時代後期から古墳時代中期にかけて流れていたと考えるため，第Ⅵ章で扱うこととする。流路の幅は約70m，深さは約1.7mを測る。流路の右岸は砂礫が厚く堆積して，中州状になり，左岸の落ち込みはややなだらかになっている。Ｂ７地区の南東で，弥生時代後期の竪穴建物ＳＩ19から続く溝ＳＤ4011がＳＤ4001に流れ込む地点では，ＳＤ4001の肩からの落ち込みが急傾斜となり，流路肩に平行して原木が並べられていた。これは護岸工事を行ったものかと考えられる。

遺物は縄文土器，弥生土器，土師器・須恵器，灰釉陶器・珠洲，越中瀬戸・肥前陶磁，木製品，石製品，石製玉作関連遺物など多岐にわたって出土しており，縄文時代から近世まで，その年代に大きな幅がある。流路の最下層の礫と砂が互層に堆積するところからは，縄文土器や弥生土器などが出土

しているが，氾濫などによって流されてきたものと考えられる。流路の下層から中層にかけては，主に弥生時代後期の土器が出土している。流路の中層から上層にかけては埋土が黒色土を主体とし，古墳時代中期ごろの土師器・須恵器が出土している。特に左岸の肩部からやや落ち込んだところで，ほぼ完形の土師器の大型壺（*3437*）が潰れた形で出土しており，この頃には流路がおおよそ埋没していたと考えられる。流路の最上層からは古代以降の遺物が少量出土しており，これは混入と考えている。弥生時代後期に流路が利用されていたことと，流路の上層から出土した土師器大型壺のことを考え合わせると，主な存続時期は弥生時代後期から古墳時代中期と推測する。

遺物は種類ごとに分けて記述する。

縄文土器（第360図，*3115*～*3118*，図版175・176）

3115 は椀形の鉢か。文様は口縁端部に沈線１条，胴部に平行沈線１条とその下に左上から右下方向に斜行沈線（三角文か）を数条施し，口縁部には無文帯を持つ。文様の沈線は描線が細い。時期は大洞Ａ式併行期か。*3116* は浅鉢の胴部。文様はＬＲ縄文と描線の太い玉抱き三叉文・２条の平行沈線間に連続刺突を施す。時期は御経塚式。*3117* は深鉢の胴部。文様はＬＲ縄文に描線の太い平行沈線・鍵手文の一部が見える。時期は中屋２式併行期。*3118* は深鉢の口縁部と胴部下半～底部で接合しない。口縁部は端部を外側に折り返す。ナデ調整。胴部下半は外面にＬＲ縄文，内面に炭化物が厚く付着する。底部は外面にＬＲ縄文の後にナデ，内面は胴部と同様に炭化物が厚く付着する。時期は縄文時代晩期前葉～中葉か。

弥生土器

弥生土器は弥生時代中期後葉・後期・終末期に属すると考えられる土器が出土している。また天王山系土器も出土している。

弥生時代中期後葉（第360・361図，*3119*～*3149*，図版175～177）

甕（*3119*～*3127*）　いずれも口縁部は外反して開き，胴部は内外面ハケメ調整で，*3125* の内面はハケ後ナデ調整する。*3119* は口縁端部内面に刻目文を施す。*3120* はほぼ完形で，口縁端部内面をユビオサエによる波状口縁にする。*3120*～*3123*・*3126* は口縁端部外面に刻目文，*3126* は口縁部内面に綾杉文を施文する。*3126* は放射性炭素年代測定を行っており，^{14}Ｃ年代で1850±40と測定されている。*3127* は胴部から開いて口縁部が外反する。胴部外面はハケメ調整，内面のハケは不鮮明で，下半はナデ，底面もハケメ調整する。*3124* は小型の甕で，口縁端部外面に刻目文，胴部内外面を粗いハケメ調整し，その後内面はヘラナデ調整する。

壺（*3129*～*3146*）　*3129*・*3130* は口縁端部外面を面取り後，ハケ状工具で斜格子目文を施文する。*3131* は口縁端部外面に上下方向から刻目文を施す。*3132* は内外面をミガキ調整後赤彩し，口縁端部は上下からハの字状に刻目を施す。*3133*～*3140* は口縁部内面にも施文するもので，*3133* は口縁端部外面に下方から刻目文と，内面に竹管２個１組を原体とする刺突文を施す。*3134*・*3135* は口縁端部外面に刻目文，内面に刺突文を施す。*3136*～*3140* は内面に綾杉文，*3136*・*3137* は端部外面に下方から刻目を施す。*3141* はほぼ完形で，最大径を胴部中位にもつ。口縁端部外面に下方からの刻目文，胴部内外面ともにハケとナデで調整し，底部外面はミガキを施す。*3142* は壺の胴部で，外面はハケ後ミガキ，肩部に２条の沈線と竹管による刺突文を施す。*3143* は無頸壺。口縁端部外面から施文しはじめ，櫛描波状文と直線文を交互に３列施文する。*3144* は口縁内面に菱形文と綾杉文，外面に刻目文を施文する。*3145*・*3146* は壺の頸部で，*3145* は貼り付けた突帯の上に斜格子文，*3146* は貼り付けた突帯を２条の沈線で３段に区画し，刻目文を施す。*3147*～*3149* は壺もしくは甕

の底部で，*3147*・*3148* は上げ底となり，*3149* は底面はケズリ，底面から底部に黒斑が見られる。

弥生時代後期（第362～365・368図，*3150*～*3219*・*3221*～*3224*・*3226*～*3229*・*3233*・*3240*・*3286*・*3287*・*3291*～*3293*，図版177～180）

甕（*3150*～*3193*）　*3150*～*3159* は擬凹線甕。*3150*～*3152* は付加状となる口縁端部外面に擬凹線を施す。*3151* は摩滅が激しく，擬凹線が消えている。*3153* は口縁部外面が下垂し，肩部に刺突文を施す。*3155*・*3156*・*3158*・*3159* は口縁部が長く伸び，端部は肥大する。*3155* は肩部に直線文を施す。*3157* は口縁端部がやや尖り，頸部内面はナデで面取りする。*3160*～*3164*・*3286*・*3287*・*3291*・*3292* は有段甕。胴部内面はケズリを施す。*3163*・*3164* は肩部に刺突文を施す。*3165*～*3179* は受口甕。*3165*～*3177* は口縁部外面に刺突文のある刺突受口甕で，*3165* は肩部に波状文，*3166*・*3167* は直線文と波状文，*3168* は直線文と列点文を施文する。*3170*・*3171* は肩部にも刺突文を施す。*3172* は肩部にのみ刺突文を施す。*3180*～*3184* は平縁甕。*3185*～*3192* は付加状甕。*3186*・*3187* は口縁部を外反させた後，口縁端部を上方に曲げて，有段状にする。*3191* の底部はやや凹む小平底，*3190* の底部は中央が凹む。*3190* と *3192* は口縁端部外面に刻目文を施す。*3193* はミニチュア土器で甕形。口縁は丸縁で，胴部外面はヘラナデ調整する。

壺（*3194*～*3205*）　*3194*・*3195* は擬凹線短頸壺。*3195* は頸部から胴部をハケ調整し，底部は平底。*3196*～*3199* は短頸壺の口縁部。*3197* は口縁端部が下垂する。*3196* は口縁端部内面，*3198*・*3199* は外面を面取りする。*3200*・*3201* は台付壺の胴部の突帯部分。*3200* は内外面ともに摩滅しているが，*3201* は内面ハケ，外面ミガキを施す。*3203*～*3205* は甕もしくは壺の底部。*3204* は底面に葉脈状痕がある。

器台（*3206*～*3209*）　*3206*～*3208* は受部で，口縁部の下部を下垂させ，*3206* は擬凹線と円形浮文，*3207* は円形浮文を施文する。*3209* は器台の脚部で3段3箇所の透孔をもつが，3段目は上2段の位置よりずれている。

高杯（*3210*～*3219*・*3221*～*3224*）　*3210*～*3213* は有段高杯で，*3210* は深めの杯部，*3213* は口縁端部内面を面取りし，ミガキ調整する。*3214*～*3216* は拡張有段高杯で，*3215* は棒状の脚基部からハの字状に脚裾部が開く。*3216* は拡張した口縁端部内面に擬凹線を施し，外面の屈曲部に下方から刻目文を施す。*3217*～*3219* は脚部。*3217* は透孔6箇所，脚裾端部は付加状になる。*3218*・*3219* は脚基部で，*3219* はタテミガキの後に沈線文9条を施文する。*3221*～*3224* は器台・高杯の裾部。*3221* は有段の脚裾部に擬凹線，脚裾端部上面に刻目文を施す。*3222* は脚裾端部上面に半截竹管文を施文する。*3224* はハの字状に開く脚部である。

鉢（*3226*～*3229*・*3233*～*3240*）　*3226*・*3227* は有段鉢で，*3226* は肩部に波状文を施文する。*3227* の底部は焼成後に穿孔されたもの。*3228*・*3237* は無頸鉢か。*3229*・*3233*～*3235* は有孔鉢。尖り底の*3229* と，平底の*3233*～*3235* に分けられる。*3229* は体部が内湾する。*3236* は台付鉢の脚部か。*3239* は把手付鉢。把手は剥離している。口縁部内外面はナデ，体部内外面はミガキ調整する。*3240* は把手。*3238* はミニチュアの鉢で，円板状の粘土の中心を凹ませた程度のもの。

弥生時代終末期（第364・365・371図，*3220*・*3225*・*3230*～*3232*・*3241*～*3254*・*3368*・*3369*，図版179・180・185）

甕（*3246*～*3249*）　いずれも擬凹線甕で，*3247*・*3248* は口縁部内面に指頭圧痕がある。

高杯（*3220*・*3225*・*3250*・*3252*）　*3250* は杯部内面に漆が付着している。

鉢（*3230*～*3232*・*3251*・*3253*・*3254*）　*3251*・*3253*・*3254* は有段鉢で，口縁部と体部の境に

段を持ち，口縁部は開いて伸びる。*3230*～*3232*は尖り底の有孔鉢。*3254*は鉢の把手で，体部に逆U字型に粘土紐を貼り付けたもの。

蓋（*3241*～*3245*・*3368*・*3369*）　*3241*～*3243*・*3368*はつまみ部のみで，*3241*・*3242*はつまみ部が大きく凹み，*3242*は孔が1箇所あけられている。*3368*はつまみ部内面に刺突痕がある。*3369*は低いつまみと内湾する口縁部をもつ。*3244*・*3245*は返し付蓋である。

天王山系土器（第366・367図，*3255*～*3285*，図版180・181）

3255～*3285*は天王山系の土器。小破片ばかりであるため，全体の復元が可能なものは少ない。そのため，器種は甕か壺かいずれかであろうが，区別がつかないものが多い。

3255～*3261*・*3263*・*3264*はくの字状口縁の甕で，*3255*～*3259*は口縁端部に刻みを施す。*3255*は外面にススが厚く付着し，文様が不明瞭であるが，口縁部に平行沈線文と連弧文を2条ずつと下開きの連弧文を1条施す。口縁端部は外面から刻み，突起部にも刻みを施す。*3257*は口縁部にＬＲ縄文の後，平行沈線文と山形文を2条ずつ施す。口縁端部は縄文の後に両側から刻み，突起部を持つ。*3259*は口縁部外面にＬＲ縄文，内面にも一部縄文が見える。口縁端部は両側から刻み，突起部にも刻みを施す。*3261*はＬＲ縄文の後，頸部に交互刺突文を施し，口縁に焼成後の穿孔がある。口縁端部は上方につまみ上げ，外面に刻み，突起部にも刻みを施す。*3256*は口縁部にＬＲ縄文，端部に外面から刻み，その上に沈線を1条施す。*3258*は外面にＬＲ縄文の後，いびつな平行沈線文4条，内面にＬＲ縄文の後，いびつな平行沈線文2条を施す。口縁端部はＬＲ縄文。ススが付着せず内面にも文様がある事から，他の器種の可能性がある。*3260*は頸部がすぼまるタイプで口縁端部を面取りし，外面はＬＲ縄文，内面は輪積み痕が残る。下老子笹川遺跡では他にこのタイプは見られず，時期または系統の違いが窺える。外面と口縁内面にはススが厚く付着。*3263*はやや直立気味の口縁。口縁内外面にはＲＬ縄文，ススが厚く付着。*3264*は口縁内外面にＲＬ縄文，端部にも縄文を施す。

*3262*は球胴状の壺。頸部に平行沈線文と下開きの連弧文？を施す。その形状は東北地方には見られるが，県内には類例が見られない。調整は外面ＲＬ縄文，内面ナデ。

3265～*3283*は全体を復元できなかった小破片。*3265*～*3270*は口縁部の破片で甕と考えられる。*3265*は外面にＲＬ縄文に描線の細い平行沈線文2条・山形文3条，口縁端部に外側からの刻みを施す。*3266*はＲＬ縄文に描線の細い山形文2条を施す。*3267*は外面に描線の太い平行沈線文と連弧文2条，内面に平行沈線文1条，口縁端部に両側から刻み，突起部にも刻みを施す。*3268*は口縁端部が外側に強く屈曲するもの。外面の文様は，ＲＬ縄文に描線の太い平行沈線文・連弧文・下開きの連弧文を施す。*3269*は外面にＬＲ縄文の後，描線の細い平行沈線文2条・連弧文2条・山形文？2条，内面にＬＲ縄文，口縁端部に外側からの刻みを施す。*3270*は外面にＬＲ縄文の後，交互刺突文の崩れたハの字状刺突文・連弧文，内面にＬＲ縄文，口縁端部に両側からの刻みを施す。また焼成後の穿孔が見られる。*3271*～*3283*は胴部の破片。*3271*はＲＬ縄文に描線の細い平行沈線文・交互刺突文・連弧文？を施す。*3273*は交互刺突文・平行沈線文2条・連繋渦文2条を施す。*3274*は壺の胴部上半部分。外面の文様は連弧文2条・下開きの連弧文2条・平行沈線文2条・連弧文。*3272*・*3276*は描線の太い重弧文の破片で壺か。*3276*は平行沈線文の間に背中合わせの弧線が入る。旧福岡町教育委員会調査地区[注1]や頭川遺跡[注2]にも同類のものがある。*3277*は重菱形文が工字文風になったもの。*3281*は平行沈線文の間に背中合わせの弧線を1対ずつ配するもの。地文はＬＲ縄文であるが，一部に撚糸文？が見える。*3282*は交互刺突文・平行沈線文2条・単位が不明な沈線文（波状文か）を施す。*3275*・*3278*～*3280*は宇津ノ台式土器系統[注3]の重菱形文の破片で，*3278*・*3279*は同一個体。

注1　栗山雅夫　1998『富山県福岡町下老子笹川遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会
注2　上野章　1974「高岡市頭川遺跡」『大境　第5号』富山考古学会
注3　石川日出志　1990「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学　第3号』北越考古学会

3284 ・*3285* は底部の破片で壺と考える。*3284* は外面を底部下半に左下から右上へ刺突状に斜行短線，その上に３条以上の連弧文を施す。内面はケズリ。*3285* はＬＲ縄文の底部で，ユビオサエが残る。

古墳時代の土器

土師器・須恵器が出土している。土師器は古墳時代前期・中期・後期に分けて記述する。

土師器（第368～372図，図版182～186）

古墳時代前期

甕（*3288* ・*3290* ・*3294* ～*3308* ・*3310* ～*3312*）　*3288* ・*3290* は有段甕で，口縁部に段を持つ。*3294* ～*3308* はくの字甕で，口縁端部を面取りするもの（*3296* ～*3299*），尖らせるもの（*3300* ・*3301*），丸く収めるもの（*3302*），口縁端部の角度を変えて外反させるもの（*3305* ～*3308*）がある。*3294* は口縁部外面に指頭圧痕が残り，ヘラナデで内外面ともに調整するが，全体的に雑なつくりとなっている。*3295* は胴部外面にススが厚く付着する。*3310* は甕の胴部。*3311* は台付甕の台部で，底面は面取りする。*3312* は小型甕。

壺（*3289* ・*3313* ～*3331*）　*3313* ～*3321* は有段壺。*3313* は口縁外面に擬凹線を入れた後，ヨコミガキする。*3315* は内外面に粗いハケを施し，外面にススが付着する。*3316* は口縁部が伸びて緩やかに外反する。*3317* は内外面ハケメで，口縁部はやや内湾する。頸部内面に接合痕が残る。*3318* は口縁部外面に竹管文・沈線３条・竹管文・刺突文が施文され，内外面赤彩される。*3319* ～*3321* は口縁部が強く外反して，開くもの。*3322* は胴部外面に直線文７条・波状文７条・円形浮文が施文される。*3323* は大型壺で，流路の肩よりやや落ち込んだところから，ほぼ完形のまま潰れた状態で出土したものである。口縁部は有段となり，短く直立する。胴部は球形で厚手，底部は平底だが，自立は難しい。焼成は悪く，また器面の摩滅も激しいが，外面はハケ，内面の上半はケズリ，下半はハケで調整する。底部には黒斑が見られる。大型壺の完形品は日本海側の古墳の土器棺および供献土器などに類例があり，それらの土器とは性格が違うが，形が酷似していることから，前期後半から中期初頭に位置付けたい[注4]。*3324* ～*3326* は直口壺。*3325* ・*3326* は口縁部が内湾する。*3325* は胴部との境に沈線１条が入る。*3326* は潰れた球胴で丸底。*3327* ～*3331* はくの字状の口縁部をもつ。*3329* ・*3330* は広口で，口縁部はほぼ直立する。*3331* は胴部最大径が中位よりやや下になり，底部は平底となる。内外面ハケメで，底部外面タタキ調整する。

高杯（*3332* ・*3333* ・*3335* ・*3336* ・*3338* ～*3341* ・*3343* ～*3349*）　*3332* ・*3333* は伸びた口縁部が緩やかに外反するもの。*3332* は内外面赤彩，*3333* は雑なつくりである。*3335* ・*3336* は口縁部がやや内湾気味に，大きく直線的に伸びるもの。*3338* ～*3341*・*3343* ～*3348* は脚部で，ハの字状に開くもの。*3348* は脚裾部でわずかに屈曲して開く。*3339* は杯部の裏側に刺突痕がある。*3343* は杯部と口縁部の境に稜をもつ。*3344* ・*3345* は短い脚部で，いずれも赤彩する。*3346* ・*3347* は脚裾端部を丸く収める。*3349* はゆがみが大きく，厚手の雑なつくりである。器台に例のある器形で，椀形の杯部と内湾する脚部をもち，脚裾端部は内側が肥厚する。

器台（*3350* ～*3360*）　*3350* ～*3356* は小型器台。*3350* ～*3352* は受部端部をわずかにつまみ上げ，*3353* は端部を屈曲させる。*3354* ～*3356* は脚部で，*3354* ・*3355* は内外面に赤彩する。*3357* ～*3360* も脚部で，*3357* は内湾，*3358* ・*3359* は外反して開く。いずれも赤彩する。*3360* はいびつで雑なつくりのもので，受部と脚部の境に指頭圧痕を残す。

鉢（*3361* ～*3366*）　*3361* ・*3362* は小型有段鉢で，内湾する体部とほぼ直立する口縁部との間に

注４　赤澤徳明氏のご教授による。記して謝意を表します。

わずかな段があるもの。*3363* は小さな体部と長く伸びて外に開く口縁部をもつ有段鉢。内外面はミガキ調整で，底部付近の状態から台付鉢の可能性がある。*3364* は台付鉢で，浅い体部から屈曲して短い口縁部がつく。外面ケズリで，内面ヘラナデ調整する。*3365* ・*3366* は台付鉢の脚部かと考えられるもの。

蓋（*3367*）　*3367* は柱状のつまみで，鈕頂部は平らになる。

古墳時代中期

小型丸底壺（*3374* ～*3377*）　いずれもやや内湾する直立した口縁部に，潰れた球形の胴部をもつ。*3374* ・*3375* は丸底，*3376* ・*3377* は上げ底となる。

高杯（*3334* ・*3337* ・*3342* ・*3378* ～*3381* ・*3384* ～*3388*）　*3337* は小さな杯部と緩やかに外反する口縁部をもち，脚部は棒状でややふくらみ，脚裾部で屈曲して開く。杯部内面から脚部外面はナデ調整する。*3378* は杯部と口縁部の境に稜を持ち，口縁端部が外反する。*3380* ・*3381* はやや内湾して開く口縁部をもつ。*3380* 外面に輪積痕を残す。*3381* は短い脚基部と，強く屈曲して広く開く脚裾部をもつ。*3384* ～*3388* は脚部のみで，*3384* ・*3385* も同様の脚部。*3386* ～*3388* は，上記の脚部よりも脚基部が長いが，脚裾部は強く屈曲し，広く開く。

鉢（*3373*）　深く内湾する体部から強く屈曲する短い口縁部がつく。体部外面はハケ後ナデ，内面はナデで輪積痕が残る。

古墳時代後期

椀（*3370* ～*3372*）　*3370* は口縁端部がわずかに屈曲して外反する。外面には輪積痕が残る。*3371* は口縁端部がやや尖るもので，体部外面は摩滅しているが，内面はミガキ，底部はケズリ調整する。*3372* は口縁端部内面を面取りし，外面はハケ，内面はミガキ調整で赤彩する。

高杯（*3382* ・*3383*）　*3382* ・*3383* は杯部が内湾し，椀状となる。*3383* の脚部は短い脚基部と，強く屈曲して広く開く脚裾部をもつ。

甑（*3389* ・*3390*）　*3389* は口縁部と把手部のみ図化したもので，同一個体。外面は粘土紐接合痕が残り，内面はススが付着する。

須恵器（第373図，図版186・188）

蓋（*3391* ・*3392*）　*3391* ・*3392* は杯Ｈ蓋である。天井部はロクロヘラ削りが施され，体部は直線的に立ち上がる。天井部と体部の境には，明瞭な稜が見られる。ＴＫ47～ＭＴ15期並行頃のものと考えられる。

杯（*3393* ～*3395*）　*3393* ・*3394* は杯Ｈである。底部はロクロヘラ削りを底部中位まで施し，受部は細く挽き出され，立ち上がりはやや外反気味または内斜する。端部は丸く納めるもの（*3393*）と，内斜し，端部内面に１段の稜を設けるもの（*3394*）が見られる。これらはＴＫ47～ＭＴ15期並行頃のものと考えられる。*3395* は口縁部を欠損しているが，受部の状況などから前者と同様な時期のものと思われる。

甕（*3396*）　大きく外反した口縁部を持ち，突帯状の稜が下方に付く甕で，口縁部周辺には波状文が巡る。古墳時代後期頃のものと考えられる。

壺（*3397*）　口縁部外面に面を取り，頸部にはロクロナデを施す。ＴＫ43～209期並行頃と考えられる。

古代の土器

古代の土器は須恵器・土師器が出土している。

須恵器（第373図，*3398*～*3412*，図版186～188）

蓋（*3398*・*3399*）　*3398*は山笠形の天井部を持ち，扁平な擬宝珠形のつまみを持つ。口縁端部は外方で内斜し，断面はやや丸みを持って接地する。*3399*は扁平形の天井部を持ち，端部は丸みを持って接地する。天井部外面の欠損部分に墨書があり，全容は不明であるが「成」や「浅」などの右側の一部かと考えられるものが書かれていた。前者は８世紀後半頃，後者は８世紀後半～９世紀代としたい。

杯Ａ（*3400*～*3408*）　底部が回転ヘラ切りで，底部から口縁端部へ内湾しながら直線的に立ち上がるもの（*3400*・*3402*・*3406*・*3407*）や，体部上位で緩やかに角度を変え外反して口縁端部に至るもの（*3401*・*3403*・*3404*・*3408*）などある。これらの時期はおおむね８世紀後半頃のものと考えられる。*3405*は底部から口縁端部へ外反しながら立ち上がり，全般的に器高は浅く口縁部は開く。９世紀中葉～末葉頃のものと考えられる。

杯Ｂ（*3409*～*3411*）　*3409*・*3410*は高台が貼り付け高台で，細く平行に接地する。底部から口縁端部にかけては，内湾しながら立ち上がり，体部上位で緩やかに角度を変え外反して口縁端部に至る。いずれも墨書があり，高台内側に「節万呂」と書かれていた。８世紀後半のものと考えられる。*3411*は高台径が10.4㎝と大きく，高台は外傾して接地する。底部から口縁端部へ内湾しながら立ち上がり口縁端部に至る。時期は８世紀前半頃と考えられる。

稜椀（*3412*）　金属器模倣の稜椀で，底部を欠損して出土したものである。体部中位には明瞭な稜が見られ，角度を変え外反し口縁端部に至る。８世紀中葉から末葉頃のものである。

土師器（第373図，図版187）

椀Ａ（*3413*・*3414*）　底部は回転糸切り未調整で，底部から口縁端部にかけて内湾しながら立ち上がり，口縁端部に至るものである。９世紀後半～10世紀初頭頃と考えられる。

土製品（第360図，図版175）

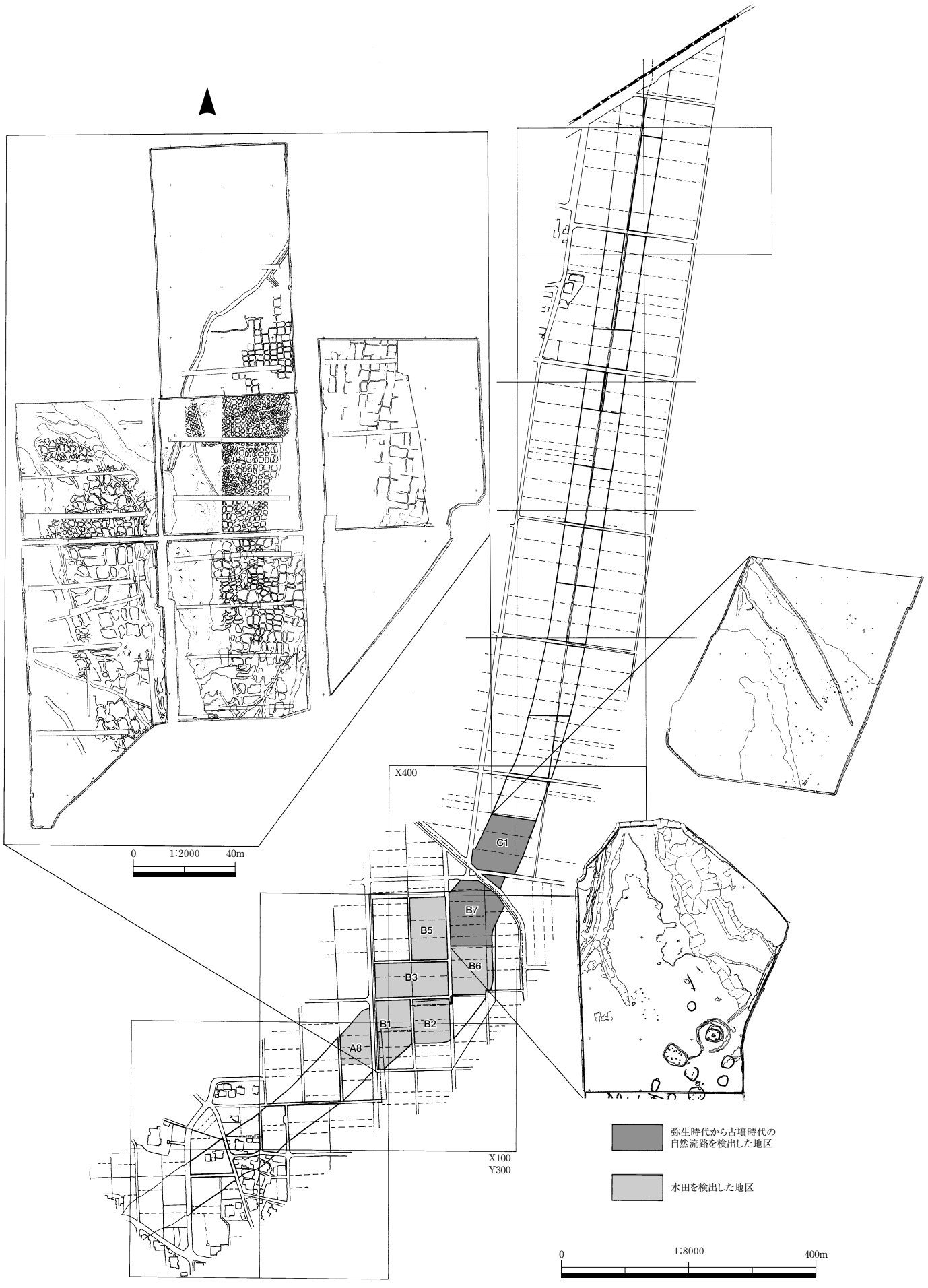
*3128*は土製品。甕などの破片を丸く打ち欠いて，側面を磨いて整形したものである。時期は不明。

石製品（第374図，*3415*～*3418*，図版149・151・194）

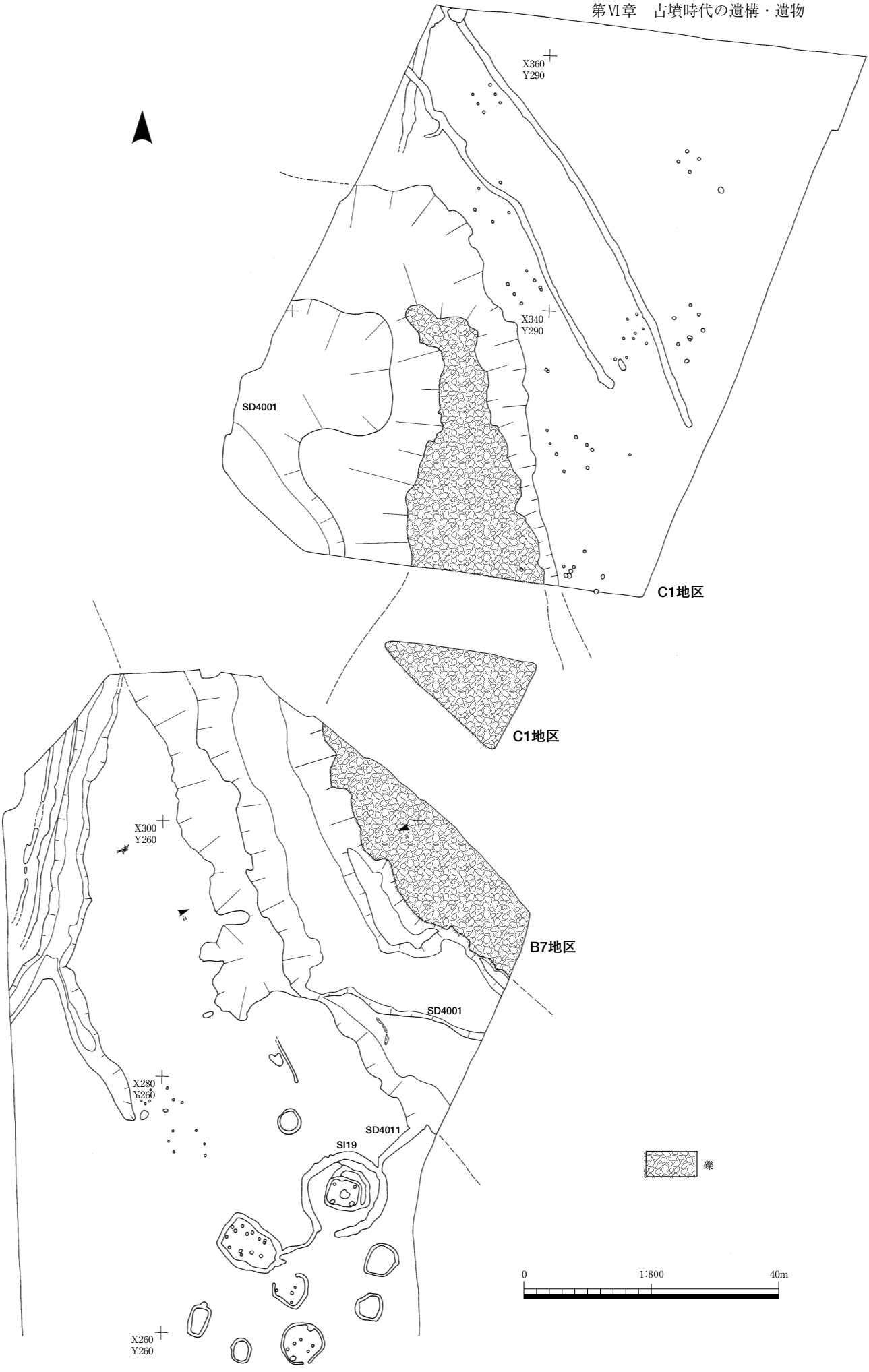
*3415*は流紋岩の剥片の表面に二次加工を施したもの。表面天側は二次加工により左右２箇所に括れが生じており，縄文時代晩期の石匙と思われる。*3416*は安山岩製の石鏃。*3417*は板状に剥離した剥片の両縁に剥離を施したもの。石包丁や鋸等の用途が考えられる。表面や側面の一部に剥離を施した後にできたと思われる線状の擦跡がみられる。*3418*は叩石。天地面に叩打痕がみられる。

石製玉作関連遺物（第374図，*3419*・*3420*，図版164）

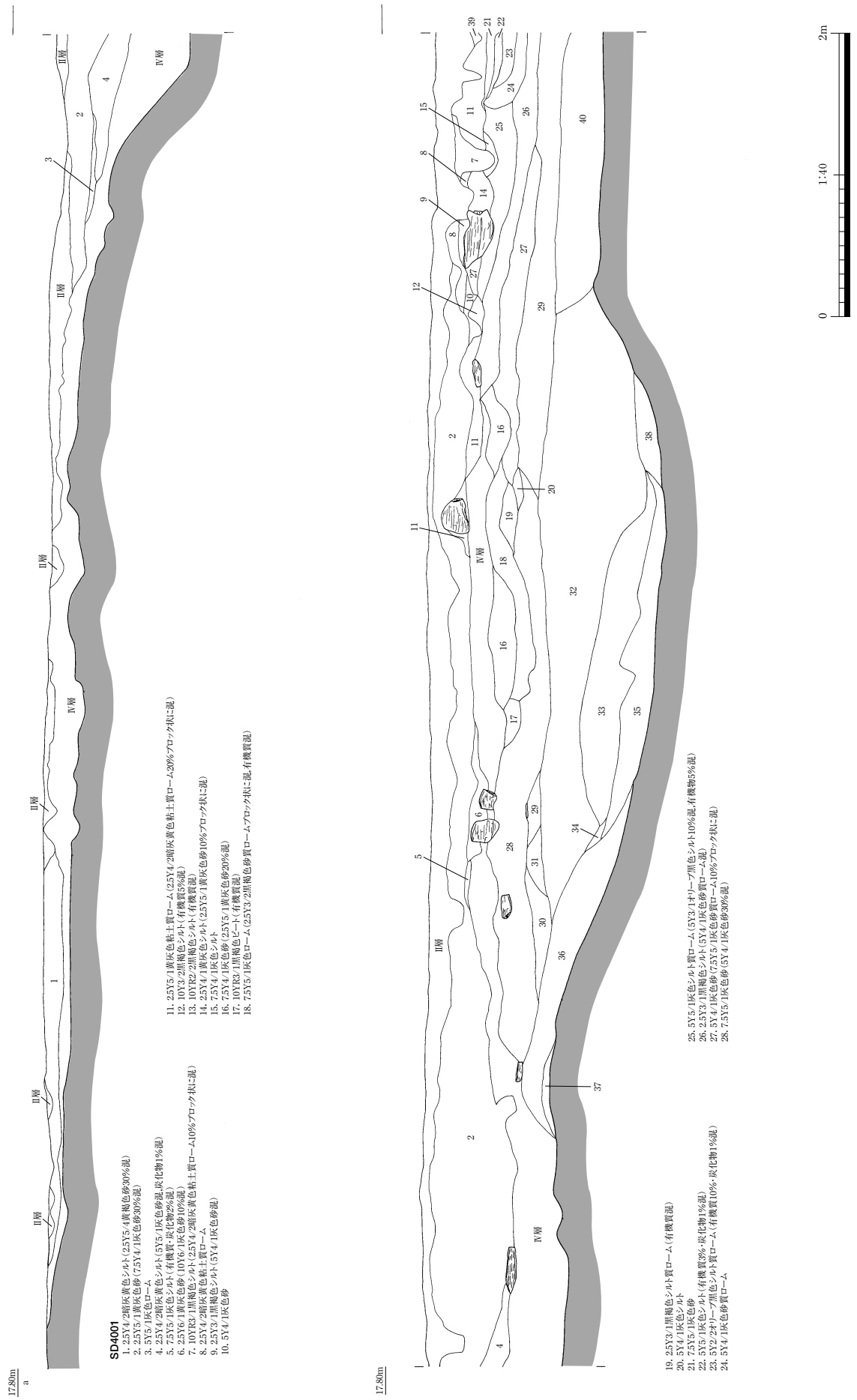
*3419*は鉄石英の荒割工程品。*3420*は緑色凝灰岩製管玉の研磨工程品。ほぼ四角柱になるよう研磨されている。この２点は周辺の玉作りが行われた弥生時代の建物からの流れ込みと思われる。また先に述べた石製品も古墳時代の遺物とは言い難く，同様に流れ込みと思われる。



第356図　古墳時代遺構位置図　(1/2000・1/8000)

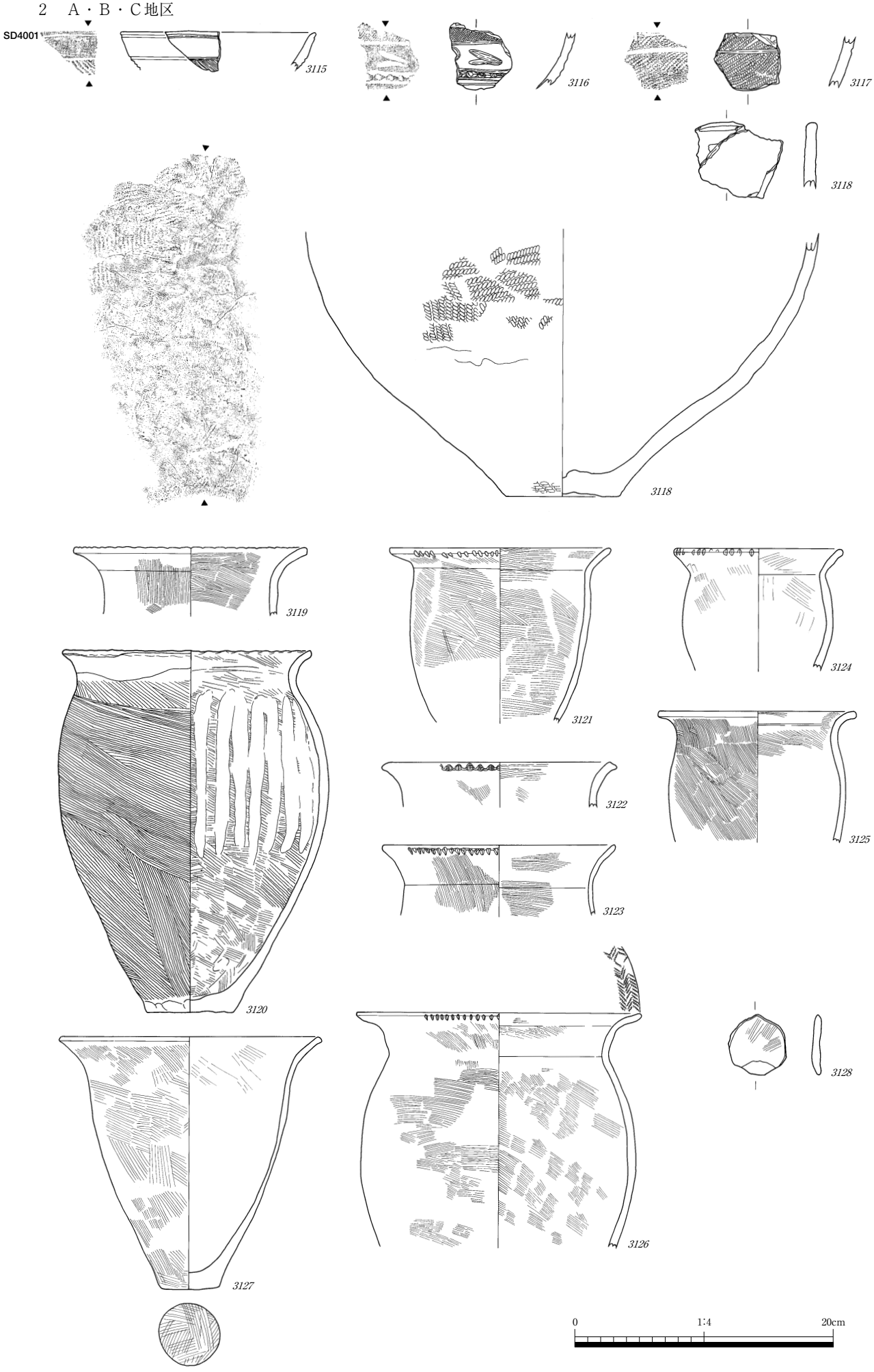


第357図　遺構実測図　(1/800)
Ｂ７地区　ＳＤ4001

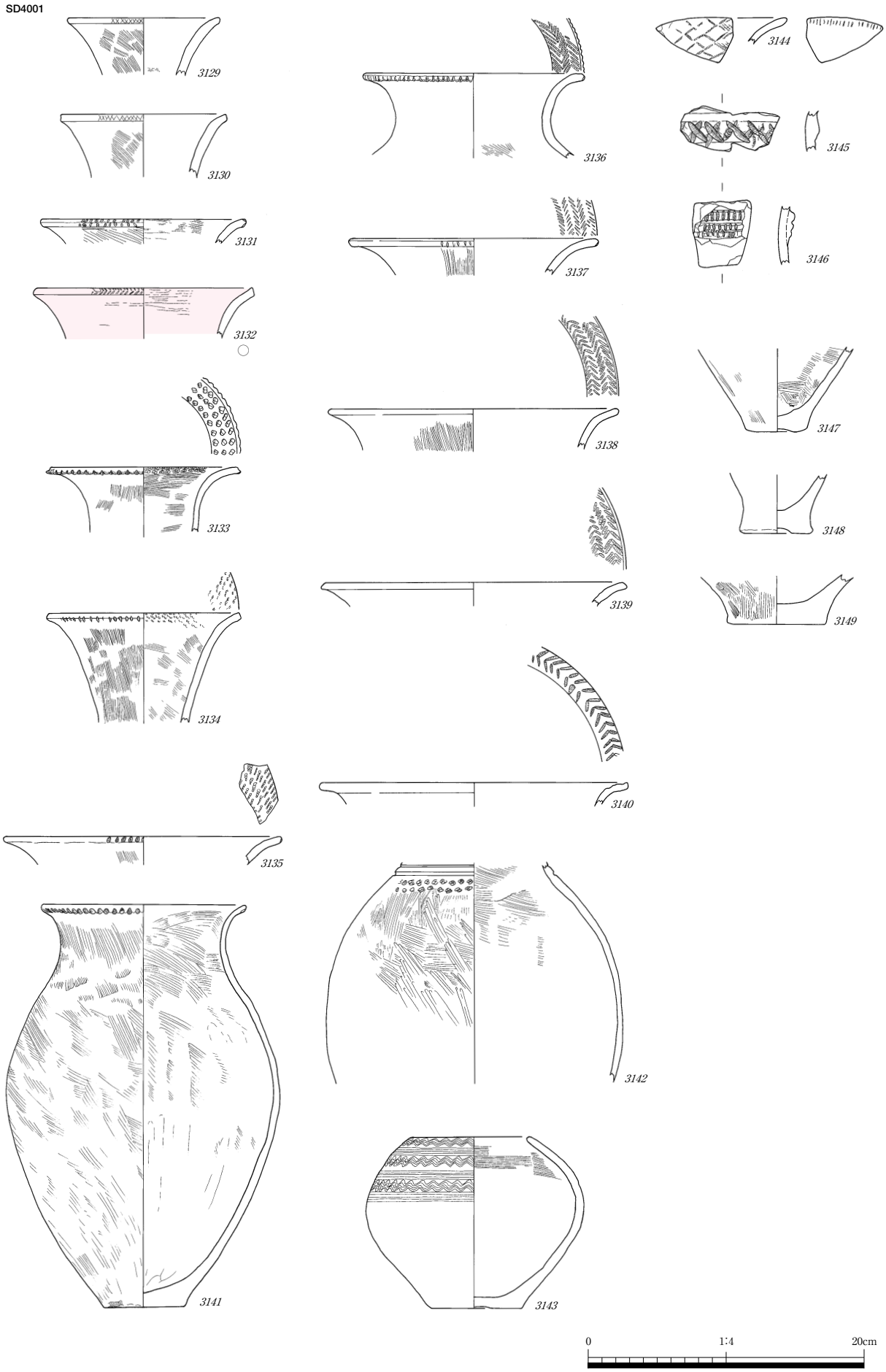


第358図　遺構実測図　(1/40)
B 7 地区　S D4001

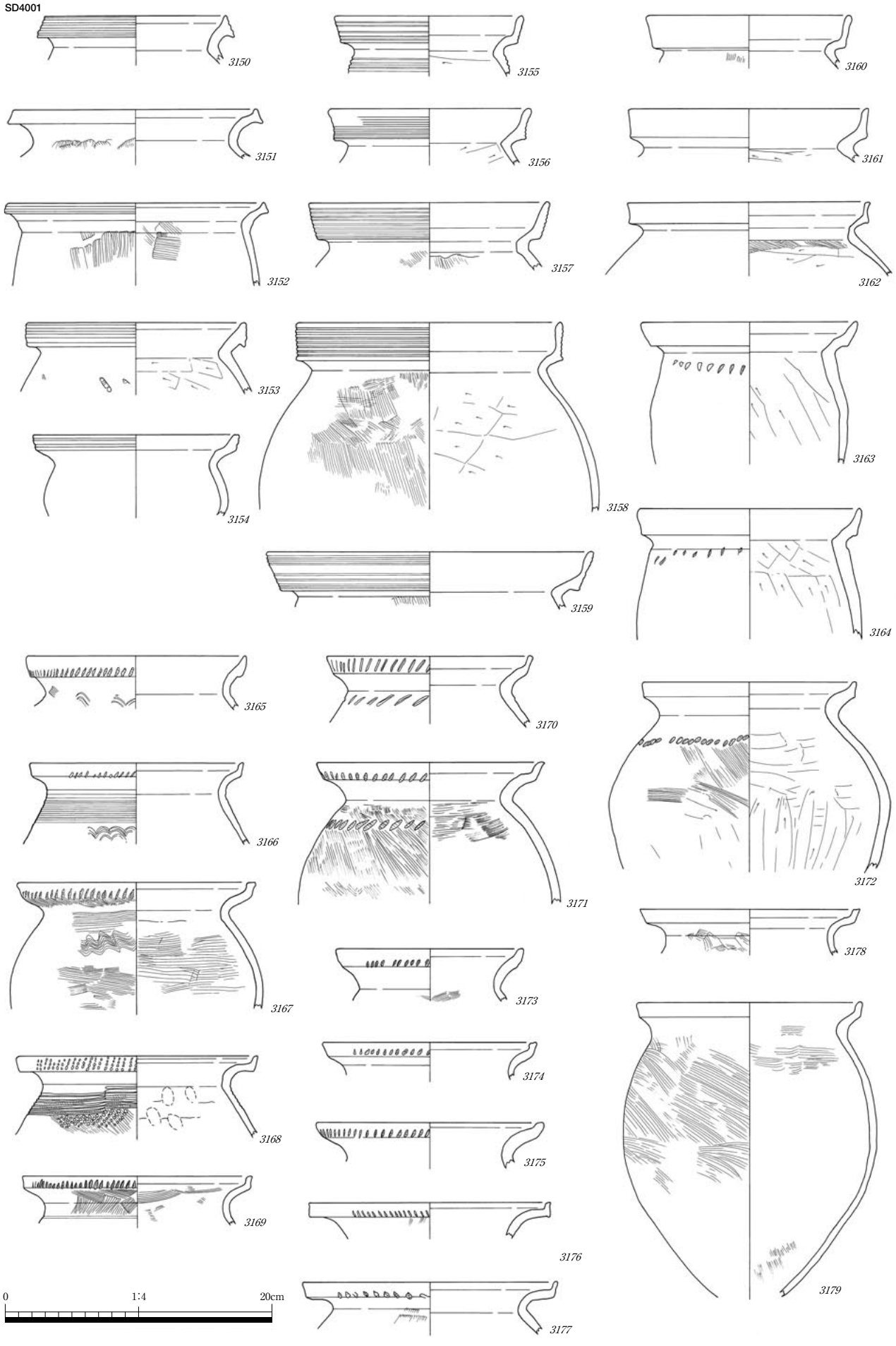
第359図　遺構実測図　(1/40)
B７地区　ＳＤ4001



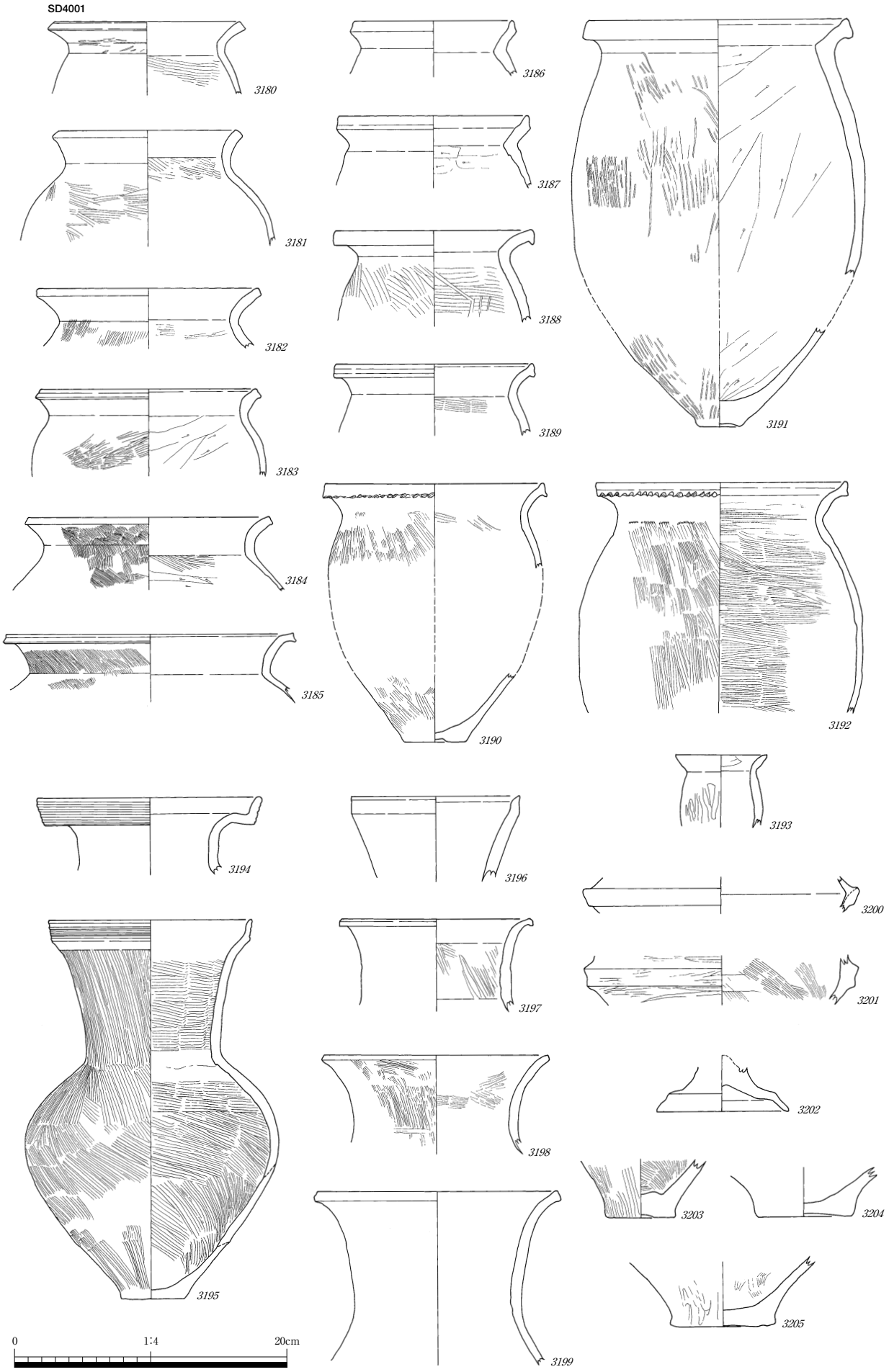
第360図　遺物実測図　(1/4)
B７地区　ＳＤ4001



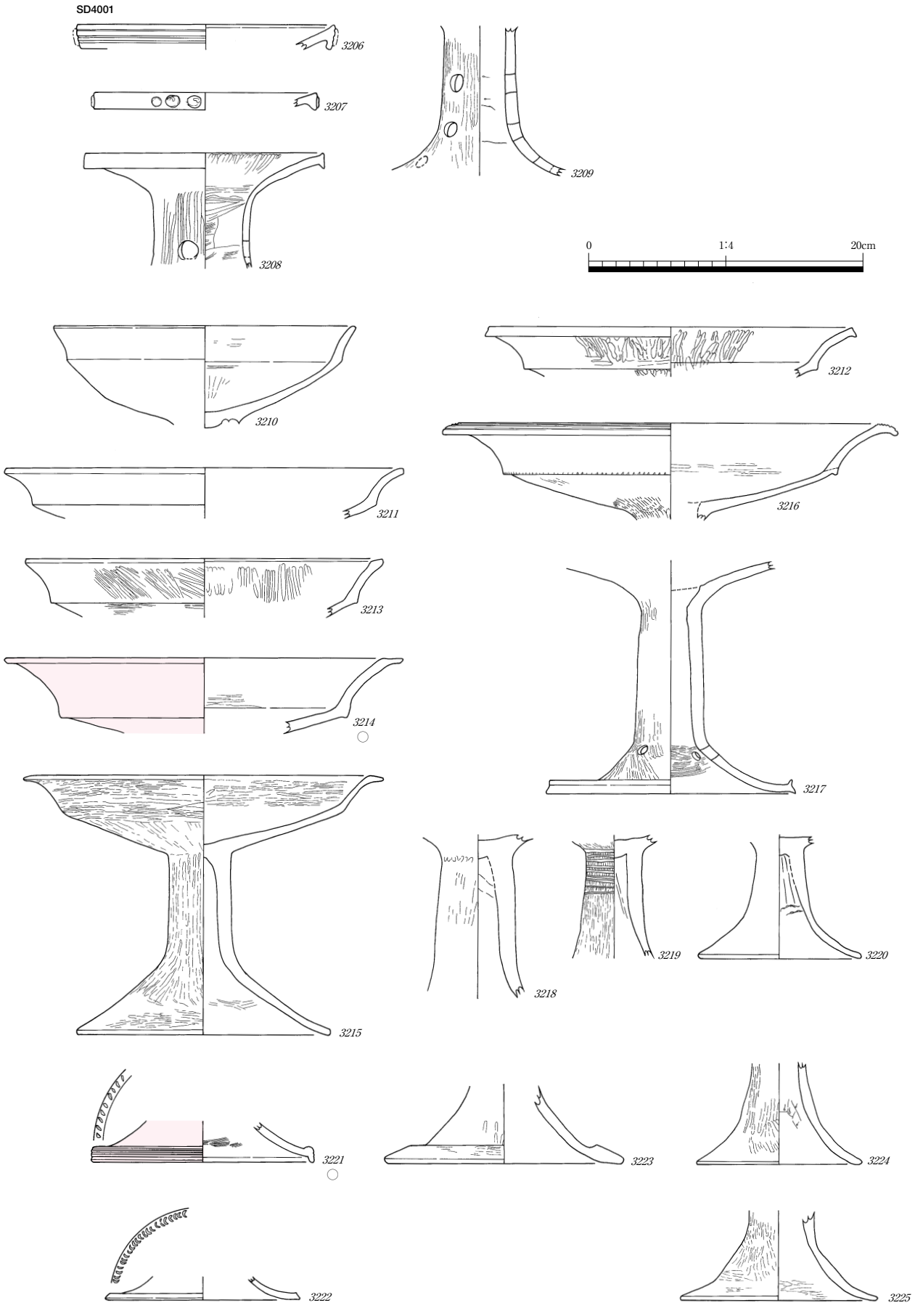
第361図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ７地区　ＳＤ4001



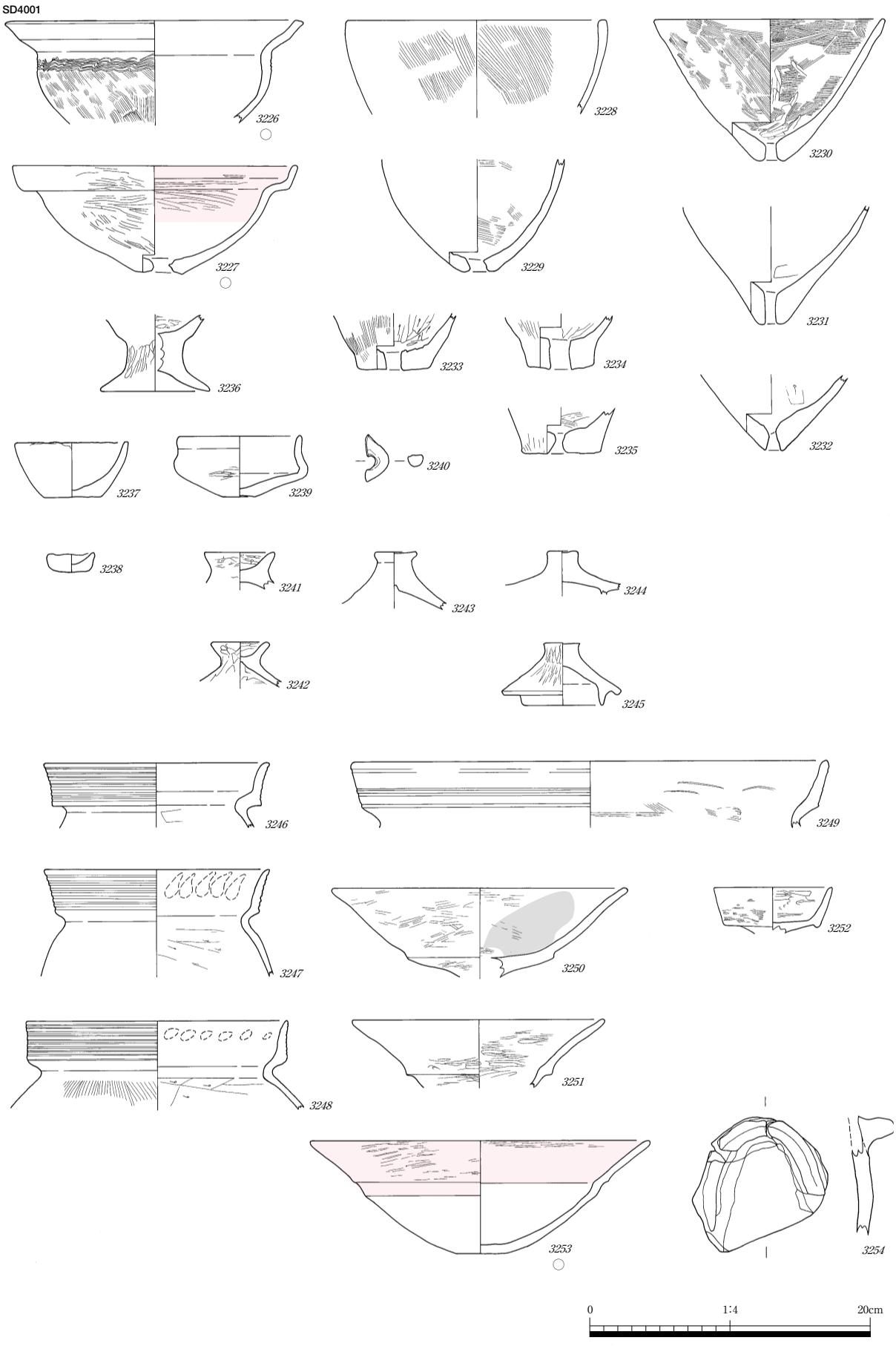
第362図　遺物実測図　(1/4)
B 7 地区　S D4001



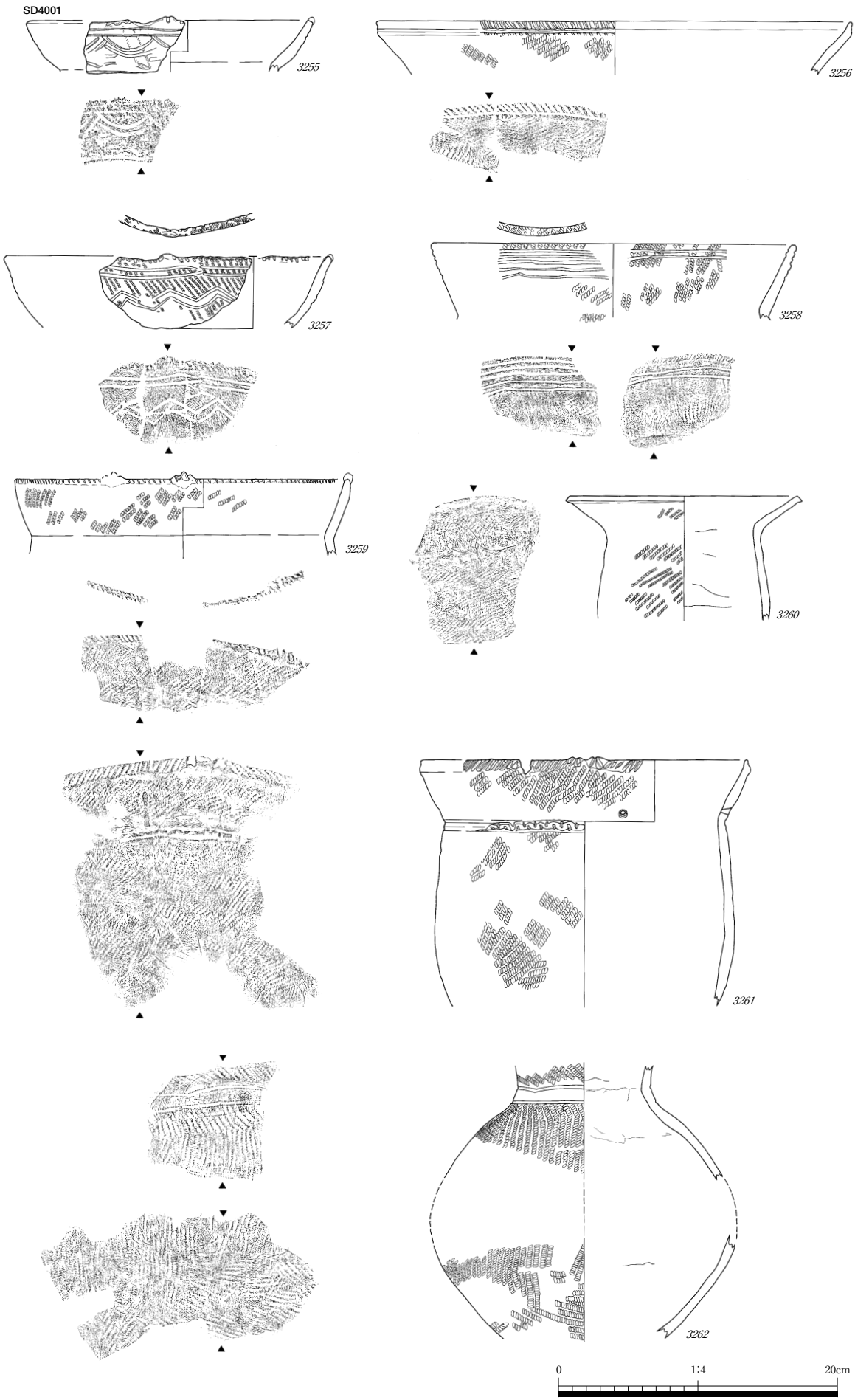
第363図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ７地区　ＳＤ4001



第364図　遺物実測図　(1/4)
B７地区　ＳＤ4001

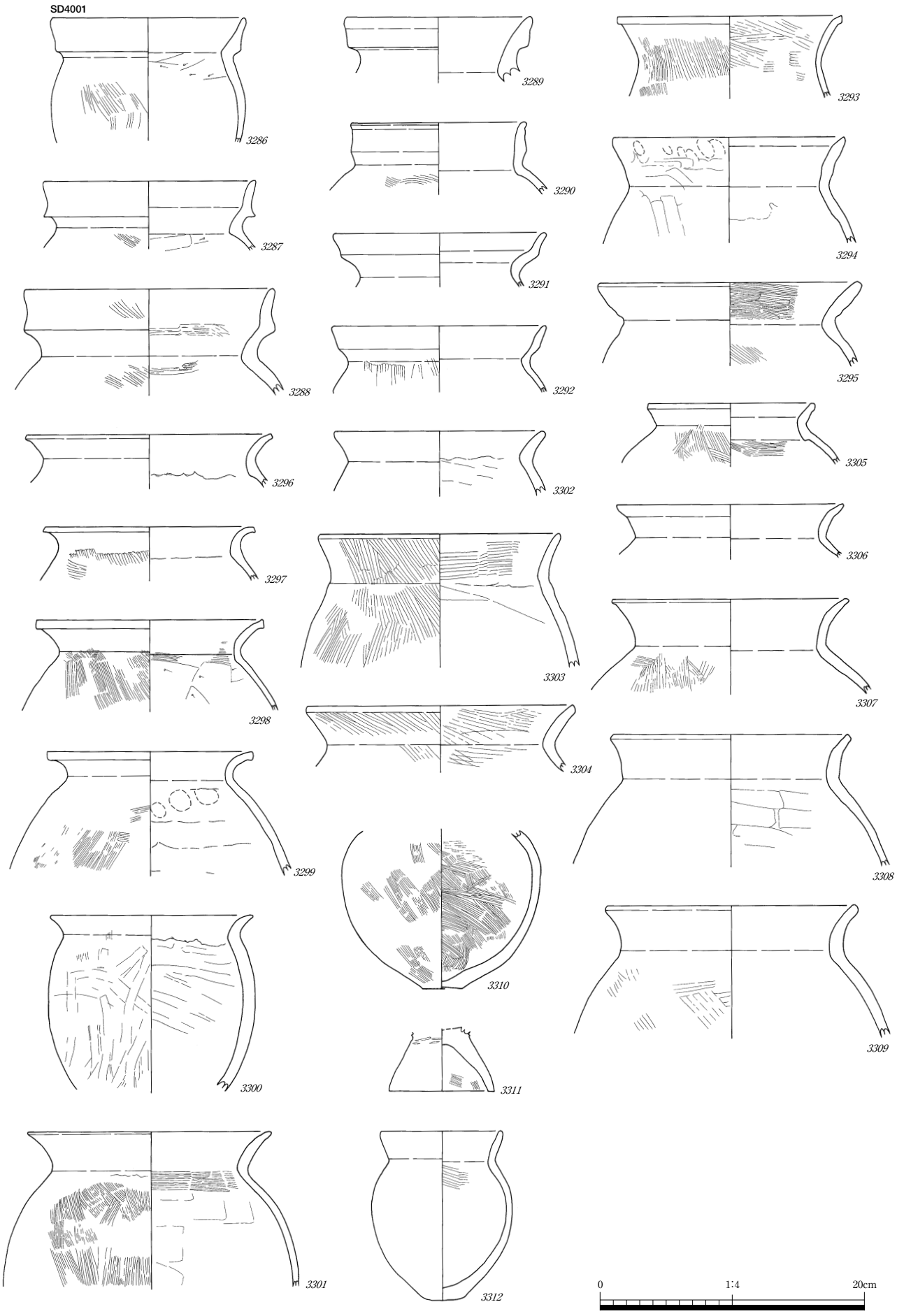


第365図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ７地区　ＳＤ4001

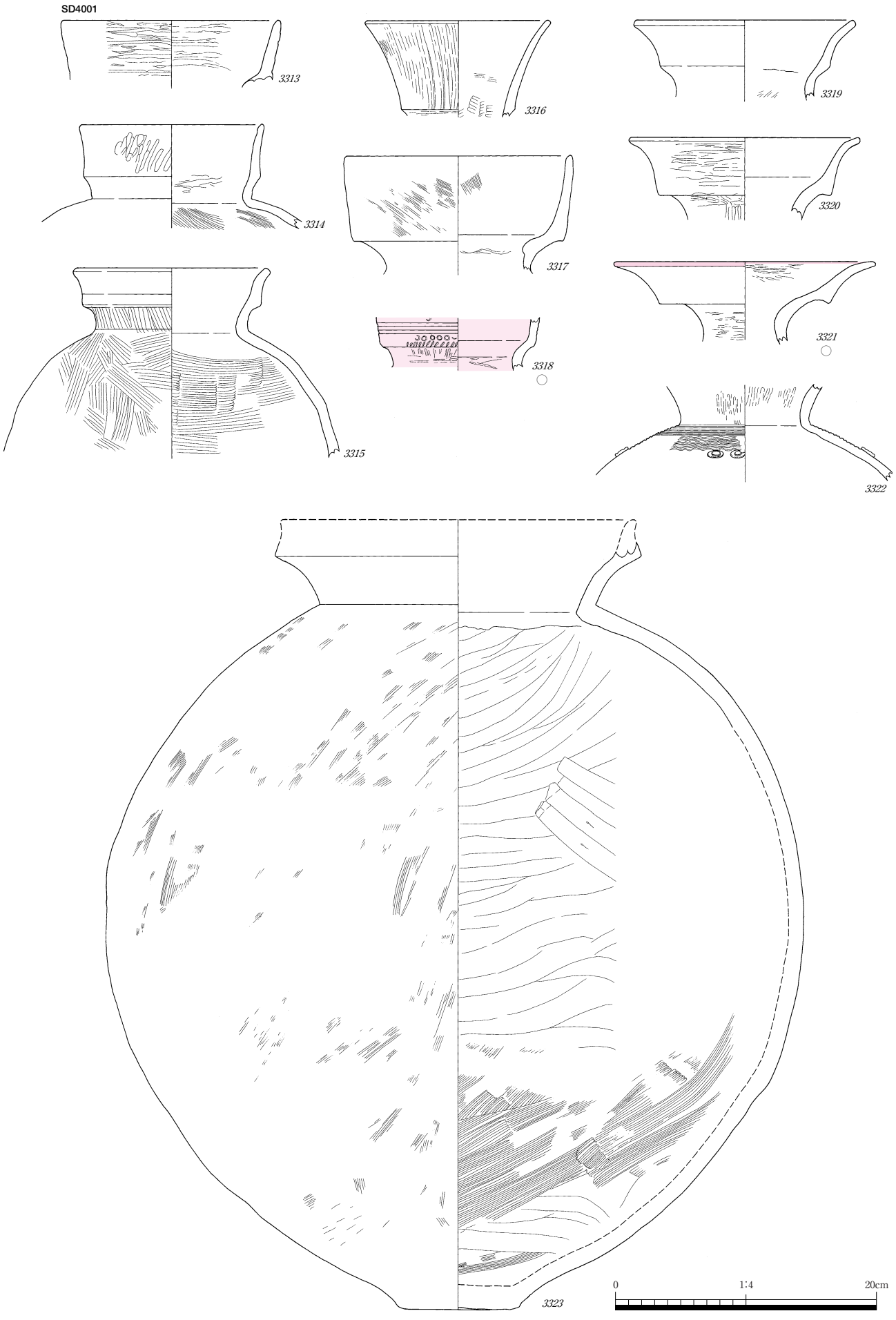


第366図　遺物実測図　(1/4)
B 7 地区　S D4001

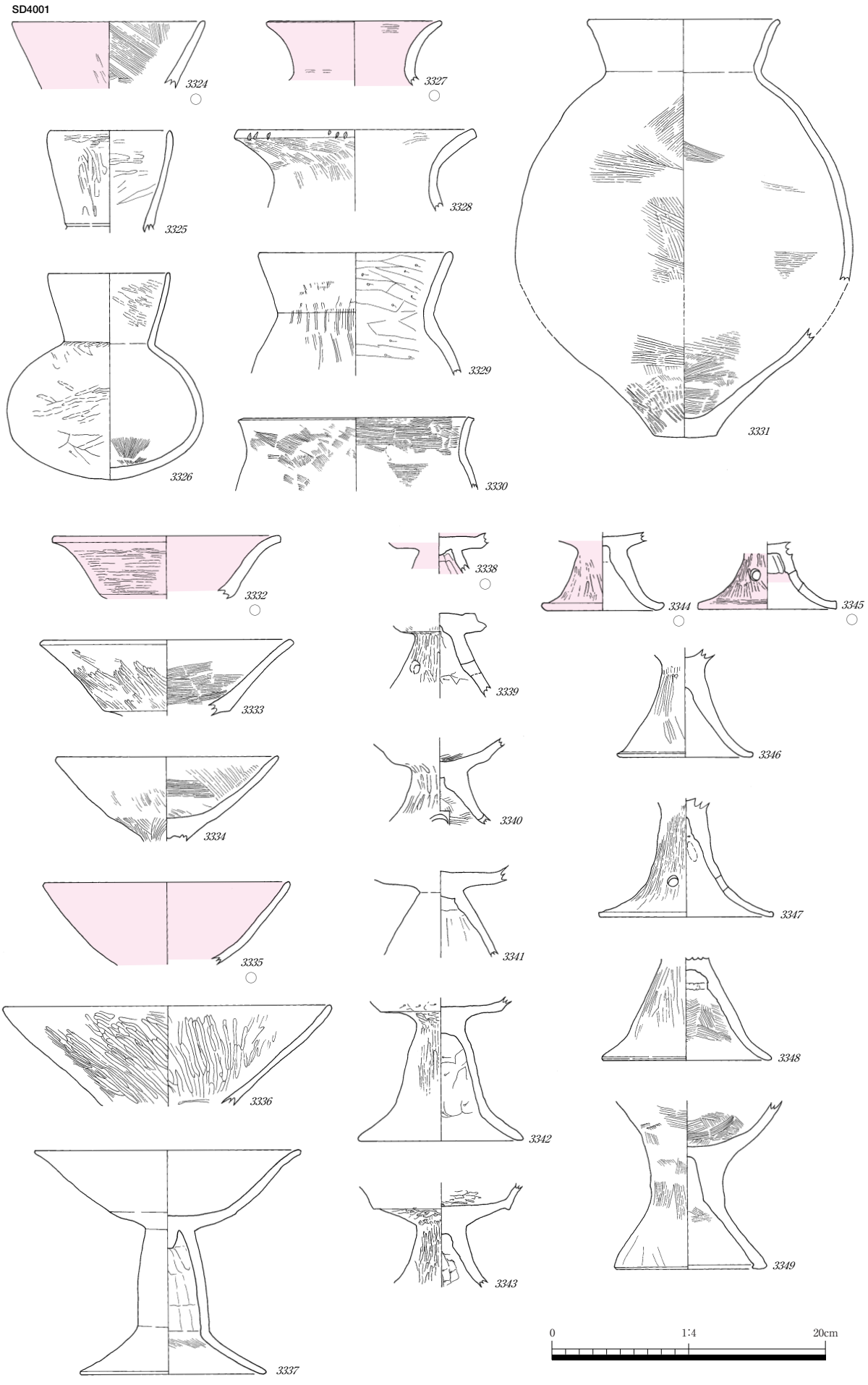
第367図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ７地区　ＳＤ4001



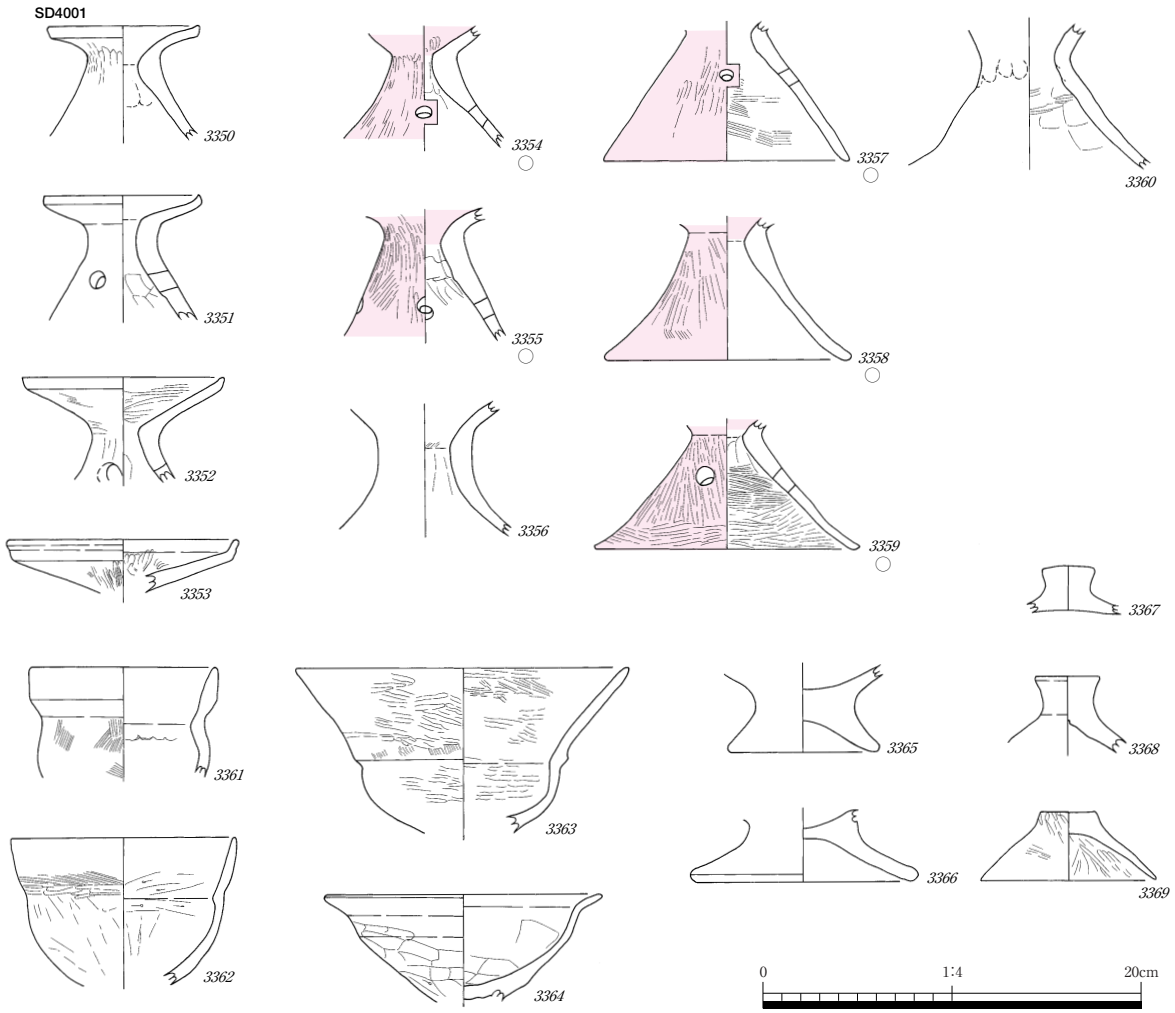
第368図　遺物実測図　(1/4)
B７地区　ＳＤ4001



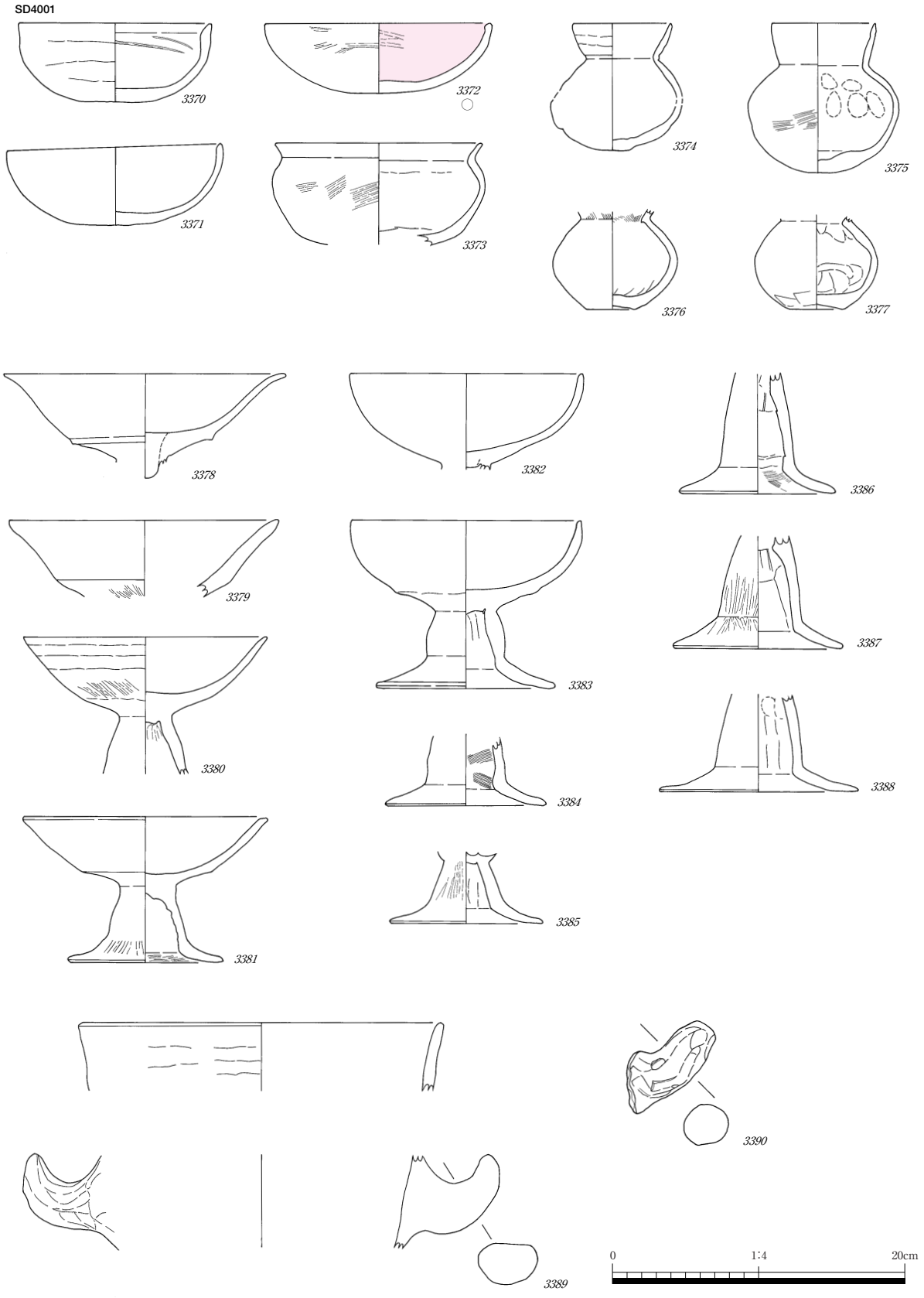
第369図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ７地区　ＳＤ4001



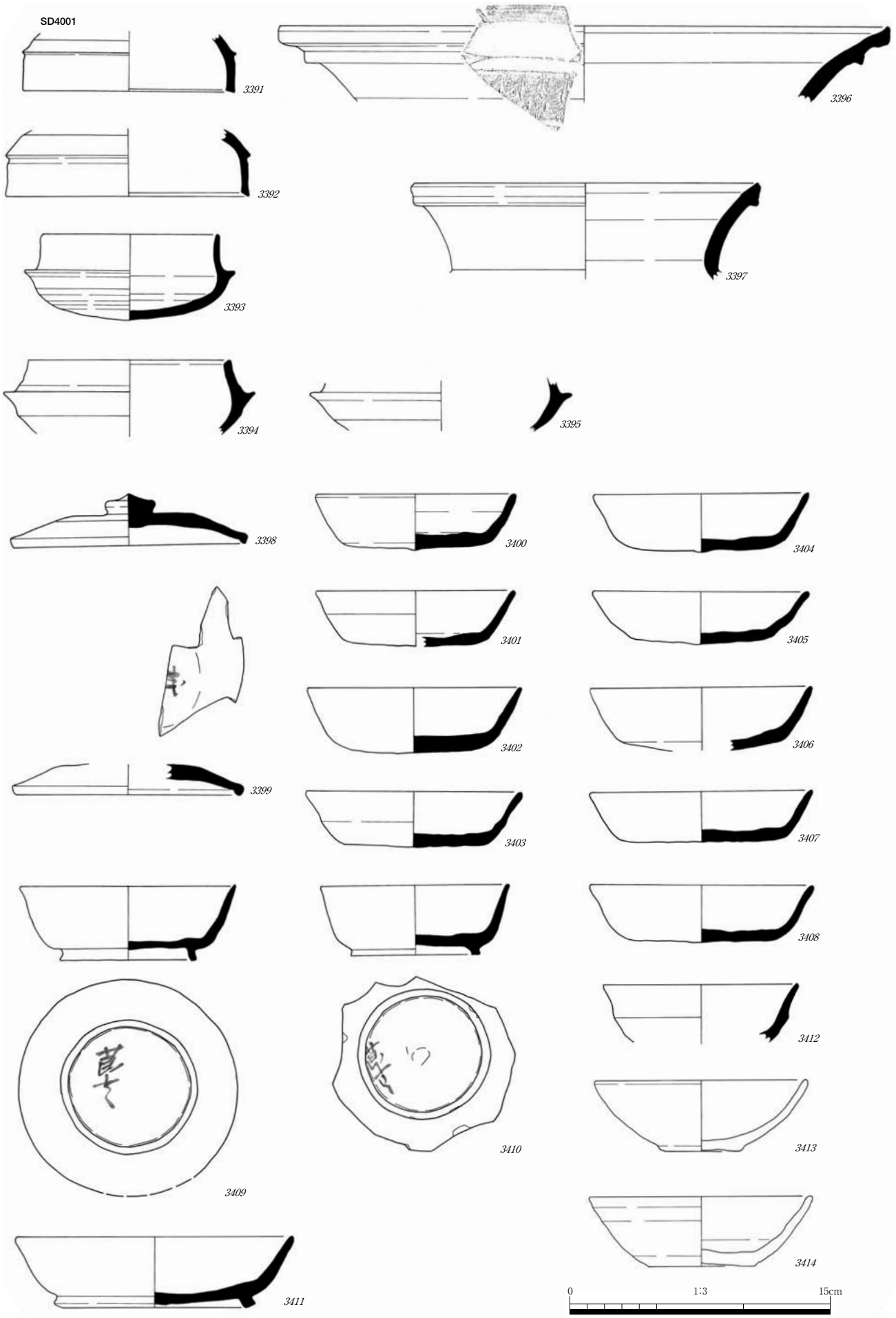
第370図　遺物実測図　(1/4)
B７地区　ＳＤ4001



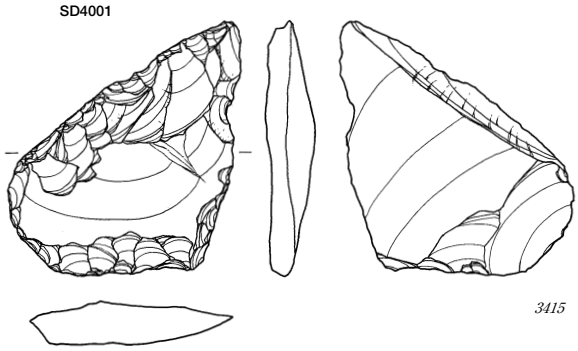
第371図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ７地区　ＳＤ4001



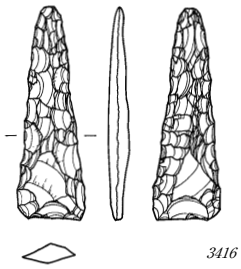
第372図　遺物実測図　(1/4)
B７地区　ＳＤ4001



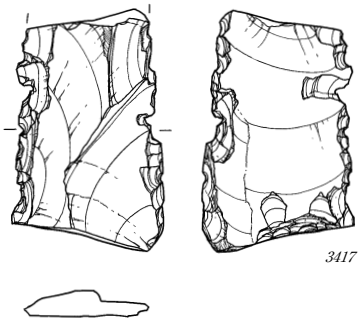
第373図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ７地区　ＳＤ4001



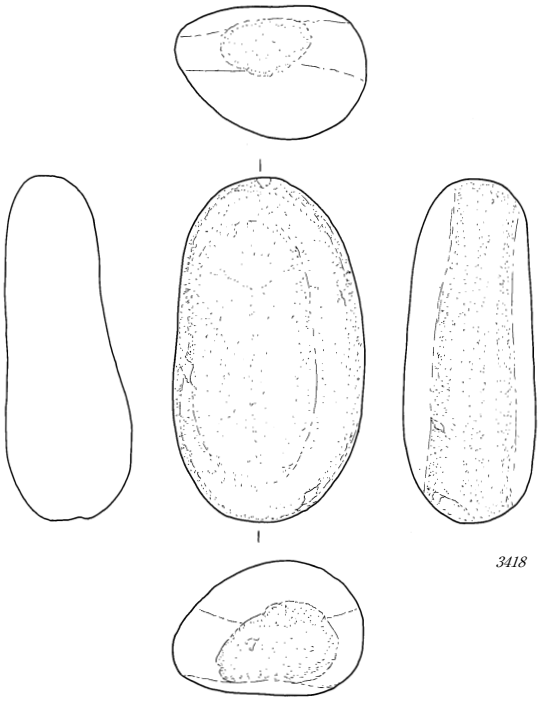
3415



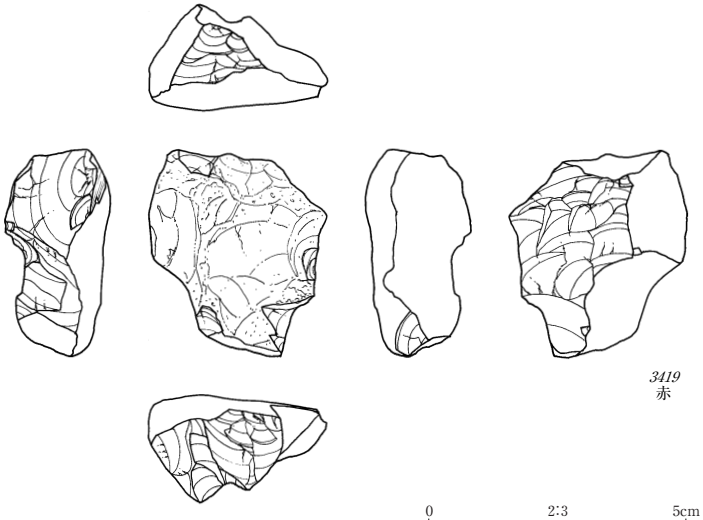
3416



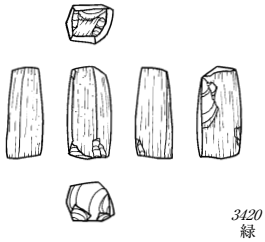
3417



3418



3419
赤



3420
緑

0　1:3　15cm

0　2:3　5cm

0　1:1　10cm

第374図　遺物実測図　（*3420*　1/1，*3415*・*3416*・*3419*　2/3，*3417*・*3418*　1/3）
B７地区　ＳＤ4001

（２）Ａ８～Ｂ６地区の遺構

当遺跡が立地する庄川扇状地扇端部一帯は稲作農耕を基盤とする集落が県下で最初に定着した場所の一つと目されており，試掘調査の段階から当遺跡もそうした動向に沿って形成された遺跡の一つと考えられていた。この推測を立証するために，特に遺跡の中心部の試掘調査において弥生時代の遺構を多く検出した地区に対し，調査に入る前にあらかじめサブトレンチを掘削して土層の堆積状況を確認し，層位別にプラント・オパール分析を実施することにした。分析は株式会社古環境研究所に委託し，Ａ７～Ｃ１地区まで２箇年にわたり84箇所のサンプリングを行った。詳細は第Ⅸ章自然科学分析の「プラント・オパール分析」の項に委ねるが，ここではその結果を簡単にまとめた後，各地区毎に検出した水田とその付属施設について述べる。

なおサンプリング採取場所は，Ａ７～Ｂ４地区（平成８年度調査）は試掘トレンチの壁面を利用し，Ｂ５～Ｃ１地区（平成９年度）調査では基準杭列の土層観察用畦を利用している。また「プラント・オパール分析」の他に「珪藻分析」・「花粉分析」・「土壌理化学分析」の自然科学分析も委託している。結果だけ簡潔に述べれば，「土壌理化学分析」においても，Ⅳａ層については水素イオン濃度，マンガン含有量の検討結果から水田耕作層であった可能性が高いという回答を得ている。

Ａ　「プラント・オパール」分析結果

Ａ７～Ｂ４地区（平成８年度調査）

弥生時代の包含層であるⅣ層ではすべての地点においてイネのプラント・オパールが検出され，その大部分でプラント・オパール密度のピークが認められたことから，調査区のほぼ全域が水田跡と判断された。特にＡ８地区の北側からＢ１地区の南側にかけての区域はプラント・オパール密度が比較的高い。この他にⅡ層とⅢ層の一部においても水田跡の可能性が推定された。

また，実際に発掘調査に入り，Ⅳ層上面において精査を行い水田面を検出した後，これらの遺構における稲作の検証，および水田面と畦畔における密度の比較を目的に再度プラント・オパール分析を行っている。水田遺構を検出したＢ１～３地区では田面・畦畔ともにすべての資料からイネのプラント・オパールが検出され，稲作が行われていたことが分析的に確認された。田面部と畦畔部の検出密度の比較においては大きな差異は認められなかったが，これは一般に畦畔が水田土壌で修復されることが通例であることを鑑みれば例外ではなく，逆に頻繁に畦塗りが行われていたことが推定される。

Ｂ５～７・Ｃ１地区（平成９年度調査）

当年度の分析は，特に水田遺構を検出したⅣ層を中心に，Ⅳａ層とⅣｂ層に細分して検討を行った。

Ｂ５地区のⅣａ層では，すべての地点においてイネのプラント・オパールを検出し，耕作層であった可能性は高く，Ⅳｂ層でもプラント・オパール密度はⅣａ層に比べて低いが，調査区北側では高密度の数値が得られ，耕作層であった可能性が高いという結果が得られた。

Ｂ６地区では，Ⅳａ層・Ⅳｂ層共にプラント・オパールは検出されたが，特に中央から北側にかけて比較的密度が高く，耕作層であった可能性が高い。また，Ⅳａ層とⅣｂ層を比較するとⅣａ層のプラント・オパールの密度が高い地点が多い。

また，Ⅳａ層上面での水田検出段階で，立命館大学の高橋学助教授の御指導で，Ⅳｂ層上面での水田の存在が示唆された。Ⅳｂ層上面での水田の検出を行った結果，第二の水田面をＢ５・６地区で検出し，ここでもプラント・オパール分析によるⅣｂ層における稲作の確認を行った結果，プラント・オパール密度が比較的高く，稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

Ｂ７地区とＣ１地区のⅣ層でも比較的高い密度で検出された。Ｂ７地区では特に調査区南部から西

側にかけて，C１地区では調査区中央西側で（B５・６地区寄り）高い数値を示し，一帯で稲作が行われていた可能性は高い。

このようにして，プラント・オパール分析の結果を参考にして発掘調査を進めた結果，弥生時代後期後半から古墳時代中期の２時期の水田面を検出することができた。この水田の時期については水田面上面で出土した古墳時代の土師器の年代を下限とし，Ⅴ層上面で検出している弥生時代後期の集落の遺物を上限としたものである。プラント・オパール分析によってプラント・オパールを包含する水田土壌の層位を確定することができたが，その平面形を検出することはなかなか困難を極めた。この際採った方法の一つは，調査面に縦横に細かくサブトレンチを設定し，詳細な土層の堆積状況を把握し，そこから手掛かりとなる僅かな層の高まりを見つけ出すことである。幸いⅣａ層上面を覆っていたⅢ層は有機質分を含まない黄灰色粘土またはシルト質ロームで，周辺には存在しない一種の洪水堆積層と推定されていた。このⅢ層によってパックされたような状態，いわゆる「埋没水田」といわれるような状況で，水田面におけるⅢ層の沈下の形状を参考に，畦畔の検出を試みている。しかしながら，平成９年度調査におけるⅣｂ層上面での検出は，Ⅳ層のａ・ｂ層共に土色が黒褐色シルト質ロームであるため色調による変化は捉えられにくく，断面観察での微小な高まりに注意をはらい検出を試みるしかなかった。実際に検出した地区以外においても，水田土壌の可能性が高いⅣ層の堆積は認められるわけで，たまたま遺存状況が良く幸運にも検出できたということであると判断している。

以下，各地区における平面図と断面図を順次掲載するが，内容については重複することが多いので，水田に伴う施設（水路・大畦畔・水口）等各地区の特徴的なことを記述するにとどめる。

B　水田・自然流路

A８地区（第376～381図，図版170）

調査区北側で水路と畦畔を検出した。畦畔は部分的検出が多く，水田の平面形が判るものは３枚のみで，いずれも歪んだ方形や三角形をしている。このうち，２基には水口が切ってある。畦畔の幅は平均80㎝，田面との差は10㎝前後である。検出した畦畔はその状況・規模からほとんどが大畦畔と考えられる。田面にはⅢｂ層（灰黄色シルト）が主に堆積し，場所によってはⅢａ層やⅢｃ層が堆積する。その堆積状況は平坦ではなく底面は波打ったようになっている。南東から北西に直線的に延びるＳＤ2001はこの周辺の水田の水路と考えられ，この両側は畦畔によって補強している。ＳＤ2001は幅3.3m，深さは20㎝で，下層のＳＤ2102とほぼ同じ軌道を通る。埋土には水田と同じⅢａ層・Ⅲｂ層が堆積する。遺物は，水田面上面で１箇所，水路脇の１箇所で古墳時代の土師器が一括して出土した。

B１地区（第382～384図，図版171・174）

調査区中央から東寄りで水田を検出した。大きさはまちまちで，平面形も比較的方形に近いものと歪な不整形のものがあるが，比較的南側から北側すなわち川下に向かって平面形は整っていくようである。畦畔の幅は40～180㎝と幅が広く，大畦畔と小畦畔の区別はつかない。田面と畦畔の高さの違いは４～６㎝と浅く，田面は比較的平坦でⅢｂ層は均一に堆積する。水田への取水は東側に隣接するＢ２地区西側の自然流路から取り込まれたと考えられ，ＳＤ2250はそこから引き込むための水路の一つである。自然流路との境には溝の流路方向とは直角に１対の長方形の穴を刳り抜いた板が渡してあり，板の長辺の自然流路側には板を固定するためと思われる杭が両側に２本打ち込んであった。水門のような役割をはたした部材であろうか。

Ｂ２地区（第385～388図，図版171・174）

Ｂ１地区との境の自然流路の東側で水田を検出した。ＳＤ2521・2523・2524・2532が水田に水を供給する水路と考えられる。何枚かの水田には水口が観察できる。いずれもⅢ層の黄灰色粘土が堆積する。畦畔の幅は20～80㎝で，西側の谷に近い水田は４～６㎝と畦畔が低く，田面も比較的平坦な堆積状況を示すが，東側に向かってⅢ層の堆積状況は均一ではなくなり，畦畔の有り様も断面ですら不明瞭となっている。

Ｂ３地区（第389～394図，図版171）

Ｂ１・２地区から続く中央を流れる自然流路の両側で水田を検出した。流路の東と西では様相がやや異なる。流路の西側では形はやや大きいが不整形なものが多く，畦畔は30～130㎝と幅が広い。畦畔の高さは平均約５㎝前後で，田面は比較的平坦で，Ⅲｂ層が堆積する。流路の東側では平面形は不整形なものが少なく，ある程度画一化されていると言える。畦畔も幅が30～50㎝のものが多い。しかし，Ⅲｂ層の堆積状況は不均一となり畦畔との境も不明瞭となっている。

ところで，Ⅳ層上面の田面においては多量のエゴノキの種子が検出されている。エゴノキは果皮にエゴサポニンを含み，これは白く泡立ち，かつて洗濯や漁労に利用されていたものである。調査時はその出土量から意図的に田面に散布された可能性も考えられた。プラント・オパールと同時に行った花粉分析結果においてはエゴノキの花粉は検出されなかった。これは種子のみを持ち込んだという傍証となるかもしれないが，他のＢ５地区からＢ７地区の建物埋土からもエゴノキの種子は見つかっており，意図的に散布したものと考えるより当時の植生を示すものと推測される。

水田の他には当地区ではＢ５地区から続く道路の側溝の一部と考えるＳＤ2982を検出している。

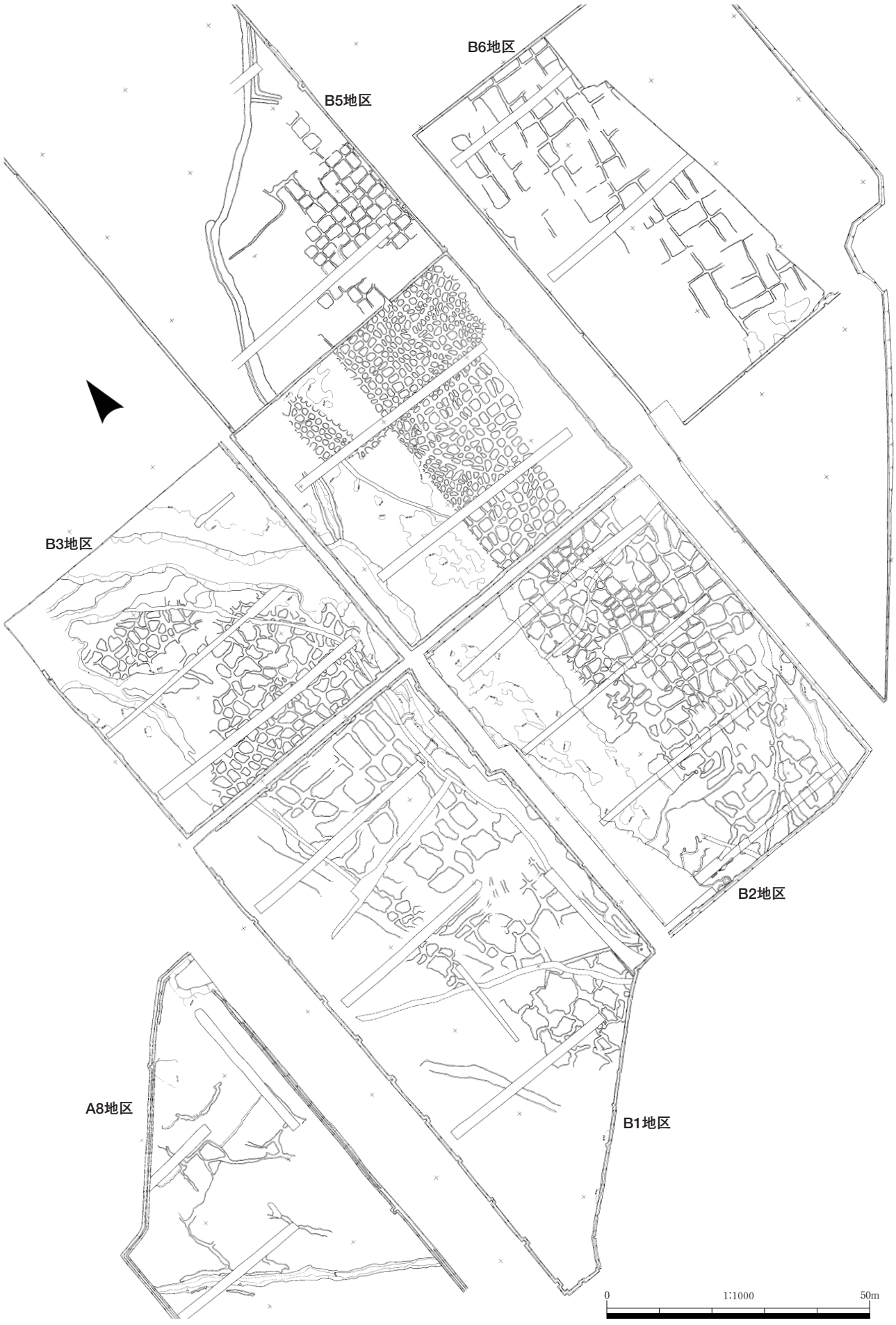
Ｂ５地区（第395～399図，図版172・174）

Ⅳａ層とⅣｂ層上面での２時期の水田面を検出している。Ⅳａ層上面では大畦畔と考えられる大区画の畦畔のみを検出している。畦畔の幅は40～60㎝，西寄りでは比較的厚く平均約10㎝と均一にⅢ層が堆積しているが，東に行くに従って均一ではなく，波打ったような堆積となり，畦畔の所在もはっきりしない。Ⅳｂ層上面では東側で小区画の均一な平面形をもつ水田が検出された。Ⅳａ層上面で検出された大畦畔の区画に沿っており，２面の水田の区画に大きな差がなかったことが窺える。また，この面の畦畔は上面の水田の耕作により撹拌されている故か，高まりの痕跡が断面観察でさえ最高で４㎝前後とほとんどなく，わずかな痕跡を頼りに検出した水田である。

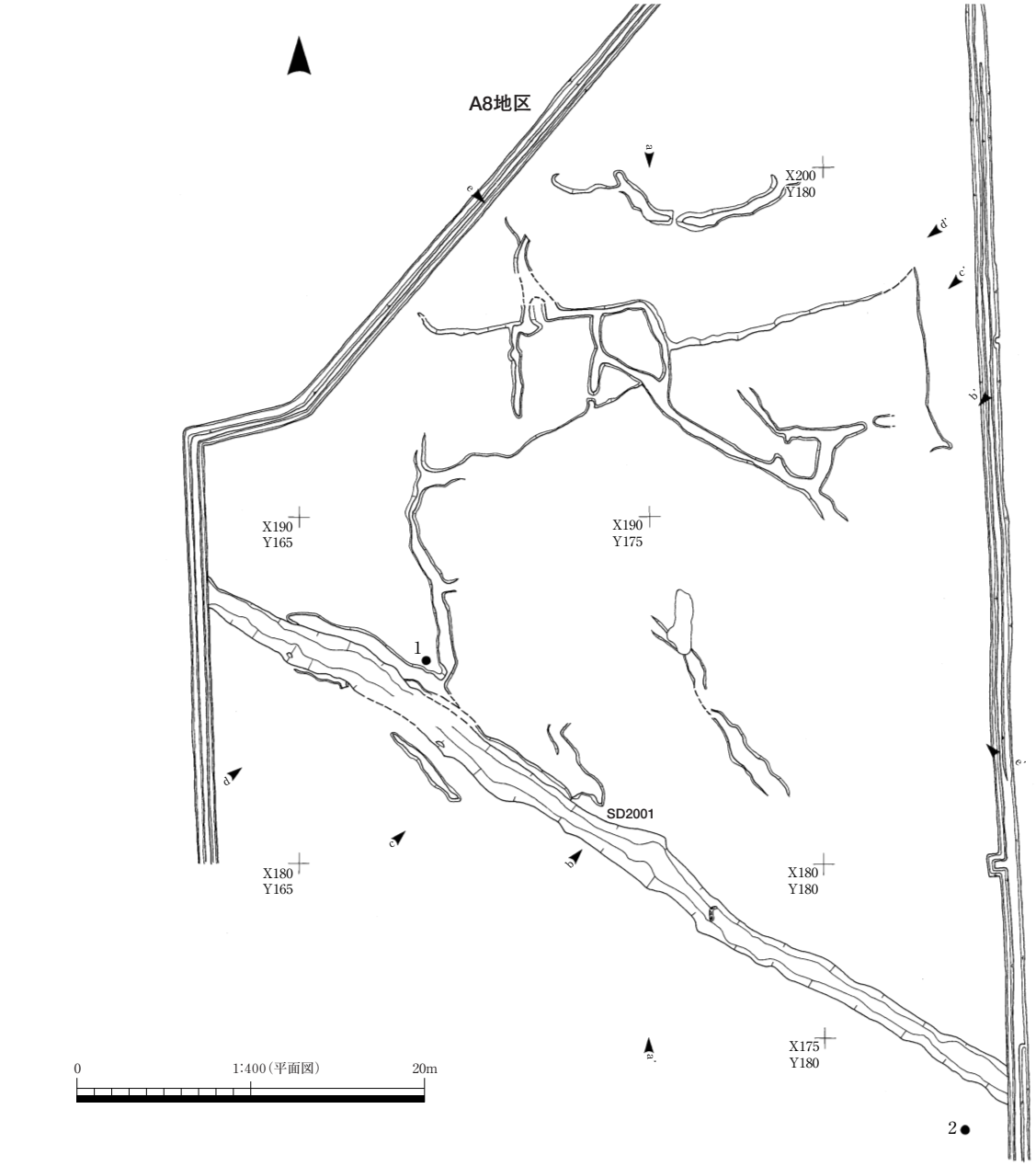
また，この時期には弥生時代後期後半で検出した道路（ＳＦ3526）とその側溝（ＳＤ3524）が遺存していたものと思われる。これはＢ３地区からＢ５地区を斜めに横断し，Ｂ７地区へと続くが，この面で検出できたのはＢ５地区のみである。

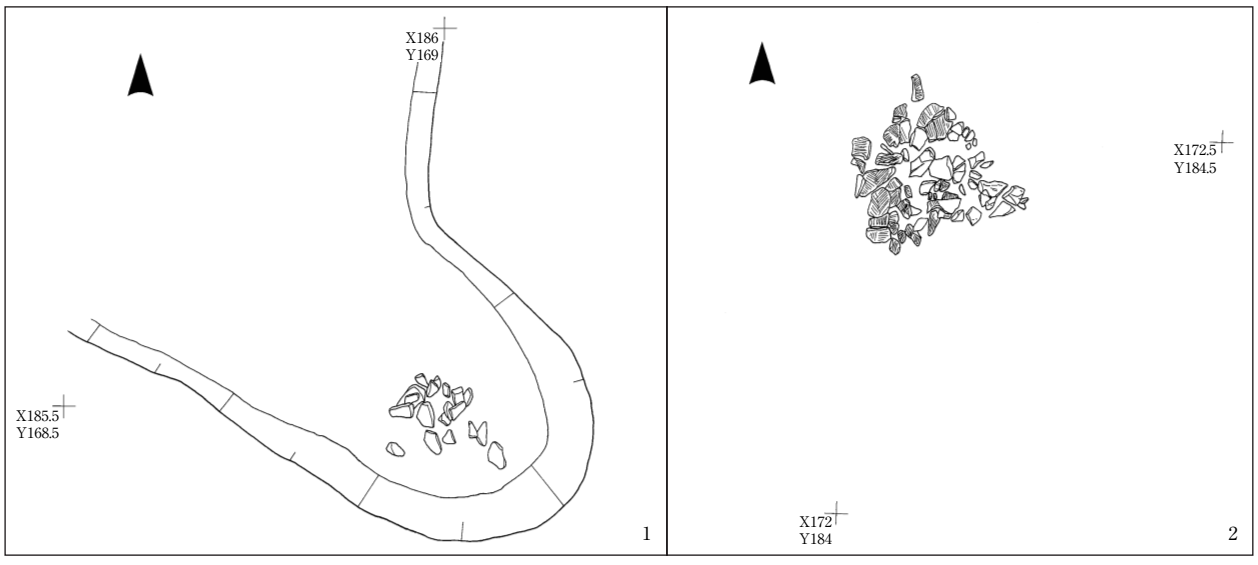
Ｂ６地区（第400～404図，図版172・173）

Ｂ５地区と同様にⅣａ層・Ⅳｂ層上面での２時期の水田面を検出している。水田検出の目安となるⅢ層の堆積の遺存が調査区北側の東寄りに認められたので，その部分を集中的に検出することに努めた。Ｂ５地区に比べ大きな区画の畦畔を検出したが，Ｂ５地区からの連続性はあまり認められない。また，Ⅳｂ層上面で検出した水田の区画との関連性も認められない。また，Ⅳａ層上面ではⅢ層で充填された偶蹄目の足跡が多数検出されている。堆積状況では，足跡が地面についた直後にⅢ層が堆積したか，Ⅲ層が堆積した後に足跡が踏み抜かれて下層に遺存したものかは定かではない。偶蹄目と言えば野生種ではイノシシ・シカがいる。家畜にはウシ・ブタがいるが残存した足跡からは整然とした歩みとは言えず，農耕用に利用されていたとは考えにくい。

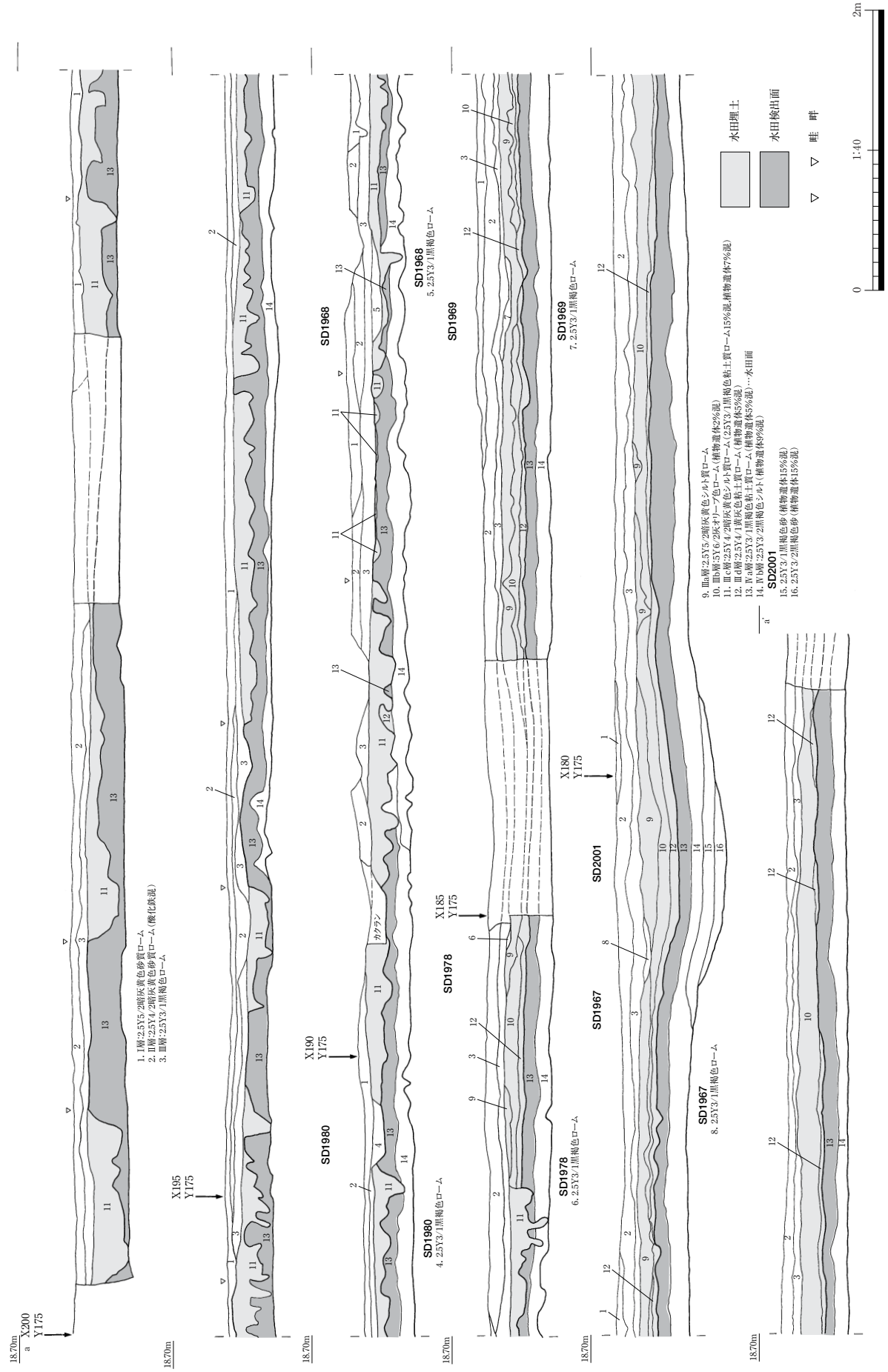


第375図　遺構実測図　(1/1000)
A・B地区　水田

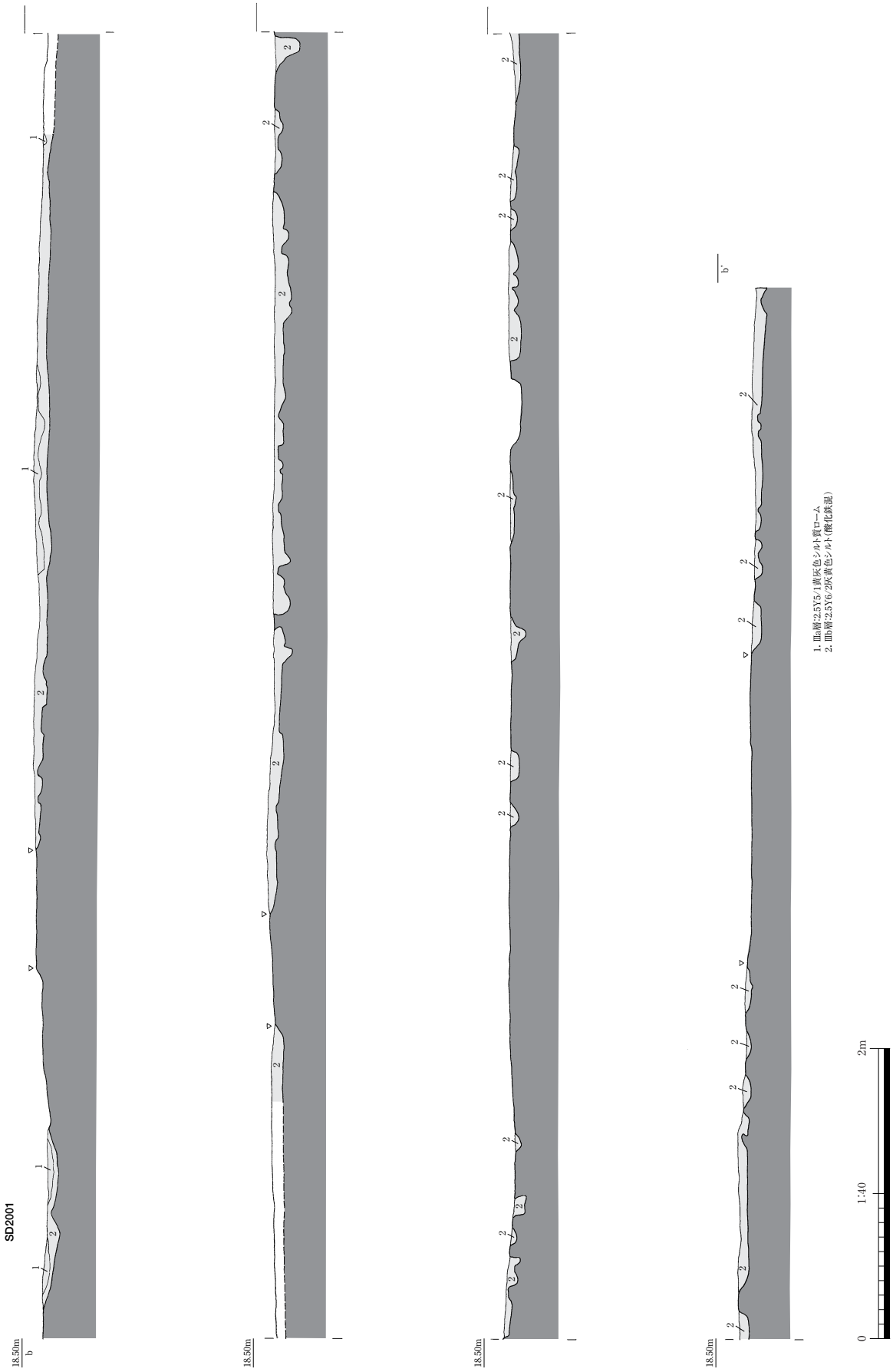




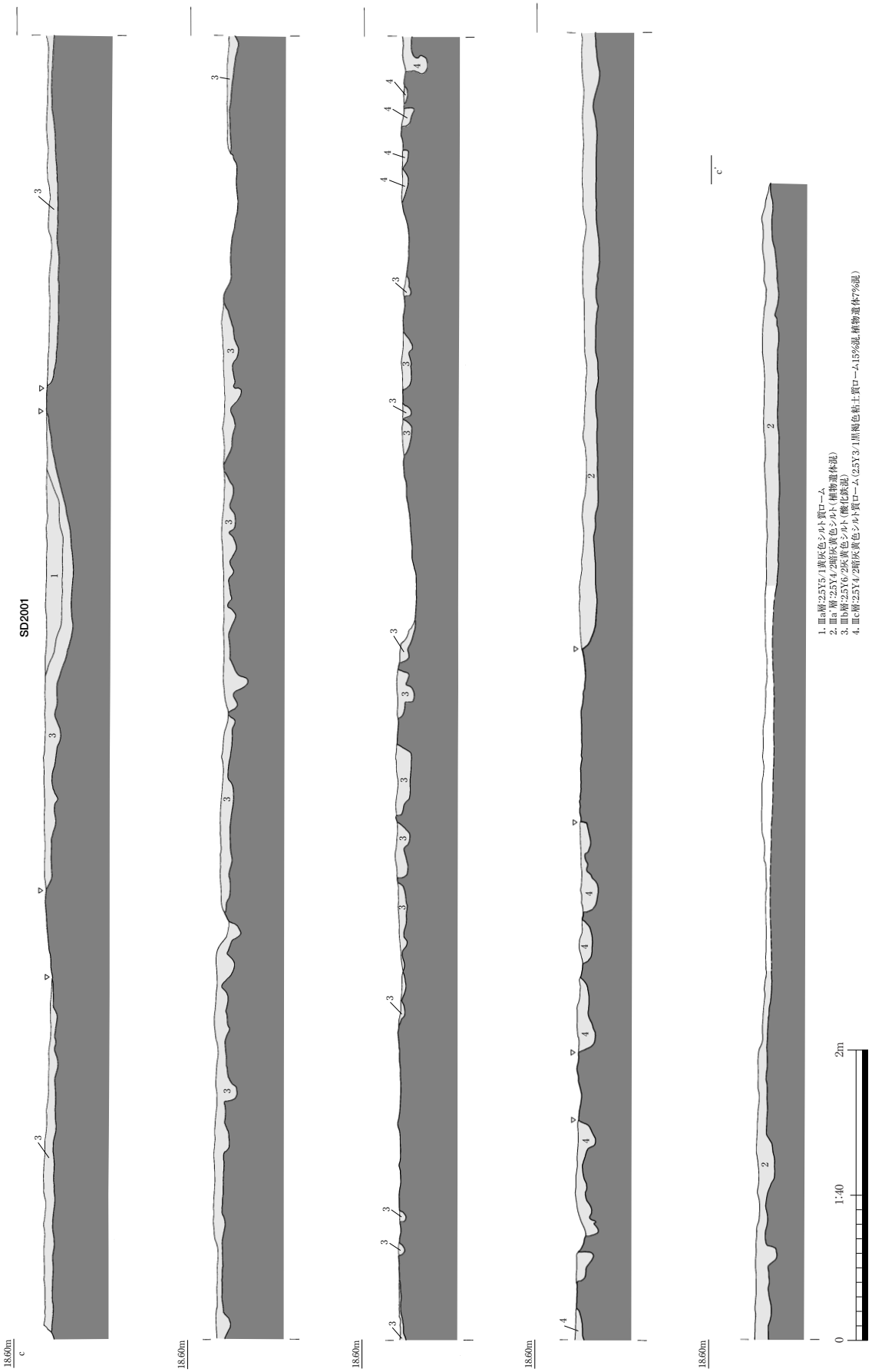
第376図　遺構実測図　(1/20・1/400)
Ａ８地区　水田



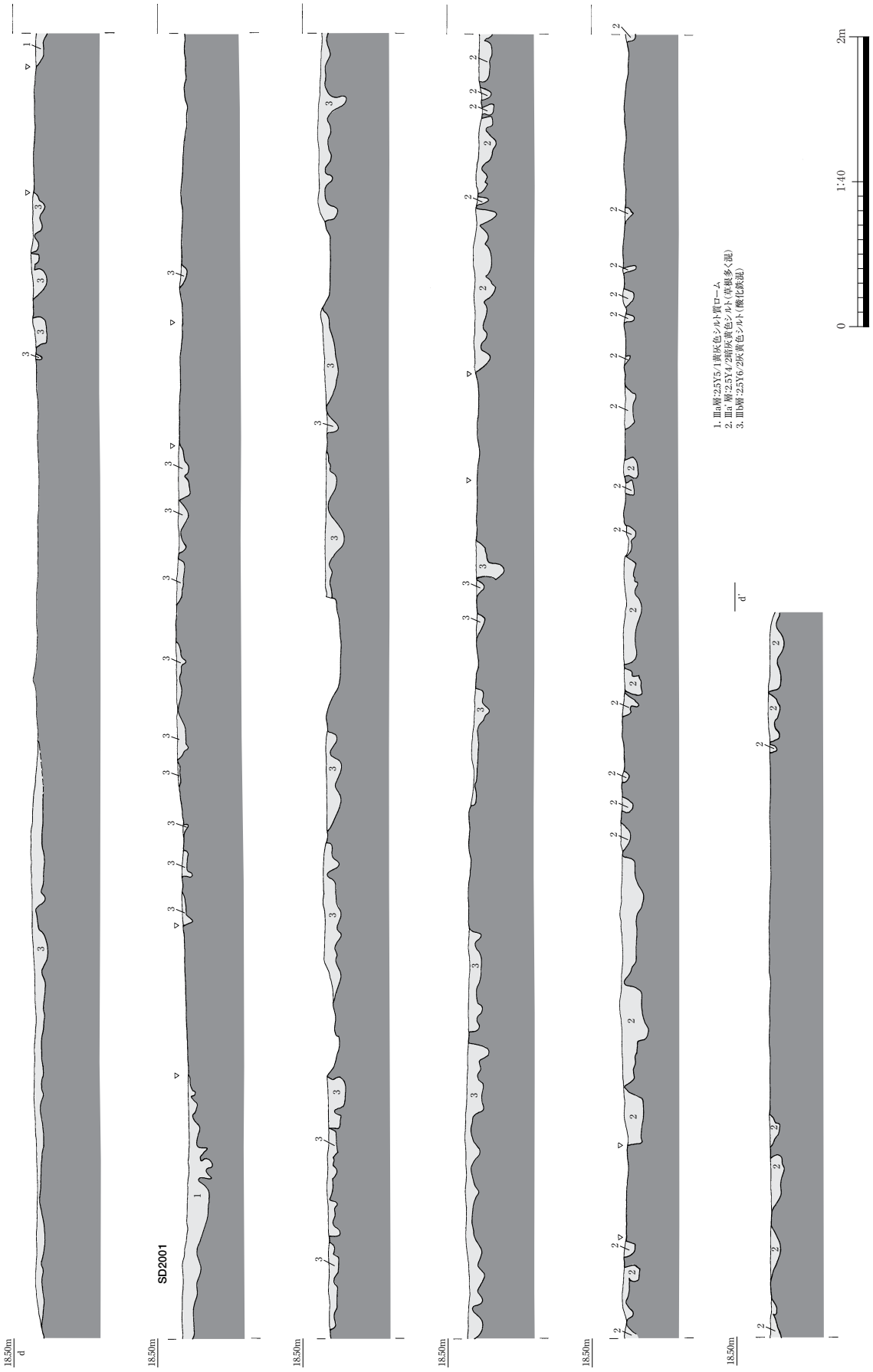
第377図　遺構実測図　(1/40)
A 8 地区　水田



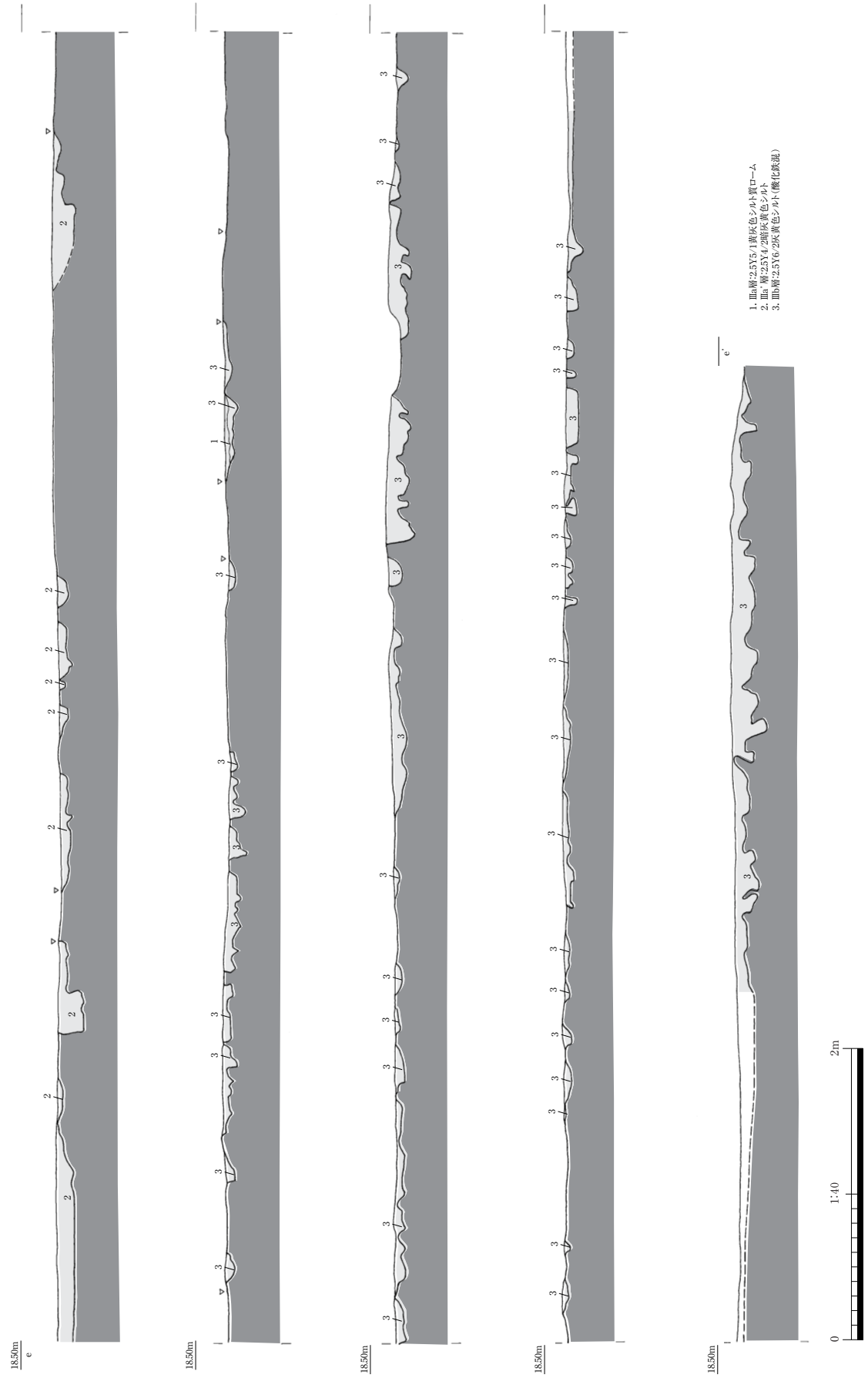
第378図　遺構実測図　(1/40)
A 8 地区　水田



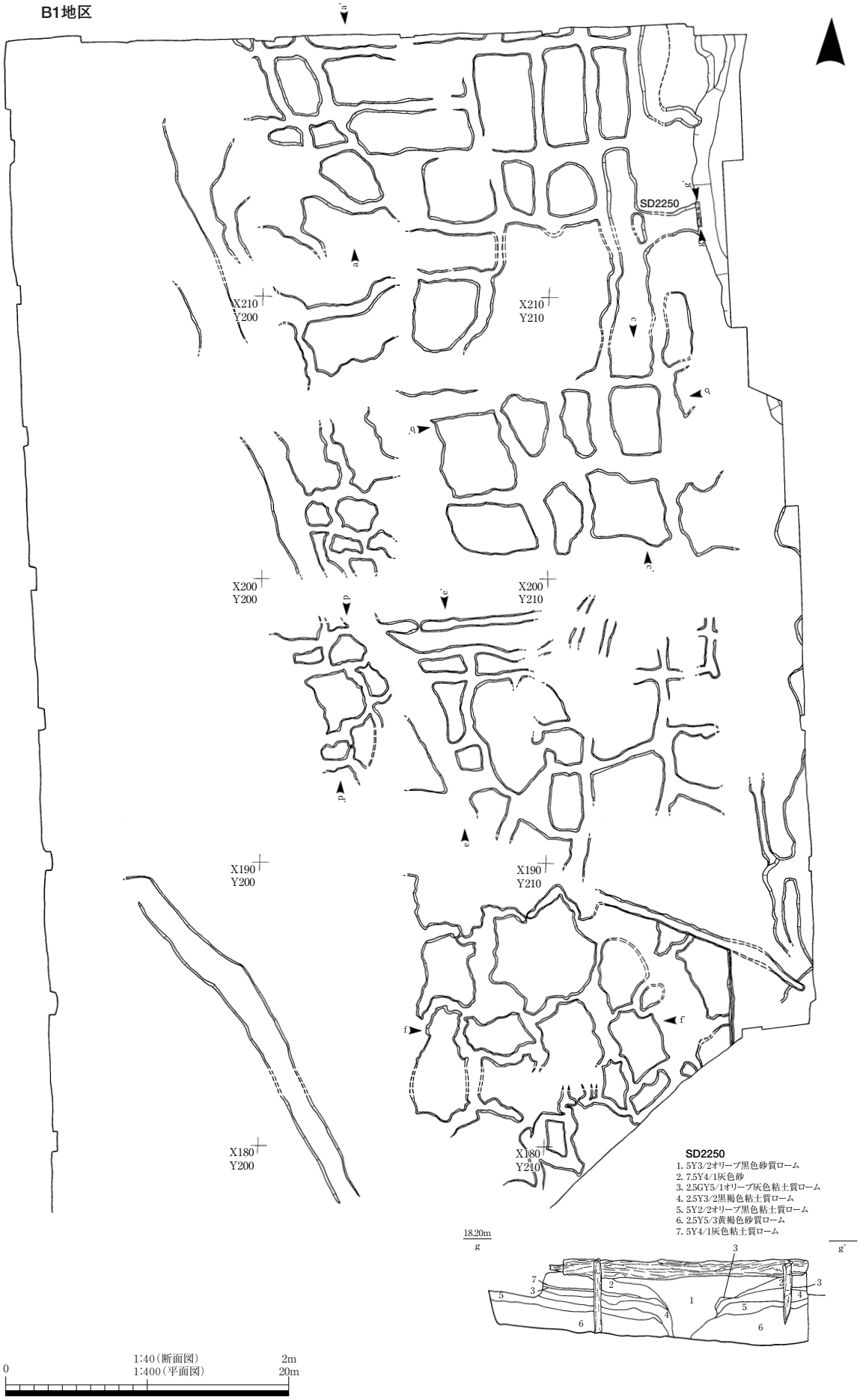
第379図　遺構実測図　(1/40)
A 8 地区　水田



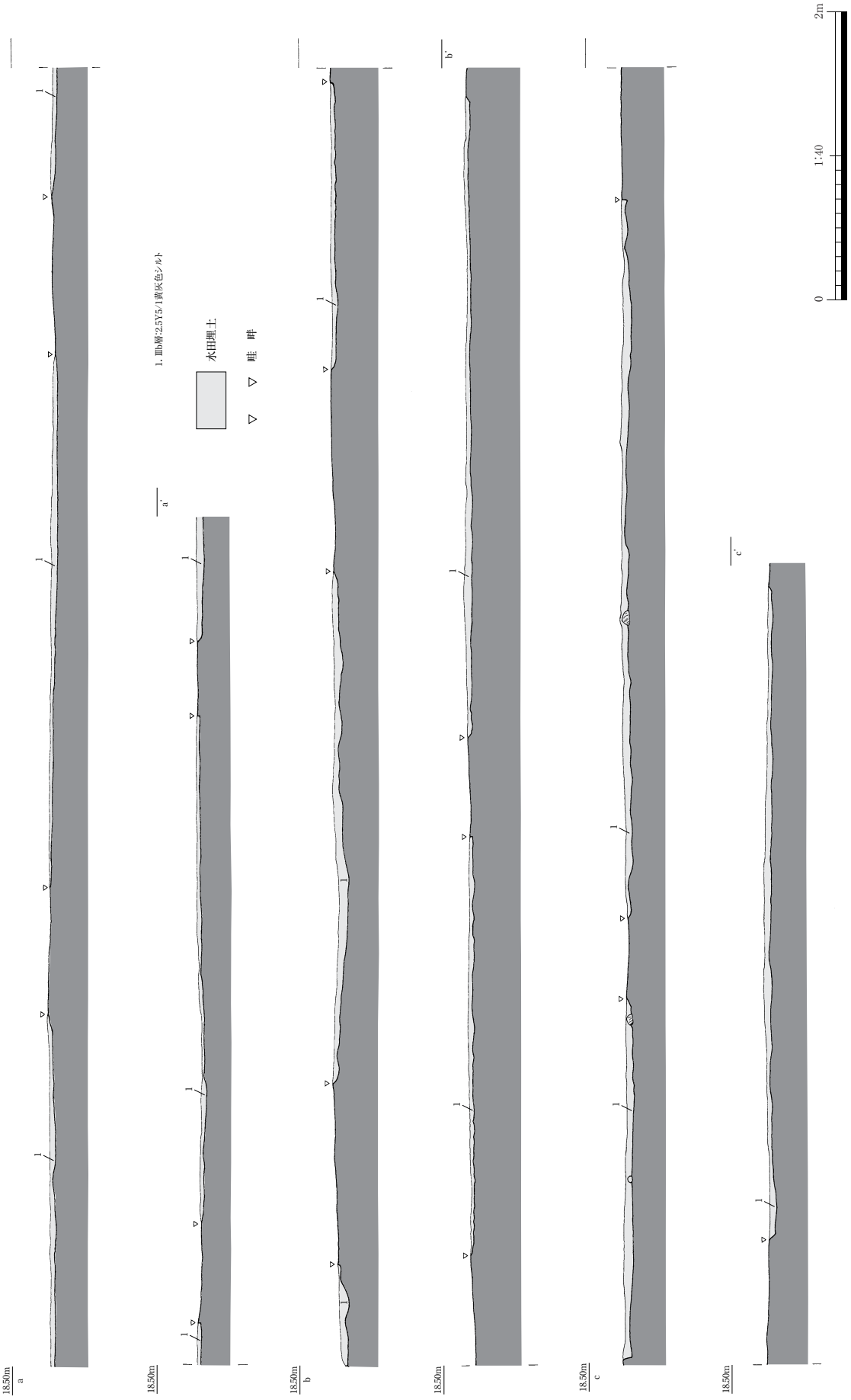
第380図　遺構実測図　(1/40)
Ａ８地区　水田



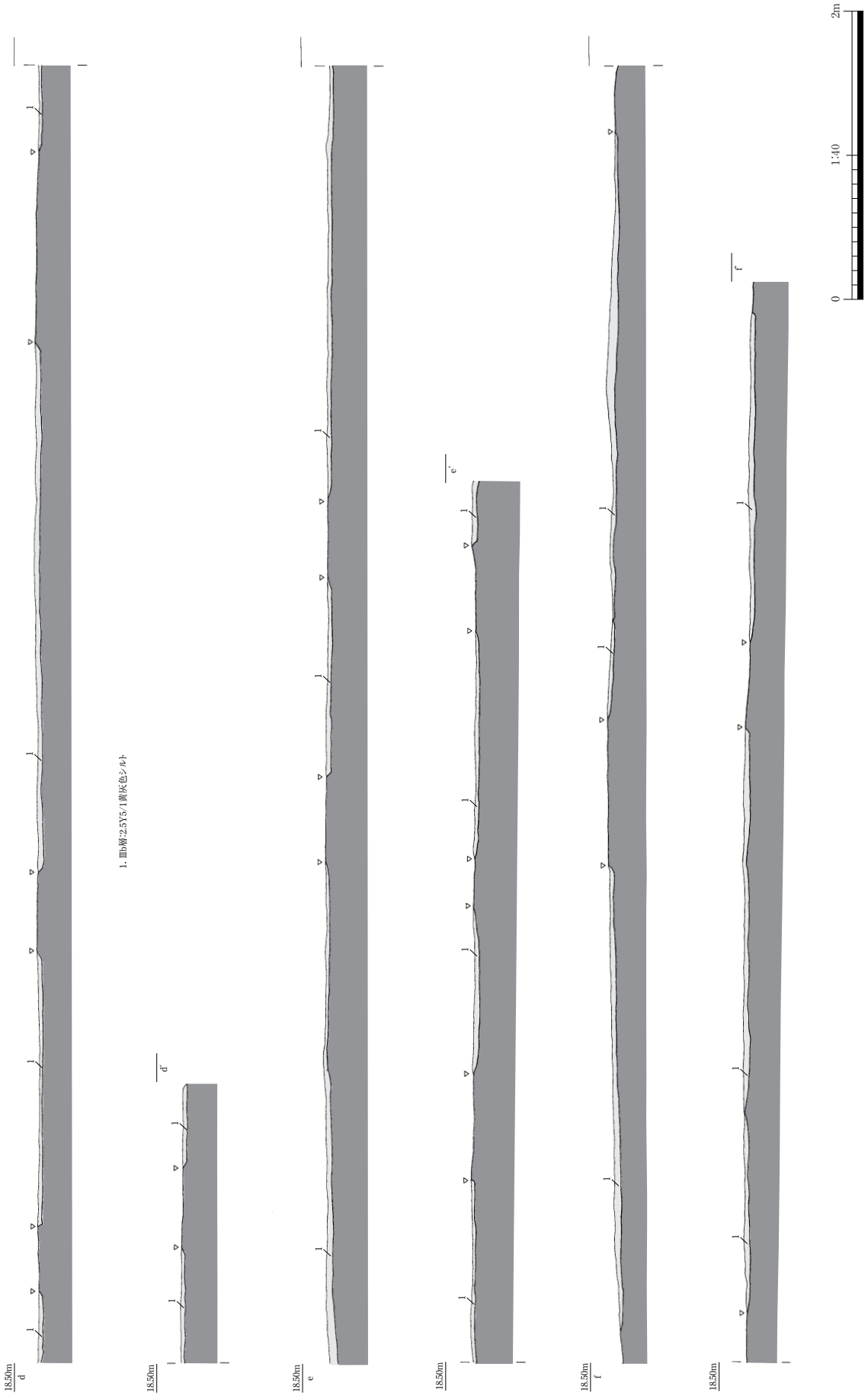
第381図　遺構実測図　(1/40)
A 8 地区　水田



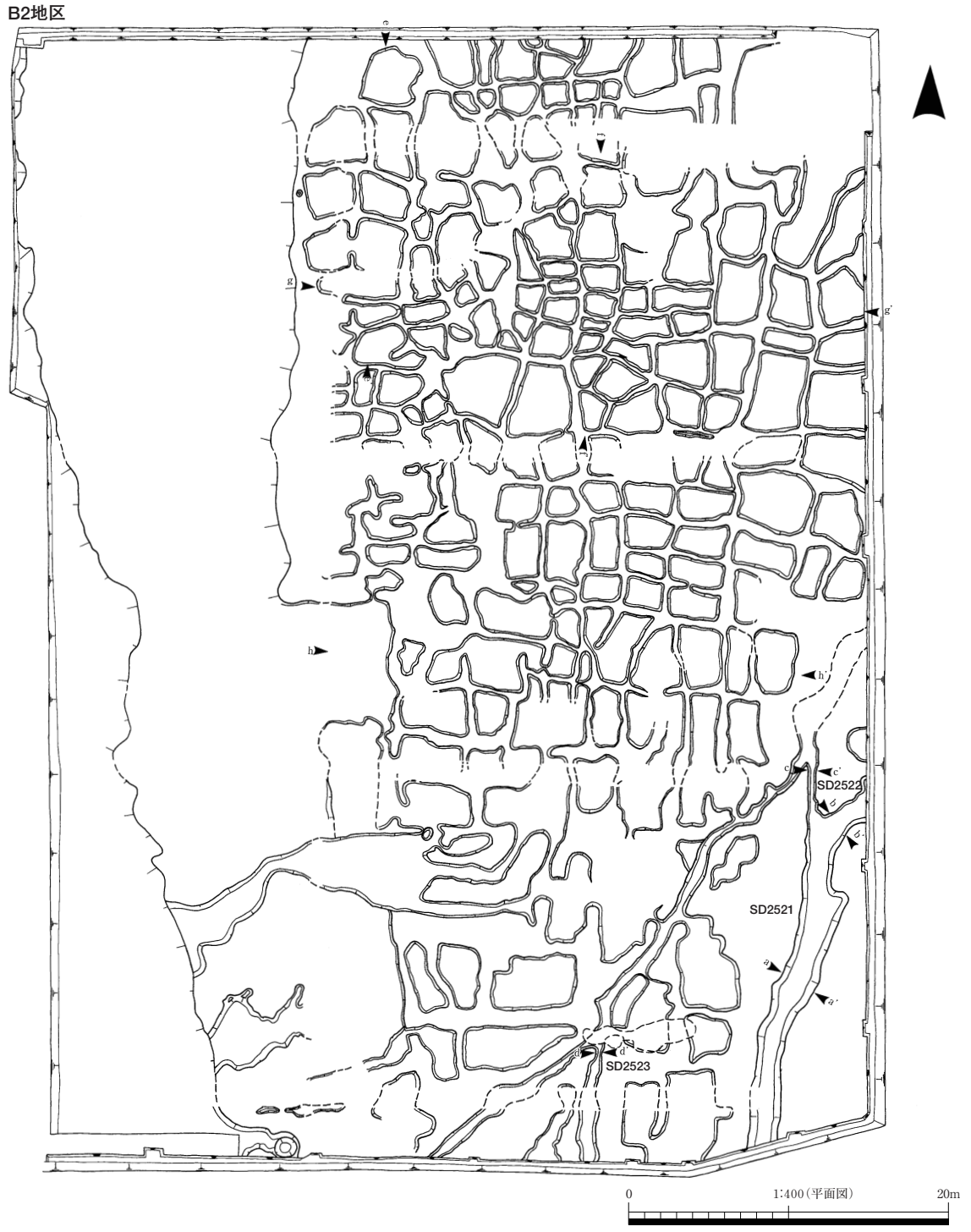
第382図　遺構実測図　(1/40・1/400)
Ｂ１地区　水田・ＳＤ2250



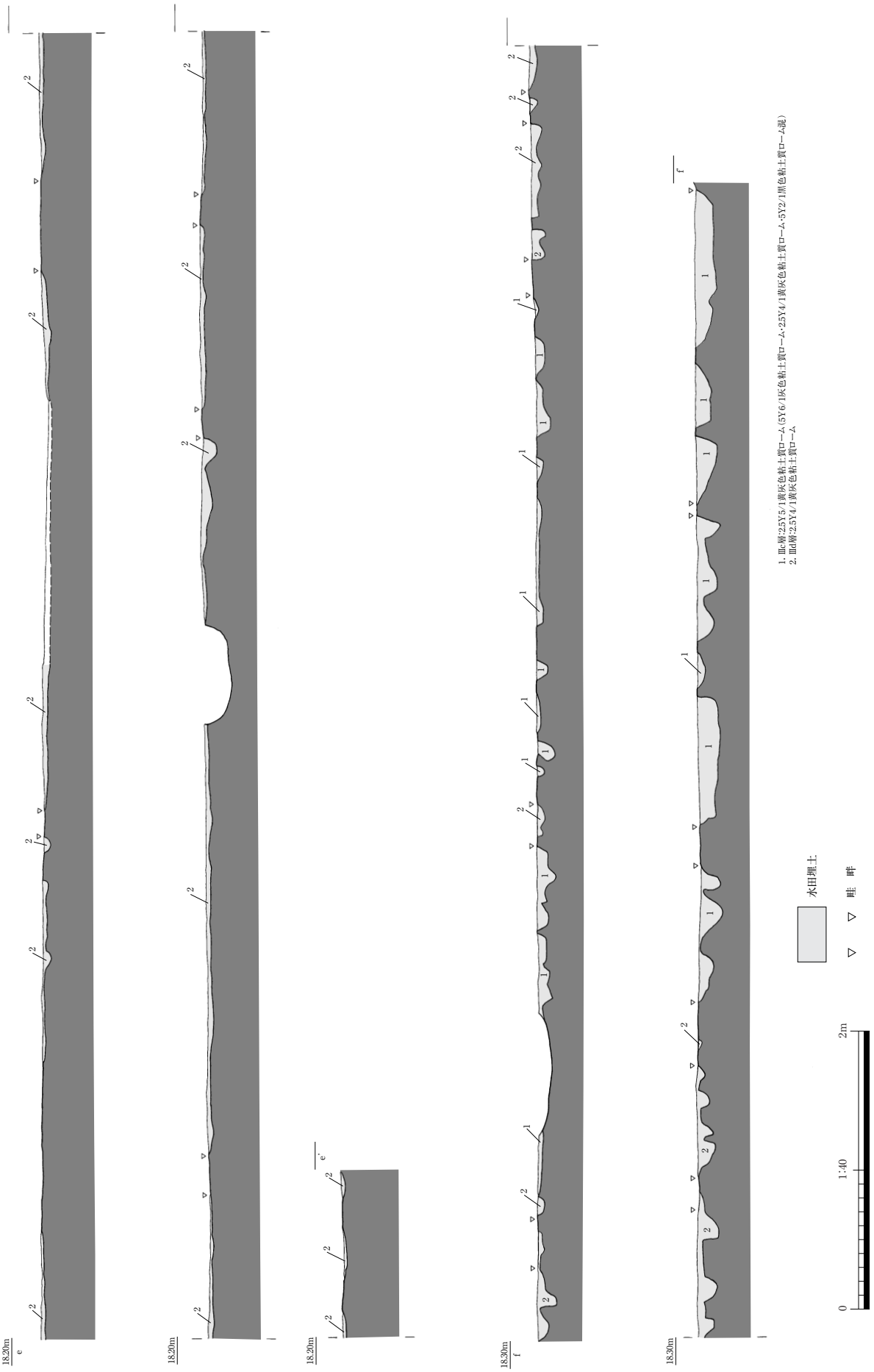
第383図　遺構実測図　(1/40)
B 1 地区　水田



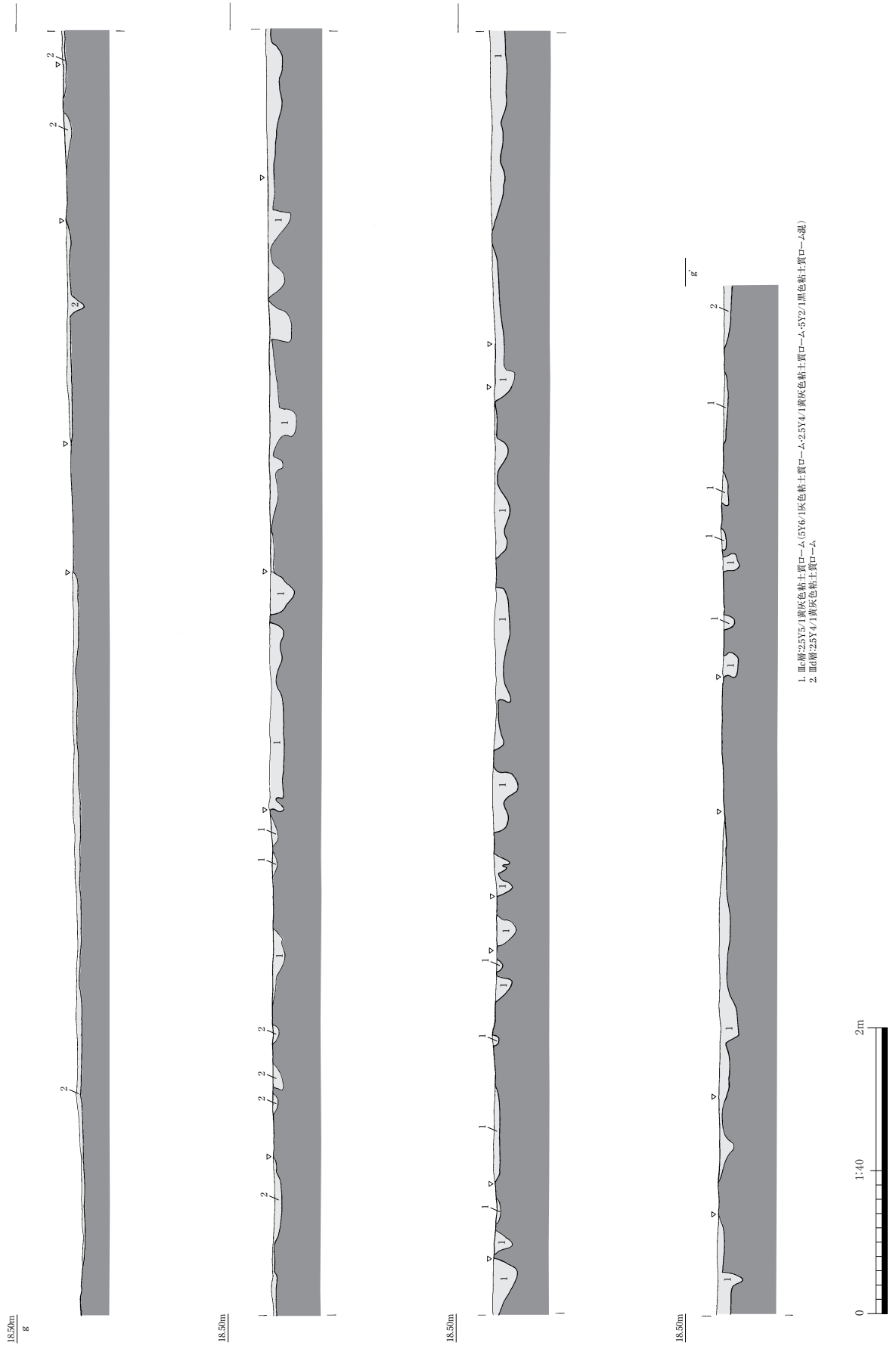
第384図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ１地区　水田



第385図　遺構実測図　(1/40・1/400)
B２地区　水田・ＳＤ2521～ＳＤ2523

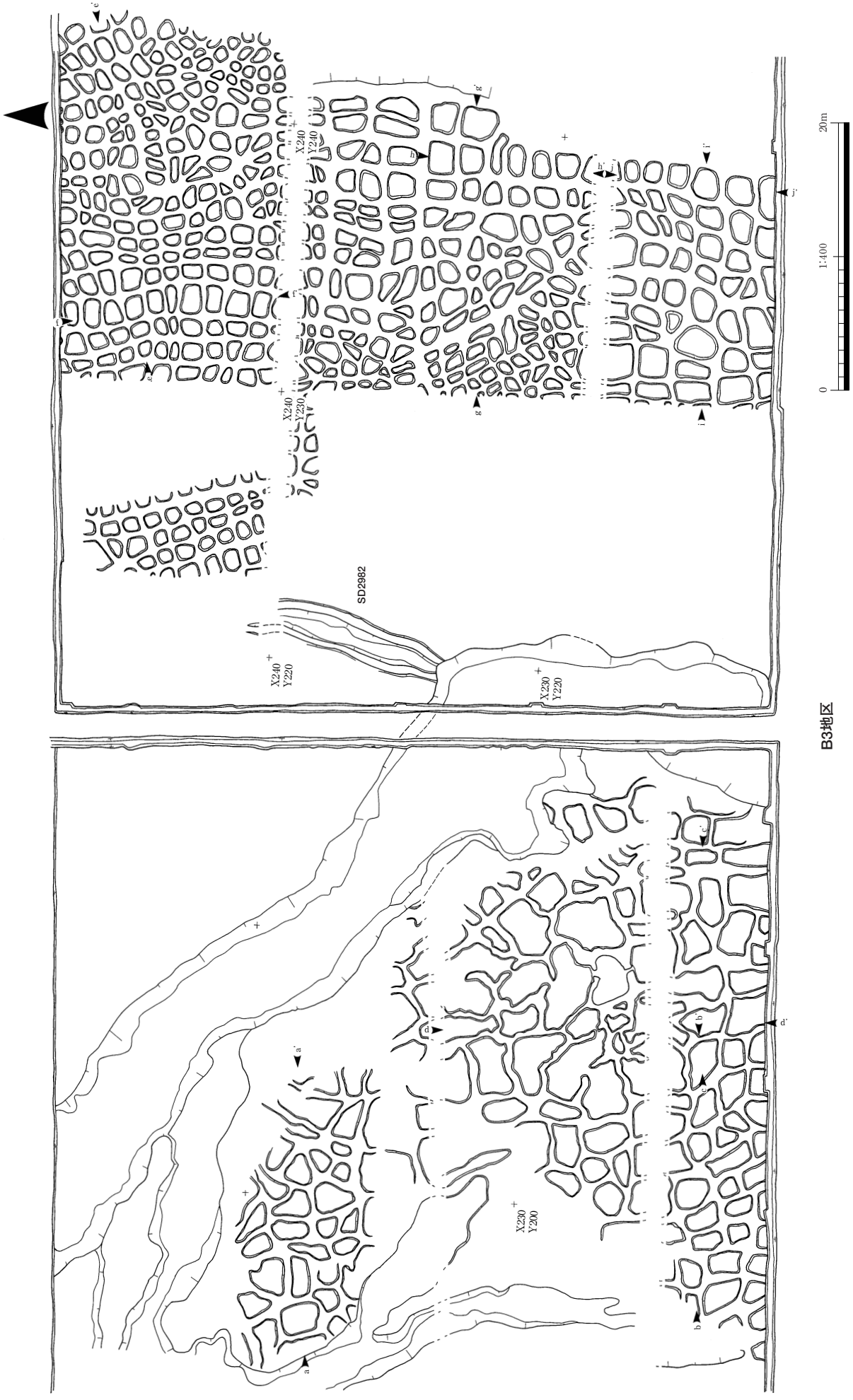


第386図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ２地区　水田

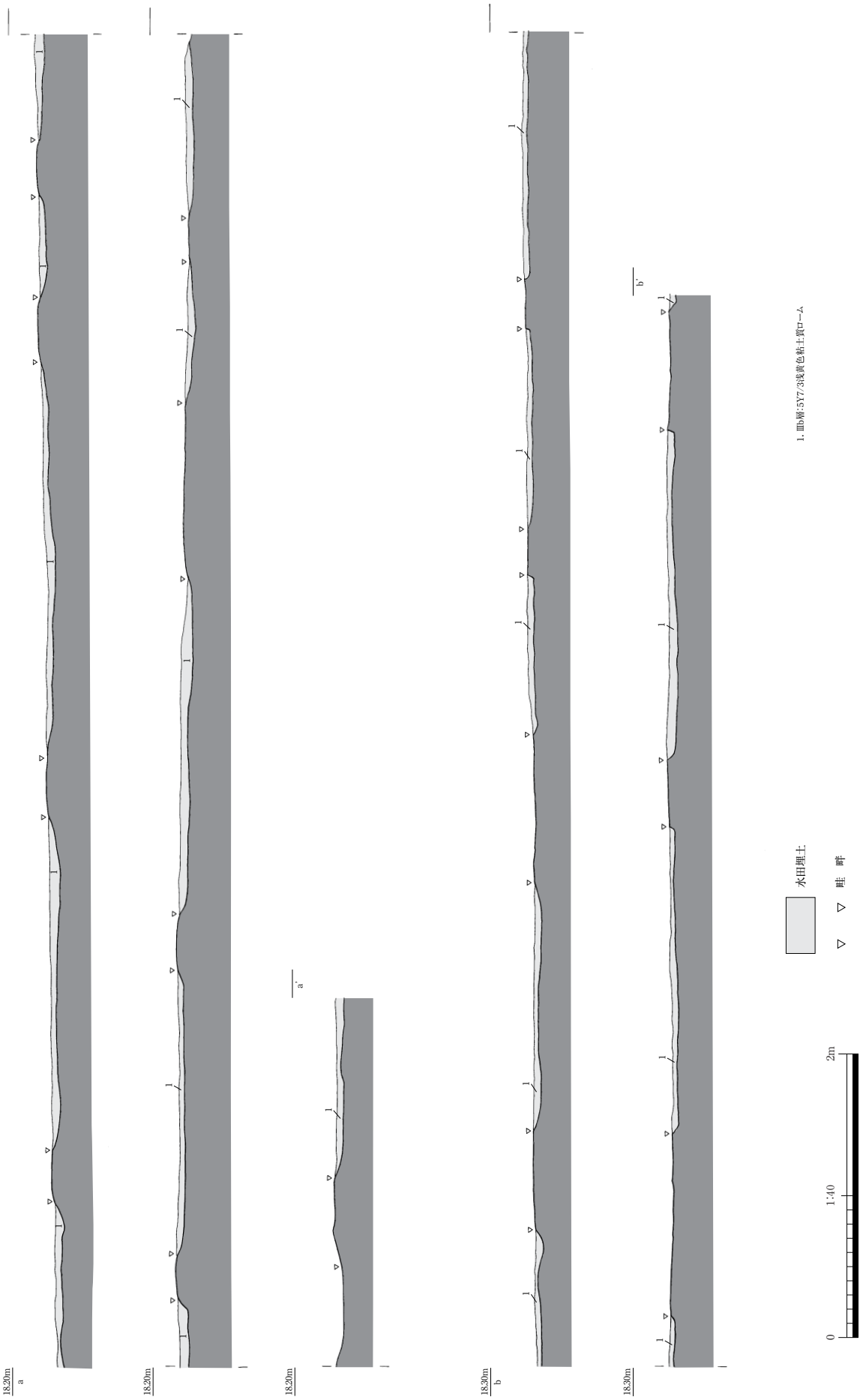


第387図　遺構実測図　(1/40)
B 2 地区　水田

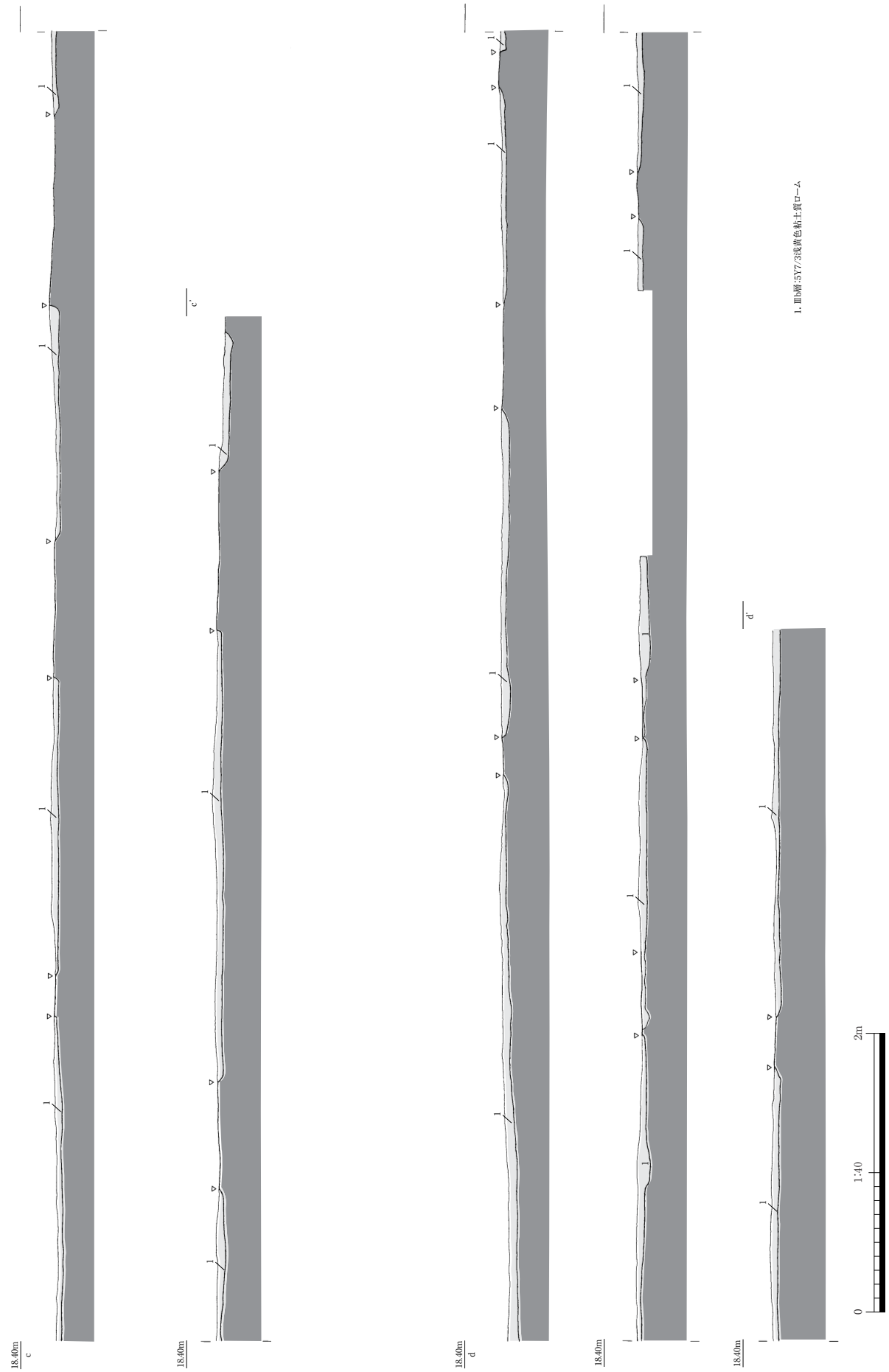
第388図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ２地区　水田



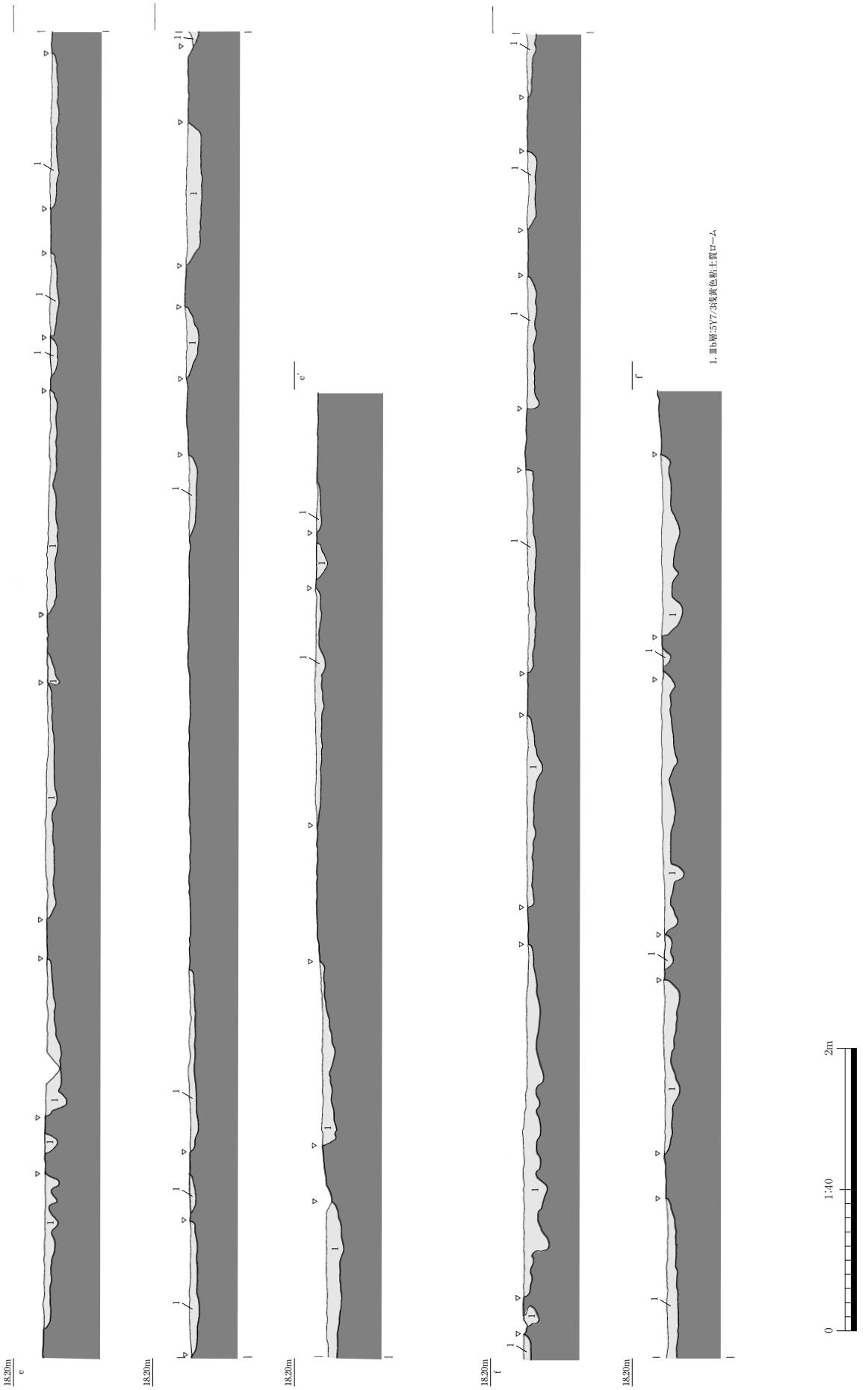
第389図　遺構実測図　(1/400)
B 3 地区　水田



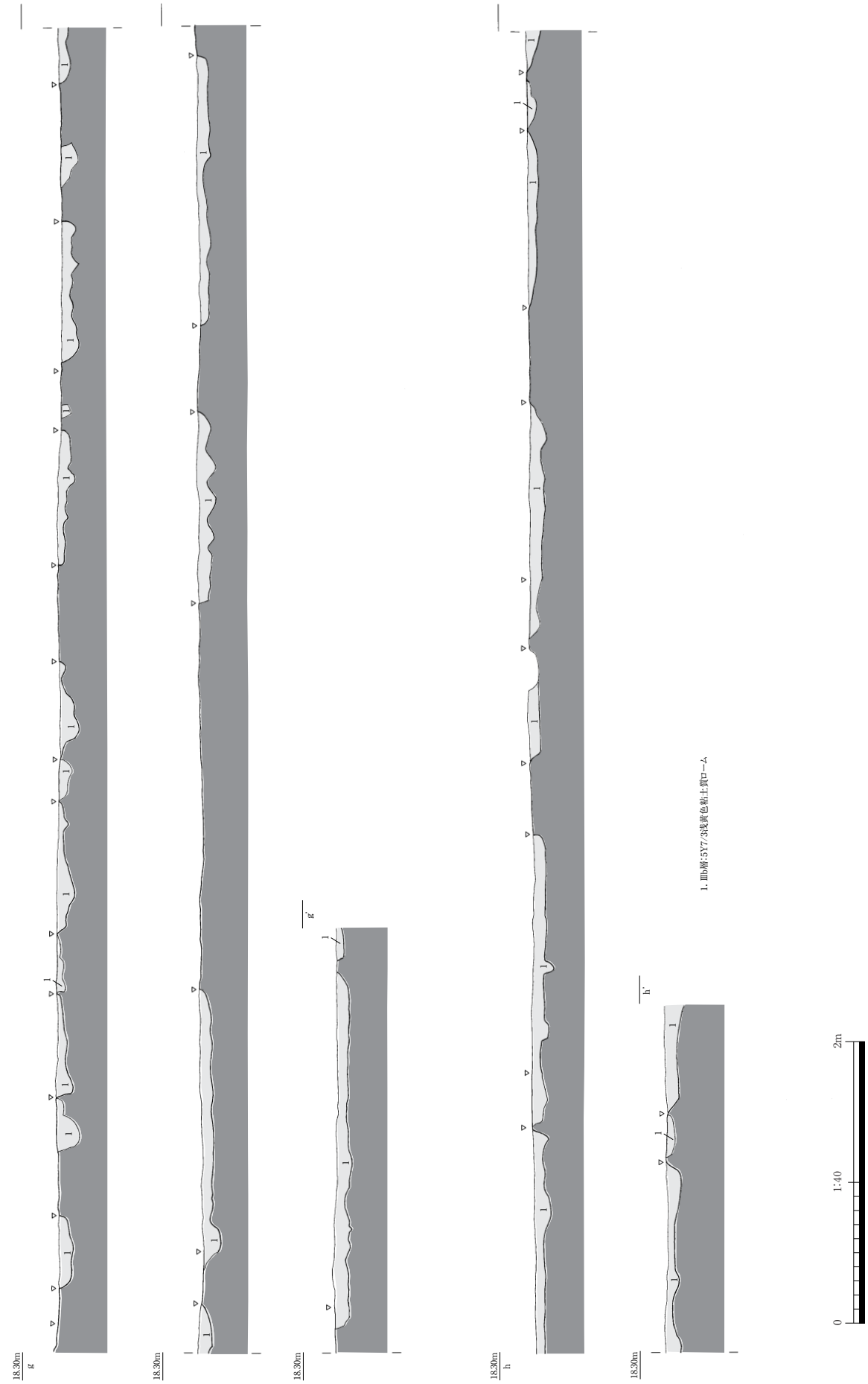
第390図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ３地区　水田



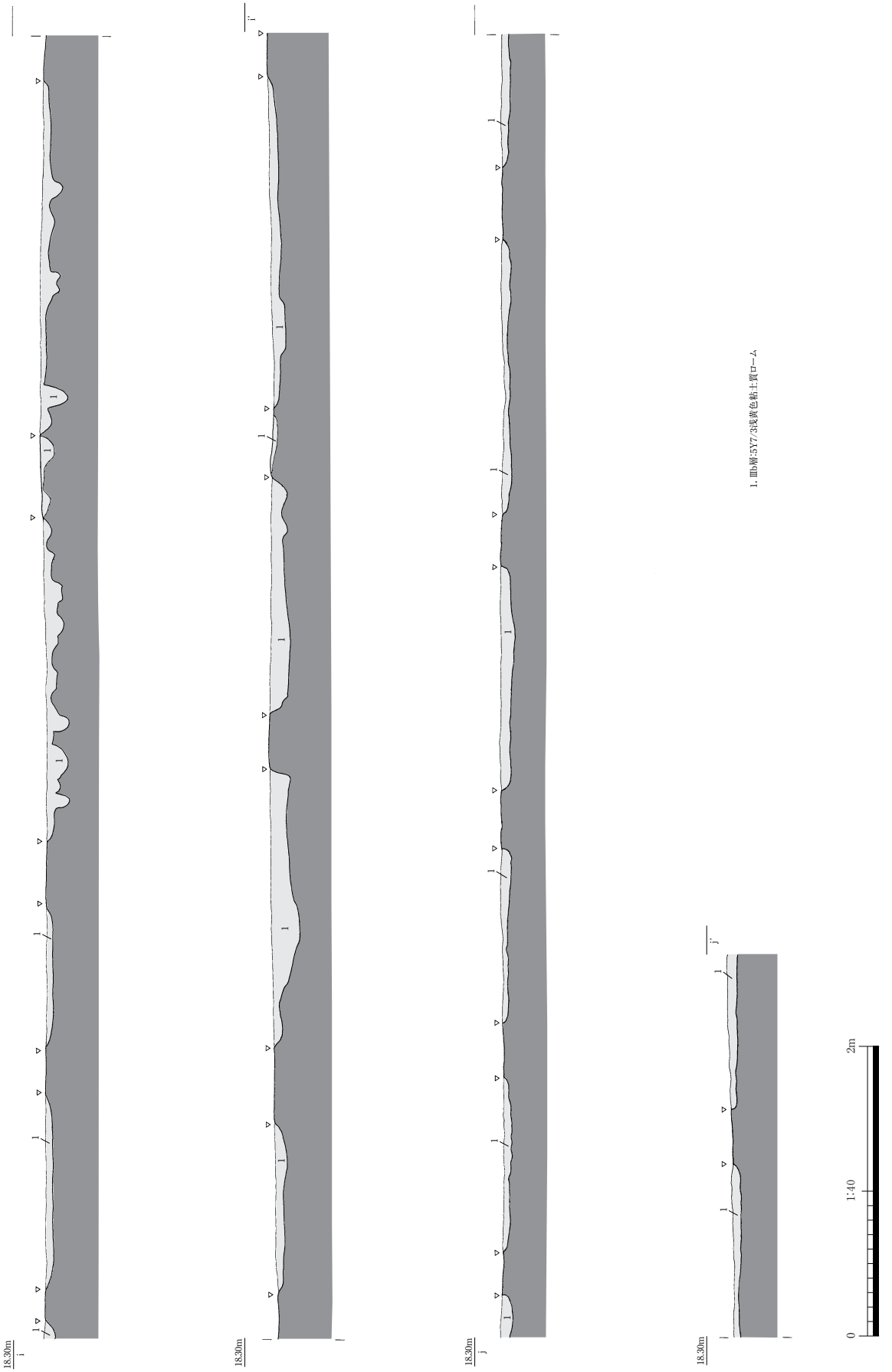
第391図　遺構実測図　(1/40)
B 3 地区　水田



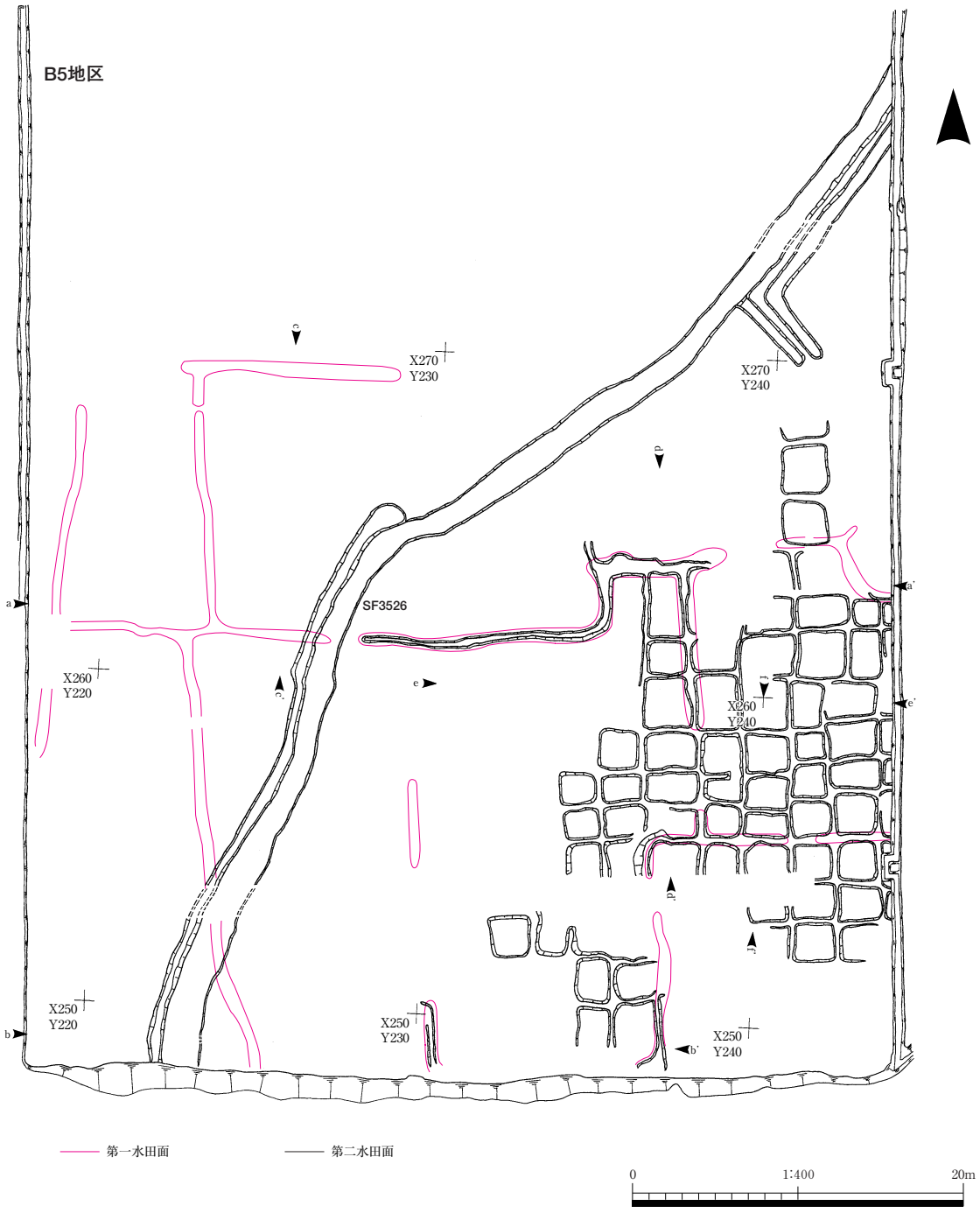
第392図　遺構実測図　(1/40)
B３地区　水田



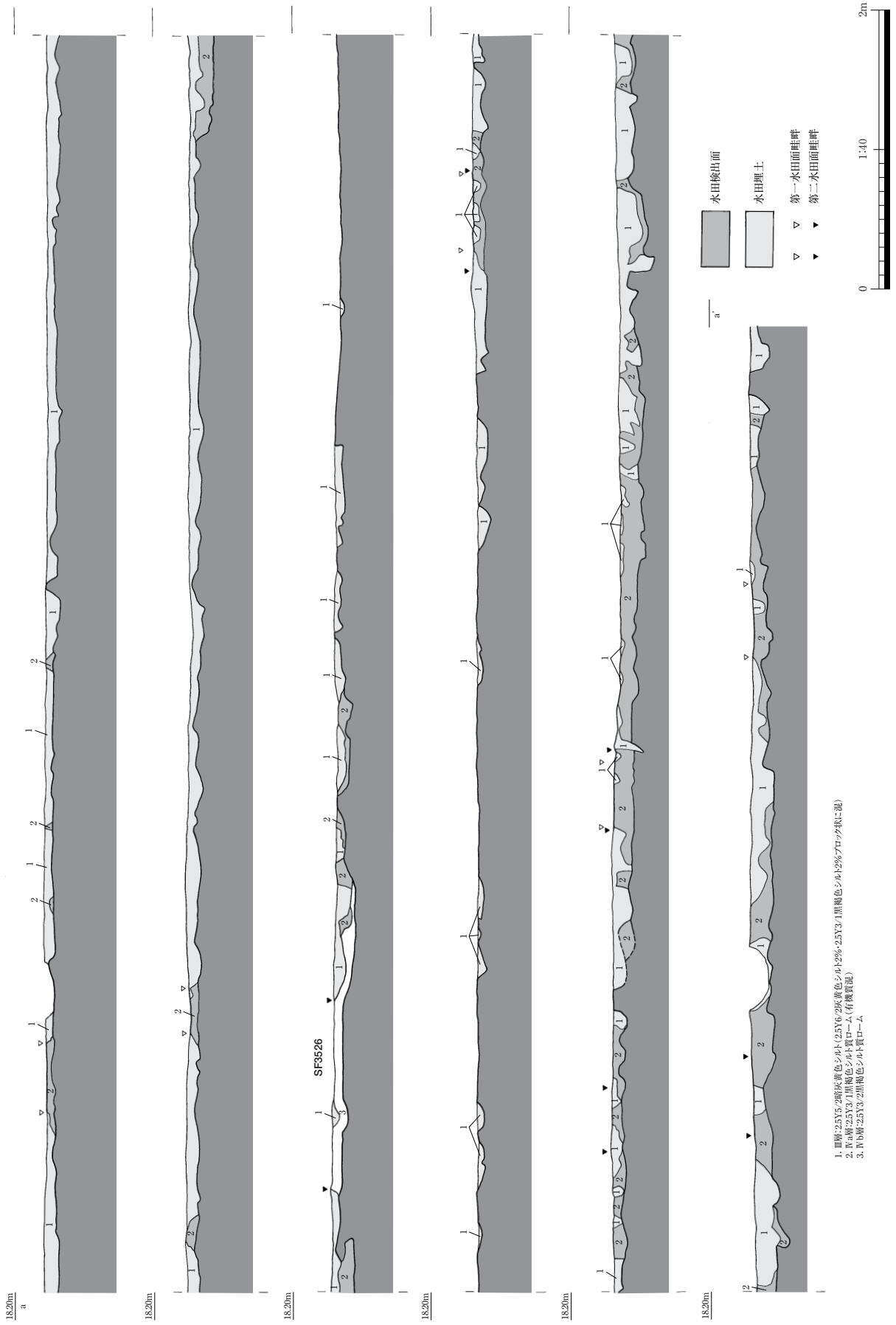
第393図　遺構実測図　(1/40)
B３地区　水田



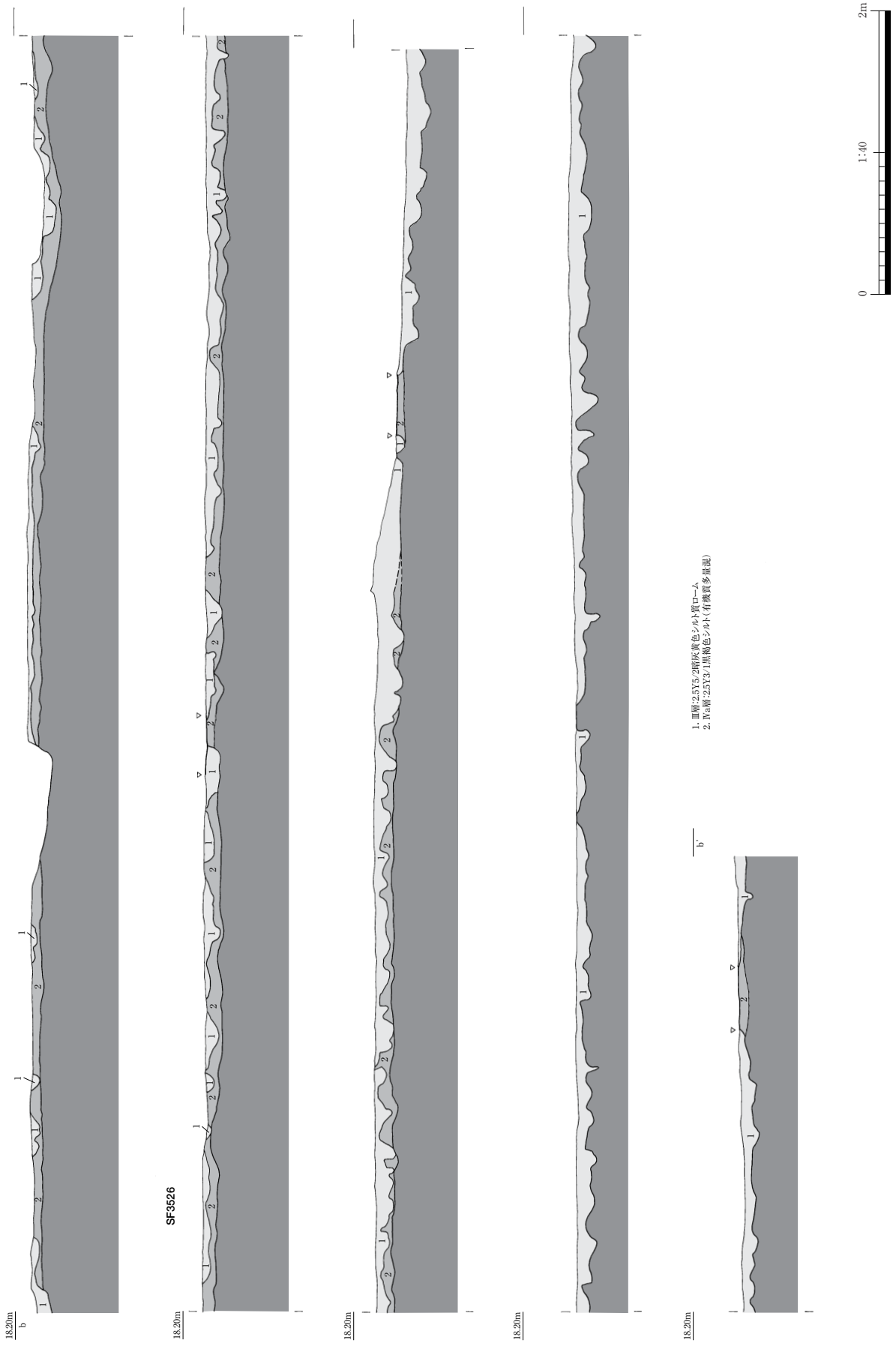
第394図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ３地区　水田



第395図　遺構実測図　(1/400)
B５地区　水田・ＳＦ3526

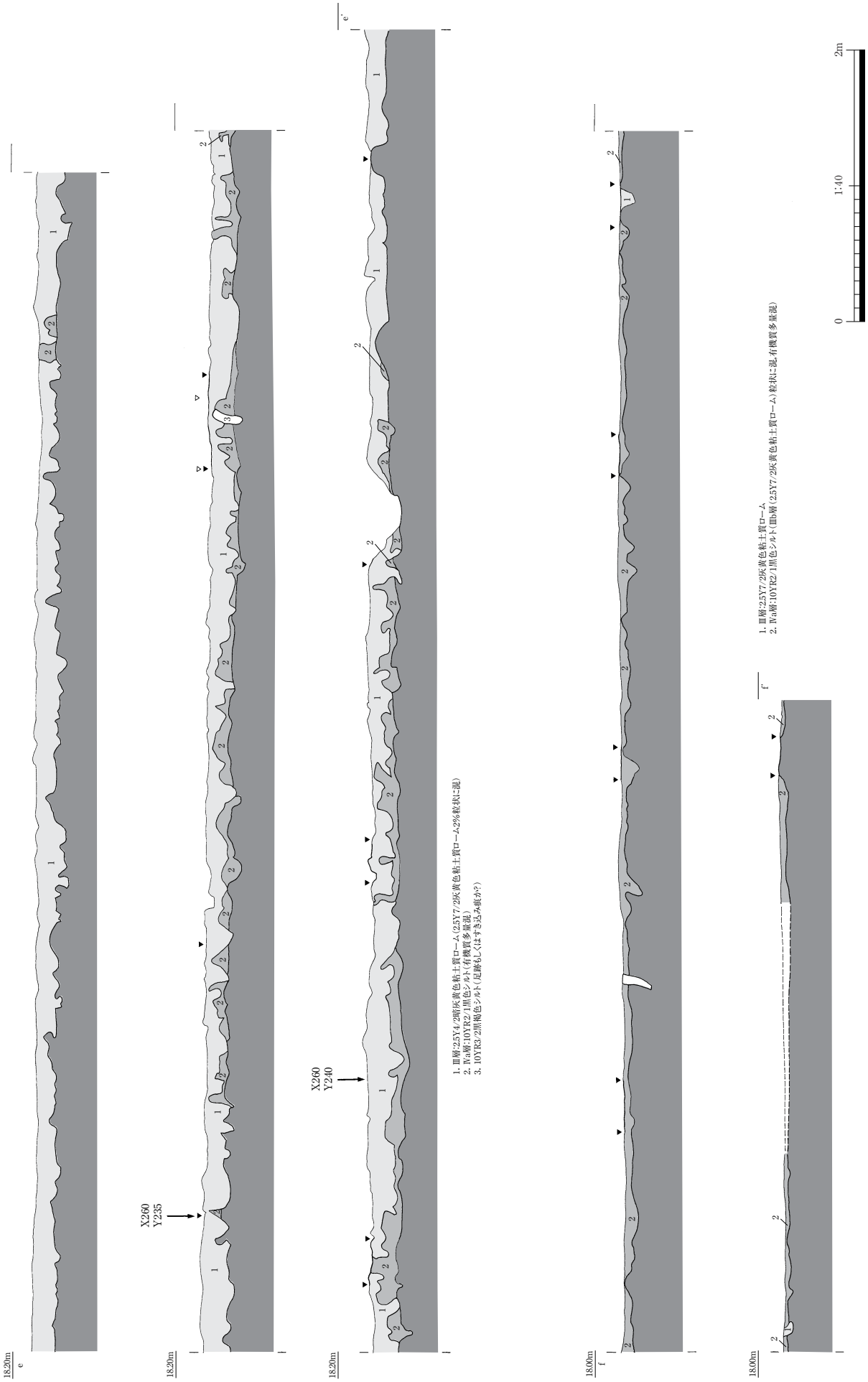


第396図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ５地区　水田・ＳＦ3526



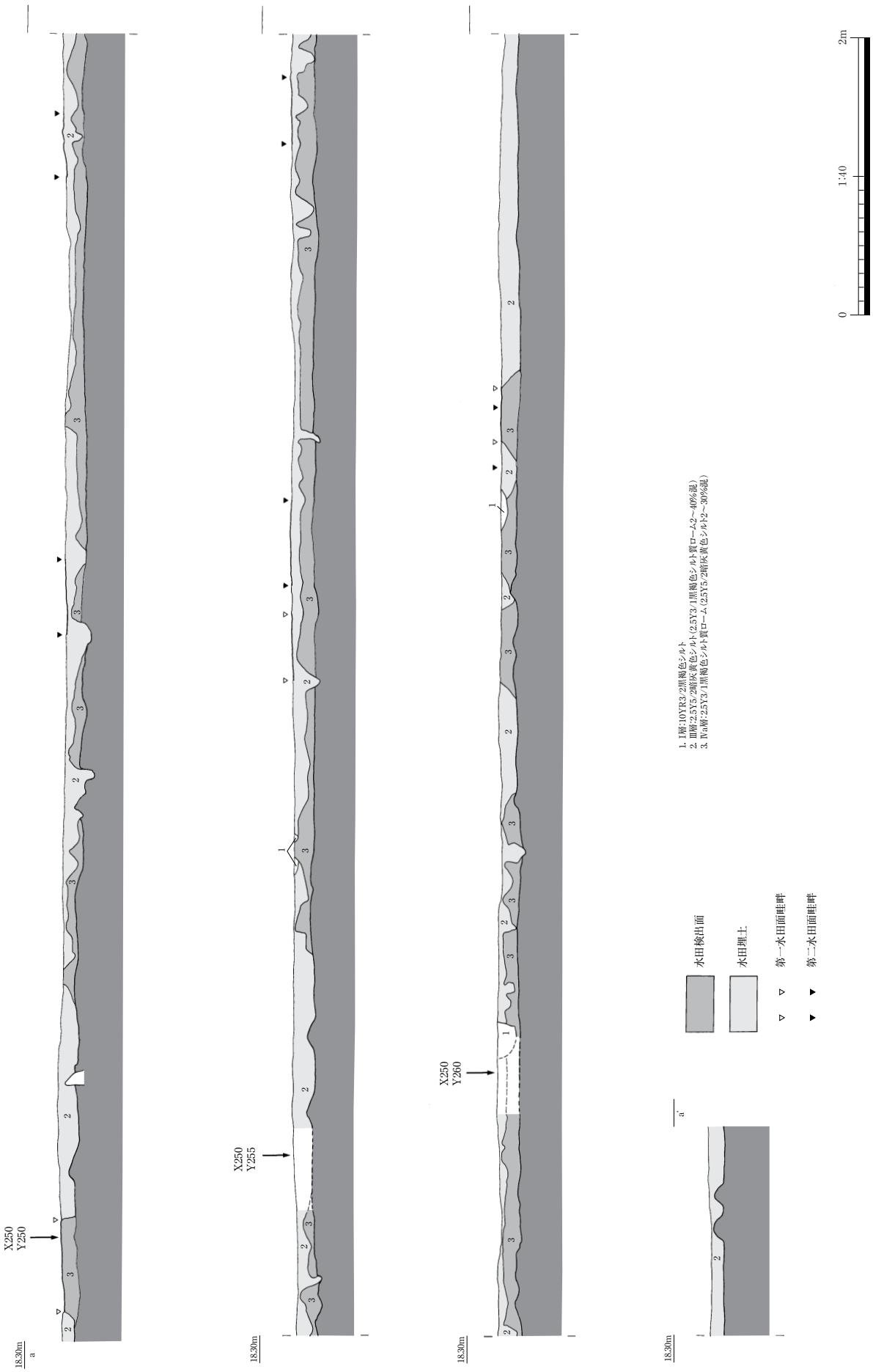
第397図　遺構実測図　(1/40)
B５地区　水田・ＳＦ3526

第398図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ５地区　水田



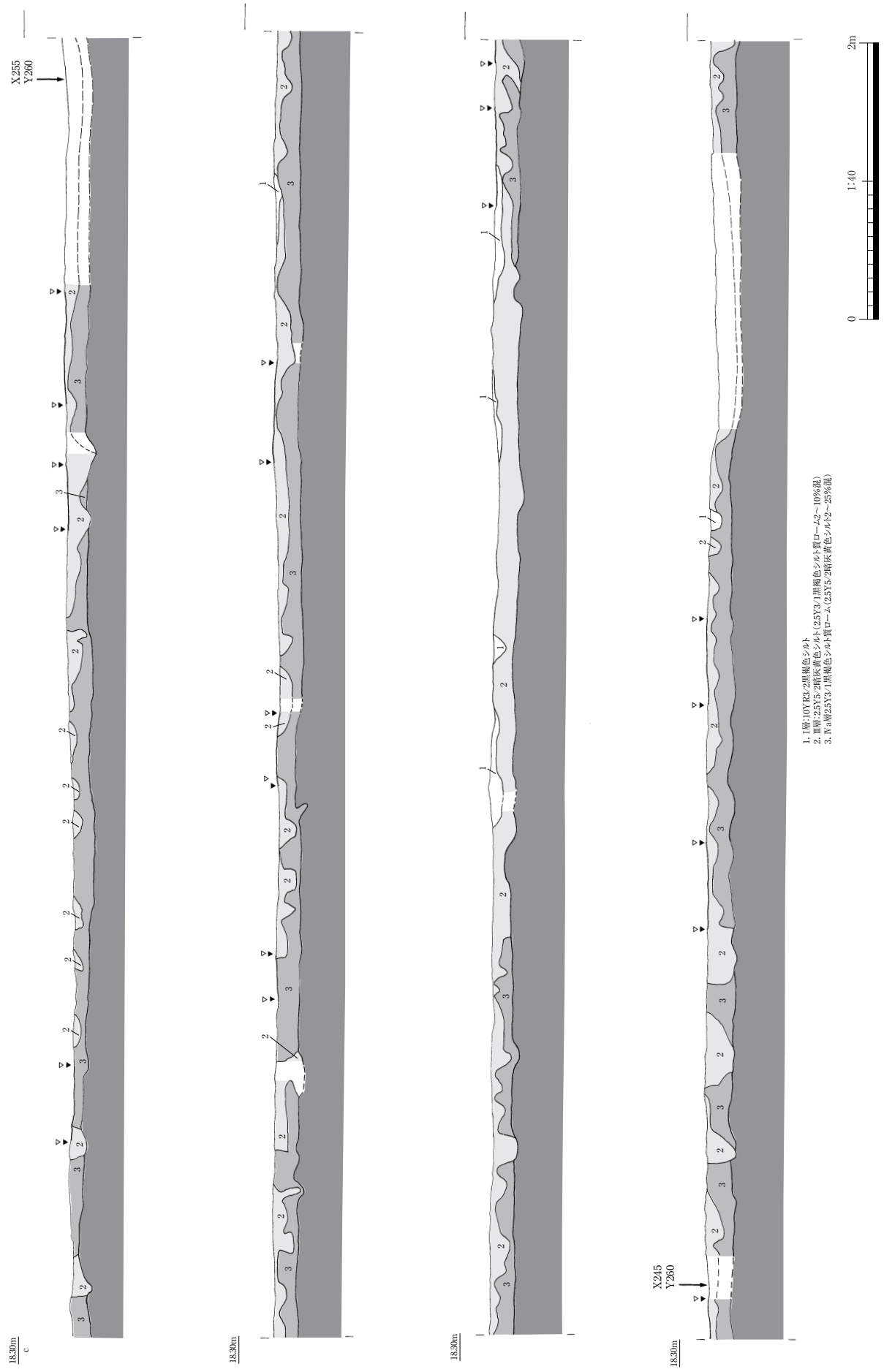
第399図　遺構実測図　(1/40)
B 5 地区　水田

第400図　遺構実測図　(1/400)
Ｂ６地区　水田

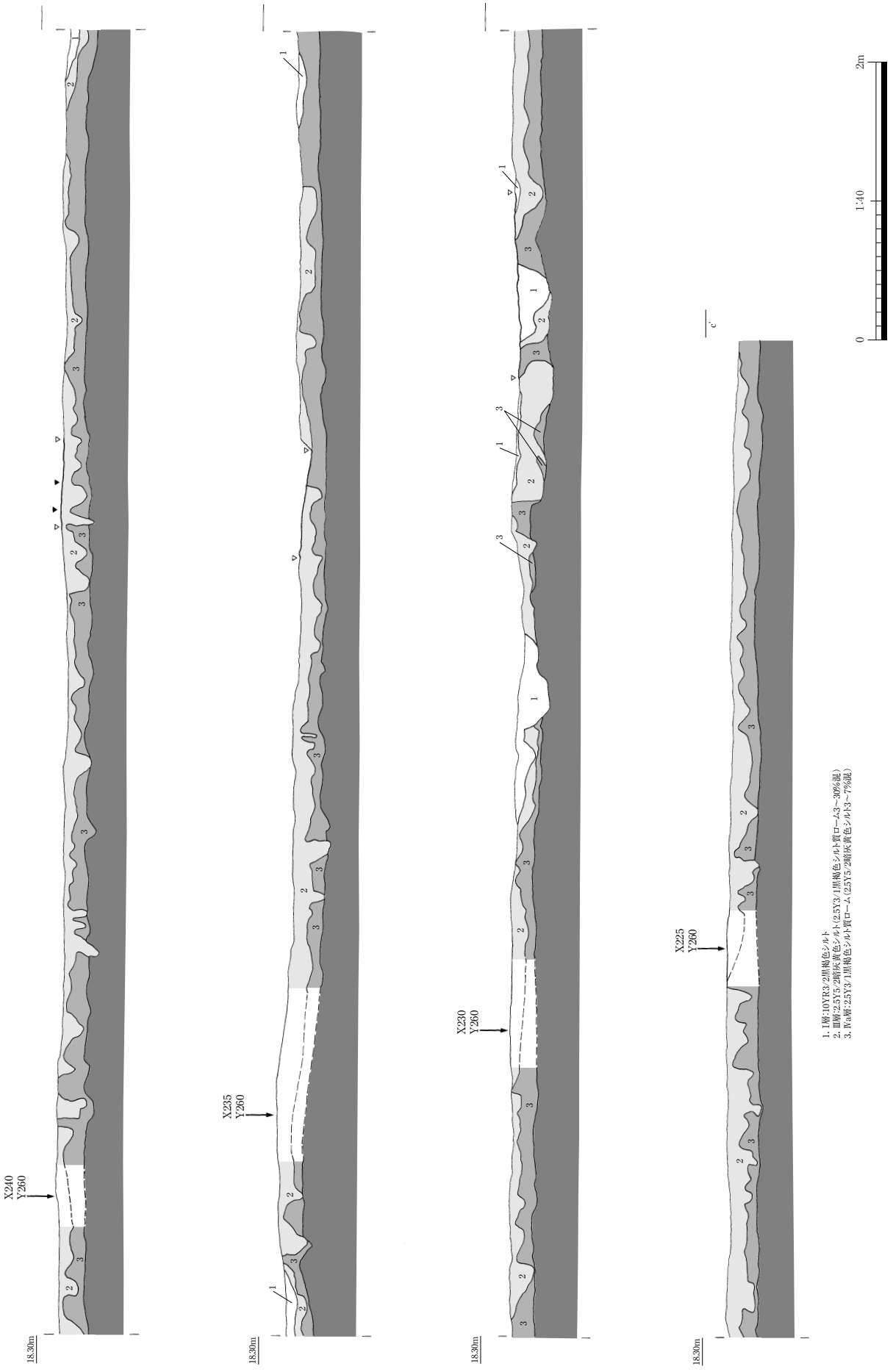


第401図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　水田

第402図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　水田



第403図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　水田



第404図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　水田

（3）A8～B6地区の遺構・包含層出土遺物

出土した遺物は，土師器・土製品（紡錘車）・木製品（火鑽臼・火鑽杵・鳥型・板材）・石製品（紡錘車・勾玉）である。これらは溝から出土しているものもあるが，大半が包含層から出土した。ただし，居住域ではなく，水田という生産域の遺構しかなかったため，遺物の量は少なかった。遺物の時期は一括性はなく，また包含層出土遺物が多いため，古墳時代前期から後期まで時期幅がある。

A　土器

須恵器（第405図，図版188）

3421・*3422*は須恵器。*3421*は杯蓋で外面に自然釉がかかる。天井部を回転ヘラケズリし，稜をもつ。胎土が赤褐色の陶邑産。時期はTK208かTK23で，5世紀後半。*3422*は杯身。口縁部にかえりを持つ。底部はヘラケズリ後に調整のための板圧痕が残る。器高は3.35㎝。時期は6世紀後半。

土師器（第405・406図，図版188～191）

3423～*3463*は土師器。*3423*～*3437*は甕でくの字状口縁。*3423*・*3424*は頸部で強く屈曲し外に開くタイプで，他は頸部で緩く屈曲し外反するタイプ。*3423*は外面にススが厚く付着し，調整は不明。*3424*は口縁端部を面取りし，内側につまみ出す布留系。口縁と胴部に黒斑が見える。*3425*～*3430*は大型の甕で内外面ハケ。*3426*・*3428*は長胴で，*3425*・*3427*・*3429*は球胴に近い。*3430*は頸部内面に分厚い粘土接合痕を残す雑な作り。*3431*～*3437*は中・小型の甕。*3431*は内外面ハケ。*3432*は口縁外面をヨコハケ，内面をナデと沈線1条を施す。*3433*は内外面ヘラケズリ。*3434*～*3436*は外面をハケと下半をケズリ，内面ハケ。*3434*・*3436*は丸底。これらは小矢部市道林寺遺跡[注5]・金沢市田中A遺跡[注6]のものに近い。*3435*は尖り気味の底部。*3437*は小型で胴部中位で屈曲する。時期は*3423*～*3425*・*3431*・*3432*・*3435*が古墳時代前期，他は中期と考える。*3428*はその中でもやや新しい様相を持つ。

3438～*3452*は壺。*3438*は有段無文口縁の大型壺で，内外面をハケの後ミガキ。*3439*は複合口縁の壺。口縁下半に3条の沈線を施す。内外面赤彩。勅使塚古墳[注7]に類例がある。*3440*は有段無文口縁の中型壺。*3441*～*3443*は有段無文口縁の小型壺。*3442*は非常に薄い作りで，内外面ミガキの後赤彩。*3443*は頸部にヘラ状工具による連続刺突を施す。*3448*は直口壺と考えるが，外面にススが付着し，甕としての利用が窺える。*3445*はくの字状口縁の小型壺で内外面ハケ。*3446*は頸部から緩く外反するくの字状口縁の壺と考えるが，外面にススが付着し，全体はないが甕とすれば*3429*と同様な器形か。頸部に指頭圧痕が残る。*3447*～*3452*は小型丸底壺で底面に円形の黒斑が残る。*3448*・*3450*は内面に指頭圧痕が見える。外面の調整は*3447*・*3448*がハケ，*3449*～*3452*がナデ。時期は*3438*～*3445*が古墳時代前期，他は中期か。

*3453*は器台で，小型器台の受部。古墳時代前期。

3454～*3458*は高杯。*3454*は椀形の杯部にハの字状に開く脚部が付くもの。杯部内面を黒色処理し，ミガキを施す。*3455*は分厚い器壁の脚部。外面赤彩。*3456*～*3458*は脚裾部で強く屈曲するタイプ。*3456*は内面に輪積み痕が明瞭に残る。時期は*3455*が古墳時代前期，他は中期で，*3454*は新しい様相を持つ。

3459～*3461*は椀。*3460*・*3461*は内外面ミガキで口縁がやや内湾する。*3459*は内面をミガキの後赤彩し，黒斑が残る。時期は5世紀後半から6世紀。

3462・*3463*は蓋。*3462*は外面赤彩でかえりが付くもの。*3463*はつまみ部のみ。時期は古墳時代前期。

注5　上野章・岸本雅敏他　1978年「道林寺Ⅰ遺跡」『日の宮遺跡』富山県教育委員会，伊藤隆三　1987年『道林寺遺跡』小矢部市教育委員会
注6　増山仁　1992年『金沢市田中A遺跡』金沢市教育委員会
注7　中川道子　2003年「勅使塚古墳」『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

遺物の時期は古墳時代前期～中期と時期幅があるものの，遺構及び水田近くの包含層出土の遺物の時期は，概ね古墳時代中期であり，その時期の水田と考えられる。県内でこの時期の遺跡を調査した例は，小矢部市道林寺遺跡・小矢部市五社遺跡[注8]・富山市古沢Ａ遺跡[注9]・富山市境野新遺跡[注10]・射水市北野遺跡[注11]・氷見市中谷内遺跡[注12]など数少なく，遺物量も少ないため，貴重な調査例となるであろう。

Ｂ　土製品（第409図，図版194）

土製品は紡錘車が包含層から２点出土した。*3486* は表面右側と裏面が若干欠けているものの，ほぼ完形で出土した。直径約3.7㎝，厚さ0.8㎝，中心の孔は直径0.7㎝を測る。胎土には海綿骨針を含む。*3487* は1/2程度欠損した状態で出土した。直径約3.9㎝，厚さ0.6㎝を測る。いずれも焼成前の成形である。

Ｃ　木製品

2250号溝（ＳＤ2250，第407図，図版174）

3464 ～*3466* は取水施設かと考えられるＢ１地区ＳＤ2250から出土したもの。*3464* は上下端部に近い部分にほぼ同じ大きさの長方形の孔をあけ，一端では孔と端部の間に小さめの孔をあけた部材。*3465* ・*3466* は角材の下端を四方から削り落として尖らせた杭。樹種はいずれもスギ。

2532号溝（ＳＤ2532，第407図）

3467 はＢ２地区ＳＤ2532から出土した部材。断面は隅丸方形で，上下の幅はやや広くとり，上下端部は角を削り落として丸みをもたせる。上部は左右に切り込みをいれ，方形の孔をあける。この切り込みには結縛などの痕跡はない。下部にも方形の孔をあけており，孔内面には顕著な圧痕がある。また裏面では，上下部の孔左右にも直角に交わる圧痕があり，別材を組み合わせた時の細工かと考えられる。樹種はスギ。

包含層（第408～409図，図版192・193）

包含層の木製品はⅢ・Ⅳ層出土のものをとりあげた。Ⅳ層からは弥生土器の出土が多いものの，須恵器も出土しており，これらの木製品が帰属する時期は弥生時代後期から古墳時代後期と幅をもつ。

3468 ・*3469* は円形板。*3468* は側面に１箇所木釘が残り，木釘穴も残存する。中央には楕円形の大きな孔があけられている。容器底板かと考えられるが，中央の孔の役割は不明である。樹種はスギ。

3470 はヤス状木製品。両端を細くとがらせている。

3471 ～*3473* は発火具で，*3471* ・*3472* は火鑽臼。いずれも完形ではなく，*3471* は６箇所，*3472* は２箇所で火鑽穴を確認できる。*3473* は火鑽杵。下端は丸く削られて，焦げている。樹種はスギ。

3474 はヘラ状木製品で，なで肩を削り出し，裏面は平らに仕上げる。樹種はスギ。

3475 は切り欠きを入れて逆Ｓ字状に加工し，表裏に貫通しない穴が３箇所穿たれている材である。欠損する右端はその角度からみて，そう大きくは欠損していないと考える。祭祀具の鳥形か。穴に別材をはめ込んで羽根を表現したかと考えている。樹種はスギ。

3476 ～*3479* は用途不明の部材。*3479* は上端近くに切り欠きを入れ，そこが欠損している。表面は上端に向けて斜めに削り落として厚みを薄くする。穴は表裏面からあけられているものの，それぞれずれており貫通していない。樹種は*3476* がアスナロ，*3477* ・*3479* がスギ。

3480 ～*3482* は弥生時代の流路ＳＤ2541と同様の棒材で，一端に紐かけ状の段を削りだし，裏側を斜めに削るもの。特に*3480* は完形で，前述のＳＤ2541の棒材がいずれも３～４ｍと長いのに比べて76.6㎝と短く，下端から８㎝ほどを断面菱形になるように加工している点が他と違うところである。

注８　三島道子　1998年『五社遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
注９　古川知明　1983年「古沢Ａ遺跡Ⅴ区」『古沢Ａ遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会
注10　橋本正春　1974年『富山市境野新遺跡発掘調査報告書－古墳時代住居跡－』富山文化研究会
注11　酒井重洋　1987年「北野遺跡」『北野遺跡・椎土遺跡緊急発掘調査概要』小杉町教育委員会
注12　青山晃　2004年「中谷内遺跡　Ｃ３地区下層」『埋蔵文化財調査概要－平成15年度－』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

3483・*3484*も棒材で，*3484*は両端ともに欠損しているが，*3481*・*3482*と近い場所から出土しており，同一個体の可能性がある。樹種はすべてスギ。

*3485*は枝の股を利用した材で，タモの柄か。樹種はツバキ科。

D　石製品

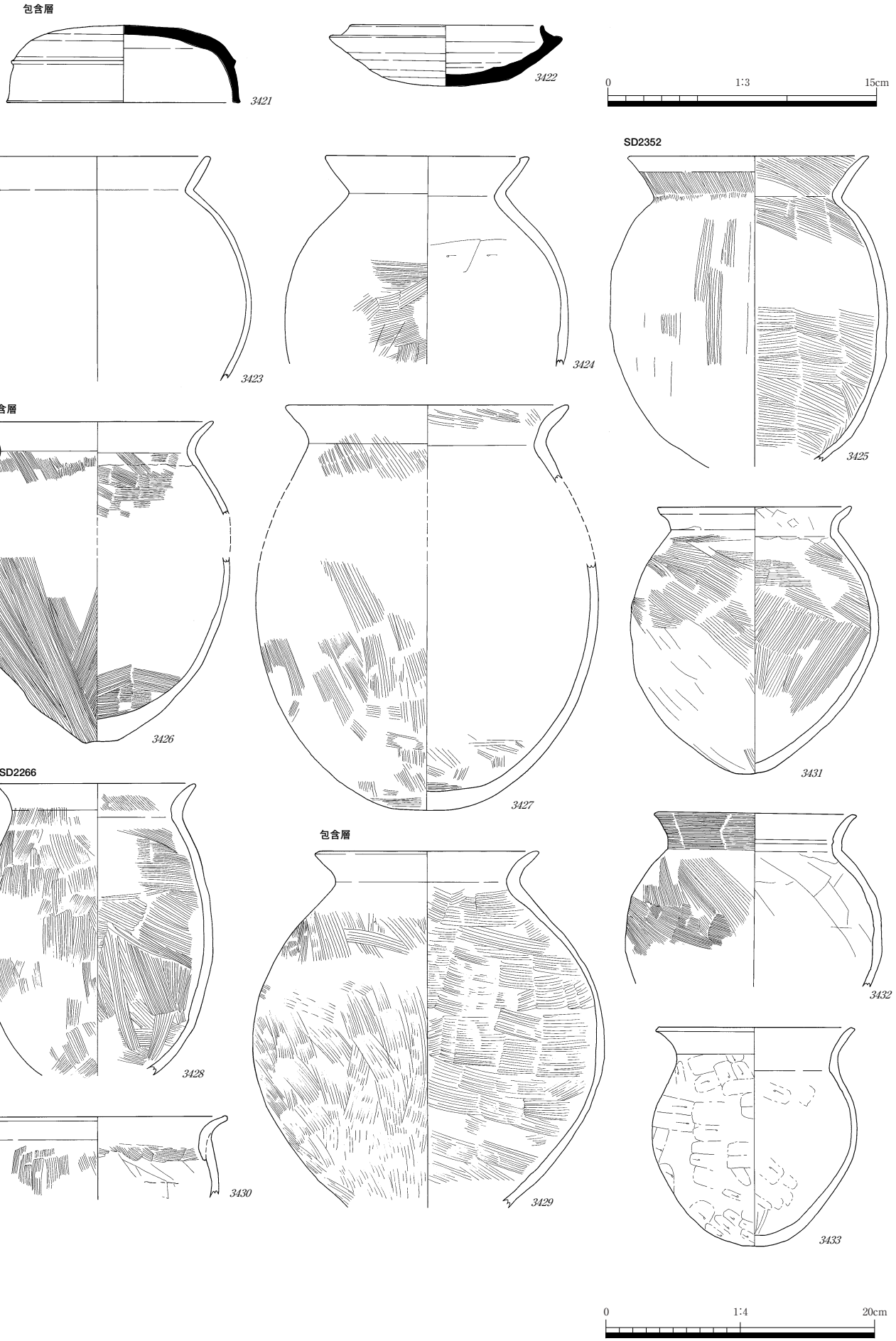
包含層（第409図，図版194）

*3488*は滑石製の紡錘車。最大幅39.3㎜，高さ19.2㎜，中心の孔は直径6.3㎜を測り，重さは41.8ｇである。側面は３重の圏線を巡らし，その上下に掛かるように斜格子文で装飾された鋸歯文を巡らす。裏面は中心の孔の周りに２重の圏線を巡らし，外端から２重の圏線の外側に掛かるように斜格子文で装飾された鋸歯文を巡らす。なお，裏面から側面にかけて，鋸歯文を消すかのように人為的に削り取った痕跡がみられる。

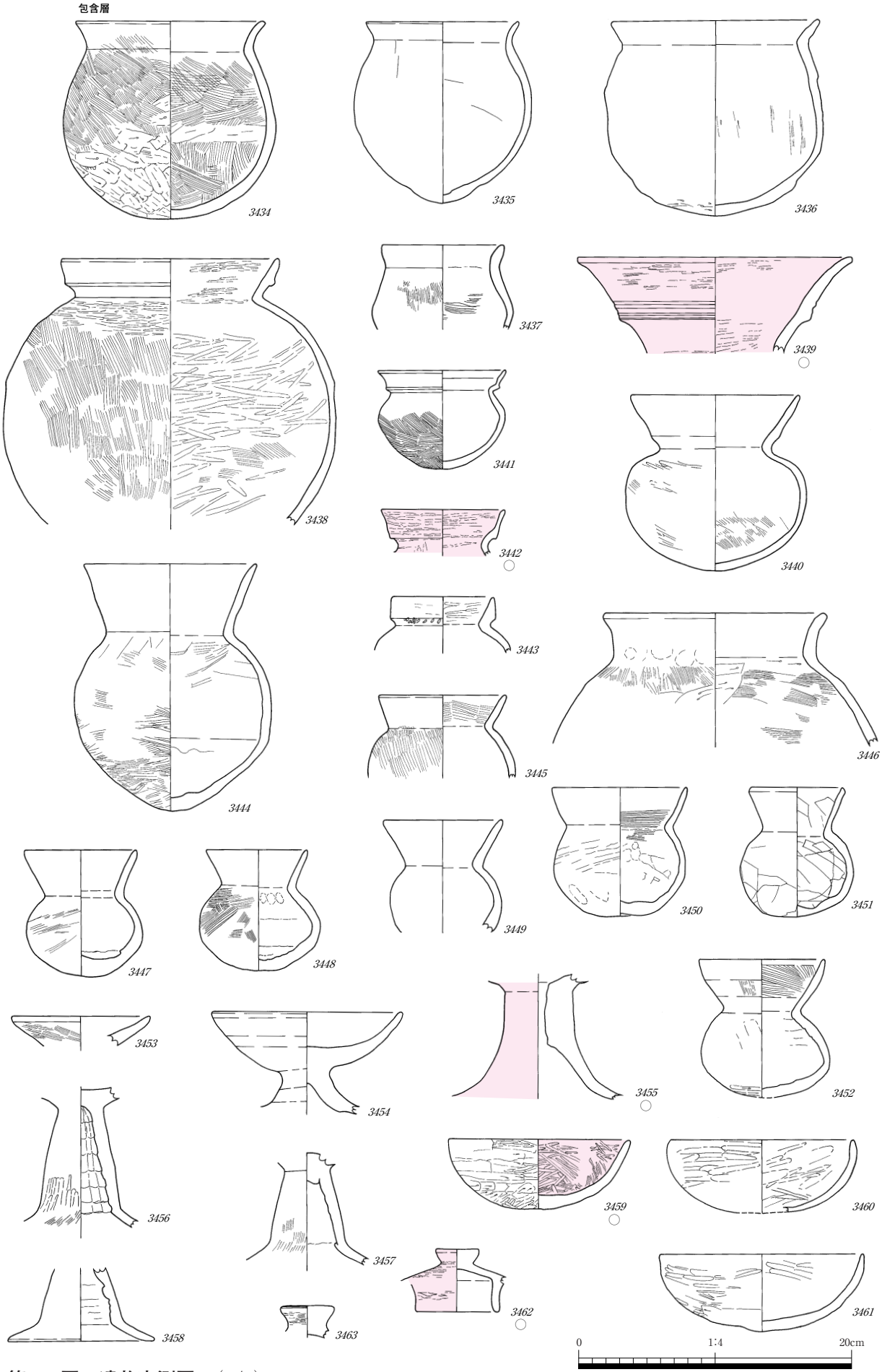
*3489*は滑石製の勾玉。長さ3.46㎝，最大幅2.16㎝，厚さ1.08㎝を測る。研磨は充分に施されているが，稜線・擦跡が所々に観察される。孔は直径約2.6㎜である。穿孔の中央付近に盛り上がりがみられ，両側穿孔である。

3488・*3489*はともに茶色の滑石を石材にしている。ともにＡ８地区から出土した。

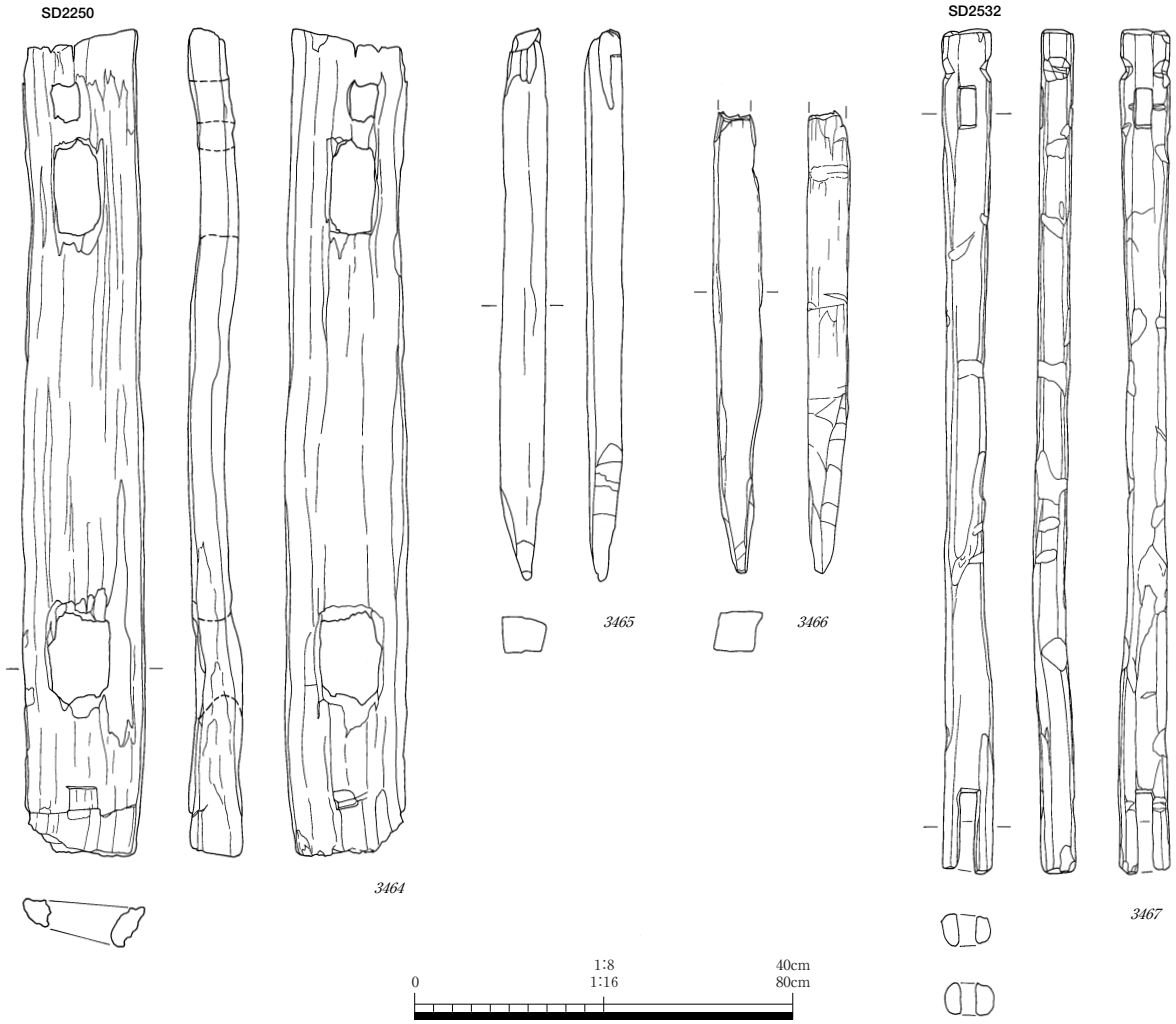
（島田・新宅・髙栁・町田賢一）



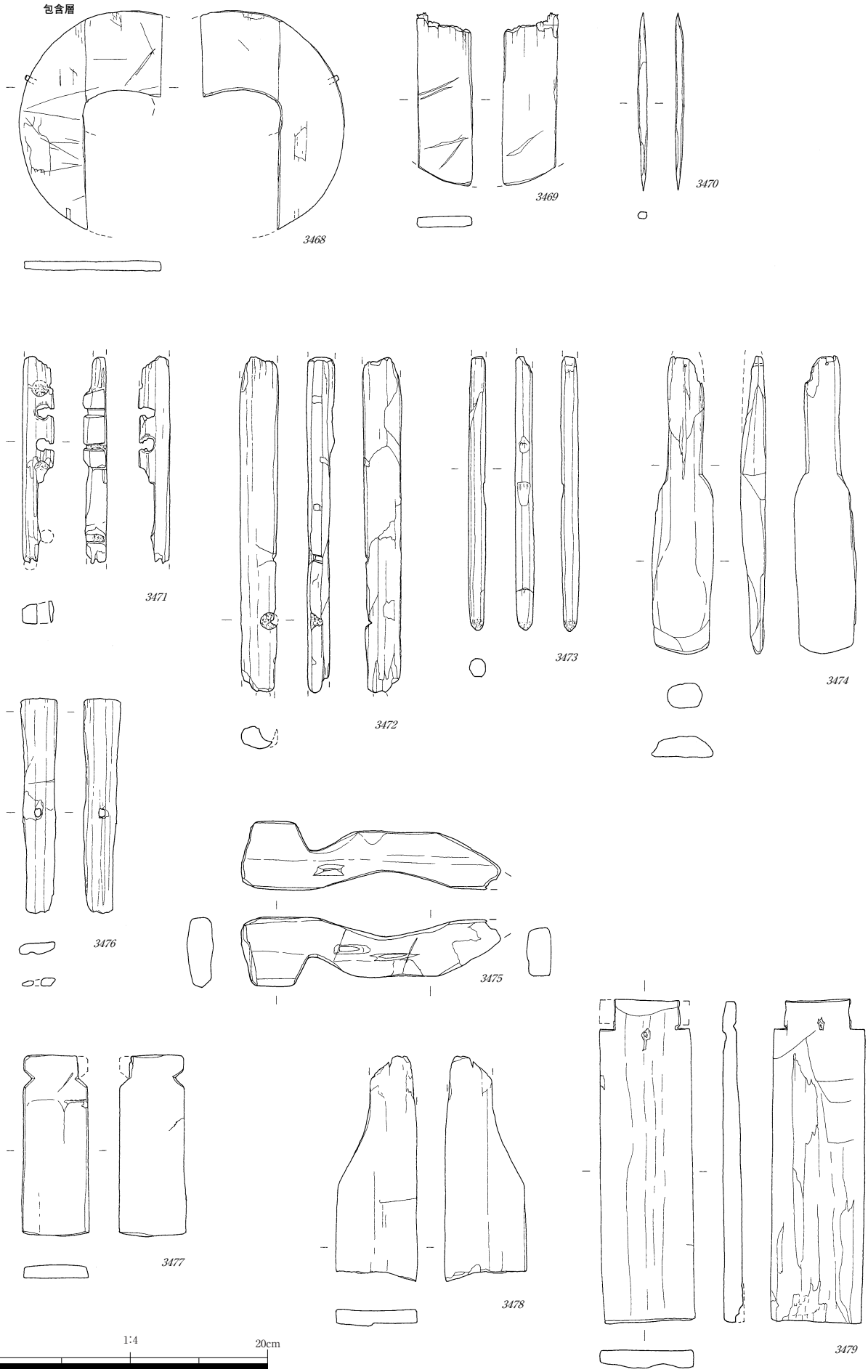
第405図　遺物実測図　(*3421・3422*　1/3, *3423～3433*　1/4)
Ｂ１地区　ＳＤ2266(*3428*)・ＳＤ2352(*3425*)
包含層(*3421～3424・3426・3427・3429～3433*)



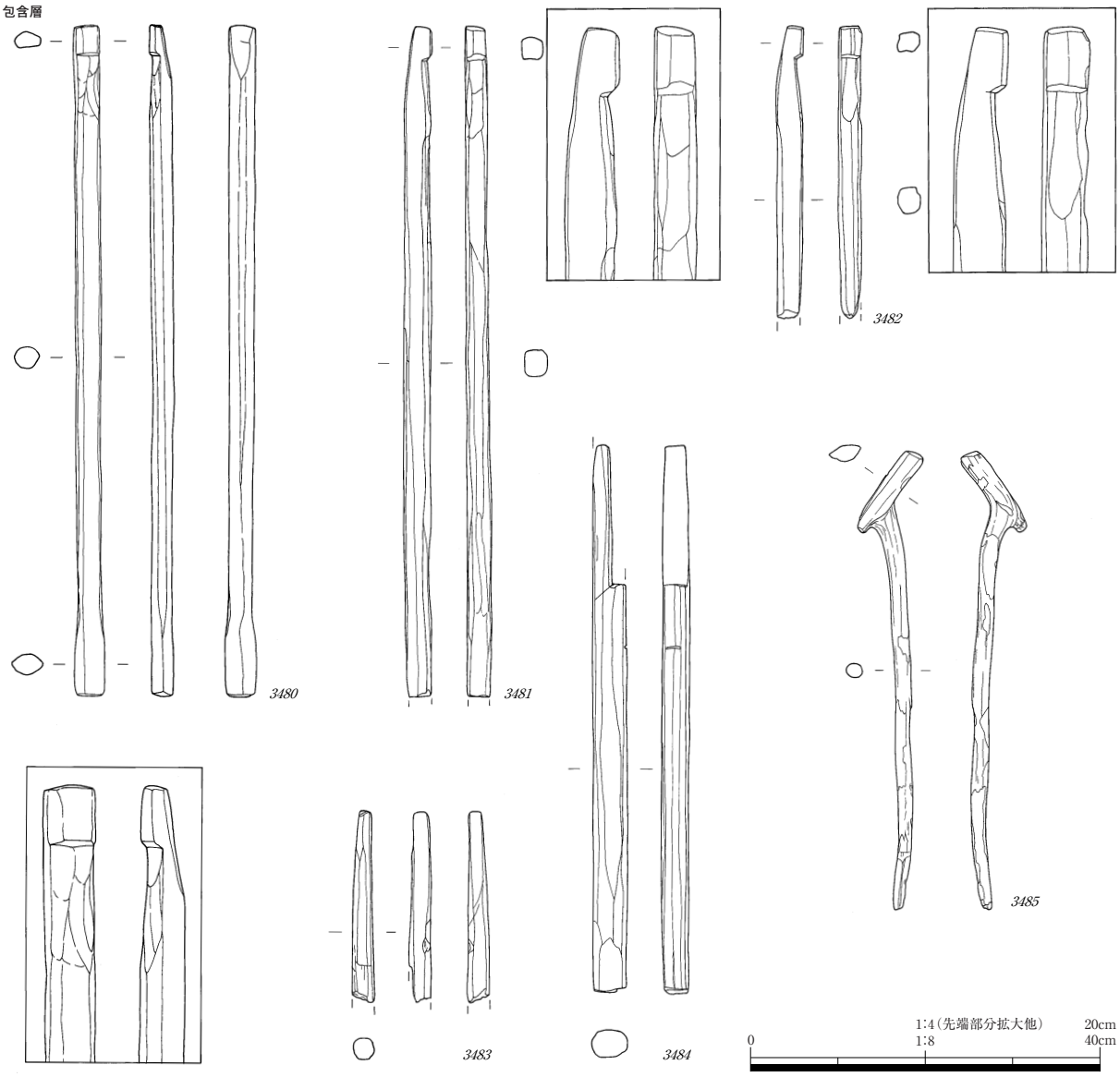
第406図　遺物実測図　(1/4)
包含層

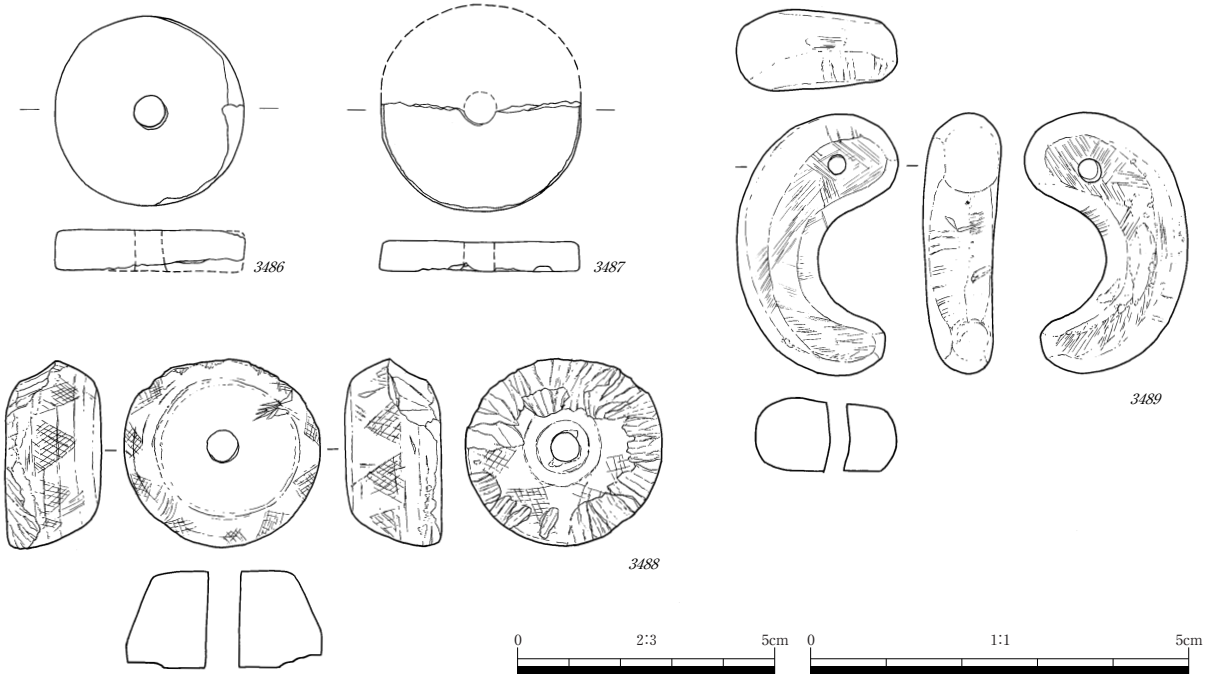


第407図　遺物実測図　（*3465～3467*　1/8，*3464*　1/16）
Ｂ１地区　ＳＤ2250（*3464～3466*）
Ｂ２地区　ＳＤ2532（*3467*）



第408図　遺物実測図　(1/4)
包含層





第409図　遺物実測図（*3489*　1/1，*3486～3488*　2/3，*3483・3484*　1/4，*3480～3182・3485*　1/8）
包含層

2006（平成18）年３月17日　印刷
2006（平成18）年３月31日　発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第31集
下老子笹川遺跡発掘調査報告
－ 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅴ －
（第二分冊　弥生～古墳時代　本文・図面編）

編集・発行　財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番１号
TEL．076－442－4229

印　　刷　とうざわ印刷工芸株式会社
〒930-0008 富山市神通本町1丁目8-13
TEL．076－432－3267